

昭和 59 年度

# 京都市埋蔵文化財調査概要

1987 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



## カラー図版一解説

### 鳥羽離宮跡

南部に鴨川と低湿地が広がる鳥羽離宮跡からは、多数の池が検出されている。池は金剛心院の釈迦堂東側に広がる苑池で、湾曲した岸部には所々に花崗岩・チャート・緑色片岩などの景石を据付け、部分的に人頭大の石を馬蹄形に並べている。東部には規模の大きな導水路がある。

102次調査S G 8北部全景(西から)

## カラー図版二解説

### 鳥羽離宮跡

飾り金具には、羽を孔雀のように大きく広げて向かい合う鴛鴦が、毛彫によって表現されている。地紋は魚子地で、全体に鍍金がされている。金剛心院九躰阿弥陀堂跡の基壇上面から出土し、御堂須弥壇の框に使用されていた可能性が高い。

金剛心院関係の調査の進展と共に、多くの離宮以前の遺構・遺物が検出された。古墳も数基検出されており、いずれも古墳時代中期のものである。女性像の埴輪は周溝から細片で出土したものを接合し、上半部を復元できた。目は猫目で大きく前方を見る。口は目と対比的に小さい。肩にたすきを掛け、手を胸の前で合わせ、捧げものを持つ形である。

上：109次調査出土飾り金具

下：106次調査出土埴輪



# 序

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、京都市域を範囲として、地下に埋蔵されている遺跡・遺物を発掘調査し、研究することを業務としている。この業務の発掘も研究も、発掘する土地の所有者が、その土地に土木事に先行し、その費用を拠出し、その協力を受けてなされるものである。したがって、京都市が公共事業を行う場合は、その事業に含まれている予算から支出されて行われるものであり、法人・個人の場合はその土地柄をわきまえて、費用をまず算出し、その金額で契約書を取りかわして行く。いわばその調査の代行者として、研究所に委託される。話はそれだけであるから単純ではあるが、調査の対象がその土地だけでは終わらないのが普通である。遺跡というものは、広い面積を以て造営されたものである。その面積が現代までに極めて細かく分割された状態にある。例えば、対象を平安京にとって考えれば、南北約 5.3km、東西約 4.3km、面積約 22.79km<sup>2</sup>の間が、無数に分割されている。その分割された単位が狭いものであれば、そこに遺跡があったとしても、遺構のわずかな部分であるに止まる。加えて、それが長い年月の間のことであるから壊されていることも多いから、その一部を求めて他は次の機会を待つより方法がないというものである。しかしその隣接した場所が、たまたま調査可能な場所もある。その時、研究所には調査する費用はない。さきにも述べたように、この研究所の経費は事業者の拠出によるものであるから、その土地の調査にのみ使うことが原則である。隣の土地の調査には使用できない費用である。必要経費を差し引いて余剰が出るなら還付することになっている。したがって、調査成果の発表も細切れのものになるが、年を積み重ねると或る程度まとまることになる。

その一つは平安宮内裏中央の承明門の位置を確かめたことである。御所を造営して安鎮法を行った時、その時にしつらえた道具を9箇所へ納める。その場所のうち南門（承明門）内側のものは、その性格上内裏の中央を示すことになる。それは内裏の中心線上の一点であることになる。これは御所の位置を決定することで重要である。第二は、白川街区として六勝寺の一つ尊勝寺西塔の一部と認めていい遺構を発見したことである。これは寺の配置を推定した時に、西塔として推定した位置にある遺構である。そのような推定した建物を他の所で発見すれば、なお確実になるだろう。第三は烏羽離宮跡である。従来から試行錯誤して調査してきた、伏見区竹田・中島の地で発掘してきた遺構は、今年度の発掘で文献とほぼ一致する金剛心院跡を決めることによって、調査して確かでない東殿等を決める手懸かりを得たのである。まだ決めなければならない部分はあるにしても、与えられた問題に挑み着実に成果をあげることができたのは、京都市民の御協力のたまものだと思います、改めて御礼申し上げたい。

昭和 62 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 杉 山 信 三

# 凡 例

1. 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が昭和 59 年度に実施した、発掘調査（第1章）、試掘・立会調査（第2章）、資料整理（第3章）、事務報告（第4章）の年次報告である。
2. 試掘・立会調査の内、調査継続中のため次年度に報告する分については表2に示した。
3. 方位及び座標は、「平面直角座標系VI」によった。ただし本文では単位(m)を省略している。標高は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
4. 使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の2千5百分の1、1万分の1、3万分の1の都市計画基本図を調整したものである。
5. 長岡京跡の条坊呼称は、向日市教育委員会並びに長岡京市教育委員会の成果によった。
6. 遺構の表示記号は奈良国立文化財研究所の用例に従った。SA（柵）・SB（建物）・SD（溝）・SE（井戸）・SF（道路）・SG（池）・SK（土壙）・SX（その他の遺構）
7. 各調査位置図の黒塗りした部分が今回実施した調査地点で、網目は前回の地点である。
8. 59年度の発掘調査の内、文化庁国庫補助事業による調査は、昭和59年4月～12月の実施分は59年度の各調査概報に、60年1月～3月分は60年度の各調査概報に報告してある。59年度発行分は一覧表に掲げたので、60年度の関係報告書を示しておく。  
『平安京跡発掘調査概報』 昭和60年度 1986年  
『京都市内遺跡試掘・立会調査概報』 昭和60年度 1986年
9. 図版1～6の番号は頭のIが発掘調査、IIが試掘・立会調査である。試掘立会調査は付表IIの番号を用いており、II章の報告順とは一致しない。
10. 本書作製にあたって、研究所全員の協力と参加があったが、特に出土遺物の復元を多田清二・村上勉・出水みゆき・田中利津子・中村享子が担当した。写真は遺物写真及び発掘調査の全景写真を牛嶋茂が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は各調査担当者が撮影した。
11. 個々の報告は文末に記した各調査担当者が執筆した（連名の場合は初出の者が主として報告した）。編集と調整は百瀬正恒・平尾政幸が協力して行った。

# 目 次

第1章 発掘調査	21	烏羽離宮跡第104次調査	60	
	22	烏羽離宮跡第105次調査	62	
I 昭和59年度の発掘調査概要	1	23	烏羽離宮跡第106次調査	63
		24	烏羽離宮跡第107次調査	67
II 平安宮・京跡		25	烏羽離宮跡第108次調査	68
1 平安宮内裏跡	5	26	烏羽離宮跡第109次調査	69
2 平安宮中和院跡	6			
3 平安宮西限跡	7	V 中臣遺跡		
4 平安京左京北辺三坊	8	27	中臣遺跡第59次調査	74
5 平安京左京一条二坊	9	28	中臣遺跡第60次調査	75
6 平安京左京四条二坊	13			
7 平安京左京六条二坊	14	VI 長岡京跡		
8 平安左京六条三坊	20	29	長岡京左京四条三坊	76
9 平安京左京九条二坊	22	30	長岡京左京二・三条 三・四坊	78
10 平安京左京九条三坊	25	31	久我東町遺跡	82
11 平安京右京七条一坊	31	VII その他の遺跡		
12 平安京右京八条二坊	35	32	上久世遺跡	88
13 平安京隣接地	36	34	松室遺跡	93
III 白河街区		35	音戸山古墳群	99
14 尊勝寺跡	39	36	音戸山古墳群西支群	100
IV 烏羽離宮跡		37	御堂ヶ池古墳群	101
15 烏羽離宮跡第97次調査	47	38	醍醐古墳群	102
16 烏羽離宮跡第98次調査	49	39	日野谷寺町遺跡	103
17 烏羽離宮跡第99次調査	50	40	小倉町別当町遺跡	113
18 烏羽離宮跡第100・101次調査	53			
19 烏羽離宮跡第102次調査	54			
20 烏羽離宮跡第103次調査	57			

第2章 試掘・立会調査	18 嵯峨院・大覚寺御所跡……	150
I 昭和59年度の試掘・立会調査概要……	116	19 貞観寺跡……………
		153
II 平安京跡	20 本多山古墳群泉山支群……	154
1 平安京左京六条四坊……	120	21 出雲寺跡・相国寺境内……
2 平安京左京九条三坊……	121	155
3 平安京左京九条四坊……	122	第3章 資料整理
4 平安京右京北辺四坊・一条四坊、法金剛院境内、四円寺跡…	124	1 遺物復元……………
5 平安京右京三条一坊……	129	2 遺跡測量……………
6 平安京右京三条三坊……	130	3 コンピュータ……………
III 烏羽離宮跡		159
7 烏羽離宮跡(1)……………	131	4 写真撮影……………
8 烏羽離宮跡(2)……………	132	5 遺物管理……………
9 烏羽離宮跡(3)……………	133	6 保存科学……………
10 烏羽離宮跡(4)……………	134	7 報告書の刊行、遺物の貸出し
IV 京域外の遺跡		165
11 中臣遺跡・中臣十三塚・宮道古墳…	136	8 御堂ヶ池1号墳の移築復元
12 山科本願寺跡……………	137	166
13 長岡京左京九条四坊・淀城跡……	140	第4章 事務報告
14 中久世遺跡……………	143	1 人事異動……………
15 上久世遺跡……………	144	2 普及啓発及び技術者養成事業……
16 大原野南春日町遺跡……	147	3 文化庁「低湿地遺跡調査研究会」への派遣…
17 檜原遺跡隣接地……………	149	171
		4 京都市考古資料館の状況…
		171
		5 組織及び役職員……………
		172
		1 調査地点の表示方法……………
		174
		2 発掘調査一覧表……………
		175
		3 試掘・立会調査一覧表……
		178
		4 外部からの委託事業その他一覧表……………
		181

## 図版目次

図版 1	調査地点位置図 (1)	1	平安京跡調査地点位置図
図版 2	調査地点位置図 (2)	1	鳥羽離宮跡調査地点位置図
図版 3	調査地点位置図 (3)	1	市内遺跡調査地点位置図
図版 4	調査地点位置図 (4)	1	市内遺跡調査地点位置図
図版 5	調査地点位置図 (5)	1	市内遺跡調査地点位置図
図版 6	調査地点位置図 (6)	1	市内遺跡調査地点位置図
図版 7	平安京左京一条二坊 (1)	1	西半部全景 (北から) 江戸時代
		2	全景 (東から) 室町時代
図版 8	平安京左京一条二坊 (2)	1	SE300 出土土器
図版 9	平安京左京一条二坊 (3)	1	SE300 出土土器
図版 10	平安京左京六条二坊 (1)	1	全景 (東から) 中世
		2	全景 (東から) 平安～弥生時代
図版 11	平安京左京六条二坊 (2)	1	SD1 出土弥生土器 前期
		2	SD1 出土弥生土器 中期
図版 12	平安京左京六条二坊 (3)	1	SD1 出土弥生土器 中期
		2	SD1 出土石器 弥生時代
図版 13	平安京左京六条三坊 (1)	1	全景 (西から) 2 区
		2	全景 (西から) 1 区
図版 14	平安京左京九条二坊 (1)	1	全景 (東から)
		2	御土居堀・SD1 (北から) C 区
図版 15	平安京左京九条二坊 (2)	1	御土井堀出土木製品
図版 16	平安京左京九条二坊 (3)	1	御土井堀出土木製品
図版 17	平安京左京九条二坊 (4)	1	御土井堀出土木製品
図版 18	平安京左京九条三坊 (1)	1	烏丸通調査区遠景 (北から)
		2	烏丸小路東側溝群(北から) No.84調査区
		3	烏丸小路東側溝群(北から) No.85調査区
図版 19	平安京左京九条三坊 (2)	1	烏丸小路東側溝,ピット群(南から)No.86 調査区

- 2 ピット群（南から） No.87 調査区
- 図版 20 平安京左京区九条三坊 (3) 1 烏丸小路東側溝, 井戸, 土壙, ピット群（北から） No.89 調査区
- 2 烏丸小路・信濃小路交差点北東部, 弥生溝  
(西から) 立会調査 No.28 調査区
- 図版 21 平安京右京七条一坊 (1) 1 全景（北から） 4 区
- 2 朱雀大路西側溝, 七条坊門小路交差点（北東から）
- 図版 22 平安京右京七条一坊 (2) 1 SD465 出土土器
- 図版 23 平安京隣接地 (1) 1 全景（西から） 1 区
- 2 全景（西から） 2 区
- 図版 24 平安京隣接地 (2) 1 SK414 出土土器
- 図版 25 尊勝寺跡 (1) 1 全景（南西から）
- 2 ガス管工事で出土した花崗岩（北東から）
- 3 ガス管工事で出土した花崗岩（西から）
- 図版 26 尊勝寺跡 (2) 1 B 版築（北東から）
- 2 B 版築（北西から）
- 図版 27 鳥羽離宮跡第 97 次調査 (1) 1 全景（西から）
- 図版 28 鳥羽離宮跡第 97 次調査 (2) 1 SB1 地業（南東から）
- 2 SB4（北東から）
- 図版 29 鳥羽離宮跡第 97 次調査 (3) 1 瀧・SX11（南西から）
- 2 船着場・SX12（北東から）
- 図版 30 鳥羽離宮跡第 99 次調査 (1) 1 全景（南西から）
- 2 築地・SA14 地業細部（南から）
- 図版 31 鳥羽離宮跡第 102 次調査(1) 1 全景（南東から）
- 2 苑池・SG8 冠水状態（西から）
- 図版 32 鳥羽離宮跡第 102 次調査(2) 1 舟入状遺構（南から）

- 2 苑池・SG8 石組み（西から）  
 3 苑池・SG8 石組み（北から）
- 図版 33 鳥羽離宮跡第 102 次調査(3) 1 木棺墓 平安時代中期（北西から）  
 2 木棺墓遺物出土状態（北から）  
 3 土壇墓 奈良時代（北から）
- 図版 34 鳥羽離宮跡第 102 次調査(4) 1 全景（北から） 古墳時代  
 2 方墳, 竪穴住居（北西から）  
 3 流路土器出土状態（北から）
- 図版 35 鳥羽離宮跡第 102 次調査(5) 1 流路出土土器
- 図版 36 鳥羽離宮跡第 102 次調査(6) 1 流路出土土器
- 図版 37 鳥羽離宮跡第 103 次調査(1) 1 掘立柱建物・SB74（北から）  
 2 掘立柱建物, 竪穴住居（西から）
- 図版 38 鳥羽離宮跡第 104 次調査(1) 1 基壇建物（北東から）  
 2 基壇建物下層東西溝（北から）  
 3 基壇建物下層東西溝（北から）
- 図版 39 鳥羽離宮跡第 106 次調査(1) 1 全景（南東から） 鳥羽離宮期  
 2 古墳検出状態（東から）
- 図版 40 鳥羽離宮跡第 106 次調査(2) 1 古墳周溝出土須恵器・埴輪
- 図版 41 鳥羽離宮跡第 109 次調査(1) 1 全景（北東から）  
 2 苑池・SG10 全景（南から）
- 図版 42 鳥羽離宮跡第 109 次調査(2) 1 SB2（東から）  
 2 SB2 地業（東から）  
 3 SB2 地業完掘状態（東から）
- 図版 43 鳥羽離宮跡第 109 次調査(3) 1 洲浜（東から）  
 2 庭石（南から）  
 3 橋脚・SX18（西から）  
 4 橋脚・SX18 断ち割り（北東から）
- 図版 44 鳥羽離宮跡第 109 次調査(4) 1 出土軒平瓦

- 図版 45 鳥羽離宮跡第 109 次調査(5) 1 出土軒平瓦
- 図版 46 長岡京左京四条三坊 (1) 1 全景 (西から) 長岡京期  
2 根石, 石敷遺構 (南から) 長岡京期
- 図版 47 長岡京左京二・三条三・四坊(1) 1 全景 (北西から) 長岡京期 1 区  
2 全景 (北から) 長岡京期 9 区
- 図版 48 久我東町遺跡 (1) 1 掘立柱建物 (北から) 室町時代  
2 SD102 上層検出状態 (北西から)
- 図版 49 久我東町遺跡 (2) 1 掘立柱建物 (西から) 平安時代後期  
2 SE143A・B 検出状態 (北東から)
- 図版 50 久我東町遺跡 (3) 1 SK37 (北から)  
2 SK50 (北から)  
3 SK43,SK49 (北から)  
4 SK303・木棺墓 (北から)
- 図版 51 久我東町遺跡 (4) 1 出土土器
- 図版 52 上久世遺跡 (1) 1 全景 (北から) 6 区  
2 全景 (北から) 11 区
- 図版 53 桂徳大寺町遺跡 (1) 1 全景 (西から)  
2 石積み遺構 1・2 (東から) 4-1・2 ト  
レンチ
- 図版 54 松室遺跡 (1) 1 全景 (北から)  
2 全景 (北西から) 中央ブロック北半部
- 図版 55 松室遺跡 (2) 1 全景 (北東から) 東部ブロック西半部,  
SB1~4, ピット群  
2 全景 (北から) 東部ブロック東半部
- 図版 56 松室遺跡 (3) 1 9 号竪穴住居 (北西から) 弥生時代中期  
2 4 号竪穴住居 (北東から) 古墳時代前期
- 図版 57 松室遺跡 (4) 1 溝・SD9,SD14 (南東から)  
2 SD9 断面 (南東から)

- |       |                                   |   |                       |
|-------|-----------------------------------|---|-----------------------|
| 図版 58 | 松室遺跡 (5)                          | 1 | 弥生土器・石器               |
| 図版 59 | 松室遺跡 (6)                          | 1 | 土師器, 須恵器, 鉄器          |
| 図版 60 | 日野谷寺町遺跡 (1)                       | 1 | 縄文時代土壇群 (東から) B区      |
|       |                                   | 2 | SK261 (北から) B区        |
|       |                                   | 3 | SK222 (南西から) B区       |
| 図版 61 | 日野谷寺町遺跡 (2)                       | 1 | 掘立柱建物 (西から) 鎌倉時代以降 A区 |
|       |                                   | 2 | 掘立柱建物 (東から) 奈良時代 B区   |
| 図版 62 | 日野谷寺町遺跡 (3)                       | 1 | B区土壇出土縄文土器            |
|       |                                   | 2 | SK428 出土縄文土器          |
| 図版 63 | 日野谷寺町遺跡 (4)                       | 1 | SK437 出土条痕文鉢形土器       |
|       |                                   | 2 | SK395 出土土偶            |
|       |                                   | 3 | B区出土石鎌                |
| 図版 64 | 右京北辺四坊・一条四坊, 法<br>金剛院境内, 四円寺跡 (1) | 1 | 出土軒瓦                  |
| 図版 65 | 右京北辺四坊・一条四坊, 法<br>金剛院境内, 四円寺跡 (2) | 1 | 出土土器・軒瓦               |
| 図版 66 | 烏羽離宮跡 (3) - (1)                   | 1 | 東礎石 (南から)             |
|       |                                   | 2 | 西礎石 (東から)             |
|       |                                   | 3 | 土壇出土軒瓦                |
| 図版 67 | 嵯峨院・大覚寺御所跡 (1)                    | 1 | SX3 検出地点調査風景 (東から)    |
|       |                                   | 2 | SX3 北壁断面 (南から)        |
|       |                                   | 3 | SX3 出土遺物              |
| 図版 68 | 出雲寺・相国寺境内 (1)                     | 1 | 池状遺構 (東から) B区         |
|       |                                   | 2 | 池状遺構 (南から) B区         |
|       |                                   | 3 | 池状遺構検出地点 (南から) B区     |

# 第1章 発掘調査

## I 昭和59年度の発掘調査概要

**平安宮・平安京跡** 本年度当研究所が平安宮、京跡に関して実施した発掘調査は13件で、そのうちわけは平安宮3件、左京7件、右京2件、平安京隣接地1件である。これらの調査で、条坊関係を始めとする平安時代の遺構・遺物の他、平安京造営以前あるいは平安時代以降の遺物を数多く発見した。

平安宮跡の3件の調査では、内裏承明門跡<sup>註</sup>(1)で承明門の雨落溝や、天台密教の安鎮法による地鎮跡、中和院跡(2)では平安時代前期の遺物を多量に含む土壌、平安宮西限の推定地(3)では宮の西を限る隍の遺構を検出した。特に承明門跡の地鎮土壌の一つには、銅製の輪宝や櫛が埋納されており、『阿婆縛抄 安鎮法日記』との対比からその実年代を推定し得る貴重な成果といえよう。

京内の調査では、まず左京一条二坊(5)で平安時代後期の近衛大路北側溝、九条二坊(9)で平安時代後期の油小路東側溝、九条三坊(10)で烏丸小路東側溝など条坊に関連する遺構を検出した他各調査地で土壌や遺物包含層などを確認している。

右京の調査では七条一坊(11)で朱雀大路、七条坊門小路の路面、側溝などを検出したが、七条坊門小路と朱雀大路西側溝の交差部では溝が暗渠になっていた状況が観察された。また溝や路面からは南接する西鴻臚館のものとみられる多量の瓦の出土をみた。八条二坊(12)でも野寺小路の西側溝や邸宅地内の溝、柱穴などを検出した。この野寺小路の側溝には一部護岸施設の痕跡が認められた。これら右京域の調査で検出した遺構・遺物は主に平安時代前半期に属するものである。

平安時代以前の遺構・遺物についてはまず承明門跡(1)の奈良時代の竪穴住居があげられる。承明門の遺構の保存との関係で完掘していないが3棟を確認している。平安宮域の下層ではこれまでも弥生、古墳時代あるいは奈良時代の遺構・遺物を発見しているが、遺跡の全体像を把握するまでには至っておらず、今後の課題といえよう。京域内では左京六条二坊(7)で弥生時代、六条三坊(8)で奈良時代、右京七条一坊では古墳時代から奈良時代の遺物を含む自然流路をそれぞれ検出した。このうち烏丸綾小路遺跡の南部に位置する左京六条二坊(7)の流路からは弥生時代前期から中期にかけての土器や石器類が多量に出土した。土器類は畿内第Ⅱ、第Ⅲ様式のもの为主体をなしているが、わずかなが

ら第Ⅰ様式に遡るものも含まれており、数少ない京都盆地中央部のこの時期の新資料として注目される。

平安時代以後の遺構・遺物は特に左京域の調査で検出される例が多いが、本年度の調査でも、左京の各調査地、あるいは東京極大路に隣接する教育研究所敷地（13）などで鎌倉時代から江戸時代にかけての遺構・遺物を多数検出した。これら平安時代以後の遺構・遺物のうち注目すべき成果としては、左京一条二坊（5）の桃山・江戸時代の豪商茶屋家に関連する遺構・遺物、左京九条二坊（9）の鎌倉時代の建物あるいは多量の木製品が出土した御土居の濠などがあげられる。

**白河街区** この地区で本年度実施した発掘調査は尊勝寺跡（14）の1件である。期待された東塔に関する明確な遺構の発見はなかったが、調査区全面にわたる版築を検出した。この版築が直接塔に関連するかどうかは現時点では断定できないが、過去の周辺の調査成果を統合すると、この付近に建物が存在した可能性は充分想定でき、今後の調査が期待される。

**烏羽離宮跡** 本年度烏羽離宮跡では13件の発掘調査を行った。これらの調査では烏羽離宮期の遺構、特に田中殿金剛心院に関する極めて重要な成果を得た他、離宮造営以前の多くの遺構・遺物を検出した。金剛心院に関する主な遺構には97次調査（15）で釈迦堂と推定される建物や院東限の南北溝、99次調査（17）では西限の両側に溝を伴う築地、102次調査（19）や107次調査（24）では池や導水施設などの庭園遺構、106次調査（23）では北限の溝、109次調査（26）では九体阿弥陀堂とみられる建物や池に架かる橋の遺構、あるいは仏像や金銅製の飾金具などを検出し、前年度の調査と合わせ金剛心院の規模や諸施設の配置などがかなり明らかになった。この他烏羽離宮に関する遺構としては98次調査（16）の金剛心院北限から北大路付近へ続くと思われる溝の一部や、108次調査（25）で確認した北殿の池などがあげられる。

さて烏羽離宮では近年離宮造営以前の遺構・遺物の発見例が増加しているが、本年度の調査においても、縄文時代晩期から平安時代にわたる遺構・遺物を多数検出した。それらの主なものをあげると97次調査（15）で古墳時代前期の竪穴住居、98次調査（16）では古墳時代の遺物を含む湿地、99次調査（17）では古墳時代から飛鳥時代の竪穴住居や掘立柱建物、土壙、102次調査（19）で方墳や竪穴住居、あるいは弥生時代後期から古墳時代前期の土器類が多量に出土した流路、縄文晩期の土壙、103次調査（20）では古墳時代の竪穴住居、飛鳥時代の掘立柱建物、弥生時代の流路、106次調査（23）では円墳の一部

やその周溝から出土した埴輪、弥生中期から後期の遺物を含む流路など、離宮造営以前のこの地域の様子を知る多くの手懸かりを得ている。

**中臣遺跡** 本年度実施した発掘調査は、59次、60次の2件である。59次調査(27)では古墳1基と平安時代の建物など、60次調査(28)では古墳時代後期の竪穴住居を検出した。59次調査の古墳の発見は従来不明な点の多かった「中臣十三塚」の新たな資料として貴重なものである。また60次調査で検出した竪穴住居はこれまで中臣遺跡で確認されている古墳時代後期のものとしては最も西南に位置しており、集落の範囲を考える上で重要な成果といえよう。

**長岡京跡** 長岡京跡では本年度3件の発掘調査を実施した。左京四条三坊(29)は昭和55年度から継続する外環状線建設に伴う調査で、東三坊第一小路や、川原寺に関連するとみられる礎石建物の一部を検出した。この建物はこれまでの調査では確認されておらず更に周辺部の調査が望まれる。また長岡京期の遺構の下層に古墳時代の水田遺構を検出した。左京二・三条三・四坊(30)は西羽束師川河川改修に伴う発掘調査で、これも昭和55年度から継続しているものである。この調査では二条第二小路の両側溝を始め縄文時代晩期から室町時代の遺物が出土した。久我東町遺跡(31)では久我荘に関連するとみられる12世紀から14世紀にかけての中世集落の一部を検出した。

**その他の遺跡** 本年度は以上述べた発掘調査以外に10件の発掘調査を実施した。これらは主に集落関係の遺跡と古墳群に分けることができる。集落関係の遺跡としては植物園北遺跡(41)小倉町・別当町遺跡、松室遺跡(34)、上久世遺跡(32)、日野谷寺町遺跡(39)がある。植物園北遺跡(41)では古墳時代の竪穴住居を、小倉町・別当町遺跡でも同じく古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物を検出した。松室遺跡(34)では前年度から継続する調査を実施し、弥生時代中期、古墳時代前期から後期へ継続する集落、あるいは灌漑用水路とみられる大溝などを確認している。

山科盆地東部に位置する日野谷寺町遺跡(39)は中学校新設に伴う調査により新たに確認された縄文時代から室町時代に至る複合遺跡である。縄文時代の炉や土壙を始め飛鳥、奈良時代の建物、溝、土壙、平安時代から鎌倉時代にかけての建物、井戸、柵、墓などを検出した。その他、上久世遺跡(32)では弥生時代、古墳時代の流路や土壙、遺物包含層を、桂徳大寺遺跡(33)では室町時代後期の石積遺構を検出している。

本年度調査を実施した古墳群はいずれも後期から終末期に属する群集墳である。音戸山古墳群(35)では昨年度に3～5号墳の発掘調査がなされているが、本年度の調査の対象

となったのは、その際新たに発見された7, 8号墳の2基である。音戸山古墳群の西支群(36)においても1, 2号墳の調査を行った。この調査は樹木の移植に伴う重機掘削により1号墳の一部が破壊される事態が生じたため急遽実施したものである。2号墳については天井石が露出していたが、石室そのものは原形を留めており、保存を前提に調査を行った。嵯峨野地区ではこの他御堂ヶ池古墳群(37)でも20, 21号墳の調査を実施した。醍醐古墳群(38)では3, 4, 8～12, 15～20号墳の14基の古墳調査を行った。これら本年度に調査を実施した古墳には7世紀に属するものが多く、山城地方の古墳時代の終末を考える上で注目に値するものといえよう。

(平尾 政幸)

注 第1章-1 以下同じ

## Ⅱ 平安宮・京跡

### 1 平安宮内裏跡

**経過** 調査地は、内裏内郭に位置し、南接敷地との境界付近に内郭回廊が走ると想定される。また内郭の東西中央にもあたり、南面正門である承明門を発見できる期待があった。敷地南半を中心に、東西 8.5 m、南北 16.5 m の調査区を設定した。調査の進展と共に承明門の遺構が明らかとなり、報道機関を通じて成果を発表した。その後、発見した遺構の現状保存は京都市埋蔵文化財調査センターを通じて工事原因者に申し入れ、保存で合意した。門基壇付近に平安時代より古い遺構を認めたが、輪郭の記録にとどめた。

**遺構・遺物** 遺構は第 1 遺構群（江戸時代）、第 2 遺構群（桃山時代）、第 3 遺構群（平安時代）、第 4 遺構群（奈良時代）の 4 群である。以下代表的な遺構について概略する。

**承明門跡** 基壇北縁の雨落溝 62 は新旧 2 時期認められる。第 1 期は内法 45cm の溝、側に凝灰岩切り石を並べた痕跡がある。掘形からは遺物が出土せず、成立期は不明である。2 期は中心で 1 期より北へ 60cm 移動する。河原石で内法 90cm に組み、据付け掘形の底面は 1 期より 10cm 高い。抜取り土層から 13 世紀～17 世紀の遺物が出土する。2 期は 11 世紀の造作と考えている。

**地鎮め跡** 宝物を出土し、明確な地鎮遺構と認定できるものは、遺構 76、78、80、83 の 4 遺構である。これらは承明門より北の内郭前庭部分にあり、しかも南北に並ぶ。

**小結** 平安宮内裏承明門の遺構を一部確認した。門基壇の盛土地業の痕跡はなかったが、北雨落溝は残存しており、現状保存した。門近くの内郭前庭には地鎮遺構が 4 基あった。その 1 つは天台密教の安鎮法に基づく。8 度を数える内裏での安鎮修法の内、承明門北方で地鎮めを行ったのは延久 3 年（1071）ただ 1 度と『阿婆縛抄 安鎮法日記集』は読める。したがってこの遺構はその時の南方鎮所跡に比定される。この他、9 世紀に 2 度、11 世紀に 1 度宝物を埋納している。

（梅川 光隆）

『平安京跡発掘調査概報』 昭和 60 年度 1986 年報告

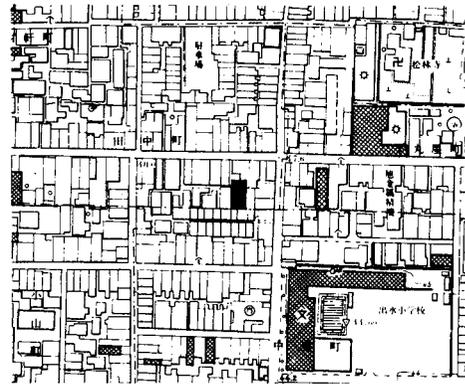


図 1 調査位置図 (1:5000)

## 2 平安宮中和院跡

**経過** 調査地は平安宮中和院南辺部に比定される所である。当該地にビル建設が計画されたため、昭和59年9月、工事に先立ち試掘調査を行った。その結果、地表下10cmで平安時代の遺物が多量に出土し、遺跡の保存状態が良好なことが判明したため発掘調査に切り替えた。

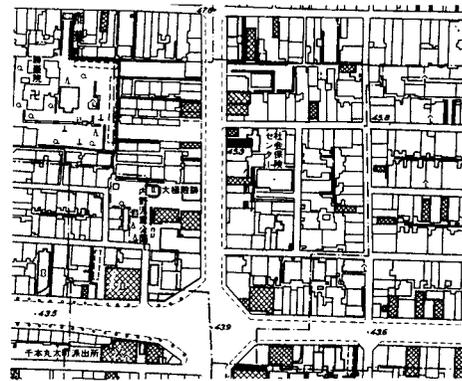


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構・遺物** 調査地の層序は、西端で盛土が約10cm、東は次第に厚くなり東端で約35cm、以下は褐色泥砂の無遺物層である。遺構はすべて無遺物層の上面で検出した。

遺構は江戸時代の土壌が7基、平安時代の土壌が17基ある。

平安時代の主要な遺構としては、土器類が多量に出土した土壌が3基ある。形状は楕円形及び円形で、埋土は炭混じりの暗褐色泥砂層である。いずれも土器捨て穴とみられる。

出土遺物には、土師器碗・杯・皿・蓋・高杯・壺・甕、須恵器蓋・杯・皿・壺・鉢・甕、黒色土器碗・甕、灰釉陶器蓋・壺・平瓶、緑釉陶器碗・羽釜がある。瓦類には、緑釉蓮華文軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦などがある。その他には石銚帯などがある。

江戸時代の遺構の中には、泥面子が80種類、391個体出土した土壌がある。大きさは3種類で、文様には家紋・暖簾印・干支・文字・将棋駒その他がある。

**小結** 中和院の施設は、何ら検出できなかったが、その後の周辺の調査などにより、当地は中和院と朝堂院の間の空地と確定するに至った。平安時代の土壌出土の土器類は、平安時代前期の良好な資料で、9世紀初頭の特徴を示す。その中には猿投窯産の須恵器が共伴しており、近年問題とされている猿投古窯跡群の年代を比較検討する資料として注目される。

(家崎 孝治)

『平安京跡発掘調査概報』昭和59年度 1985年報告



土壌9遺物出土状態

### 3 平安宮西限跡

**経過** 調査地は京都市上京区御前通下立売上ル西上之町で、昭和60年3月にビル新築に伴う試掘調査を行った。東西トレンチで多量の瓦を含む幅2.9m、深さ0.8mの落込を認め、この遺構を隍と判断した。そこで、隍の遺構を明らかにする目的で発掘調査を実施した。落込を中心に東西幅8m、南北幅7m

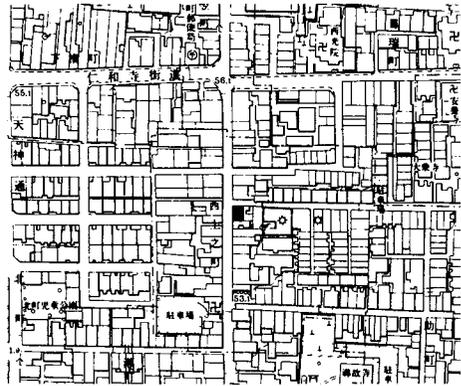


図1 調査位置図 (1:5000)

の調査区を設定したが、東部は攪乱が多く、西部に拡張した。

**遺構・遺物** 以下遺構の概略を報告する。

隍29 確認幅2m、深さ0.4である。調査区北壁断面では3度の重なりを確認できる。

隍33 確認幅1m、復元幅1.4mを測る。深さは0.55mである。

隍23 幅2.15m、深さ0.5m、断面で3度の重なりを認める。

隍22 隍23同様3度の重なりを認める。幅は1.9m、2度目の掘り直し幅1.5mで底に流水の痕跡がある。3度目の掘り直し溝では火痕のある瓦が東方から多量に投棄された状態で出土した。

隍31 幅1.6m、深さ0.5mを測る。埋土中位には瓦細片が敷きつめられたように堆積する。出土の瓦は12世紀の特徴を示す。

隍30 幅1.1m、深さ0.25mを測る。黒褐色泥土層が堆積する。

遺物は土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器・青磁・白磁などが出土しており、9世紀～10世紀の遺物を中心とする。

**小結** 隍は東西7.5mの間に時期を異にする6条があった。9～10世紀を主としている。

(梅川 光隆)

『平安京跡発掘調査概報』昭和60年度 1986年報告

#### 4 平安京左京北辺三坊

**経過** 今回の調査地付近は、弥生時代から江戸時代に至るまでの遺構の存在が認められる所である。このために耐震性貯水槽設置に伴い、遺構の確認の必要性から調査を行った。調査地は左京北辺三坊四町にあたる。

調査区は、径7mの貯水槽であるために調査面積は限られ、トレンチを東西6m、南北5mに設定した。平安時代及び弥生時代の遺構面まで約2m掘り下げを必要としたため、調査面積及び遺構面の深さなどの条件を考え、機械掘削は平安時代の遺構面まで行った。遺構は、土壌・井戸などを検出した。

**遺構・遺物** 平安時代から鎌倉時代の遺構には柱穴・土壌などがある。柱穴の中には根石を持つものがある。室町時代から桃山時代の土壌には土師器皿を多量に包含するものも認められた。その他には江戸時代の土壌・井戸などがある。出土遺物には、土師器・瓦器・白磁・青磁・陶器などがある。

**小結** 調査面積が限られているため、遺構の広がりなどは不明である。しかし、トレンチ壁面の観察では平安～江戸時代に至る遺構の存在が認められた。このような様相は、平安京左京の遺構の在り方と共通する。また、当地は内膳町遺跡の範囲に入るが、今回の調査では弥生時代の遺構・遺物は検出できなかった。

(中村 敦・磯部 勝)

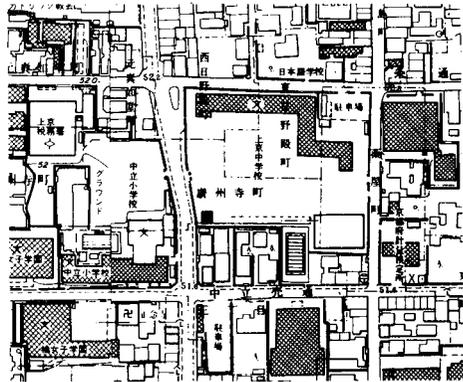


図1 調査位置図 (1:5000)



調査区全景 (東から)

## 5 平安京左京一条二坊（図版7～9）

**経過** 農林水産省近畿農政局庁舎建設に伴い発掘調査を実施した。調査地は左京一条二坊十五町の南辺付近に当たり、また寛永十四年の洛中絵図によると茶屋四郎次郎の邸宅跡の南部に該当する。調査対象地の中央やや南寄りに近衛大路北側溝が推定されたため、これを含む東西約30m、南北20mの調査区を設定し調査を行った。

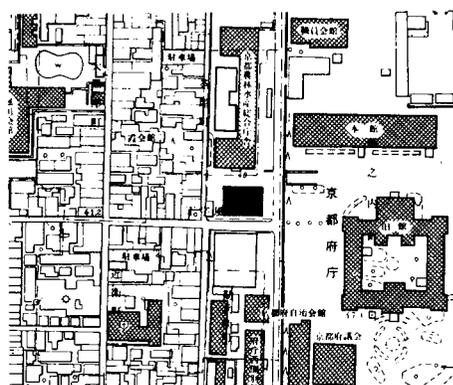
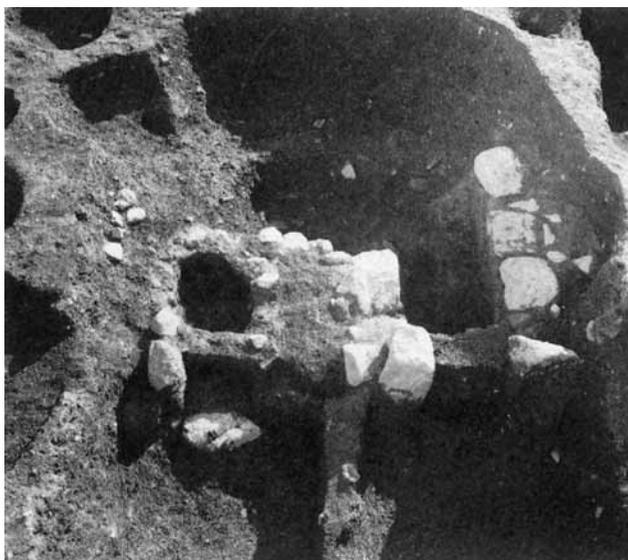


図1 調査位置図（1:5000）

**遺構・遺物** 平安時代から江戸時代にかけての遺構・遺物包含層を多数検出した。遺構総数は3000を越えるが、小規模な柱穴と思われる小穴が多数を占めている。平安時代の遺構は平安時代前期の遺物包含層と平安時代後期の近衛大路北側溝と思われる東西溝を検出した。鎌倉時代の遺構には土壇、柱穴がある。室町時代の遺構は井戸・土壇、柱穴、溝の他、瓦器の壺を埋納した小土壇を5基検出している。このうち近衛大路北側溝推定地付近で検出した東西溝は中央部が異常に深い断面漏斗状のもので、左京域では戦国期に類例の多いものである。桃山時代から江戸時代前半の遺構群には比較的まとまりがみられ、井戸、土壇の他に竈や炉状の遺構などがある、また小規模な礎石を持つ建物を1棟確認し、建物周辺では整地面も検出した。

遺物はこれらの遺構や包含層から整理箱にして約400箱出土しているが、いずれも遺構が小規模なため桃山から江戸時代のものを除き、1箇所からまとまって出土したものは少ない。桃山時代から江戸時代の遺



竈（北から）

構からは多量の土器、陶磁器類が出土しており井戸、土壙からまとめて出土した資料も多い。特に土壙（SK18, SK110）、井戸（SE273, SE300, SE325）などからは良好な一括資料が得られた。ここではその中でも数量、種類ともに最も豊富なSE300の土器類について若干の説明を加えることにする。SE300から出土した土器類には土師器、瓦質土器、国産陶器、輸入陶磁器がある。土師器には皿類（1～3, 4～9）と鍋（12）、塩壺（10, 11）がある。皿類は内面の底部と口縁部の境に圈状の凹線を持つもの（Ⅰ類）と凹線のないもの（Ⅱ類）、小型の粗製のもの（Ⅲ類）に分けることができる。Ⅰ類は口径により更に細分できる。鍋には浅い丸底に外方に張り出し、端部を内側に折り曲げた口縁部を持つものと、丸底で口縁端部が丸く肥厚するものがある。塩壺は体部がふくらむものと筒状のもの2種に分けることができる。国産陶器類には美濃系の陶器（17～23）、唐津系の陶器（13～16）の他、信楽（25）、備前（24）、丹波などの焼締陶器がある。前二者は椀皿類が中心で、後者には挿鉢、盤、甕、壺などが多い。輸入陶磁器には中国産の染付や白磁（26～35）があるがその中に精品の小鉢類（30～31）や、合わせ子（33～34）などが含まれているのが注目される。

**小結** 今回の調査で検出した遺構、遺物群は都市として機能してきたこの地域の特色を

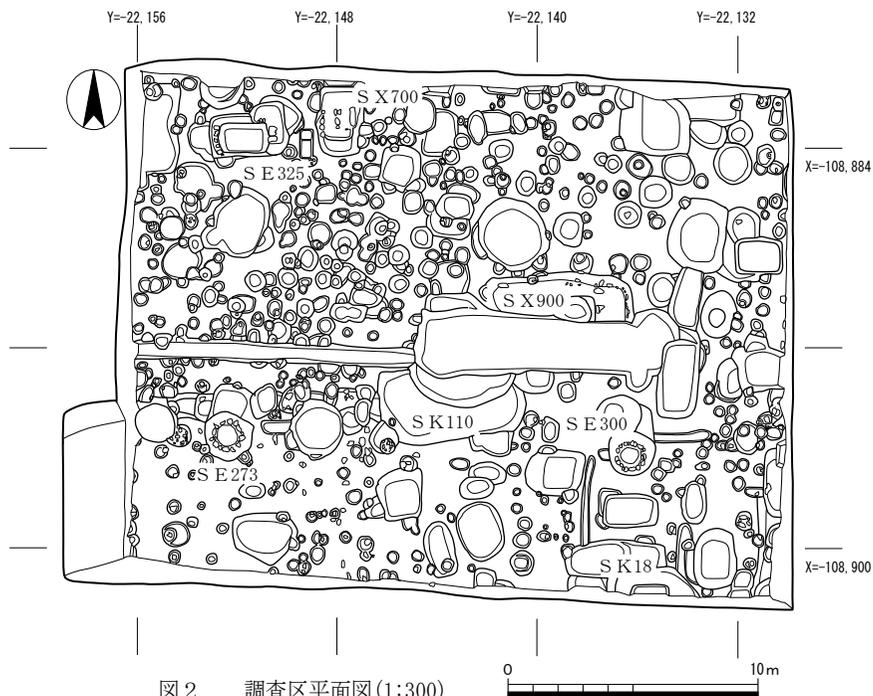
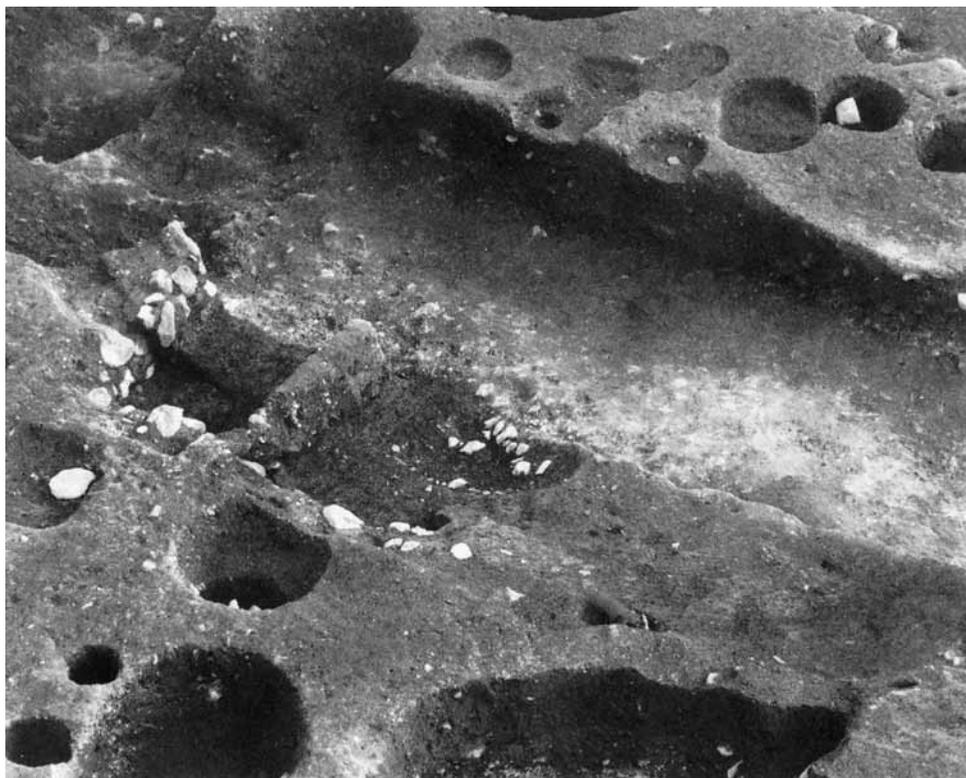


図2 調査区平面図(1:300)

よく反映したものといえるだろう。反面、こうした左京域の複雑な遺構の重複は遺構相互の関係や遺跡の全体像をつかむ上で困難な面も合わせ持っている。この遺跡の詳細を解明するには更に検討が必要であるが、江戸時代前半期の遺構群については冒頭で触れたように寛永十四年の洛中絵図や、茶屋家の文書などの史料も残っており、それらと遺構・遺物の位置や年代の検討は可能である。それによれば、調査地は茶屋邸の南端部付近にあたり、SE300, SE273, SE325 など江戸時代前半期以降の遺構群は茶屋家に関連するものとみてよいだろう。

(平尾 政幸・本 弥八郎)



炉跡（北西から）

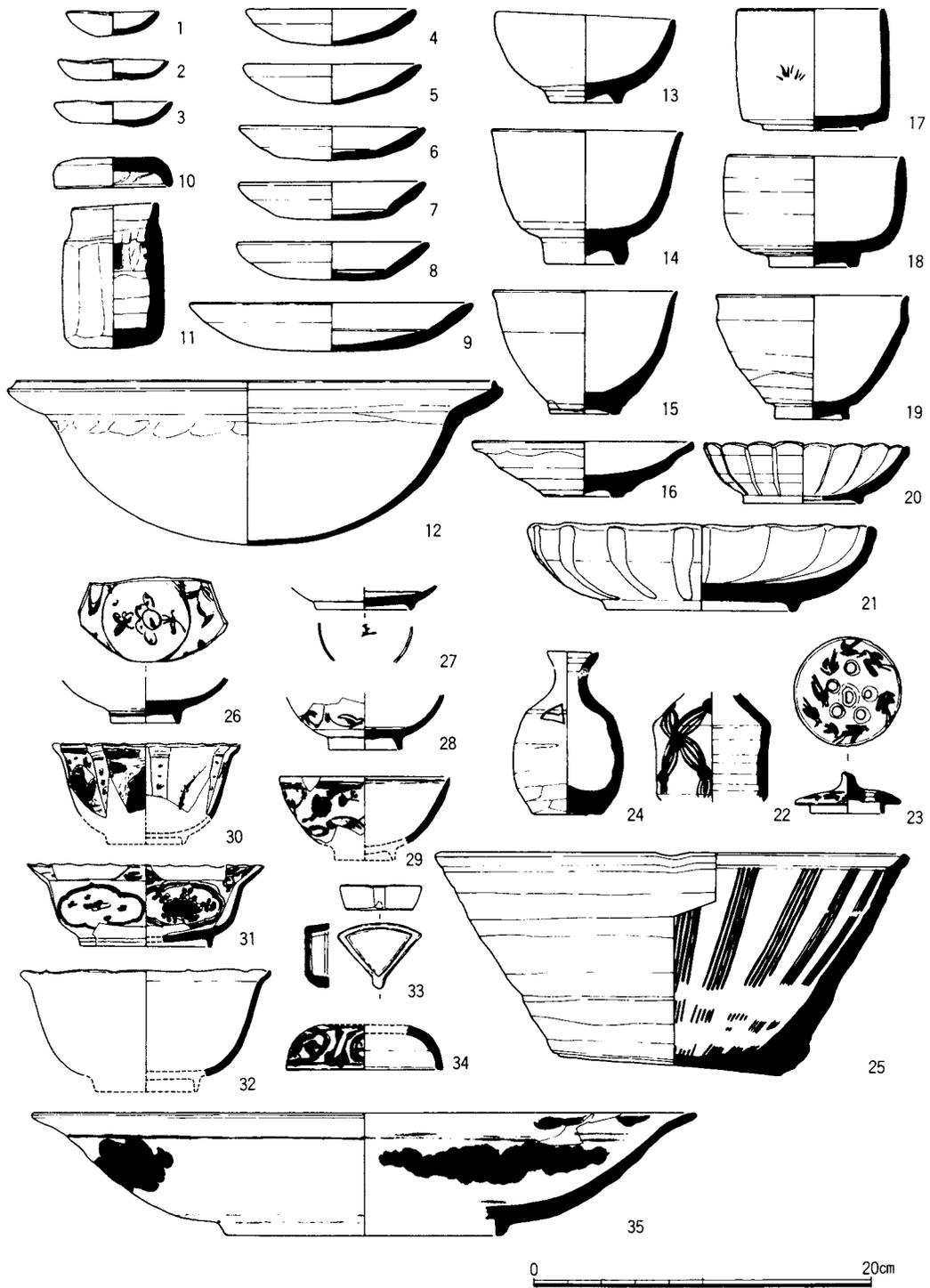


图3 SE 300 出土土器実測図（土師器 1～12，国産陶器 13～25，中国産白磁・染付 26～35）（1:4）

## 6 平安京左京四条二坊

**経過** 今回の調査は、京都市立堀川高校の校舎増築に伴って実施した。調査地は平安京の左京四条二坊十一町に推定され、調査地の西側に東堀川小路が位置している。発掘調査に先立ち試掘調査を実施した結果、遺構の残存状況が良好なため、発掘調査に切り換えた。南北10 m、東西10 mの調査区を設定したが、検出した溝を確認するために西側に拡張した。調査の主眼は堀川及び東堀川小路検出においた。

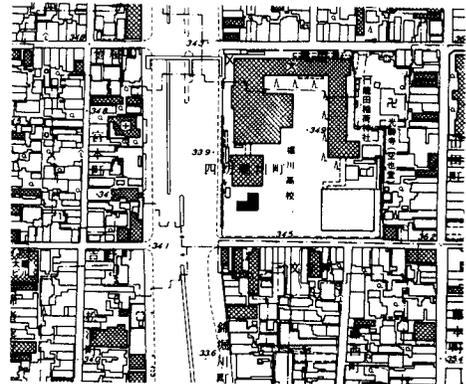


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構・遺物** 地表下0.6 mまで近・現代の整地層で、その下に江戸時代の遺構面がある。これより更に下、約0.5 mで灰褐色砂礫層をベースにした遺構面を検出した。両遺構面間の土層は中世の遺構・整地層が複雑に切り合って成立している。この灰褐色砂礫層は無遺物層（地山）で、上面は中世の遺構面である。

中世の遺構面では、調査区西側で南北方向の流路を検出した。幅9 m以上、最深部で2 mである。埋土は砂礫・砂・泥土が互層となって堆積していた。この流路の上面は室町時代に整地され、上に幅約2 m、深さ0.5 mの溝が造られている。その東側ではピット・土壙などを多く検出した。

江戸時代の遺構面では、調査区全域でピット・土壙・溝などを検出した。特に調査区西側では楕円形の焼土壙（一辺1 m）を6箇所検出した。これらの土壙は南北に1列に並んでおり、竈跡と考えられる。

遺物は整理箱で15箱出土し、そのほとんどが土器類である。土器類には平安時代の土師器・須恵器・陶器、鎌倉～室町時代の土師器・陶器・白磁・青磁、江戸時代の土師器・陶器・磁器などがある。その他の遺物には瓦などがある。

**小結** 今回の調査では後世の削平が深く、平安時代の遺構は全く検出できなかった。中世の遺構面では推定堀川小路より更に東側まで及ぶ大規模な流路を検出した。出土した土器群は室町時代後半のものである。

(上村 和直・久世 康博)

## 7 平安京左京六条二坊 (図版10～12)

**経過** 調査地は平安左京六条二坊九町に推定でき、更に烏丸綾小路遺跡範囲内に位置する。試掘調査の結果に基づき、東西15m、南北10mの調査区を設定した。調査目標は町内の変遷及び弥生時代の遺構検出である。

**遺構** 調査地は、京都盆地のほぼ中央に位置し、南北に流れる堀川と鴨川との間の微高地上

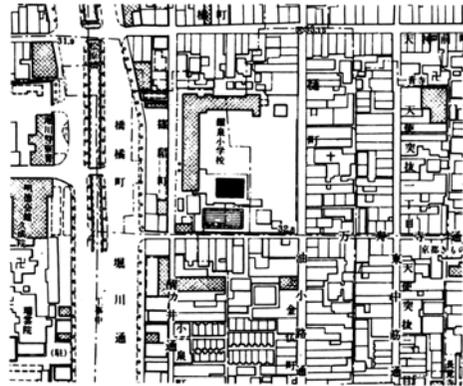


図1 調査位置図 (1:5000)

に立地している。この微高地には他に北から柳池中学校構内遺跡、長刀鉾町遺跡などの弥生時代から古墳時代に至る遺跡が分布している。弥生時代の遺構面の標高は31.2mで、遺跡中心部の四条烏丸付近の遺構面との比高差は-5mである。

調査地の基本層位は、近・現代の整地層(1m)、中世の遺構・整地層(0.3m)、緑灰色砂泥層(平安時代遺物包含層・0.2m)、茶灰色粘土層(0.2m)で、以下無遺物層の茶色粘土層、暗灰色砂礫層である。検出遺構は、弥生時代・平安時代・中世の3時期に大別でき、弥

生時代・平安時代の遺構は茶色粘土層、中世の遺構は緑灰色砂泥層上で検出した。

弥生時代の遺構には流路(SD1)

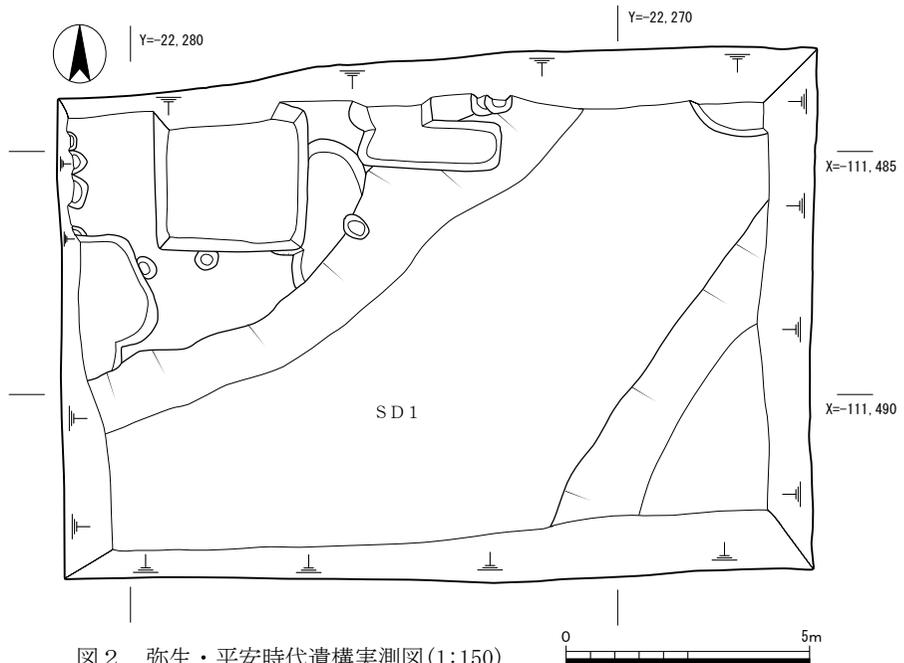


図2 弥生・平安時代遺構実測図(1:150)

があり、北肩を検出した。肩はなだらかに下がり、底部は平坦であるが一番深い所もある。幅は10 m以上、深さは平均1 m、最深部で1.6 mである。北東部と南西部の底部のレベル差は0.1 mで、地形の傾斜に従って北東から南西へ流れていたと考えられる。埋土は大きく3層に分かれ、上層茶灰色土層、中層は暗灰色砂泥層、下層は灰色砂土層である。中・下層は粘土や砂のブロックが混じり、複雑な堆積をしている。遺物は埋土全体に含まれ、小破片が多い。また摩滅したのものもあることから、遺物が投棄された場所は調査地より上流であったと推測できる。

平安時代の遺構は調査区北西部で検出したが、少数の柱穴などがある。

中世の遺構には土壇・柱穴・溝がある。柱穴は多いが、建物のまともは不明である。

**遺物** 遺物は整理箱に55箱である。この内、弥生時代の土器・石器が20箱を占め、他には平安時代から江戸時代に至る須恵器・土師器・陶器・磁器・瓦・銭貨などがある。弥生土器はすべてSD1から出土した。土器は先述したように層位的に混在しており、時期的な分離を明確に行うことはできなかった。ここでは、各時期の特徴を述べる。

畿内第Ⅰ様式の土器には壺・甕などの器種があるが、量はごく少量である。壺・甕の文様は貼付突帯文・ヘラ描直線文（多条）を主体とし、新段階に位置付けられる。逆L字口緑の瀬戸内系甕もある。

畿内第Ⅱ様式の土器には広口壺・壺蓋・無頸壺・長頸壺・甕・鉢・高杯などがある。量が多い。古段階では壺の口緑が広がり、口緑端部を下に拡張し、上面に刻目を施すものが多い。文様は貼付突帯の間隔が広がり、太く薄くなる。また櫛描直線文は単体で粗く施す。櫛描文を大きく回す流水文もある。甕はハケ目調整により、文様を持たないものが多い。この頃から大和系の甕がみられる。新段階では壺の口緑端部の刻目を上下に施すものがあり、Ⅲ様式まで続く。文様は貼付突帯がなくなり、櫛描直線文が主流となる。櫛描文は単体の間隔が狭くなり、複帯のものが出てくる。また直線文だけでなく、波状文もみられる。流水文も間隔が狭くなる。壺には内面に乳状突起を持つ近江系のものもある。甕は大和系のものの他、山形口緑の形態を持つ近江系の甕も多く出土している。

畿内第Ⅲ様式の土器には広口壺・長頸壺・無頸壺・鉢・高杯・甕などの器種があり、量が多い。壺の口緑部は大きく広がり、上・下に拡張する。文様は細かい櫛描を複帯で施す。流水文は細かく回している。甕には大和・近江系のものが多く出土している。

畿内第Ⅳ様式の土器には広口壺などの器種があるが量は少なく、文様は凹線文が主体となる。

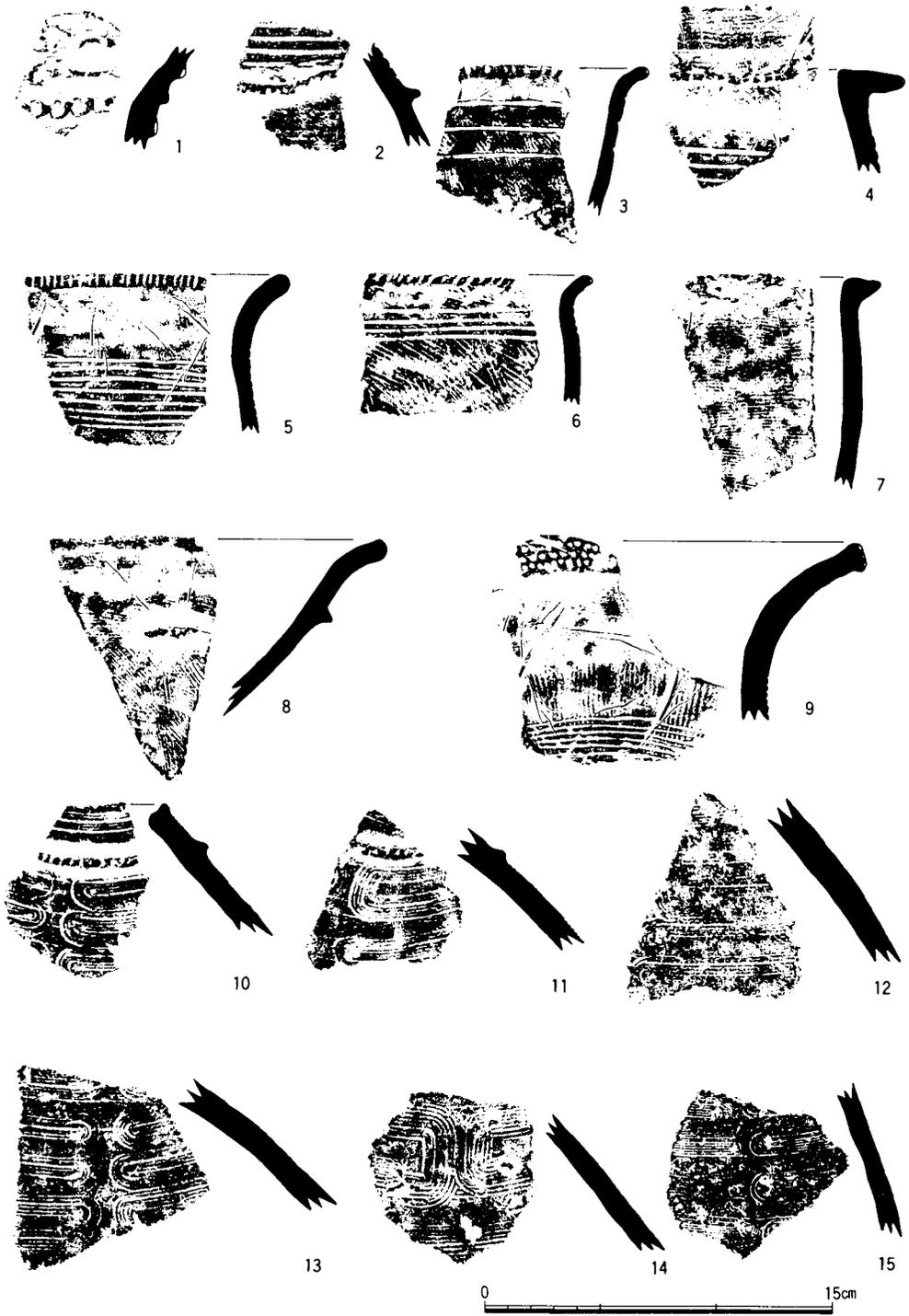


图3 SD1出土土器实测图(1) (1:3)

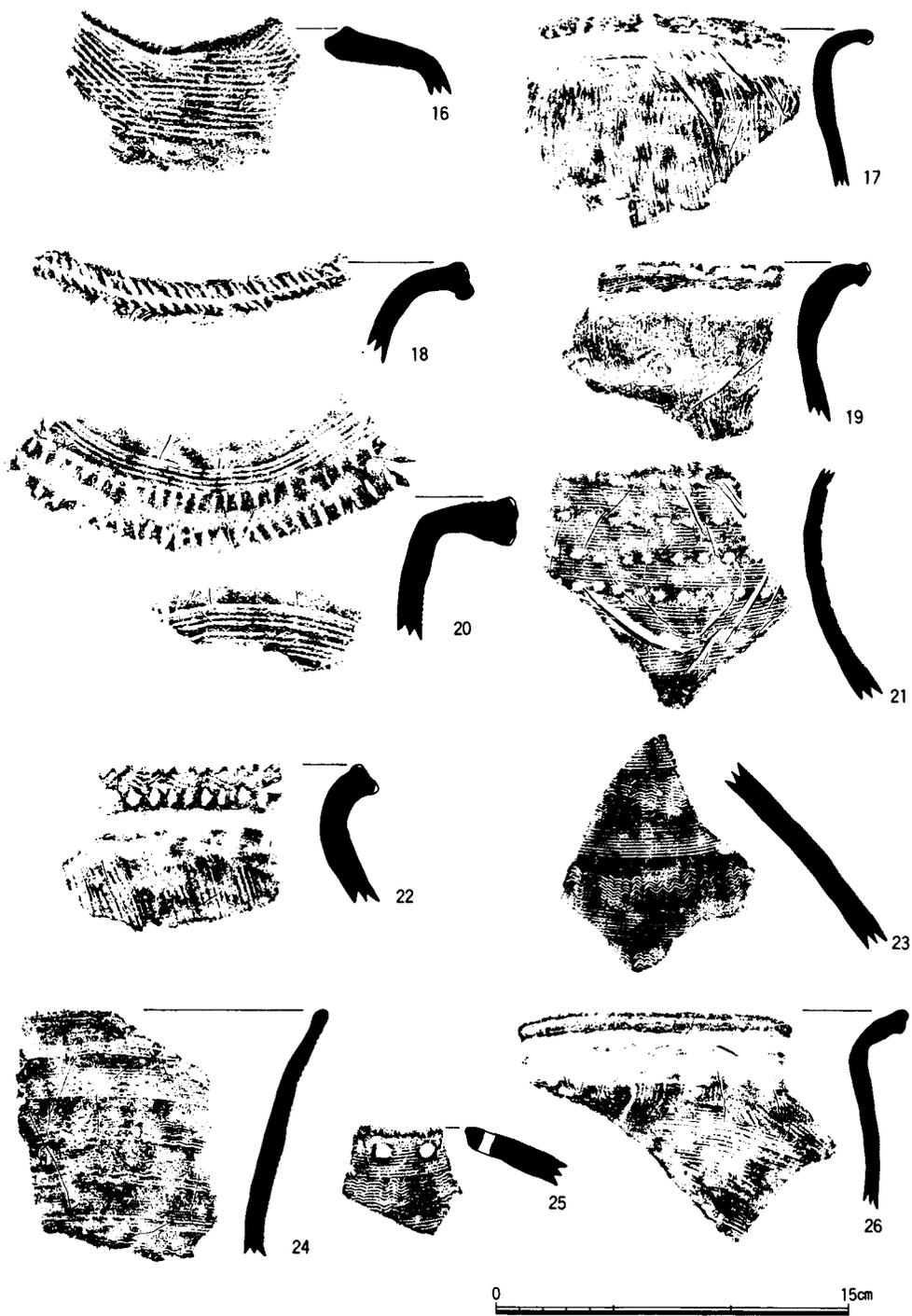


图4 S D 1 出土土器实测图 (2) (1:3)

石器はすべて S  
D 1 から出土し、  
石包丁・石鏃・太  
型蛤刃石斧・扁平  
片刃石斧・砥石・  
不明石器などが  
ある。石包丁はす  
べて磨製で打製の  
ものはない。形態  
には半月形直線刃

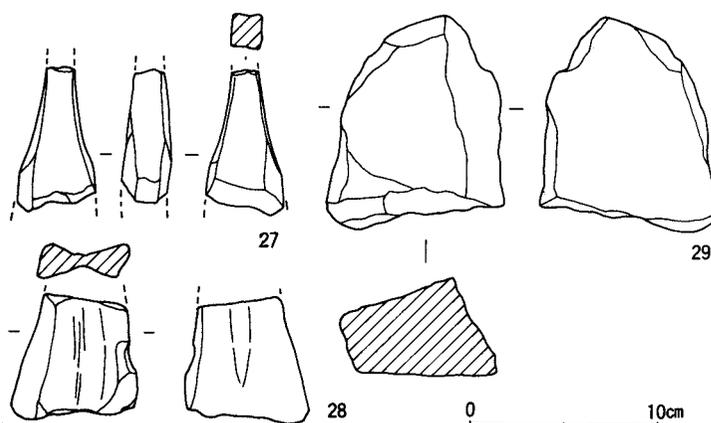


図5 SD 1 出土石器実測図 (1) (1:4)

(31・32・34), 長方形直線刃 (30), 半月形内湾刃 (33) がある。体部は斜方向, 刃部は長軸方向に研磨を施す。紐穴は直接穿孔する。刃部に細かい刃こぼれがみられる。石材は (34) が緑色片岩, 他は粘板岩である。石鏃は 1 点出土した。打製で形態は凹基式である。石鎗は 1 点出土した。形態は裁頭柳葉形である。刃部の断面は扁平な菱形である。研磨は両面斜方向に施す。基部は両側から半円形の抉りを入れ, 中心に穿孔する。太型蛤刃石斧は敲打による成形の後に全面研磨を施す。(41) は, 敲打されたままの面が残される。(43) は刃先が破損する。扁平片刃石斧は 2 点出土している。形態は側辺が平行し刃部が外湾するもの (42) と半月形になるもの (37) がある。全面長軸方向に研磨する。刃部は細かい刃こぼれがみられる。砥石は破損したものが多く, 全体の形は不明なものが多いが, (27) は四角錘形を呈している。すべて砂岩製である。不明石器 (39) は長方形で, 側面に半月形の抉りがある。全面研磨を施す。抉部内とその反対側面に長軸に直交する線条痕がみられる。

**小結** 今回の調査では弥生時代の遺構と豊富な遺物を検出し, 大きな成果をあげることができた。以下, 要点をまとめておく。

烏丸綾小路遺跡は従来の調査によって, 竪穴住居・方形周溝墓・水路などの遺構が検出されており, 集落の様相が次第に明らかになりつつある。

SD 1 からは多量の土器・石器が出土した。土器はⅡ・Ⅲ様式のもの为主体をなし, Ⅰ・Ⅳ様式は量が少ない。出土土器のうち, Ⅰ様式に遡るものは少量であるが, 山城盆地平野部における弥生時代開始の状況を知る上での手懸かりとなろう。石器の時期は層位的には限定できなかったが, 伴出した土器から考え, おおむね弥生中期頃に比定できよう。また石器以外に剥片が出土しており, 当地で製作されたものと推定できる。

(上村 和直・久世 康博)

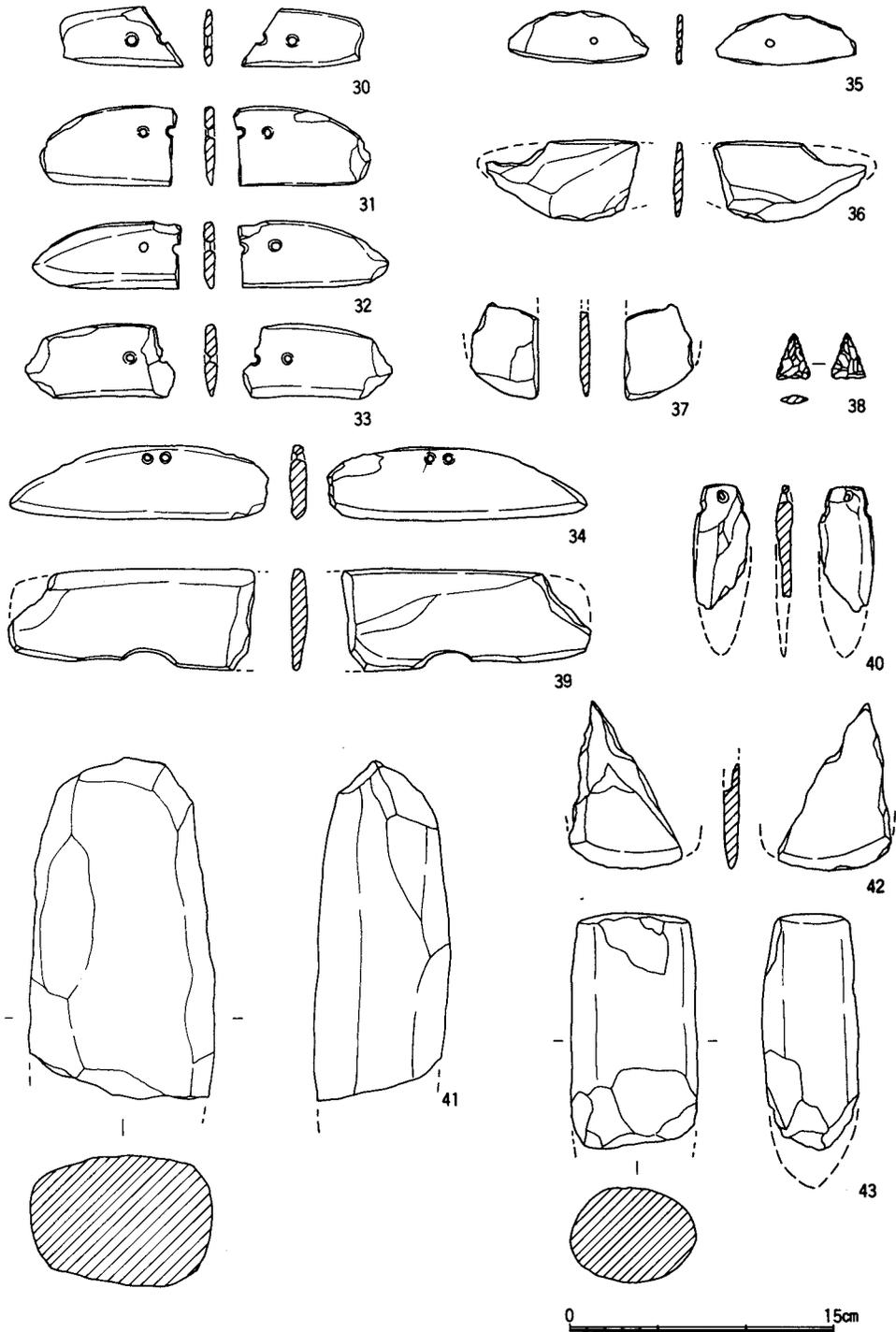


图6 SD 1 出土石器实测图 (2) (1:4)

## 8 平安左京六条三坊 (図版 13)

**経過** 調査は国道1号線共同溝工事に伴う第6次調査で、今次が最終年度である。調査地は国道1号線五条通の中央分離帯の中で、室町通を挟んだ約100mの区間で、西側の調査区をI区、東側の調査区をII区とした。調査地は左京六条三坊六・十一町に推定されている。

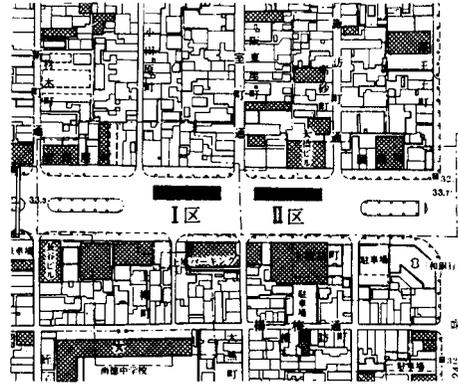


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構・遺物** 調査地の層序は極めて複雑で、各時代の遺構・整地層が重複している。基本土層は、現代盛土が厚さ0.3mで、以下は茶褐色泥土層(厚さ0.6m)、暗茶褐色砂泥層(厚さ0.7m)、暗灰色砂泥層(厚さ0.6m)を主体としており、地山の層は茶黄色砂泥層である。それぞれは近世・中世・平安時代の遺物を含む土層であるが、土壙・柱穴・井戸などが複雑に切り合って成立しており、「面」として捉えきれない場合が多々あった。江戸時代の遺構としては、土壙・柱穴・溝・井戸・瓦溜などがあり、茶黄色砂泥層まで掘り込んでいるものも多数あった。

鎌倉～室町時代の遺構は、柱穴・土壙・井戸などが多数ある。柱穴底部に砥石を据えたものも検出されるが、建物としてまとめることはできない。

平安時代の遺構は、後期の土壙が主となっており、柱穴などを数箇所検出したに過ぎない。特にI区の土壙からは土師器皿が多量に出土した。

奈良～平安時代前期の遺構は、I区の東端部で検出した北東から南西に流れる流路で、西肩部を検出した。川幅は4m以上を測るが、その規模は不明である。

遺物は整理箱で157箱出土し、各遺構・遺物包含層から多量の遺物が出土した。そのうち土器類が最も多い。奈良～平安時代前期の遺物は流路内から出土したもので、土師器・須恵器・瓦がある。平安時代の遺物は、各調査区の土壙から多量に出土し、良好な一括資料である。鎌倉～室町時代の遺物は最も多く出土しており、種類も多様である。近世の遺物からは土師器皿、陶器甕・播鉢、磁器碗・皿、銭貨(寛永通寶)などが出土している。

II区では茶黄色砂泥層の直上、暗灰色砂泥層から古墳時代の須恵器杯身が出土しているが遺構に伴ったものではない。

**小結** 今回の調査地は『京都の歴史』の付図によれば、I区は池亭、II区は小六条院に

該当しており、これに関連する資料が得られると期待された。しかし、左京特有の複雑な遺構の在り方のため、明確にそれらに関連する成果は得られなかった。しかし、平安時代末～中世にかけての良好な遺物の一括資料が得られており、今後の有用な研究資料となり得る。また遺構については、その数が多く、また切り合いが激しく、調査区外に続くものが多いため、性格が不明な点が少なくない。

(久世 康博・上村 和直)

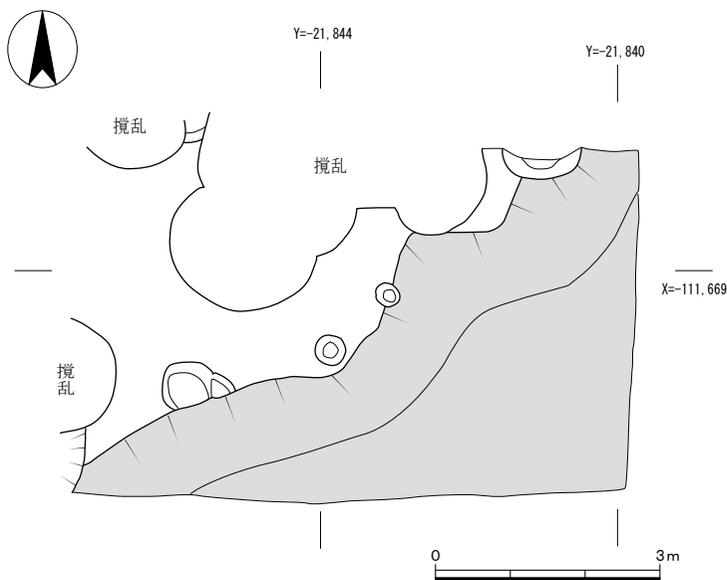


図2 奈良～平安時代前期流路跡実測図(1:100)

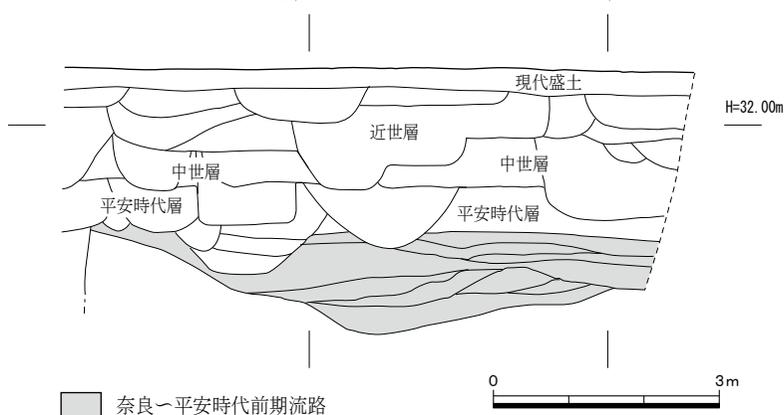


図3 奈良～平安時代前期流路跡土層断面図(1:100)

## 9 平安京左京九条二坊 (図版14～17)

**経過** 調査地は平安京の左京九条二坊十三町に位置する。昭和59年3月に試掘調査を実施した所、遺構・遺物の残りが良好なことを確認、全面にわたり発掘調査を実施する運びとなった。調査は敷地内にA～D区の調査区を設定し、昭和60年5月後半より開始、8月後半には地元住民を対象とした説明会を催し、9月末日に現場作業を終了した。調査面積は3,940㎡であった。

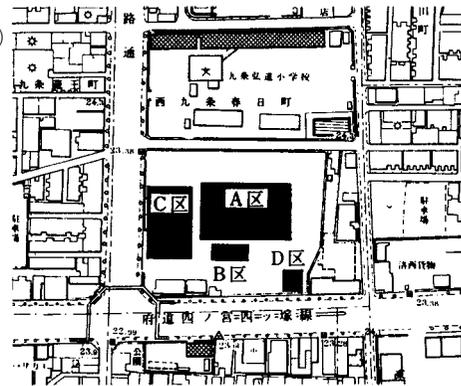


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構** 平安・鎌倉・江戸時代のものがある。調査区の層序は上から盛土 (0.6 m)・旧耕作土 (0.15 m) があり、旧耕作土の下は地山の褐色砂礫層となる。なおSD100, SG350の上面に限り、整地層が認められた。

平安時代 油小路東側溝 (SD10)、南北方向の流路 (SD100)、池状遺構 (SG350) などがある。いずれも9世紀後半～10世紀初頭に属する。SD10はC区西端で検出した。幅1.5～1.8 m、深さ0.4 mあり、埋土は灰色細砂層であった。SD100はA・B区で検出した。幅約16 m、深さ約0.8 mある。埋土は上層が青灰色泥土、下層が腐植土と細砂の互層であった。SG350はA区東端で検出、長さ15 m以上、深さ0.4 mあり、窪み部分に川原石・砂利を敷いて洲浜状に仕上げている。

鎌倉時代 建物 (柱穴)・井戸・土壇・溝などがある。柱穴は約100基検出した。A区中央では約40基の柱穴が柱筋を揃えて並んでおり、2棟前後の建物が想定できる。他は建物としてまとまるものはない。井戸はA区で11基、B区で1基、C区で3基検出した。石組みの1基 (SE287) を除くと、すべて方形の木枠組み井戸である。土壇は規模の大きなものがA区東半に集中する。溝はA区で南北方向のものを2条検出した。

桃山～江戸時代 C区で御土居の堀 (SD1) を検出した。SD1は幅が約20 m、深さ約1.5 mある。底面には作業単位を示すと考えられる連続した窪みが認められた。埋土は底に細砂層が認められたものの、大部分は泥土層で、この中に多量の木製品が含まれていた。

**遺物** 土器・瓦類・木製品などが整理箱に約400箱出土した。

平安時代 SD10・SD100・SG350 などから9世紀後半～10世紀初頭頃の土師器・須恵器・黒色土器・二彩陶器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦などが出土した。SG350からは石帯未製品・

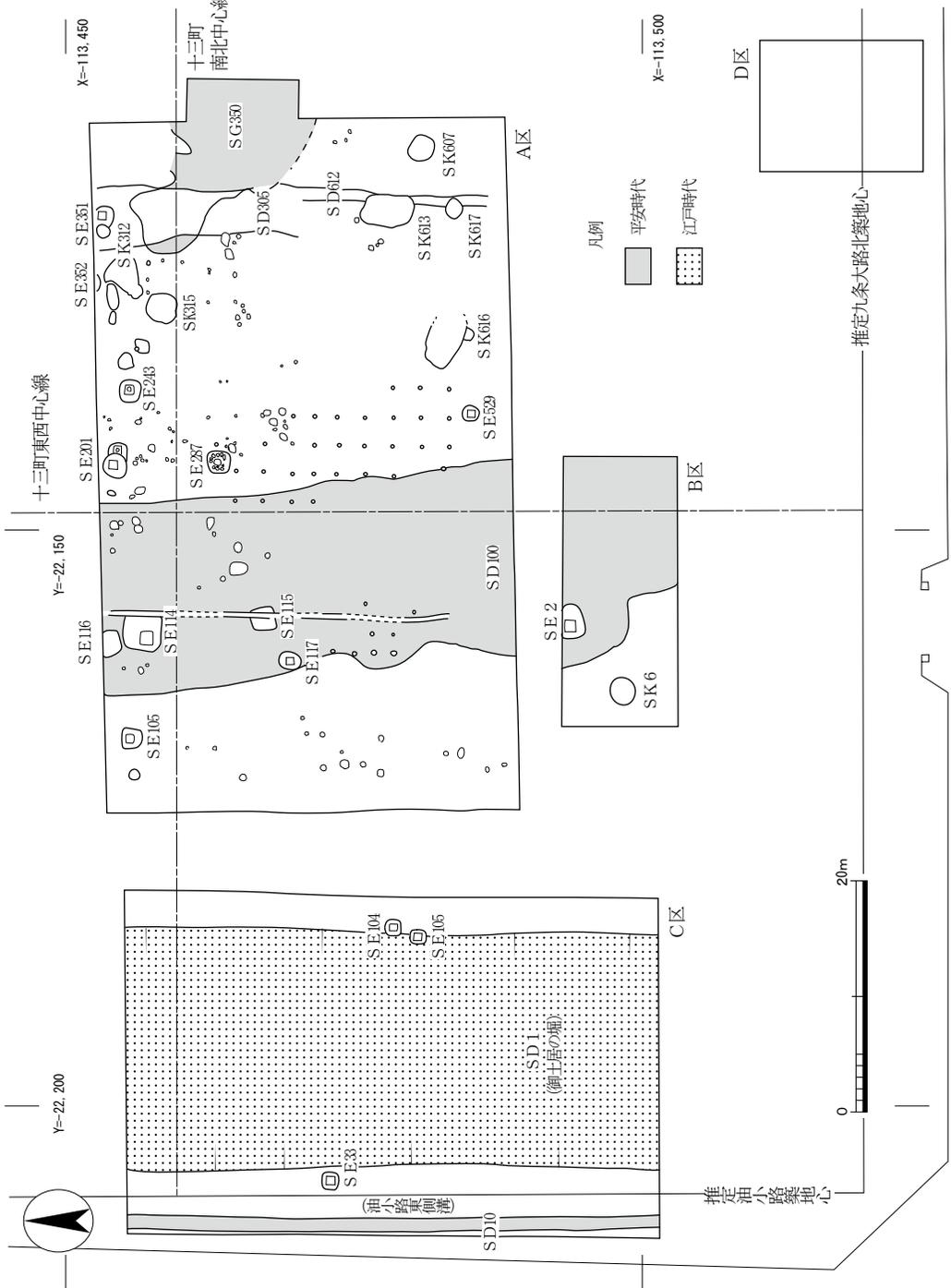


図2 遺構配置図(1:600)

土馬・土錘・人面土器・ミニチュア土器といった祭祀関係遺物が出土した。またSD 100からは木簡・斎串・人形・皿・高杯脚・刀形・柄・曲物・箸などの木製品と端部が燃えた松明の残片が多数出土した。

鎌倉時代 主に井戸・土壙・溝などからは13世紀代に属する土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・瓦・銭貨などが出土している。

桃山～江戸時代 御土居の堀SD 1からは多量の木製品と、土師器・国産陶磁器・瓦・銭貨などが出土している。木製品の内容は、飲食具（漆器の椀・皿、挽物・杓子・ヘラ・箸・曲物・折敷・箱物・桶・栓）、家什具（ほうき）、容飾具（櫛）、燈火具（灯明台）、履物（下駄）、工具（漆用ヘラ・刷毛・錐・刀子や包丁の柄・糸巻・紡錘車、文具（筆軸）、遊戯具（独楽・将棋駒王1、銀1、歩2・木球）、装飾具（欄間飾・雲形飾・楯板）、工芸品（人形の頭部と脚部）、信仰関係品（人形・舟形・卒塔婆・五輪塔の火輪・陽物・尊立像）、その他（加工した木材・棒・箱物の破片・建築部分）である。また墨書は荷札類を始め、折敷、箱物・糸巻・刷毛などの木製品にみられた。この中には「天正」・「慶長」・「承応」・「寛文」などの紀年木簡を始め、ポルトガル語で記したキリシタン関係の荷札、西国三十三箇所巡礼札、掟札など様々なものがある。これらの木製品は江戸時代の生活文化を示す貴重な資料といえる<sup>注</sup>。

この他、弥生土器や環状石斧といった古い時代の遺物も若干出土している。

**小結** 調査成果を統合すると、調査地は以下のように変遷したことが推察できる。まず平安時代では流路や池状遺構がみられたが、建物や井戸・土壙といった生活関連遺構が未検出であるため宅地として利用されなかったことが考えられる。鎌倉時代に入ると流路や池状遺構は完全に整地され、宅地として活発に利用された。建物や井戸などはこの時の生活跡を示す遺構であるが、建物配置については十分解明できなかった。しかしその後は耕作地帯となり、桃山時代に入って御土居が築造されるに及んで、調査地の西端にも堀が開削されることになる。この堀は江戸時代を通じて湿地帯、あるいは部分的に水路として存続し、近代に入って完全に埋没する。そして戦後の再開発に伴って居住地に整備され今日に至ったのである。

（丸川 義広・木下 保明・辻 裕司）

注 梅川 光隆「京都・平安京左京九条二坊十三町」『木簡研究』第7号 1985年

## 10 平安京左京九条三坊 (図版 18～20)

**経過** 京都市高速鉄道烏丸線の南進工事は、京都駅から近鉄竹田駅間で予定されているが工事工区と重なる周知の遺跡は平安京跡だけであり、発掘調査対象区は、平安京推定京域内に限られている。具体的には針小路通り～九条通り南 30 m までの地区であり、平安京左京九条三坊十三町～十五町の西端辺、及び烏丸小路と推定されている地域である。

南進工事に伴う発掘調査は、既に昭和 58 年から部分的に実施している。58 年度に実施した 81～83 トレンチの発掘調査は<sup>注</sup>、信濃小路～九条大路間の南半を調査対象とした。同調査では、平安時代後期に形成され室町時代までその機能が維持されていたとみられる烏丸小路の路面部東半及び東側溝を検出した。また室町時代～桃山時代の濠を始めとする平安時代以降の各時期の遺構も多数検出しており、その成果は大きいものがある。

昭和 59 年 8 月 27 日から連続して実施した今回の発掘調査は、調査再開時には、残る調査対象地全体の調査を一連で完了する予定であったが、小数の民家と工場の立ち退き問題が解決しなかったため一部は、昭和 60 年度へ残ることとなった。

**層位** 各調査地点の基本層位は、平安京成立以前の原地形を形成している無遺物の自然堆積層（地山）と、その上に順次堆積している平安時代以降の各時期の堆積層（遺物包含層）によって構成される。

平安時代の堆積層は後期の整地層とみている層を No.89 トレンチ北部以北の各調査地点で 1～2 層確認している。平安時代前期から中期に比定できる堆積土層はどの調査地点でも検出していない。

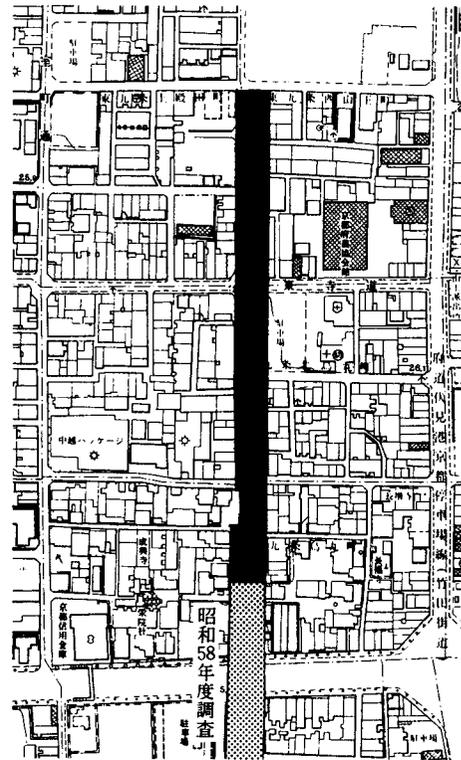


図1 調査位置図 (1:5000)

中世から近世の堆積層は、鎌倉時代に位置付けられる層を各調査地点で1～2層確認している。これらの土層は、上面の柱穴などの成立状況からみて整地層と判断している。No.89 トレンチ北部以北では、平安時代後期の層上に堆積しており、No.89 トレンチ南半以南では自然堆積層（地山）直上に堆積している。室町時代以降の層は、各調査地点とも室町時代から江戸時代の長い時期幅で理解している耕作土層を確認しているに過ぎない。近代の整地層は、この耕作土層上面に積み上げられている。

平安時代以降の堆積層は、近代に入ってから整地層を除くと全体には極めて薄く、層位数も少ない。このことはこの地域が平安京成立以降にも実体的な都市化が遅れ、平安時代後期から鎌倉時代の短期間のみ稠密な都市的状况を呈するが、それ以降中世の早い段階には近郊農村化した歴史を反映しているものと理解している。

**遺構** 平安時代後期から鎌倉時代の遺構群を中心に平安時代以前のものを含めて、各時代の各種の遺構を多数検出している。

平安時代以前の遺構は、立28地点において弥生時代の溝1条を検出している。この溝は、断面形状は開いたU字状を呈し、調査区を北東～南西に走る。出土遺物は少ないが、第V様式末の土器片が出土している。溝の性格などは判断しがたいが、遺跡の一端を検出した意味は大きい。集落跡など遺跡の中心地は、黄褐色の色調を持つ泥砂層（地山）の広がりからみて、調査地東方とみられる。

なお、No.89 トレンチ北部を中心に、縄文時代晩期の土器、石器が出土している。これらの遺物は、新しい時期の層、遺構への混入遺物として出土しているものも多いが、地山砂礫層上面の小窪み内堆積土からも一定量まとまって出土している。この小窪みについては、新しい時期の遺構に削平されている部分が多く、形状を明確にし得なかったため、そのようにして扱っているが、土壌など遺構の残欠とみられる。同様のものを近接する2箇所を確認している。

平安時代前期に比定できる遺構は、No.89 トレンチで検出した小井戸1基である。この井戸は、湿地の脇をうがって曲物を設置しただけの簡易なものである。平安時代中期の遺構は、No.86 トレンチとNo.88 トレンチの2箇所、柱穴を含むピット、土壌、溝などを検出している。この他の調査地点では、同期の遺構は検出しておらず、限定された検出状況を示している。

平安時代後期から鎌倉時代の遺構は、土壌・井戸・溝（烏丸小路東側溝など含む）・ピット（柱穴と確認できるものも多い）・掘込・落込など各種のものを各調査地点で多数検出

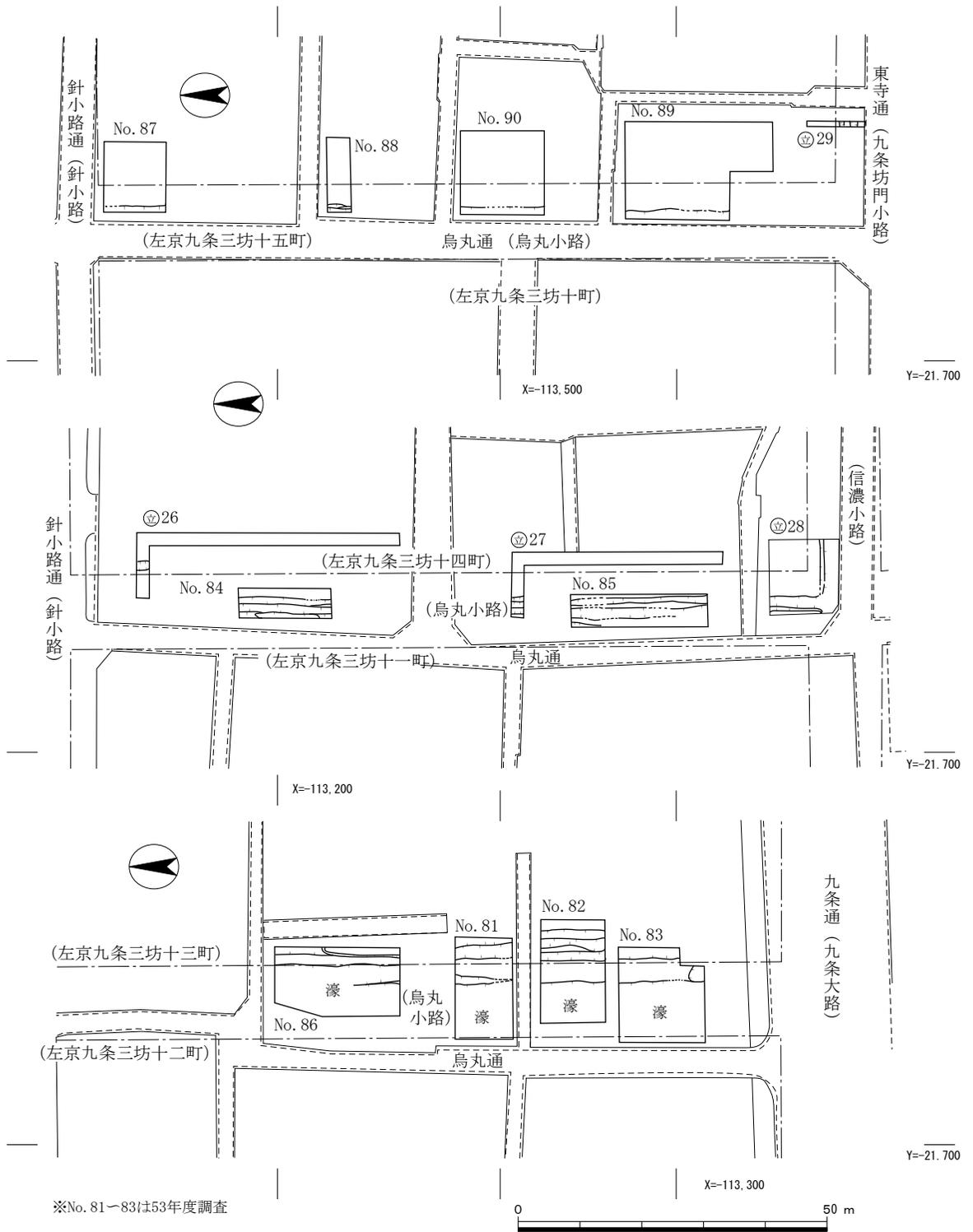


図2 主要遺構配置図(1:1000)

している。しかし、平安時代後期前半（11世紀）の遺構は、No.89トレンチ、立27、28において主に検出しており、他地点では比較的少なく、前述した平安時代中期の様相に近い。平安時代後期（12世紀代）から鎌倉時代にかけて遺構密度は非常に高くなり、同期以前の様相とは明確に異なる。遺構のあり方からみれば、稠密な都市的状况を呈していた時期とみることができよう。

鎌倉時代末から室町時代初頭を境にして遺構の種類が限定され、遺構数は急激に減少し、遺構密度がかなり低くなる。室町時代以降から江戸時代の遺構がまとまって検出できる地域は、室町時代後期から江戸時代中期の濠などを検出しているNo.86付近以南から既調査地点No.83付近までにはほぼ限定できる。この様相の変化は中世の早い段階以降近郊農村化するこの地域の歴史を直截に示している。

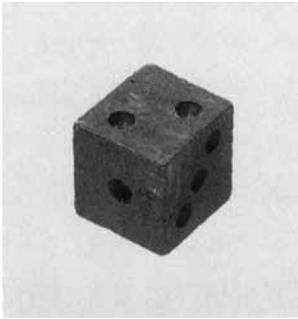
烏丸小路関係の遺構は、各調査地点で重複する数条の東側溝群を、またNo.85トレンチ以南の調査地点では、東側溝と共に、側溝に対応する数枚の道路敷も検出している。

この結果、既調査地点を含めると針小路から九条大路間の三町間にわたり、ほぼ連続する形で烏丸小路東側溝を調査したことになる。検出した側溝群の時期は、各調査地点とも平安時代後期から鎌倉時代が中心であるが、No.85トレンチ、立28、No.86トレンチなどでは室町時代に入ってから埋没した溝も検出している。

これら烏丸小路東側溝群は、信濃小路を挟んで北側の各調査地点では、推定ラインから2～5m西側に、南側の各調査地点（既調査地点No.81～83を含めて）では、推定ラインの約3m東側に位置している。検出状況からみれば、平安時代後期から鎌倉時代の烏丸小路東側の各側溝は、信濃小路を境として東西に大きくずらされて設置されていたといえる。このような道路側溝のあり方は、条坊の小地域における変遷の一例として今後重要な資料となる。

**遺物** 今回実施した一連の調査で出土した遺物には、多量の土器類を始め、瓦・土製品・木製品・石器・石製品・金属製品・銭貨・骨・流木など自然遺物など各種のものがみられる。

縄文時代の遺物は、No.89トレンチ北半を中心にしてNo.90トレンチからも若干出土している。No.89トレンチ北半部の地山砂礫上面では、2箇所の小窪み内堆積土から器表に付着した煤が残る比較的依存状況の良好な土器片が少量ではあるがまとまって出土している。新しい時期の層や遺構へ混入した状態で出土したものを含めると総計100点を上まわっている。出土土器の器形には、浅鉢・深鉢がみられる。型式的には、船橋式に併行するものであり、縄文時代晩期末に比定できる。土器類以外には同期のものとみられる石鏃



No. 84 溝 2 出土骰子

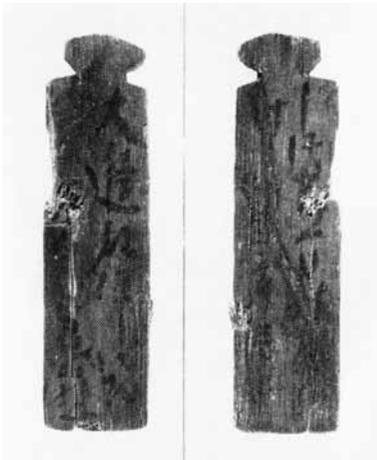
が上層への混入品として No.89, 90 両トレンチから各 1 点ずつ出土している。これら遺物の出土状況からみて、この地域を同期の遺跡と認知できるだろう。

弥生時代の遺物は土器類や石器が少量ずつではあるが各調査地点から出土している。そのほとんどは、新しい時代の遺構や土層へ混入して出土したものである。しかし、立 28 では、弥生時代終末期に埋没したと判断している溝を検出しており、その溝内からは少量ではあるが畿内第 V 様式末に比定し得る土器が出土している。

古墳時代の遺物は、弥生時代の遺物などと同じく、新しい時代の遺構や土層へ混入して出土している。6 世紀代後半の須恵器杯身などが出土している。

平安時代前期～中期の遺物は少量しか出土していない。平安時代前期に比定できるまとまった遺物は、No.89 トレンチ・井戸 3 から土器類が少量出土したに止まる。新しい時期の遺構への混入遺物もごく少ない。平安時代中期の遺物も出土量は少ない。No.86 トレンチと No.88 トレンチの 2 箇所を中心に出土しており、出土地点、出土遺構の広がり是比较的限定された範囲である。

平安時代後期～鎌倉時代の遺物は、各調査地点から土器・木製品・瓦などが多数出土している。各調査地点とも、この時期の遺物が中心をなすといえる。同期の出土土器群の様相は、基本的には平安京左京域内の他地点で出土しているものと大差はない。しかし、



No. 84 土壙 1 出土木簡

現場で通観した印象では、左京中心部に比べて輸入陶磁器がやや少なく、瓦器碗や同三足羽釜類が若干多いようである。結論は整理研究後にゆずるが、このような印象差が実証できるならば都市内での地域色を解明して行く上で重要な手懸かりになるであろう。

木製品は No.84, No.85 トレンチの溝・土壙などから一定量まとまって出土している。木製品には、生活用具・祭祀用品・遊戯具など各種のものがみられる。

No.84 トレンチの溝 2 からは、平安時代末～鎌倉

時代初に比定しうる土器類や、木製品と共に象牙製とみられる骰子が1点出土している。この骰子は表裏を加えると「7」となるいわゆるローマ系のタイプ「天一地六」である。確実な出土例としては、日本最古の可能性が高い。

瓦類は、平安時代後期のものが中心である。出土地点は、信濃小路以南が主である。それ以北の調査地点からは少量しか出土しておらず、北へ向かうほど出土量が少なくなり限定された出土状況を示している。このような出土状況では、瓦を使用していた建物群の存在範囲を示しているものとみられる。出土瓦の産地別では、大和系のものが一定量まとまって出土している。平安京京域内から大和系の瓦がまとまって出土した例は少なくその意味でも重要な資料といえる。

室町時代以降江戸時代の遺物は、各調査地点とも出土量は少なく、限られた遺構から出土しているに過ぎない。

室町時代前期の遺物は、No.89 トレンチ溝群から土器類と木製品が少量ずつまとまって出土している。室町時代後期の遺物は、No.86 トレンチ溝2から土器類が少量出土している。同No.86 トレンチの濠底部からは、室町時代末期に比定し得る土器類・木製品がごく少量出土している。

桃山時代～江戸時代の遺物は、No.86 トレンチを除く各調査地点では、埋桶・漆喰遺構及び井戸などの比較的限られた遺構から一定量が出土しているに過ぎない。No.86 トレンチでは、濠などから桃山時代～江戸時代中期の土器類・木製品などの遺物が多数出土している。江戸時代後期の遺物も他地点に比べて多いようだ。

**小結** 高速鉄道烏丸線南進工事に伴う平安京京域内の発掘調査は、昭和59年度に連続して実施したトレンチ調査（No.84～90）、立会調査（立26～29）の終了ではほぼ大勢を決したといえる。その調査成果は各項で示したごとく極めて大きなものである。しかし、民家の立ち退き問題が解決せず、No.88 トレンチとNo.90 トレンチの間、No.89 トレンチの南側、No.86 トレンチ北側などを含め数箇所の本調査対象地が未調査区として残っており、重要な調査課題を残す地点も多い。また発掘調査を単独で実施し得なかった生活道路部分などで工事が始まっており、立会調査で問題点の点検を行っておきたい部分も多く残っている。

（小森 俊寛・上村 憲章 平安京調査会）

注 「左京九条三坊（1）」『京都市埋蔵文化財調査概要』 昭和58年度 1985年

## 11 平安京右京七条一坊 (図版 21・22)

**経過** この調査は京都市中央卸売市場の施設改築に伴うものである。同市場の敷地は右京六条一坊、七条一坊にわたり、これまでに4次の発掘調査が行われている。特に昭和57年度に実施した第4次調査では、朱雀大路や北小路、あるいは西鴻臚館に関する遺構、遺物を多数検出した<sup>注</sup>。今回の調査地はこの第4次調査地の北側、左女牛小路のやや南から西鴻臚館の北端部付近、七条一坊二・三町の東部に該当する地域である。調査は市場の旧施設の基礎などにより下部の遺構が破壊されている部分を除き、10箇所のトレンチを設定して行った。

**遺構・遺物** 調査の結果検出した主な遺構は朱雀大路西側溝 (SD124, SD465) 及び路面 (SF467), 七条坊門小路北側溝 (SD901), 井戸, 建物, 流路がある。朱雀大路西側溝は1区, 4区で確認しているが, 特に4区

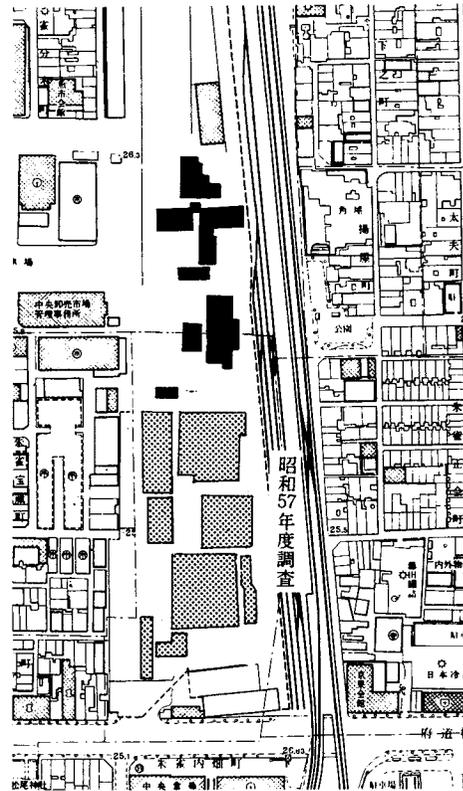


図1 調査位置図 (1:5000)

で検出した七条坊門小路との交差部付近が良好に残存しており, 大路側溝が七条坊門小路を横切る部分には, 杭と矢板を使用した護岸施設が良好な状態で出土した。杭列は矢板を支えるもの以外に溝の中央にも1列検出しており, この部分が暗渠上になっていたことがうかがえる。溝内からは9世紀から10世紀にかけての土器類が出土しているが, 量的に多いのは10世紀代のものである。溝の最上層上面から路面にかけて瓦を多量に含む砂礫層によって整地がなされており, 溝が廃絶した後もしばらく機能していたようである。一方1区で検出した朱雀大路西側溝 (SD124) は11世紀から12世紀にかけての遺物を含み, 溝の廃絶後路面にあたる位置にかけて鎌倉時代の小規模な建物を検出していることなどから, この時期には道路としての機能も失っていたと推測される。更に1区, 3区, 6区ではこれらの遺構の下層で北東から南西に流れる自然流路を検出した。S D 135, 204, 601

は古墳時代前期から奈良時代後期にかけての遺物を含む自然流路で、1区ではこの流れの上部で朱雀大路の路面を検出しており、平安京造営直前まで存続していた川跡と思われる。

遺物は整理箱に約500箱出土した。平安時代の遺物の9割以上が瓦類で、土器類は少ない。他に若干の木製品や銅銭がある。瓦類は主に1区、3区、4区から出土したが、特に4区のSD465及びSF467からは多量に出土した。大半が丸瓦・平瓦の破片であるが、軒丸瓦、軒平瓦、鳩尾片などかなり含まれている。土器類がまとまって出土したのはSD465の南部付近に限られ、他の遺構からは少量出土しただけである。SD465出土土器類破片数1667片のうち土師器61.2%、須恵器24.8%、黑色土器

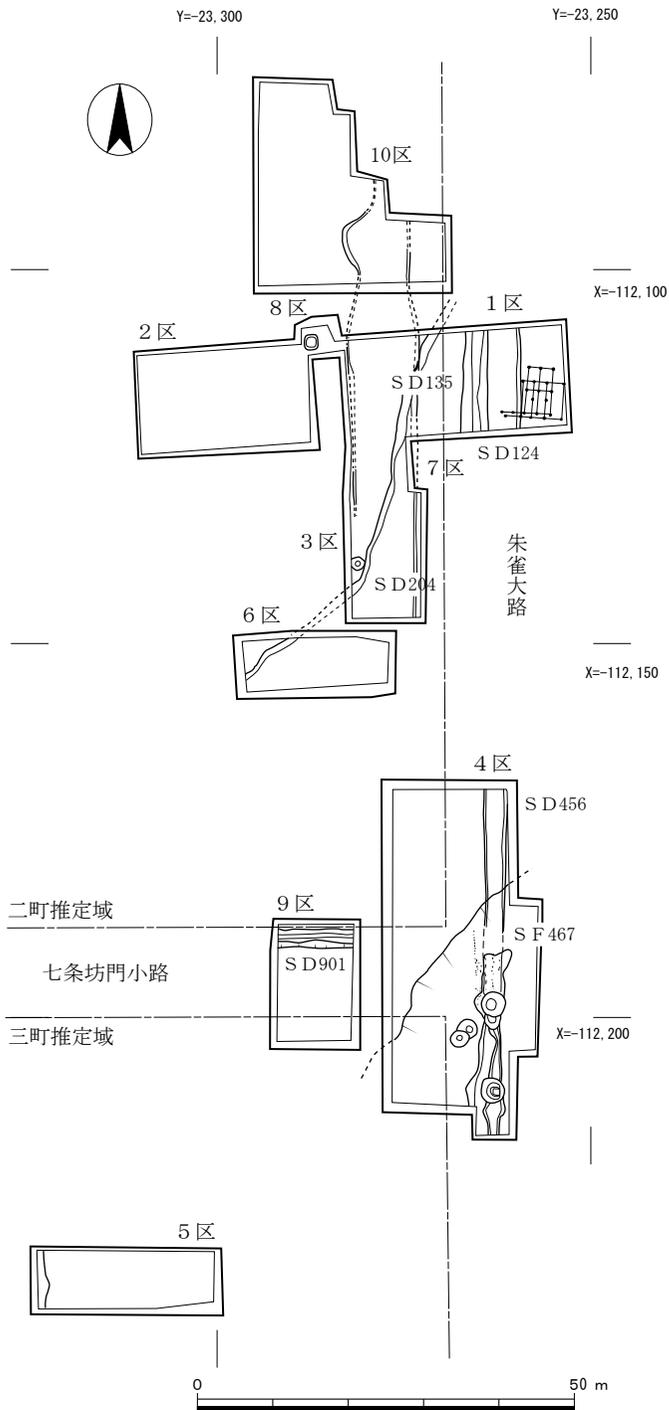


図2 主要遺構配置図(1:1000)

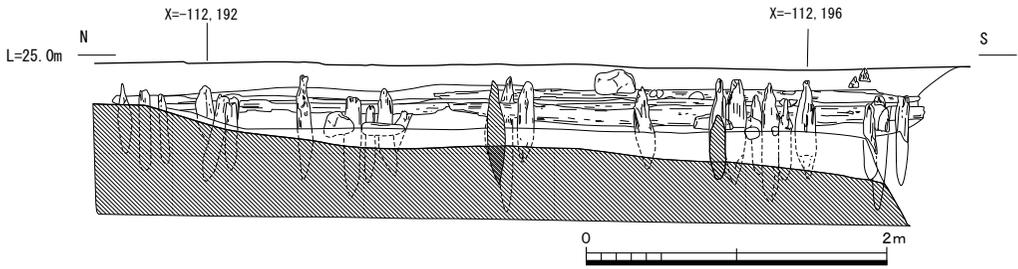


図3 SD 456護岸状況(1:50)

2.3%, 緑釉陶器 1.9%, 灰釉陶器 9.4%, 無釉陶器 0.2%, 輸入陶磁器 0.3% である。溝下層土の一部が9世紀中頃のものである他はおおむね 10 世紀後半に属するものである。土器類に伴って銅銭が出土しているが、下層からは承和昌寶、上層からは延喜通寶、乾元大寶が出土している。特に最上層からは腐蝕が激しく、正確な銭種や数量は不明であるが、数十枚の延喜通寶がまとめて出土した。

**小結** 今回の調査では、平安京条坊関係の遺構を比較的明確に検出した。しかし、西鴻臚館に関する遺構は調査区が推定地の北西の一角に掛っただけということもあり検出できなかった。ただ路面の整地に使用されていた多量の瓦類は西鴻臚館に関するものとみてよいと思われる。

朱雀大路の存続期間に関する知見についても前回の調査と同様のものが得られたが、かつて大規模な道路として使用されていた地帯のその後の変遷に関する詳細な情報を得るには至らなかった。平安時代の遺構の下層に検出した流路は従来資料の少ない京都盆地中央部の平安時代以前、特に奈良時代の遺物を出土した点で貴重なものといえよう。

(平尾 政幸・本 弥八郎)

注 「右京七条一坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和 57 年度 1984 年

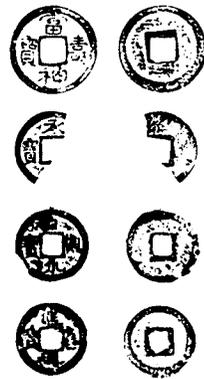


図4 SD 465 出土銅銭拓影(1:2)

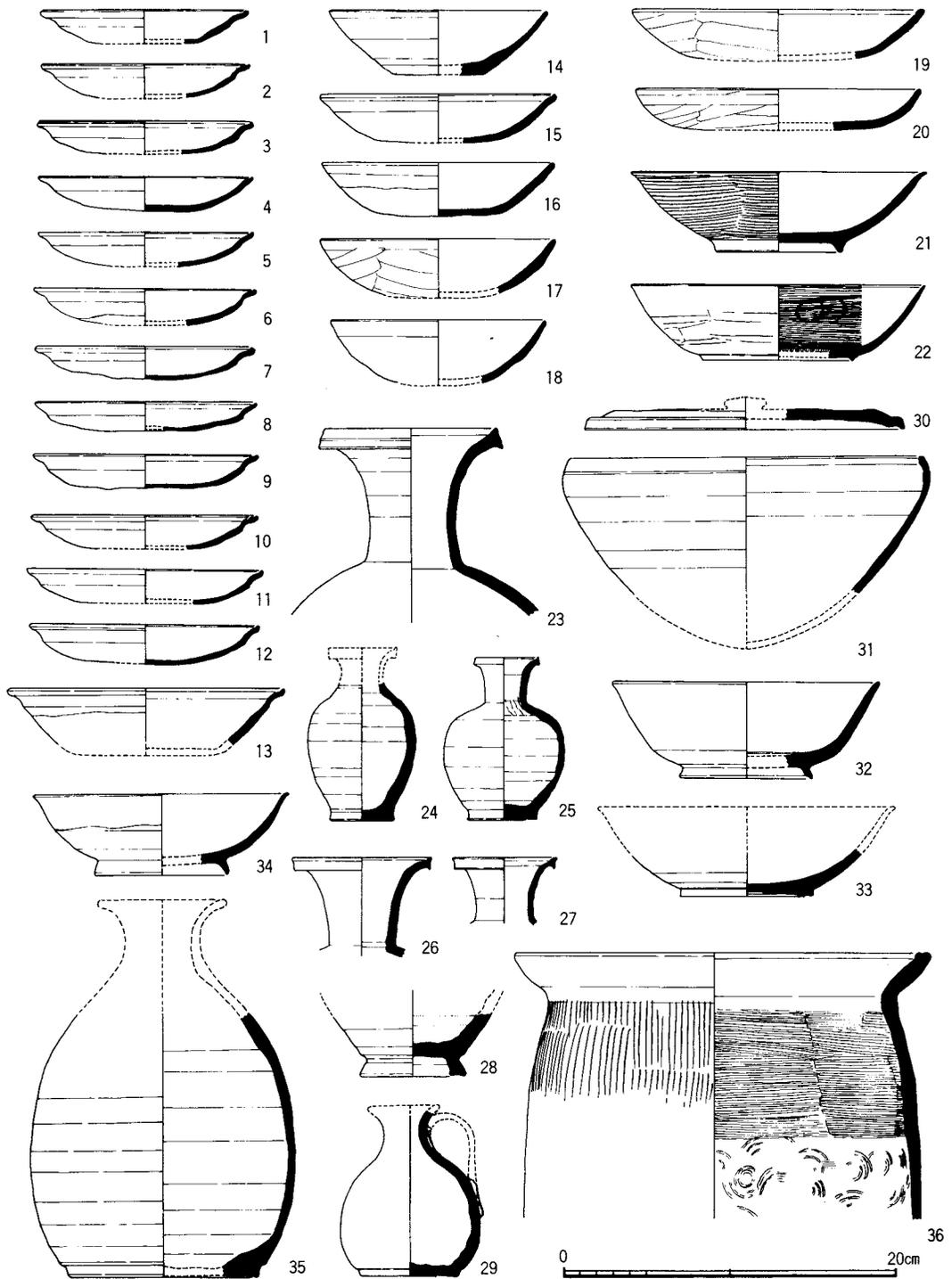


図5 SD 465 出土遺物実測図 (土師器 1 ~ 21・36, 黒色土器 22, 須恵器 23 ~ 28・30 ~ 31, 緑釉陶器 29・32・33, 灰釉陶器 34・35) (1:4)

## 12 平安京右京八条二坊

**経過** 調査地点は右京八条二坊十六町にあたり、敷地東辺を野寺小路が走る。『拾芥抄』西京図には「号院御領」と記載されている。昭和59年7月4日マンション新築工事に先立ち、試掘調査を実施した所、平安時代前期の柱穴を確認し、本調査を実施した。調査期間は8月1日から31日までの1ヵ月間である。野寺小路と宅地内を同時に調査できるように、東西20m、南北7mを調査区とした。

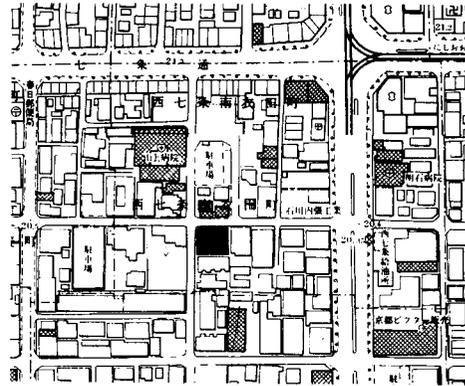


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構** 盛土・耕作土・床土の下に平安時代後期の遺物を少量含んだ黄橙色及び明褐色の砂泥層が堆積し、その下に平安前期の遺物を多く含む灰オリーブ色砂泥、褐灰色の砂泥層が堆積していた。更に下層は明褐色砂礫の地山である。各遺構は地山面で検出した。

検出した遺構は野寺小路の路面・西側溝・犬走・築地に相当する部分・宅地内の溝・土塋・柱穴群などである。各遺構とも平安時代前期である。

路面は調査区東端で検出した。表面にはまばらに小石が張り付いており、西部は緩やかな斜面となり、西側溝に繋がる。西側溝は幅1.6m、深さ0.2m～0.3mの南北溝である。北側では幅が1.3mと狭くなり、大部分は素掘りのままであるが、一部は板側になっている。側板を溝の底端に立て、その外に直径10～20cmの石を込めている。柱穴群はこの側溝の西側に掘られた宅地内の溝の更に西側で大小20基検出した。

**遺物** 出土した遺物は整理箱に10箱である。その内訳は土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯・蓋・壺・鉢・黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、磁器、製塩土器、銭貨（富寿神寶）などである。これらの遺物の年代は、平安後期の遺物包含層から出土した少量の土器以外は平安時代前期のものである。

**小結** 小面積ながらも、平安時代前期の野寺小路の路面・西側溝・犬走・築地相当部分・宅地内の溝・柱穴などを発見した。

出土遺物は平安時代前期のものがほとんどで、柱穴の掘形からは、完形品やそれに近いものが出土した。特異な在り方である。（北田 栄造 京都市埋蔵文化財調査センター）

『平安京跡発掘調査概報』昭和59年度 1985年報告

### 13 平安京隣接地（図版 23・24）

**経過** 調査地は平安京東京極大路の東約 60 m で綾小路の延長上にあたる。京域外ではあるが四条大路にも近く、中世以後の遺構の存在は十分予想される地域であるため発掘調査を実施した。周辺部の道路事情により表土の搬出が不可能であったため調査区を 2 回にわけ反転して調査を進めた。旧建物の基礎で破壊されていた部分もあったが、遺構の残存状況は良好で平安時代から江戸時代にかけての遺構を検出した。

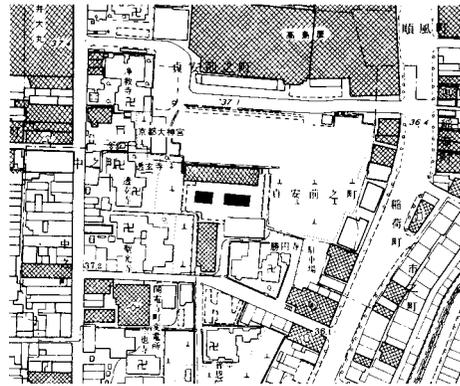


図 1 調査位置図 (1:5000)

**遺構** 平安時代の遺構は鴨川の旧流路あるいは氾濫原と思われる砂礫層で平安時代前期から中期の遺物を含んでいる。この砂礫層の上部に整地が行われ、鎌倉時代の遺構が造られている。遺構の密度が高くなるのは室町時代以降で、特に桃山時代から江戸時代の遺構を多く検出した。この時期の遺構には、井戸、溝、石室、土壇、柱穴などがあり、遺物も多く出土している。

**遺物** 土壇 (SD414)、溝 (SD476) などからは多量の土器・陶磁器類が出土している。このうち SK414 の土器類について触れる。土師器は皿 (1・2・3～8)、鍋 (11)、塩壺 (9・10) などがある。皿は内面に圈状の凹線を持つものと、凹線のないもの、粗製で小型のもの 3 種がある。鍋は浅い丸底で外方へ開く口縁端部を上方へわずかに摘み上げている。塩壺は筒状の体部で口縁部がすぼまり、内面に布目の残るものがある。国産の陶磁器類には美濃系 (12～16)、唐津系の施釉陶器 (17～19)、伊万里系の染付磁器 (26～28)、丹波産 (21)、備前産 (20) などの焼締陶器がある。この他に中国製の染付磁器類 (22～25) も含まれている。

**小結** 今回の調査結果から当地は平安時代には川原あるいは河川敷であったが、鎌倉時代以後、次第に人々の生活の場として利用されて行ったことが明らかになった。特に室町時代以降急速に発展して行った過程をうかがうことができる。また秀吉の都市改造以来この周辺が寺町として新しい町並みを形成したことは周知のことであるが、寛永十四年の洛中絵図によっても当地が大雲院の一部であったことが判る。SK414 から出土した遺物はこの大雲院に関係するものであろう。この遺物群は茶屋家跡<sup>註</sup>出土のものとなわずに型式

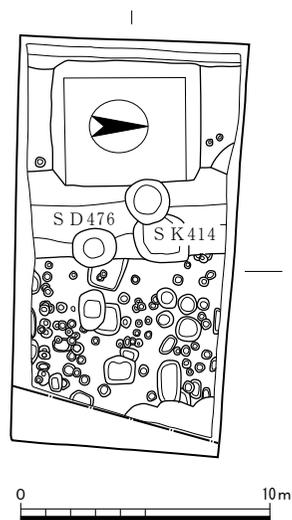
差は認められるが類似した内容を持つもので、江戸時代前半期に京内で消費された内外の陶磁器類を研究する上で良好な資料といえるだろう。

(平尾 政幸・吉川 義彦)

注 第1章-5「平安京左京一条二坊」



石室（北東から）



井戸（西から）

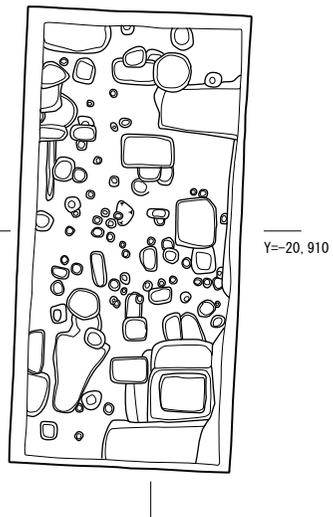
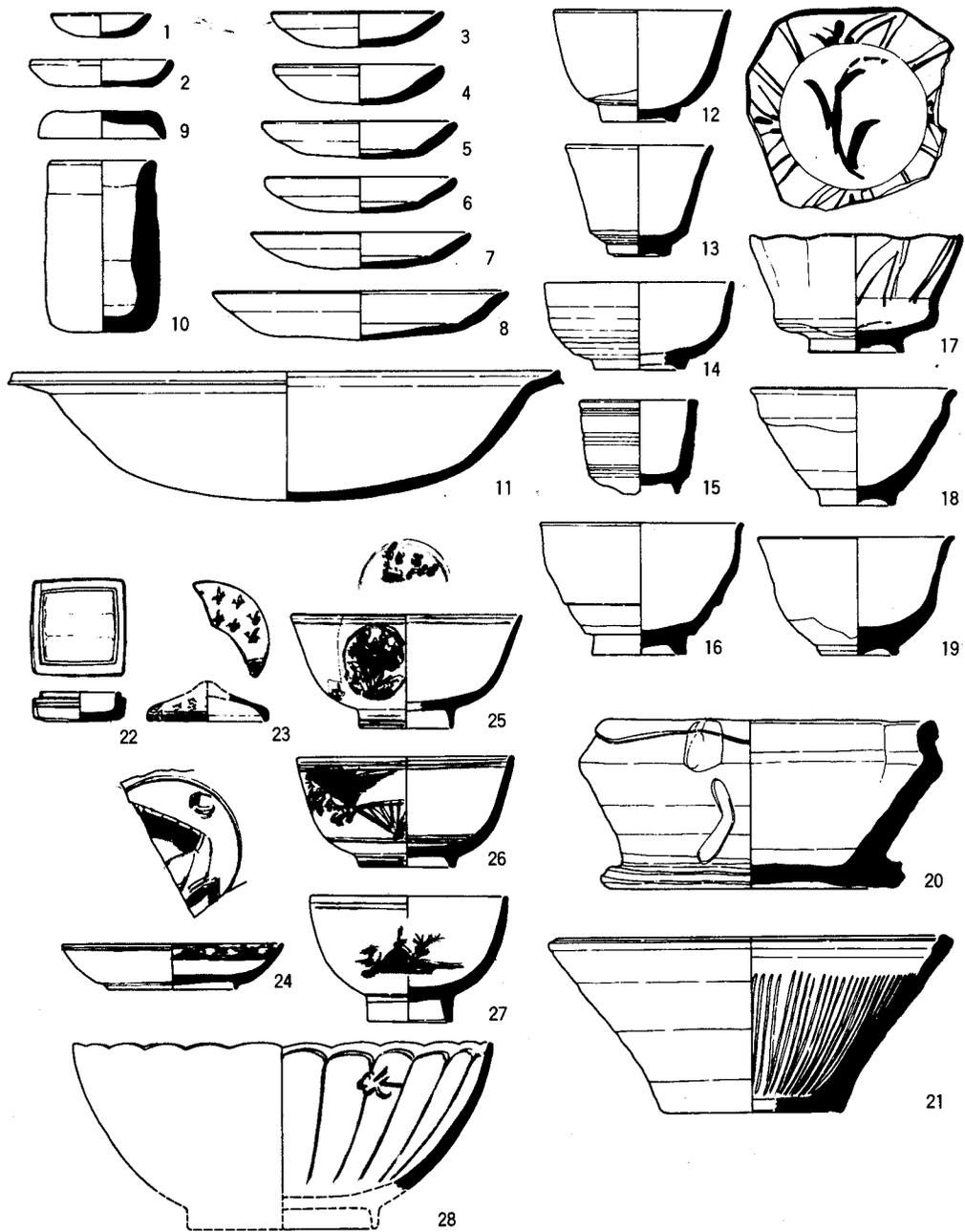


図2 遺構配置図(1:300)



### Ⅲ 白河街区

#### 14 尊勝寺跡 (図版 25・26)

**経過** 京都市左京区岡崎最勝寺町 2 にある 216㎡の敷地で、京都市民生局同和对策室が隣保館を建設する計画を立てたが、当該地は院政期に造営された六勝寺中の一寺院である尊勝寺跡に該当するため、事前に発掘調査を実施したものである。

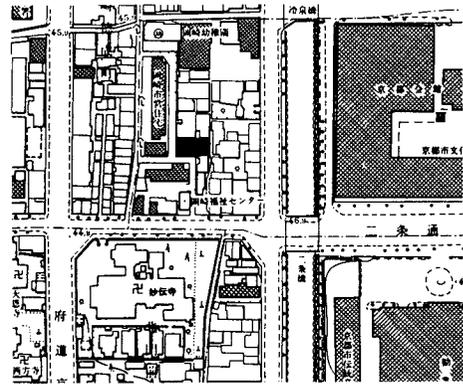


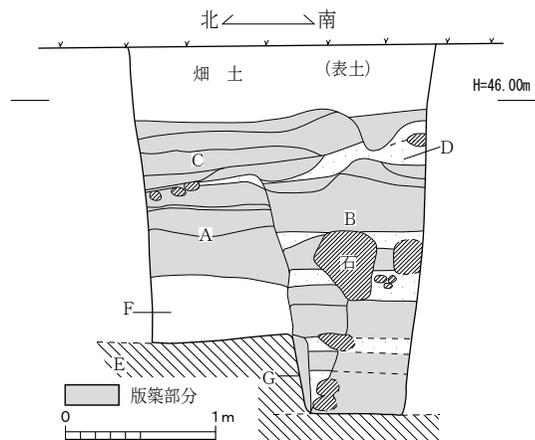
図1 調査位置図 (1:5000)

調査は発掘に先立って昭和 59 年 7 月 9 日に試掘を行い、改めて 9 月 3 日から 10 月 6 日までの間発掘調査を実施した。

**遺構** 発掘調査では、敷地東端を除く全域が版築された地業であることを突き止め、更に敷地の南方では、拳大から人頭大の河原石を橙色粘土で突き固めて版築された堅牢な地業であることが判明した。この堅牢な版築は、敷地南端のブロック塀に沿って東西約 9.5 m、最大幅約 1 m を検出し、連続して北側に続く版築とは異なるものである。

この部分は、亀腹状に高く、北辺は真東西に極めて近いもので、調査期間中に調査地南方で行われたガスパ閉鎖工事でも同様の版築を確認したことから、敷地南端から南方に存在する版築であることが判る。(図 2)

地業は、右の断面図のとおり、まず、A 版築を広く行い、次に南側(堅牢にする必要のある所)では更に深く掘り下げ、拳大から人頭大の石を橙色及び白色の粘土や砂を交えて A 版築より高く B 版築し、その上部に C 版築(主に A 版築上部)を行っている。B 版築の上層部からは凝灰岩の切り



- A 粘土、粘土質、砂層を使用した版築部分
- B 拳大〜人頭以上の石と粘土、4砂を使用した版築部分
- C 砂と粘土質を使用した版築部分
- D 橙色粘土層
- F 黒褐色粘土質層 (溝内堆積泥土) 弥生〜古墳
- E 砂層 (地山)
- G 土止め用貼り付け粘土 (?)

図2 a-a' 地業跡断面実測図 (東壁断面) (1:50)

石 (55 × 29 × 15cm) を 1 個 検 出 し た。

調査地内で広範囲に検出した A・C 版築は、残存良好な所で約 1.2 m あり、10 層程度に分層でき、異なる砂質土と、粘土及び小礫で構築されている。B 版築は現在の地表面から約 2 m 下層の砂層 (地山) を底盤にして構築し、高さ約 1.6 m 残存しており、砂礫・石・粘土・砂質土を交互に版築して堅固に積み上げられ、10 層以上に分層できる。これらの版築上では、調査地北方で凝灰岩片が固まって出土した程度で、礎石据付け跡を示す根石や雨落溝などの建物を具体的に示す遺構は検出できなかった。

その他、調査中に施工された敷地南側の東西道路内でのガス管閉鎖工事では、4 箇所の工事穴の内、東側の 2 箇所から B 版築が、更に東から 3 番目の穴からは A・C 版築中に直径 1.2 m 以上の花崗岩を発見した。この花崗岩はアスファルト舗装の直下に存在し、上面に造り出しや平坦面はなく、全体的に楕円形を呈している。この石より西へ約 10 m の工事穴からは版築を検出できないことから、A・C 版築はこの間に西限があると考えられる。

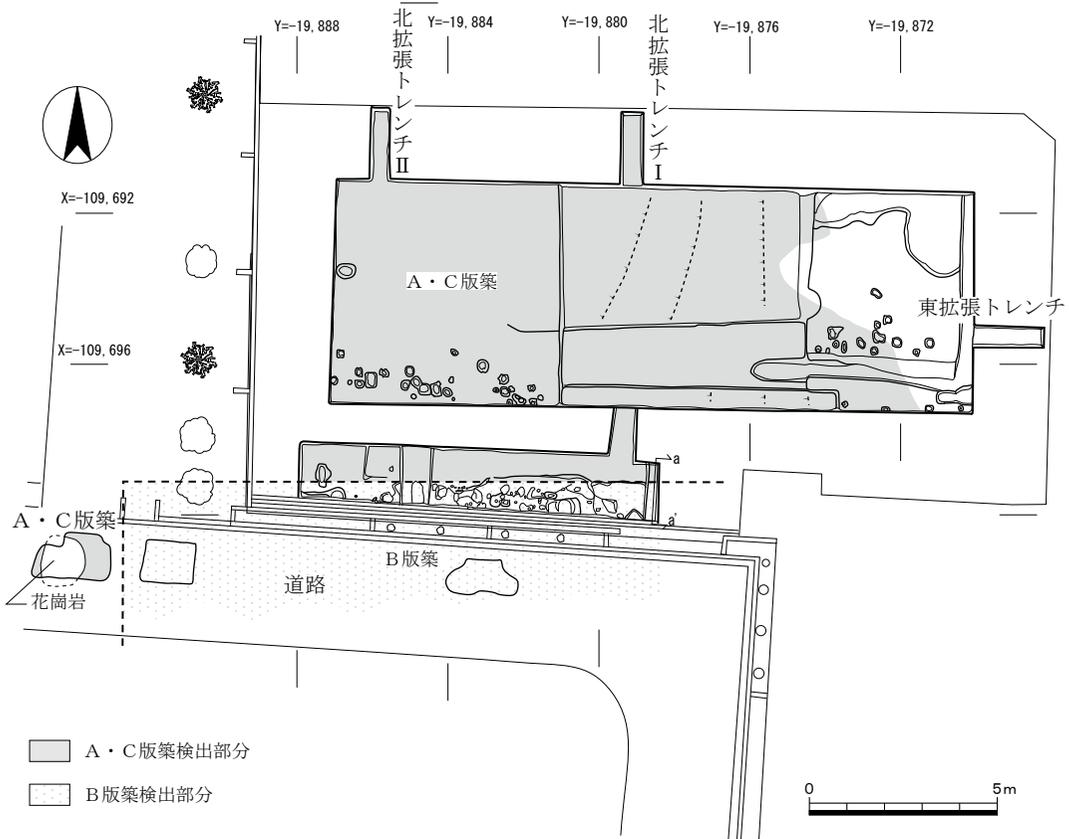


図 3 調査地平面図 (地業跡検出状況) (1:200)

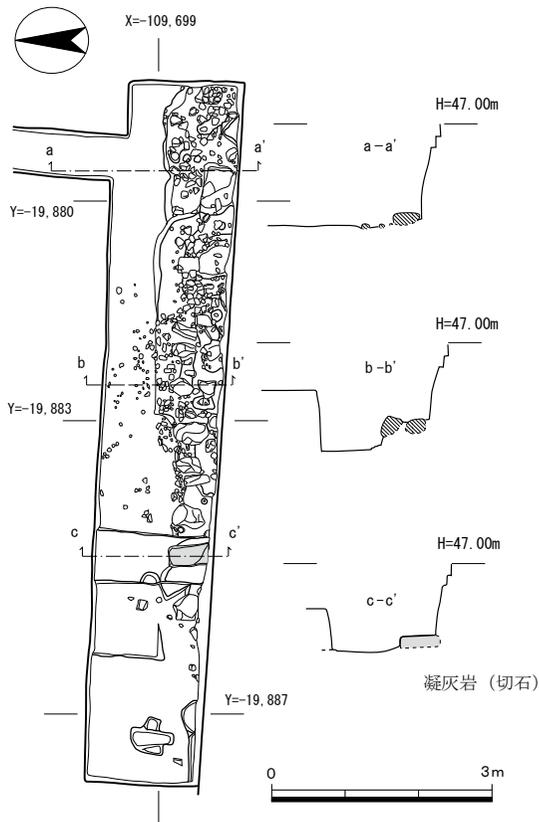


図4 調査地南側の地業跡平面・断面実測図(1:100)

調査地内で検出した版築の下層からは、大きな溝を検出し、溝内からは弥生時代から古墳時代にかけての土器や、植物遺体などが出土して、底付近では大きな流倒木も見つかった。この溝は北東から南西にかけての大きな流路とみられ、東岸は確認したものの西岸は不明である。

**遺物** 出土遺物は、遺物整理箱に22箱あり、その約7割が瓦である。

瓦は主に版築上面で出土し、軒丸瓦は21種61点、軒平瓦は33種48点あり、他に鬼瓦1点、平・丸瓦は遺物箱に15箱ある。出土遺瓦の主な生産地は、山城官窯、丹波、播磨、讃岐などである。鬼瓦(49)は、12cm程度の小片で、版築上面から出土した。いずれ

の出土瓦も平安時代後期のものである。

土師器は小片が出土しているが、(56)はA版築の最下層から出土したものである。灰釉陶器(55)は、北側の凝灰岩片が多数見つかった北拡張トレンチIから出土した。版築下層の溝内から出土した遺物は、弥生時代の土器の小破片や古墳時代の須恵器(50～54)で、特に須恵器の杯身と蓋(50・51)は完形に近いもので、溝内から出土したにもかかわらず磨耗が少なく、近辺に住居が存在する可能性もあり、6世紀初頭頃のものと考えられる。

その他の溝底部からクルミの実や枝、葉、倒木など植物遺体が出土した。

**小結** 昭和34年に行われた京都会館建設に伴う発掘調査<sup>注</sup>では、検出された3棟の建物の内、敷地南東で検出した建物を尊勝寺の塔か御堂のいずれかと推定された。仮にそれを東塔とすれば、調査の結果から四天柱間約19尺(5.7m)、四天柱から側柱まで15尺(4.5m)、軒の出が14尺以上で、基壇の大きさは1辺が77尺余(23.1m)の大規模な塔であったことになる。これを杉山信三氏の復元案に従い、伽藍中軸線で折り返し、文献にある西塔の位置を推定すると図8の所となり、当該調査地の付近が塔の有力候補地ということになる。また、現在までに実施された9次にわたる主な尊勝寺跡の調査結果から、当該調査地の北方で検出している大規模な建物を阿弥陀堂と考えると、その南方にあたる場所が今回の調査地であることから、当初より尊勝寺の復元に重大な成果が期待できる場所と考え発掘を実施した。(図5)

調査結果からは、敷地のほぼ全域が平安時代後期に行われた地業であることが判明し、礎石据付け跡を示す根石や雨落溝は検出できなかったものの、敷地南端から南方へと広がる堅牢な版築を検出し、平安時代後期の瓦も多数出土した。

この堅牢なB版築は、少なくとも東西13m以上は存在することが明らかで、更にそれに連続的に続くA・C版築が北方や西方に確認されていることから、B版築を取り囲むようにA・C版築が行われている可能性は十分ある。過去において実施した北方の阿弥陀堂跡と考えられる建物では、基壇の外にも広く版築が行われていることが判明しており、A・C版築は、建物の外側に広く行われた地業とも解することができ、根石などが検出できなかった理由も説明できる。しかし、建物外と考えられるA・C版築からは、調査地外ではあるが、性格不明の花崗岩の巨石も発見され、更にB版築の外側に存在すべき雨落溝も今回の調査では検出していない。これらの調査結果から、B版築を塔基壇であると断定することは証拠不十分である。ただし、今回の調査地は、東を除く敷地全体が地業された土地であることは間違いなく、特に南端以南の堅牢な版築がされている部分は、上のにる建物を考慮してか、堅固に造られていることを物語っており、塔基壇を検出した可能性は強い。しかし結論については、この付近の発掘調査や、明確な遺構が未検出の二条大路北側溝及び尊勝寺南限の築地の検出など、今後の発掘調査の成果に基づいて導きだしたい。

(梶川 敏夫 京都市埋蔵文化財調査センター)

注 「尊勝寺跡発掘調査報告」『平城宮跡第1次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』1961年

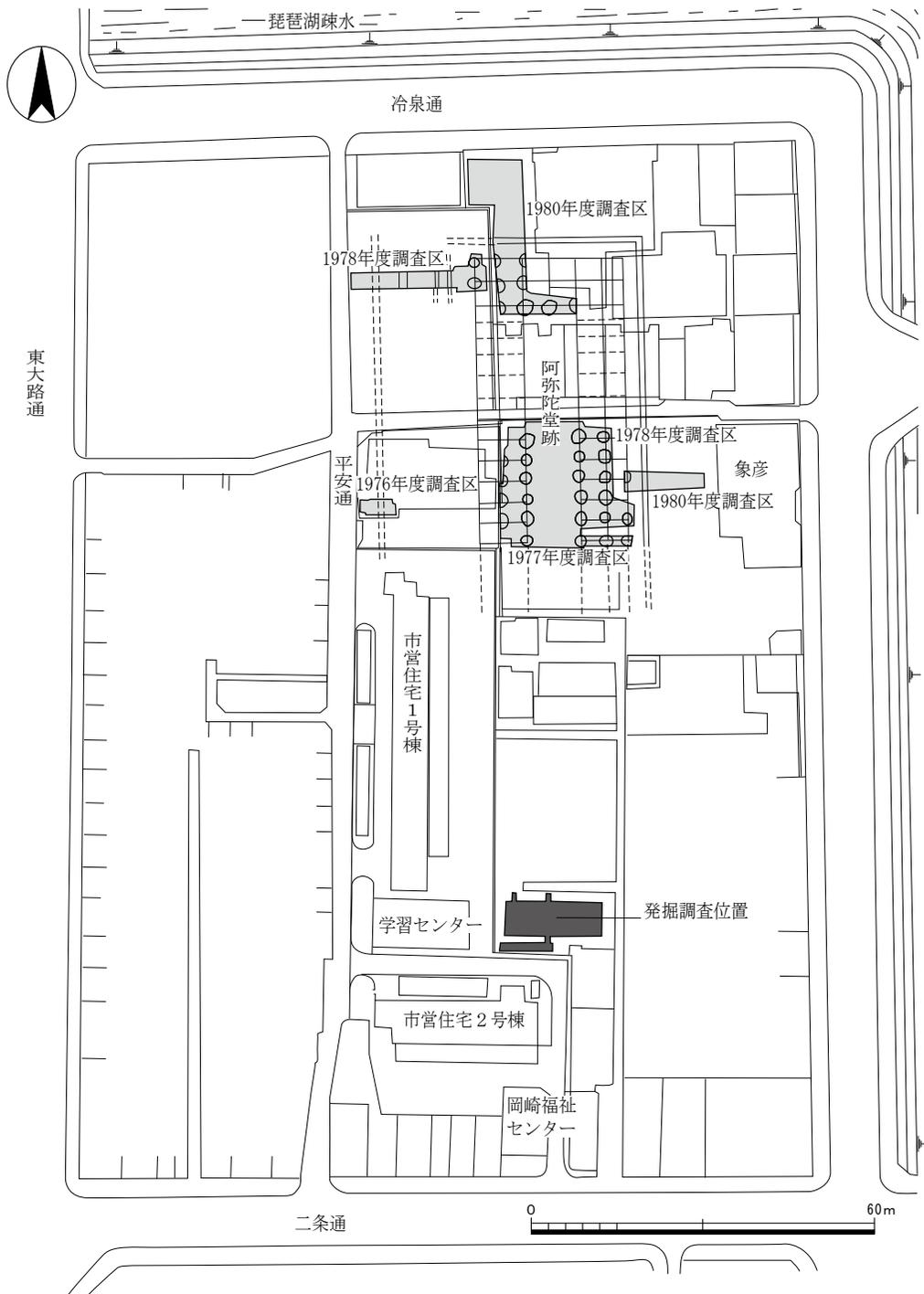


図5 調査地周辺の検出遺構(1:1200)

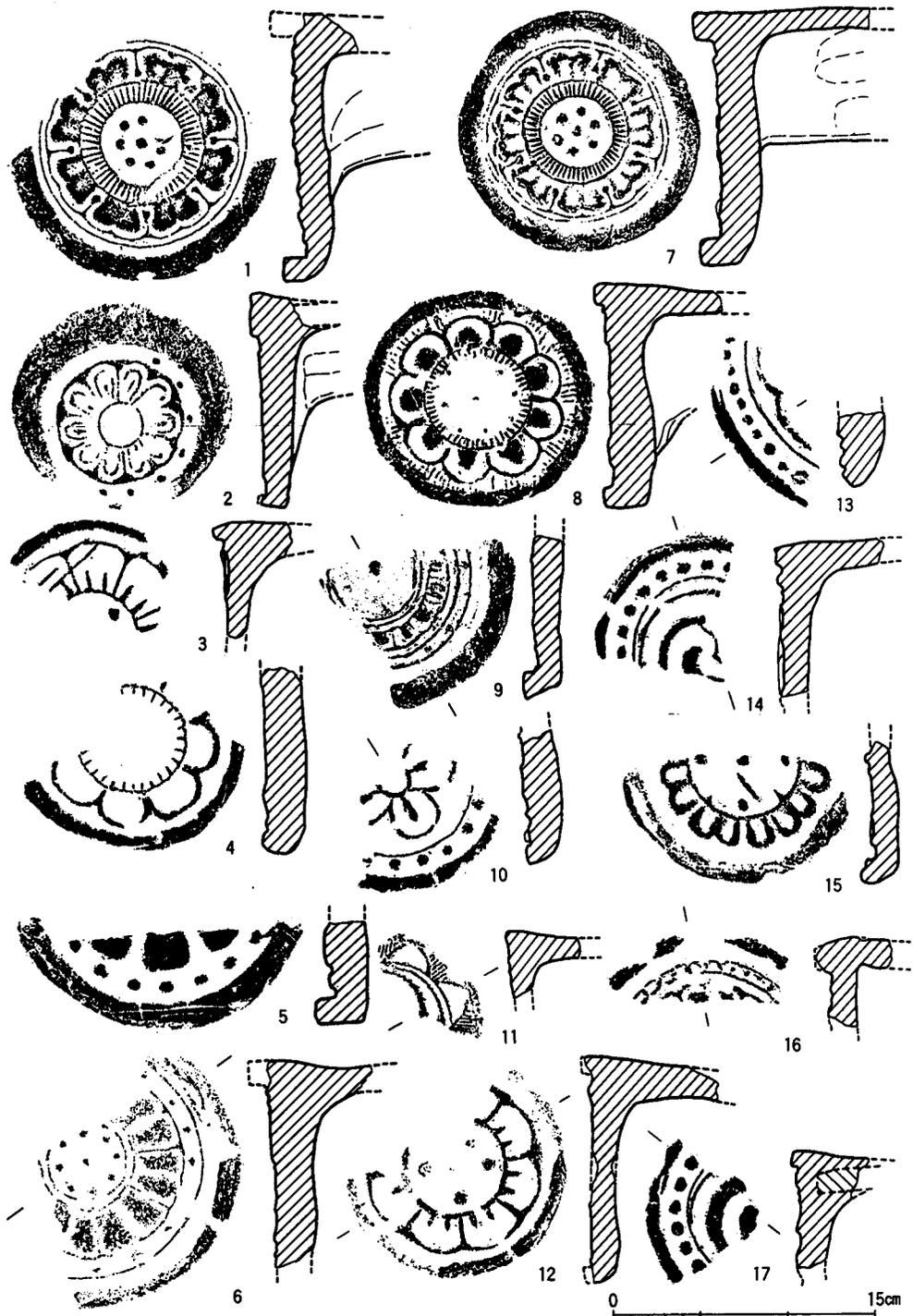


图6 軒丸瓦拓影・実測図一1 (山城官窯系 2・3・4・8・11・12・14・17, 播磨系 1・6・7・9, 讃岐系? 5・13) (1:4)

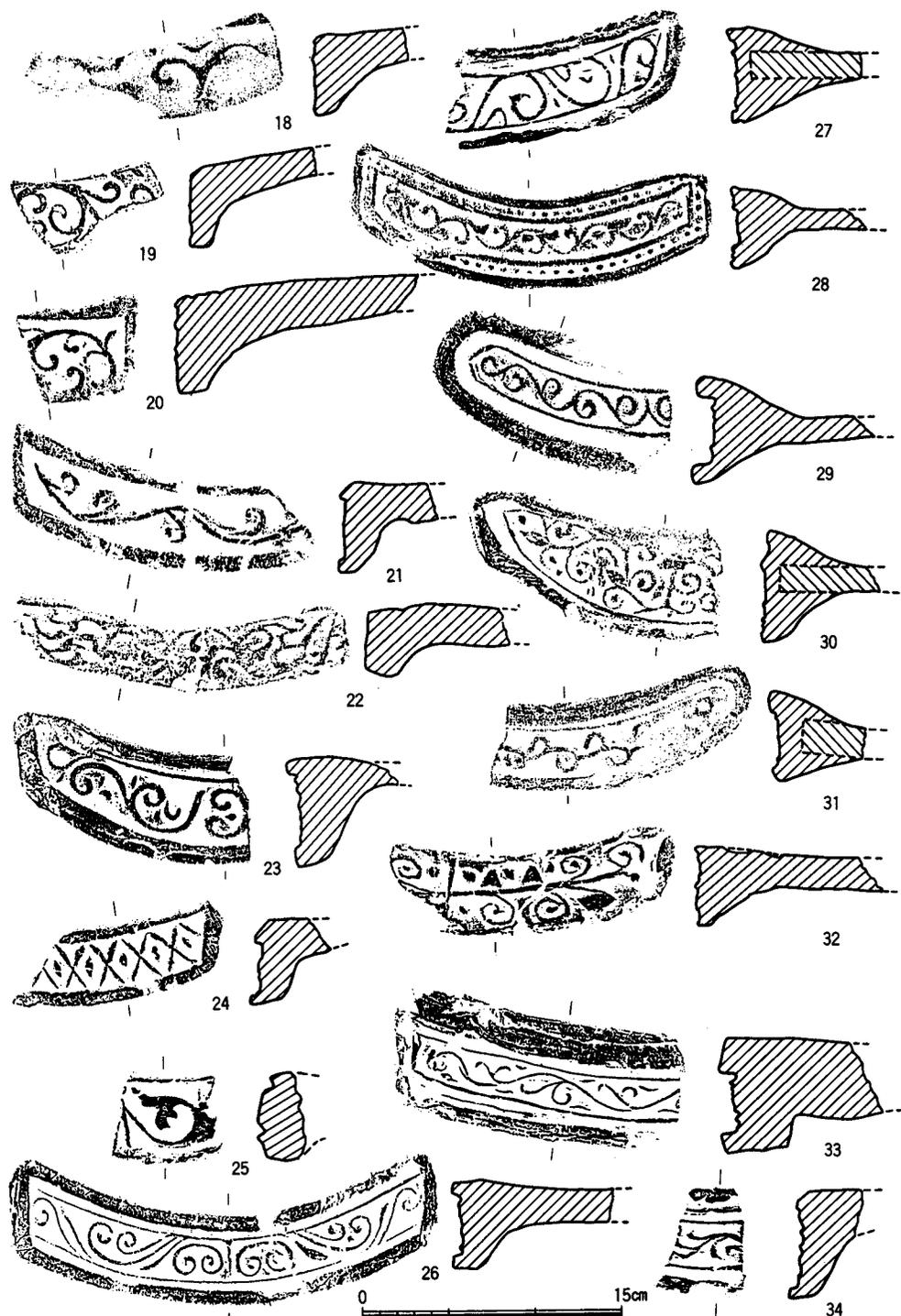


图7 軒丸瓦拓影・実測図-2 (山城官窯系 18~22・24, 丹波系 25, 播磨系 23・26~31, 不明 32~34) (1:4)



## IV 烏羽離宮跡

### 15 烏羽離宮跡第 97 次調査（図版 27～29，第 1 章－26 図 4）

**経過** 調査地は田中殿金剛心院の推定地である。この周辺では既に数次の調査を実施しており、金剛心院関係と推定される遺構を極めて良好な状態で検出している。特に第 75 及び第 79 次調査では建物基壇や多数の庭石を配した庭園遺構を検出している。今回の調査地はこの第 79 次調査地の南側にあたるため、まず遺構の状況を確認する試掘調査を実施した。この結果、建物基壇・苑池などが良好な状態で遺存していることを確認した。おりから、東側に隣接した二つの地区が調査予定地となり、遺構の規模・配置を把握するためには調査面積を広く確保するのが有利であると考え、これら 3 地区を同一の調査区として調査を実施した。

**遺構** 今回の調査では古墳時代から室町時代の各時期の遺構を検出しているが、大半は古墳時代と平安時代後期から鎌倉時代（烏羽離宮造営期）の遺構である。

古墳時代の遺構は調査区北東部に広がる褐色泥砂層の上面で竪穴住居・溝・土壙などを検出した。竪穴住居は古墳時代前期のものである。南半部を検出したが復元すれば一辺約 6 m の隅丸方形の竪穴住居であろう。

烏羽離宮造営期の遺構は金剛心院関係とこれを取り囲む庭園遺構である。

建物（SD 1）は基壇の南東部を検出した。この基壇はブロック状に、拳大の礫と粘土を交互に積み上げる、特殊な掘込み地業によって構築されている。今回と以前の調査成果を考え合わせると東西約 30 m、南北 24 m の基壇を有し、身舎桁行 3 間・梁行 2 間で四面に庇・孫庇が廻り、南面に縁が付く建物であると考えられる。

建物（SB 4）は S B 1 の東側に取り付く礎石建物である。これは東へ 5 間目で南へ直角に折れ曲がり、更に 5 間延びる廊である。

これらの建物の南と東側では苑池を検出した。南側の池（SG 9）は深さ約 0.3 m の浅い池で、周辺には



竪穴住居（南西から）

庭石・洲浜を配して景観を整えている。

東側の池（SG 8）は深さ1.5 mの深い池で現在も湧水をみる。東岸には最大2.5 tに及ぶ巨石を組み合わせた落差約1 mの瀧（SX11）が造られている。西岸には上方の平らな石を「く」字状に組んだ船着場（SX12）もある。

調査区の東部では南北に走る素掘りの溝（SD15）を検出した。瀧はこの溝から水を引いたものと考えられる。

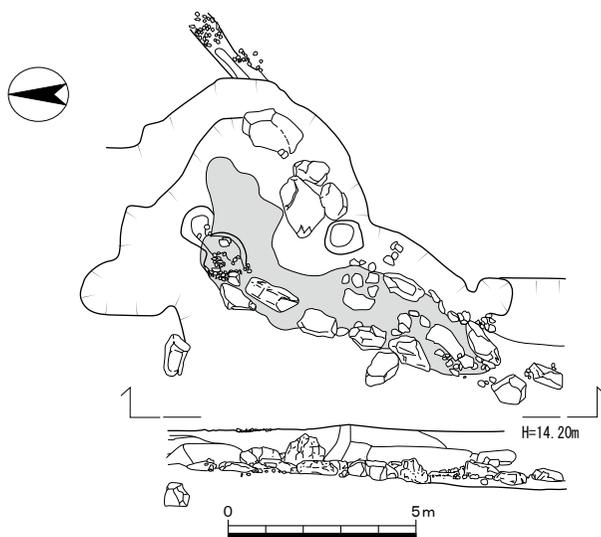


図1 瀧（SX11）実測図（1:200）

**遺物** 今回出土した遺物は弥生時代から室町時代までの各時期に及ぶが、古墳時代と平安時代後期から鎌倉時代（烏羽離宮造営期）の遺物が量的に多い。

古墳時代の遺物は土器類が出土しており、これは前期と後期のものに分かれる。前期は土師器壺・甕・後期は土師器壺・甕・高杯、須恵器杯・甕、埴輪が出土している。

烏羽離宮造営期の遺物は土器類・瓦類などが出土しているが、瓦類が大半を占める。瓦は丸瓦と平瓦が圧倒的に多く、他に鬼瓦・軒瓦も認められる。土器類は土師器皿・甕、須恵器甕、瓦器椀、白磁椀が出土している。他の出土品としては金属製品の飾金具、土塔、ガラス玉などがある。

**小結** 今回の調査によって金剛心院の建物や庭園の配置・規模が明らかとなった。文献資料によれば金剛心院には九間四面阿弥陀堂と三間四面釈迦堂の二つの御堂があり、他に寝殿、その他の建物があるとされている。今回検出した建物（SB 1）はその規模・平面形からこの御堂の一つである釈迦堂と考えて妥当であろう。また、調査区東部で検出した南北溝（SD15）はこれより東に烏羽離宮造営期の遺構を認めないことから、金剛心院の東限であると考えられる。こうした成果は今後、金剛心院を調査する上での指標となる。

下層の調査では古墳時代前期の竪穴住居を検出したが、従来この付近で発見された古墳時代の竪穴住居は後期のものが多く、その位置も北東の鴨川寄りに分布している。今回のものはこれらに比べて時期的及び位置的に異なるため、今後の調査の新たな課題となった。

（吉崎 伸・鈴木 久男）

## 16 烏羽離宮跡第98次調査（第1章-26 図4）

**経過** 調査地は名神高速道路京都南インターチェンジの南側に位置し、烏羽離宮跡田中殿地区に推定されている。

近年の調査では烏羽離宮期の遺構としては、北側の第85次調査で北大路南側溝と南北溝、東側の90次、南側の89次で南北溝があり、西側の第76次調査では遺構がないことが判明している。古墳時代の遺構としては、第85・90・93次調査で竪穴住居・方墳状遺構・土壙墓などの集落・墓地に関連する遺構を検出したが、76・87次調査では湿地状の遺構のみである。

以上のことから、本調査では烏羽離宮期の溝の続きを検出すること、及び古墳時代の湿地状遺構の範囲を明らかにすることを目標とした。

**遺構・遺物** 調査地の基本的な層序は、造成地の盛土層（0.7 m）、旧耕作土・床土（0.45 m・近世）、黄灰色砂泥層（0.2 m・平安～中世）、灰色砂土層（1.0 m・無遺物層）、灰褐色砂礫層（無遺物層）である。検出した遺構は古墳時代と烏羽離宮期の2時期に大別でき、古墳時代の遺構は灰褐色砂礫層上面で、烏羽離宮期の遺構は灰色砂土層上面で各々検出した。

古墳時代の遺構は、調査区西半部で落込、東半部で土壙・溝を検出した。落込は深さが最大で1.5 mあり、肩は北東から南西にかけて斜方向に落ち込む。埋土は茶灰色砂泥層で、湿地状の堆積をしており、弥生土器、古墳時代の須恵器・土師器を含む。東半部の土壙・溝は埋土が黄灰色砂泥層で、土師器小片を含む。

烏羽離宮期の遺構には調査区中央で検出した2本の溝がある。溝は断面U字形で、幅0.7 m、深さ0.2 mである。両溝の心々間距離は8 mである。埋土は灰色砂泥層で、平安時代の土師器小片を含んでいる。

**小結** 調査の結果、古墳時代と烏羽離宮期の2面の遺構面を検出した。

古墳時代の湿地状遺構はその北限を85次調査で、西限を90次調査で各々検出しており、かなり大規模な遺構と考えられる。東半部の遺構については、調査区が狭小なため性格などの詳細を把握するには至らなかった。

烏羽離宮期の溝は85次・89次調査で検出したものと同一のもので、金剛心院北限溝から北大路周辺まで続くことが明らかとなった。遺構はこの溝のみであり、北大路から金剛心院までの間は建物などのない、空闲地と推定できる。（上村 和直）

## 17 烏羽離宮跡第 99 次調査（図版 30，第 1 章－ 26 図 4）

**経過** 調査地は烏羽離宮跡金剛心院の西端部に位置する。金剛心院は烏羽離宮の中でも最も調査が進んでいる地区で、釈迦堂・阿弥陀堂・寢殿・釣殿などの建物群及び苑池が良好に遺存していることが判明している。また下層遺構も検出され、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物があり、遺構・遺物が密集している地区でもある。

調査地は 2 筆の水田で逆 L 字形の調査区を設定した。調査を進めるうち、調査区の西端で南北方向の築地が確認され、南側を拡張した。築地は建築建物に破壊されず保存されることになり、遺構の壊される東側を下層まで掘り下げることにした。

**遺構** 今回検出した烏羽離宮期の主要な遺構としては、第 80 次の延長にあたる築地 (SA14) がある。上部は削平されているが、両側に側溝を伴い、拳大の石を数段につきかためた地業が認められた。この地業は規模に相異はあるが、釈迦堂 (SB 1) と同様な構築法を用いている。地業の規模は幅 1.8 m～2.4 m、深さ 0.4 m を測り、今回 22.5 m の長さにわたって検出した。第 80 次と合わせると全長 50 m となる。一部地業にくいちがい認められ、ここに何らかの施設があった可能性がある。調査区の東端部では根石を持つ柱穴を検出したが、建物の全容は不明である。恐らく雑舎的な建物であろう。

下層遺構の主なものには、古墳時代から飛鳥時代にかけての竪穴住居 5 棟・掘立柱建物 1 棟・土壌群などがある。竪穴住居の 2 棟は焼失住居である。そのうち 1 棟は飛鳥時代の竪穴住居で、炭化材が多量に堆積し、床面からは火災時の原位置を保っていると思われる土器類が良好な状態で出土した。南部は調査区外にはみだし規模は不明である。平面形は方形で真北方向に対して東へ 40° の振れを持ち、北東辺には竈を設けている。この竈は作り変えを行ったものらしく、2 箇所検出した。他の竪穴住居も大半が調査区外



竪穴住居（北西から）

にはみだしており、また削平を受けているものが多く、わずかに壁溝が残っているだけの  
竪穴住居がある。

土壙群は竪穴住居群の北方で検出され、大半が埋土に焼土と炭を多量に含んでいる。平  
面形は方形・円形・楕円形を呈し、ピット状のものもある。壁面が赤く焼け、土師器の甕  
を壁面に張りつけた竈状や方形の焼土壙がみられた。

**遺物** 出土遺物の半数以上を平安時代後期の瓦類が占めている。瓦類は築地の側溝や瓦  
溜より出土し、烏羽離宮期に相当するものである。その瓦は京都産・播磨産・讃岐産など  
がみられ、各地より搬入されたことを物語っている。平安時代後期の土器類には土師器・  
瓦類があり、前期から中期にか  
けては少量の土師器・須恵器・  
緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器  
がある。古墳時代後期及び飛鳥  
時代には土師器・須恵器がみら  
れる。そのうち飛鳥時代の竪穴  
住居より出土した土器類は良好  
な一括遺物であるため図示し  
た。土師器には杯・皿・甕・鉢・  
甑などがあり、須恵器には杯・  
短頸壺・横瓶などの器形がある。

**小結** 今回検出した築地は金  
剛心院の復元にとって重要な遺  
構である。この築地は金剛心院  
の西側を画するものであり、今  
後北端及び南端を確認すること  
が課題となる。下層遺構をみる  
と当該区に住居を集中して検出  
しており、集落の中心部にあた  
ることが考えられる。また焼土  
壙群は、何らかの工房跡が想定  
できる。

(前田 義明・堀内 明博)

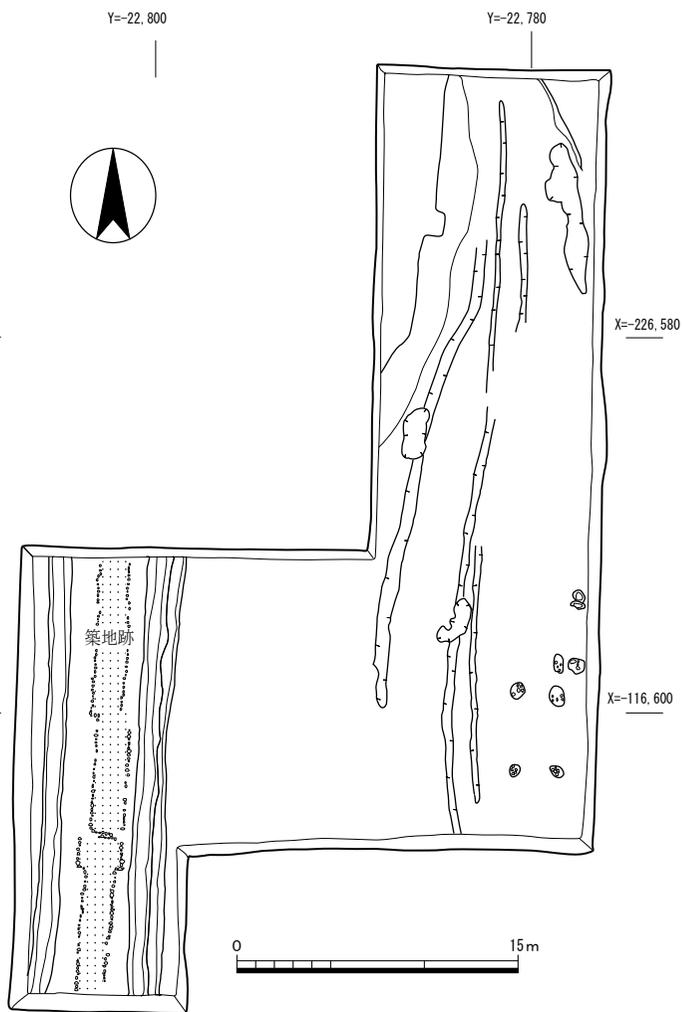


図1 烏羽離宮期遺構配置図(1:400)

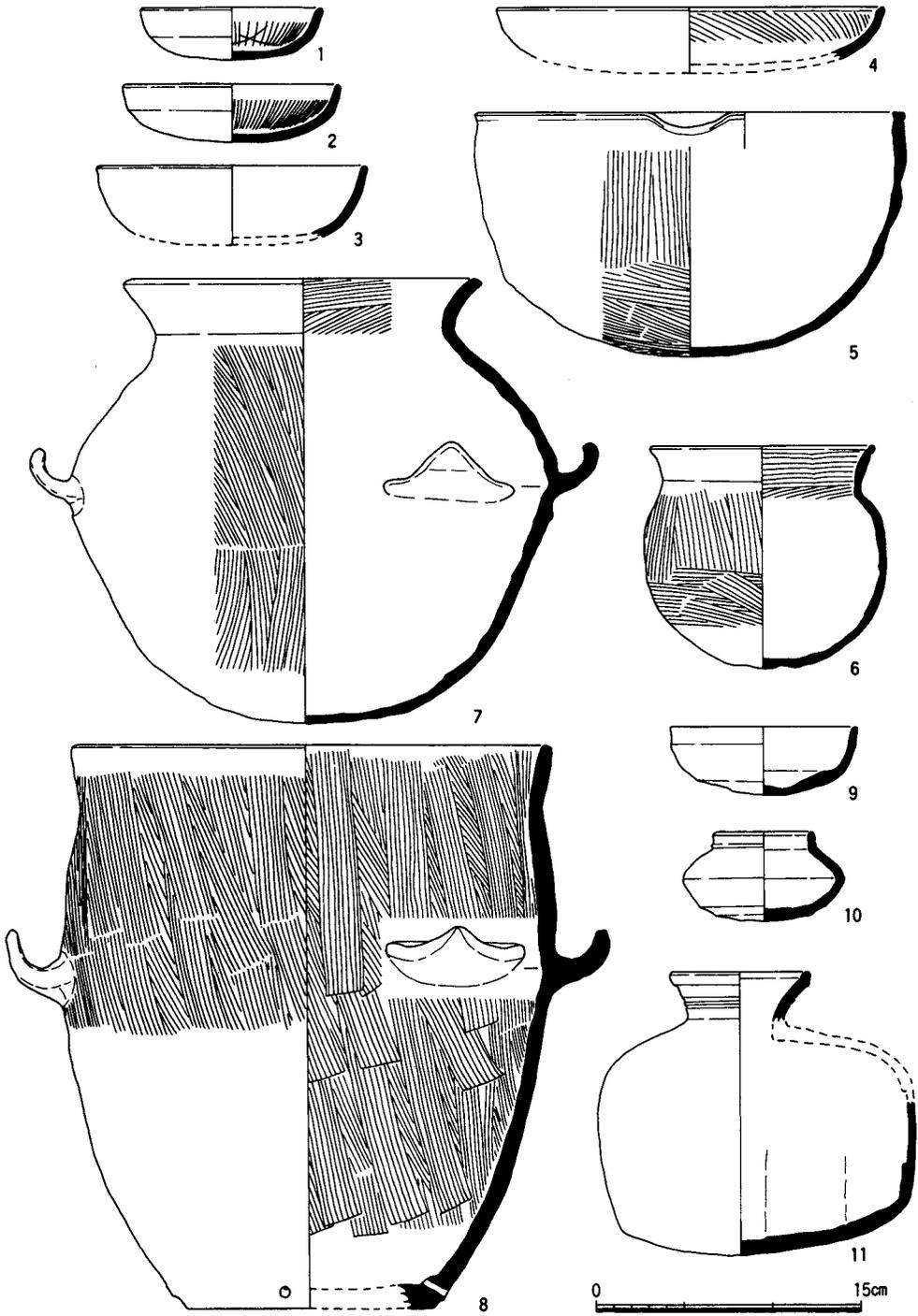


図2 竪穴住居出土土器実測図（土師器1～8, 9～11）（1:4）

## 18 烏羽離宮跡第 100・101 次調査 (第 1 章 - 26 図 4)

**経過** 当調査地は名神高速道路京都南インターチェンジの東南部にあたり、再開発が進む建物群の南、城南宮北側の水田部分に位置している。近年の調査成果から烏羽離宮金剛心院跡の南端部にあたり、第 97 次調査で検出した池の延長部に推定していた所である。今回実施した調査は、東西に隣接した倉庫建設に伴うもので、双方とも試掘調査によって建物跡を発見するに至り、遺構の確認とその保存を目的とする発掘調査を実施することになった。

**遺構・遺物** 烏羽離宮金剛心院跡に関する遺構は、第 100 次では基壇建物及び落込、第 101 次では基壇建物、築地状遺構、溝 2 条などである。第 100 次の基壇建物は掘込地業を伴い、その地業規模は東西約 14 m、南北 10.5 m、深さ 0.3 m を測る。基壇上には花崗岩の礎石が東西に 2 箇所残存していた。礎石柱間は約 2.7 m を測る。またこの基壇は第 101 次の築地状遺構と連なっている。築地状遺構の南北両側には溝が認められ、南側の溝は金剛心院の南限に廻らされたもの、北側の溝は方向的に金剛心院内の南面に広がる池へ取り付くものと想定できる。更に、第 101 次では御堂と考えられる掘込地業を伴う基壇建物を検出した。地業規模は東西 13 m 以上、南北 17.5 m 以上、深さ 0.5 m を測る。基壇上では花崗岩の礎石と抜き穴を検出した。身舎柱間 5.1 m、北庇柱間 3.3 m、東庇柱間 3.9 m を測る。

出土遺物には、土器類・瓦類・石製品・金属製品などがある。これらの遺物は古墳時代から江戸時代にまで及ぶが量は少なく整理箱で 7 箱出土した。なお、烏羽離宮跡でも出土例の少ない瓔珞が 1 点、第 101 次調査で出土した。

**小結** 今回の調査における成果は、従来、池と考えられていた場所で基壇建物を発見したことである。特に第 100 次調査の建物は、烏羽離宮跡の建物などの方位に対する振れやその他を考慮し考察すれば、第 75・79・97 次調査で検出した同一建物の建物南辺の東西心を中心として、第 80・99 次調査で検出した築地の東端までの距離（約 30 丈）を南へ同距離を測れば、今回検出した第 100 次の礎石付近にあたる。このことから、この礎石は金剛心院跡の南築地に取り付く何らかの施設であると思われる。なお、詳細については今後の調査に期待する。

(中村 敦・辻 純一)

『烏羽離宮跡発掘調査概報』昭和 59 年度 1985 年報告

## 19 烏羽離宮跡第 102 次調査（図版 31～36，第 1 章－26 図 4）

**経過** 調査地は、金剛心院内に健立された釈迦堂跡の東北に位置する水田である。この地区における発掘調査は、昭和 57 年度以降急速に進展し金剛心院内に造営された建物や庭園遺構などの一部がかなり明らかになっている。当地は、第 79 次調査や 97 次調査の成果などから、釈迦堂跡の東側に造られた庭園の一部であることがほぼ確実であった。このため、調査区をなるべく広く確保するために盛土・耕作土・近世の遺物を含む土層は、重機で掘削し残土は場外へ搬出した。烏羽離宮関係の調査を進めている段階で、離宮造営以前の遺構がかなりの密度で残存していることが明らかとなったため、数回残土の移動を実施して調査を進めた。

**遺構・遺物** 調査の結果、縄文時代から平安時代までの遺構を多数検出した。以下、各時代における主要なものについて説明を加える。

烏羽離宮跡関係の遺構としては苑池と溝がある。

**苑池** SG 8 は北岸から東岸にかけての一部分を検出した。北岸には、池に向かって北から南へ張り出す半島を設ける。半島の西岸には景石を水際に点々と据え付ける。半島の東岸には、角の丸い花崗岩を 2～3 個ずつ組み合わせて据え付ける。半島の先端から西岸にかけては、チャートや緑色片岩を据え付けている。そして、先端部より西へ若干入った箇所には、人頭大の扁平な河原石を 1 列に並べ舟入状に湾曲させている。この他に景石が据え付けられていたのは、釣殿廊対岸の水際と陸部である。半島から東側の池は、古墳時代から縄文時代の遺構面を人工的に掘り下げて造られたものであるが、南半部は、弥生時代から布留式併行期の遺物を含む流路上に設けている。

**溝** 東西方向の素掘りの溝で、苑池に注ぐ。溝と苑池との新旧関係は認められず、このため、この溝は苑池に水を引くための導水路であると考えられる。溝は、第 97 次調査で検出した南北溝（金剛心院東限）に取り付くものと考えられる。溝内からは、丸瓦・平瓦の完形品が数点出土した。

離宮造営以前の主な遺構は、平安時代中頃の木棺墓・溝、古墳時代の溝・土壙・方墳、弥生時代から古墳時代にかけての流路・竪穴住居、縄文時代晩期の土壙などである。

**木棺墓** 長方形の掘形を持つ木棺墓で、主軸は南北に合わせている。木棺は残存していなかったが、木棺が据え付けられていたと考えられる位置の土質が掘形のものとは異なっていたため、おおよその規模を知ることができた。それによると、長辺 1.45 m，短辺 0.4 m

である。棺内の中央から北側には、副葬品として、土師器皿・須恵器壺・刀子・銅鏡などが納められていた。刀子は棺のほぼ中央に、鏡は北辺に置かれていた。

方墳 一辺 13 m前後を測り、周囲に幅 3 m前後の溝が廻る。ほぼ全容の明らかなものは 1 基だけであるが、他に一部だけ確認したものが 2 基ある。周溝内からは 6 世紀代の須恵器や杯などが出土した。主体部は削平されたため残存していなかった。

竪穴住居 検出した竪穴住居は 9 棟あり、その内全容を知ることができたのが 2 棟ある。それぞれの住居は重複しており、9 棟が同時併行していたとは考えられない。住居の中央に円形の落込を有するものが 5 棟ある。また、住居の南辺に土壇を設けているものもある。全容を知ることのできるこれらの住居は、いずれも竈を持たない。

流路 調査区の南西部で東肩口の一部を北西から南東にかけ検出した。肩口部から、庄内式併行期の甕・高杯・器台・壺などが多量に出土した。流路の堆積は大きく 2 層に分層でき、上層には布留式併行期のものが若干出土しただけであるが、下層からは上述した庄内式併行期のものが出土した。なお、庄内式土器と共に、弥生時代中期の土器も数点出土している。検出した烏羽離宮併行期の苑池は、この流路上に造られたものである。

土壇（縄文時代晩期） 不定形をしたもので、性格は不明であるが土壇内からは、精製土器や粗製土器が出土した。

出土遺物には、土器、瓦、木製品、金属製品などがある。最も多く出土したのは、庄内併行期の土器群である。これらの中で注目されるものとして、体部外面に籠の編目を残す鉢がある。また、角閃石を含む河内系の土器や東海系の壺などが出土している。この他、平安時代中期の木棺墓からは、土師器や刀子と共に八稜鏡が発見された。烏羽離宮に関する遺物として、播磨や讃岐産の瓦があるが出土量は比較的少ない。

**小結** 今回の調査によって、釈迦堂の東側に造られた苑池の北限が明らかとなった。そして、この苑池がほぼ旧流路（庄内～布留式併行期）上に設けられたことが判明した。この重複は偶然のものではなく、旧流路を利用して計画されたものと考えられる。また、この苑池の水は自然の湧水だけではなく、金剛心院東限の南北溝から導入していることが確認できた。この導入溝は、金剛心院の北東、すなわち、丑寅の方向に位置し『作庭記』の記載にもよく合う。今回の調査で発見した石組みは、第 79・97 次調査で検出した石組みとは意匠が異なっている。例えば、半島の東側に角の丸い花崗岩だけの石組みにし、同じく半島の先端から西側には河原石を U 字状に並べ舟入り風になっている。

（鈴木 久男・吉崎 伸）

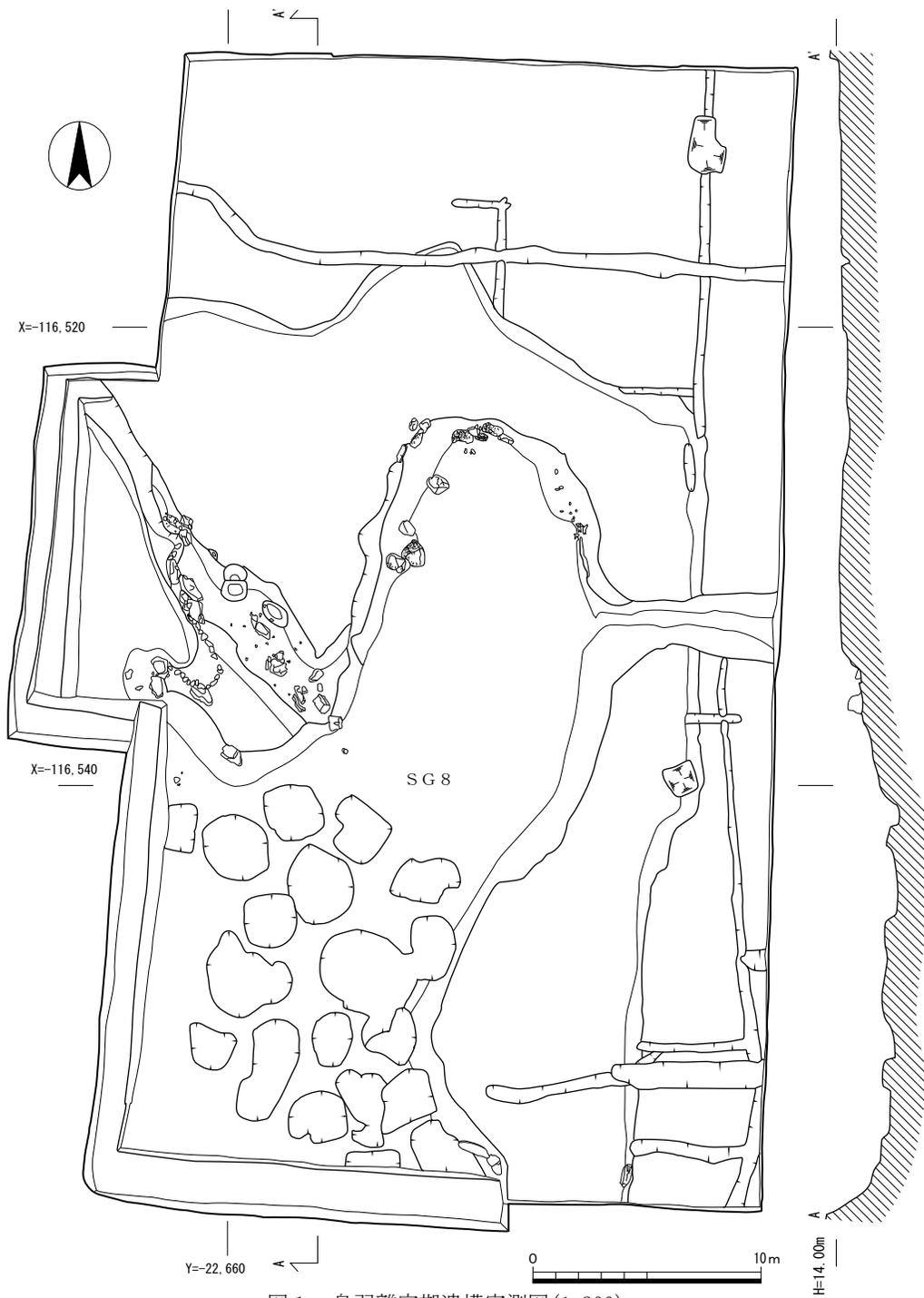


图1 鳥羽離宮期遺構実測図(1:300)

## 20 烏羽離宮跡第103次調査(図版37, 第1章-26 図4)

**経過** 今回の調査は、名神高速道路南インターの東部、旅館街の一部における旅館建設に伴うものである。調査地は、田中殿金剛心院の北西部に位置している。調査地南での既往の第74次・第80次・第99次調査では、金剛心院の西限築地とそれに伴う両側溝を検出したことから、調査地でもこれらの遺構の検出が予想された。また、周辺の調査では、下層遺構として、古墳時代の竪穴住居などが確認されていることから、これらに関連する遺構の検出も予想された。調査は、東西20m、南北17mの調査区をまず設定し、調査の進展に伴い、随時拡張した。

**遺構** 調査地の基本層序は、現代盛土(厚さ60cm)、旧耕作土(厚さ15cm)、暗オリーブ色砂層(厚さ25~30cm)、暗灰黄色泥土層(厚さ20cm)、灰オリーブ色砂泥層(厚さ15cm)、灰色泥土層(厚さ10cm)となり、暗灰黄色泥砂層(第1層, 厚さ10cm)の上面にて烏羽離宮期の遺構を検出した。その下は、暗灰黄色砂泥層(第2層, 厚さ5cmの平安時代後期の遺物包含層)、黄褐色砂泥層(第3層, 厚さ15~20cmの平安時代中期の遺物包含層)、灰オリーブ色泥土層(第4層, 厚さ20cm, 平安時代前~中期の遺物包含層)、灰オリーブ色砂泥層(第5層, 厚さ15cmの奈良時代~平安時代前期の遺物包含層)、灰色泥土層(第6層, 厚さ25cmの奈良時代遺物包含層)、オリーブ褐色泥土層(第7層, 厚さ10cmの古墳~飛鳥時代の遺物包含層)となる。これらの各層の上面では、南北及び東西方向の小溝を検出したに過ぎない。次いでオリーブ黒色泥土層(第8層, 厚さ10cm)で上面にて掘立柱建物、溝、竪穴住居などを確認した。また次の灰オリーブ色泥土層(第9層, 厚さ20cm)の上面で古墳時代前期の溝・土壙を確認した。以下は暗オリーブ灰色土層(厚さ10cm)、灰色砂層(厚さ10cm)、灰色砂礫層(厚さ30cm以上)となり、いずれも弥生時代の流路堆積と考えられる。

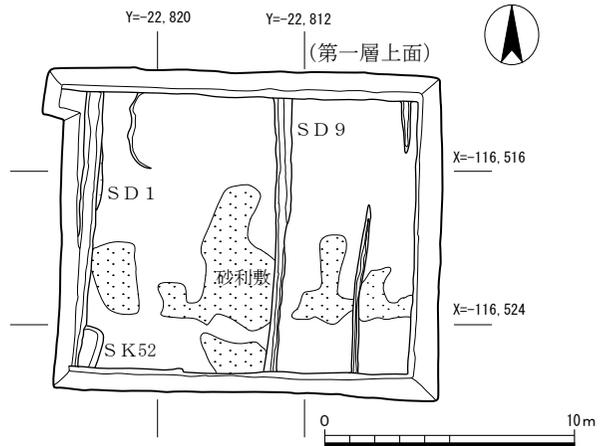


図1 烏羽離宮期遺構実測図(1:300)

検出した遺構群は古墳時代前期～平安時代末までと多時期にたっているが、その特徴は奈良時代を境として大きく変わっている。

第1層上面の西端では幅0.85m前後の南北溝(S D 1)と中央東で幅0.5mのS D 9を検出し、その間には砂利を敷き詰めた痕跡が認められ、金剛心院西側築地のすぐ西にあたることから、金剛心院に関連した遺構群と考えられる。第2層から第7層までの各々の上面では、幅

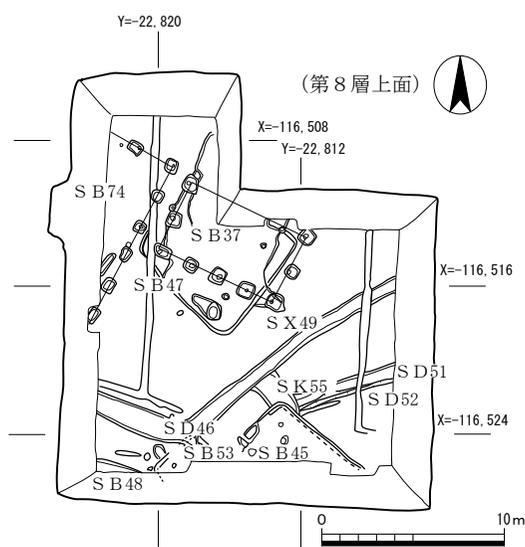


図2 古墳時代後期～奈良時代前期遺構実測図(1:400)

0.3～0.5mの南北及び東西溝が数条認められる。溝の間隔は各層によって3～8mと異なっているが、その方位、溝の堆積などは類似している。第8層上面では古墳時代後期の竪穴住居4棟と飛鳥時代と考えられる掘立柱建物2棟を検出した。竪穴住居のうちSB47は一辺6.7×7mの規模の大きなもので、SB45・53は北西辺に竈を有する。掘立柱建物はいずれも主軸が大きく東に振れ、柱の掘形は0.5～0.8mの方形である。SB37は4間×2間(6.8×4.2m)の東西棟でSB74は2間以上×5間以上の南北棟である。

**遺物** 出土遺物は、整理箱で27箱あり、その時期は弥生時代から鎌倉時代まで及び、出土遺物の大部分は平安時代後期から末までのものと古墳時代のものが二分する。平安時代後期の主なものは瓦類である。瓦類は、軒丸瓦5点(三巴文3点、複弁蓮花文2点)、軒平瓦6点(三巴文2点、唐草文4点)あり、讃岐系と播磨系のものが大部分である。この他特記すべきものとして第6層上面から岸部瓦窯の製品と考えられる平安時代前期均整唐草文軒平瓦1点が出土した。古墳時代後期の遺物は、竪穴住居・溝・土壇などから出土し、土師器甕・須恵器杯身・蓋・壺などがある。特にSB45床面からは比較的まとまって出土した。この他注目すべきものに、SB47から管状土錘2点と鉄製鎌と考えられる製品がある。

**小結** 調査の結果、烏羽離宮期の顕著な遺構の確認はなかったものの古墳時代から平安時代末までの各時期の遺構を層位毎に検出できたことは成果といえよう。まず烏羽離宮期

のものとしては南北溝があり、第74・80次調査で検出の延長にあたることから、金剛心院西限の路面及び側溝が更に北に延びていることが判明した。次いで烏羽離宮期以前の遺構としては第2層～第7層の各上面で検出した溝群で耕作に関連したものと思われる。溝間隔は各面で少しずつ異なるが、調査区内では通常3～4条あり、南端で東西溝に合流あるいは折れ曲がるという傾向は共通している。またその方位もN1°34'Eほどで、振れが共通しており、その成立が奈良時代前期まで遡ることが判明した。このことから奈良時代前期に成立して以降平安時代後期まで踏襲されていたと思われる。

奈良時代以前の遺構には掘立柱建物、竪穴住居などがあり、その方位はN30°E前後で、これ以後の遺構と異なる。これらの配置及び集落の規模などは田中殿金剛心院西半部でしか確認されておらず、今後の課題といえる。 (堀内 明博・前田 義明)

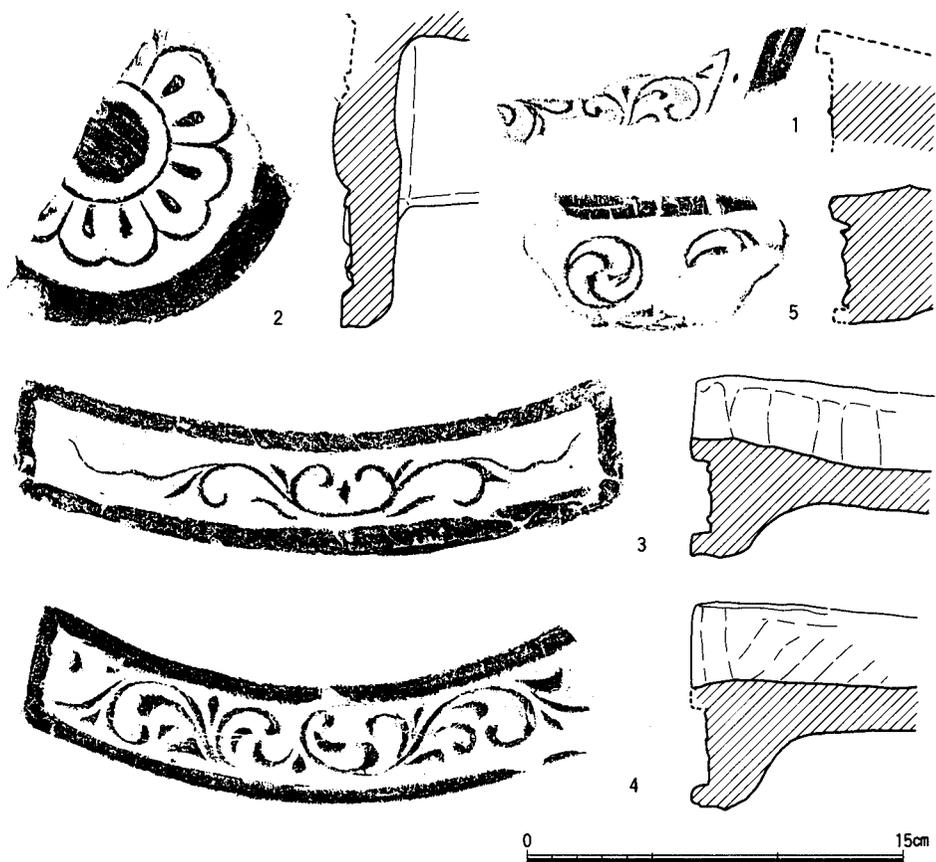


図3 軒瓦拓影・実測図 (1:3)

## 21 烏羽離宮跡第 104 次調査（図版 38，第 1 章 - 26 図 4）

**経過** 調査地は昭和 34 年度烏羽離宮田中殿跡調査で建物を検出し、現在は田中殿児童公園として保存されている所と道路を挟んで隣接している。ここは田中殿推定地の中でも北寄りに位置し、建物群の北限を想定する遺構が期待される所である。

まず調査は倉庫建設に伴って試掘調査を実施した。そして基壇上に柱跡の根固め石を検出したことによって、短期間の確認調査を実施することとなった。調査区は基壇を中心に設定した。検出した遺構は基壇建物・東西溝・不定形土壙群などである。遺構調査の終了後、保存対策の一環として砂で覆い埋め戻しを行って調査を終了した。

**遺構** 検出した遺構は平安時代後期～鎌倉時代（烏羽離宮造営期）のものである。

基壇建物は北辺部以外が敷地外に延びるため全体を明らかにすることはできなかった。残存遺構は東西 25 m 以上、南北 11 m 以上、高さ 0.5 m を測る。基壇上では北縁に沿って 9 箇所の根固め石の柱跡が認められた。基壇の築成は北側で検出した東西溝を埋め戻してから行われている。次に溝の南肩口付近を北辺とし掘込を行う。この掘込は溝に面した北辺だけのようである。その後南側を中心に粘土が盛られ、更に北側に泥土と粘土が混在する土が盛られる。最後に根固め石が造られる。

建物基壇の北辺部で検出した東西溝は幅 5.2 m、深さ 1.4 m を測り、断面は逆台形を呈する。この溝は人工的なもので肩部に掘削時の工具の痕跡を認めた。南肩部には護岸用の杭や矢板を検出した。杭の中には柱の転用材も認められた。埋土は 3 層に大別できる。上層は建物基壇を造る際に埋め戻されたものであり、下層は腐植土層で約 0.4 m が堆積している。最下層はこの溝の掘削、成形時に埋め戻された土層である。埋土には水の流れを示す痕跡は認められなかった。

溝の北側では不定形の土壙群を検出した。このような遺構は平安京内でみられる土取り穴の状況に似ている。土壙の深さはほぼ一定で約 0.5 m を測る。埋土は東西溝を埋め戻した土に酷似している。

**遺物** 出土遺物は、整理箱に 5 箱出土した。その大半は室町時代以降の水田に関する土層から出土した。平安時代後期～鎌倉時代の遺物は土師器・瓦器・磁器などがある。しかし量は少なく細片がほとんどである。室町時代以降の遺物には土師器・瓦器・磁器などがある。また建物基壇の盛土より縄文～弥生時代の土器片・基壇底部からは奈良時代の土器が少量であるが出土した。

**小結** 今回の調査成果は、基壇建物を検出し、更に下層に重複して東西の溝を確認した  
ことである。なお、この溝は創立期の田中殿建物群の北限に想定されることから調査の意  
義も大きい。更に、縄文時代の土器が出土し、この付近に下層遺構の存在の可能性もみ  
のがせない。しかし、今回得た知見は田中殿を考える上で新たな検討課題であり、今後の調  
査に期待される所が大きい。また、田中殿ひいては烏羽離宮の北限を知る上で当地より更  
に北側へ調査範囲を広げる必要がある。

(吉崎 伸・中村 敦)

『烏羽離宮跡発掘調査概報』 昭和 59 年 1985 年報告

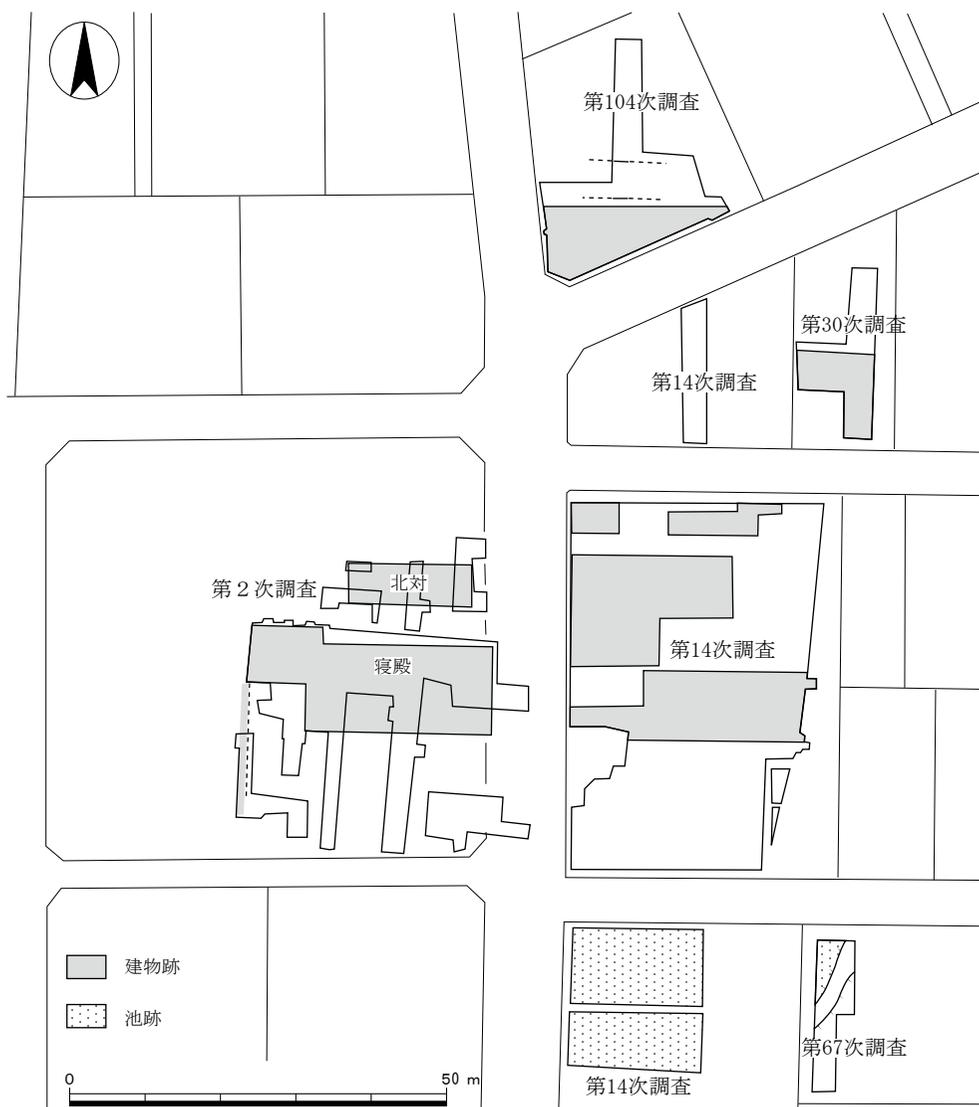


図 1 田中殿跡遺構配置図(1:1000)

## 22 烏羽離宮跡第 105 次調査

**経過** 調査は道路の拡幅工事に伴うもので、民家と道路敷に位置している。調査区は道路の交通量の多さや、民家の基礎が残っていたことなどによりかなり制約されたものとなった。近辺の調査をみると、調査区の西側に近接する第 71・第 77 次調査で、平安時代から室町時代にかけての遺構・遺物を多数検出している。また下層からは弥生時代の遺構・遺物が発見され、弥生時代以降連綿と続く複合遺跡であることが判明している。このようなことから小面積ではあるが発掘調査を実施した。これらの調査成果を踏まえ、江戸時代以降の土層を重機によって除去し、以下手掘りで調査を行った。

**遺構・遺物** 基本層序は地表面より深さ 120cm まで江戸時代以降の層で上部は灰褐色砂泥層、下部は黒色腐植土層である。その下が緑灰色シルト層 25cm、明緑灰色シルト層 10cm で次が灰色砂礫層となる。緑灰色シルト層は平安時代中期の包含層で、上面は平安時代後期の遺構面である。下層の灰色砂礫層より、摩滅した推定古墳時代の土師器が出土した。

検出した遺構には烏羽離宮期の土壙・ピット、平安時代中期の溝がある。土壙は南半分が調査区外にはみだしているが、直径 1.7 m の円形で深さ 0.7 m を測り、播鉢状を呈している。ピットは直径 0.25 m、深さ 0.1 m を測り、砥石が 1 点出土した。溝は緑灰色シルト層の上面をはがした所で検出し、東西方向に走る。幅 0.35 m、深さ 0.1 m を測る。古墳時代、弥生時代の遺構は検出できなかった。

出土遺物は整理箱で 1 箱と少ない。平安時代後期には土師器皿、瓦器椀、輸入陶磁器、白磁、平瓦などが認められる。平安時代中期の遺物は土師器皿、須恵器壺、灰釉陶器、黒色土器などがある。

**小結** 今回の調査では烏羽離宮期の土壙や平安時代中期の溝を検出したが、狭小な調査面積のため、遺構の性格を明らかにすることはできなかった。

(鈴木 久男・前田 義明)



調査区全景（東から）

### 23 烏羽離宮跡第106次調査（図版39・40、第1章-26 図4）

**経過** 調査は田中殿公園の南での旅館建設に伴うものである。調査地は、烏羽離宮田中殿金剛心院推定地の北東隅にあたる。周辺では既に数次の調査が実施され、金剛心院に関係する礎石建物・苑池・北限に相当する東西溝などを検出している。更にその下層からは、弥生時代の流路、古墳時代の竪穴住居・墳墓なども発見された。今回の調査では、こうした既往の調査成果に関連する遺構・遺物の検出が予想された。調査は、排土地確保から東西26m、南北15m、幅7～16mの矩形を呈する調査区を設定した。

**層序** 調査区の基本層序は、現地表より現代盛土（厚さ50cm）、旧耕作土（厚さ20cm）、床土（厚さ17cm）となる。次いで黄褐色泥土層（厚さ14cm）、オリーブ褐色泥土層（厚さ20cm）、褐色泥砂層（厚さ9cm）、オリーブ褐色泥砂層（厚さ7cm）の近世以降の遺物包含層となる。この層まで機械力により排土し、それ以下より調査を開始した。第1層は、厚さ10cmのぶい黄褐色泥砂層で、第2層は厚さ16～18cmの黄褐色微砂層となる。この上面で平安時代末～鎌倉時代の遺構群を検出した。第3層は厚さ5～8cmの黄褐色泥砂層となり、平安後期～末期の遺構群を検出した。この上面の調査区北東では、古墳の墳丘に相当するにぶい黄褐色泥砂層が認められた。これより以下の層は、墳丘の傾斜部に徐々に堆積したものである。第4層は暗灰黄色泥砂層（厚さ5～8cm）、第5層は暗灰黄色砂泥層（厚さ8cm）、第6層は暗灰黄色泥土層（厚さ10～16cm）、第7層はオリーブ褐色泥土層（厚さ12cm）、第8層は暗オリーブ褐色泥土層（厚さ20cm）、第9層は褐色泥土層（厚さ10cm）、第10層は暗オリーブ褐色泥砂層（厚さ15cm）、第11層は灰色粘土層（厚さ10cm）となり、古墳時代後期～平安時代に至る遺物包含層で各層上面から遺構は検出していない。このうち第7層以下は湿地に形成されるような堆積層である。以下は褐色砂礫層の地山となり、上面で

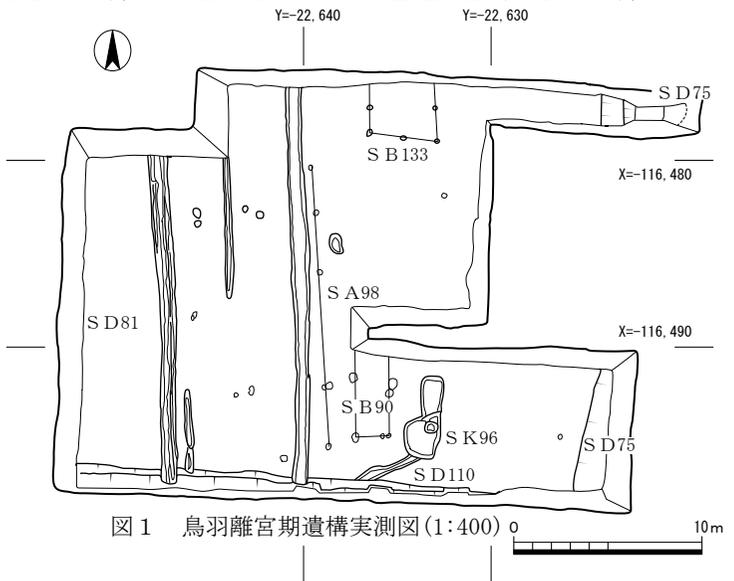


図1 烏羽離宮期遺構実測図(1:400)

弥生時代中期後半から後期の遺構群と古墳時代の遺構群を検出した。

**遺構** 検出した遺構群は、弥生時代から室町時代までの多時期に及んでいるが、その間連続と存続しているのではなく、古墳時代後期末～平安時代中期まで顕著な遺構はなく、その間空白になっている。弥生時代の遺構は、中期後半の流路・土壌、後期の溝などがある。流路は、調査区を北西から南東に大きく斜めに走るもので、幅 8.5 m、深さ 0.8 m を測る。堆積層からは、わずかに土器が出土したに過ぎない。後期の溝は、調査区の西南部で検出したもので、中期の流路の方向とほぼ平行して東南流する。幅は 2.5～3.5 m、深さ 1.5 m を測り、断面 U 字形を呈する。堆積は、底に厚さ 30cm ほどオリーブ黒色粗砂層と砂泥層が堆積し、その上が灰オリーブ色泥土層、暗灰黄色泥土層となり、遺物が多量に出土した。溝の上面は灰オリーブ褐色泥土層、にぶい黄褐色砂泥層となる。土壌は北東部で検出し、幅 1.2 m、長 2 m、深さ 0.36 m を測る。隅丸方形を呈し、少量の土器と炭が出土した。

古墳時代の遺構は、前期の土壌、後期の古墳・溝などがある。古墳は、調査区の北東部でその一部を検出したに過ぎない。その確認した範囲からみると、直径 20m ほどの円墳状を呈するものと考えられる。墳丘は、後世の削平を受け、わずかに基底をなす部分だけを確認した。周溝の内側には、わずかにテラス状を呈する幅 1～1.5 m の段が 3 段認められた、これらの基台部分は、すべて盛土により成形されたものではなく、地山を削りだして成形したことが断ち割りなどで確認できた。周溝は、幅 4 m 前後、深さ 0.6 m を測り、調査区東部で二分している。

周溝の堆積状況は、底に灰色微砂が流れ込むように堆積したのち、オリーブ黒色泥層がその上を厚く覆っている。遺物の出土状況は調査区の北端、すなわち周溝が西に折れ曲がるように浅くなった所に集中し、かつ灰色微砂層上面で出土しており、周溝の埋没から時期を経ないで入ったものと考えられる。この部分は、

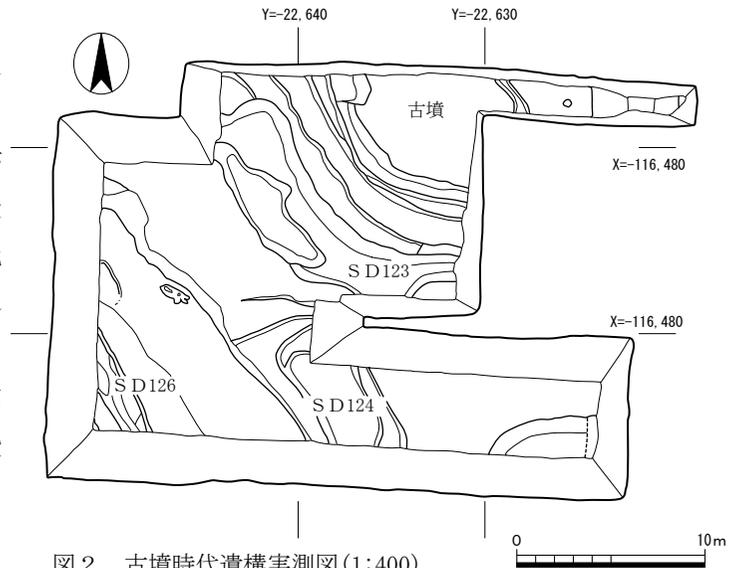


図2 古墳時代遺構実測図(1:400)

墳丘の一部が西へ張り出し、周溝も折れ曲がるような形状を呈することから前方後円墳の可能性もある。SD126は、調査区の西南隅にあり、幅1.5m、深さ0.45mの断面逆台形を呈している。方位は、弥生時代後期の溝に平行し、南端では1.5mほどの不定形な前期の土壌を切っている。その内から土器に混じってスクレイパー・砥石などが出土した。

烏羽離宮期の遺構は、平安時代後期から末まで、平安時代末から鎌倉時代のものの2時期に分けられ、それぞれ小規模な掘立柱建物・柵列・溝・土壌などを検出した。このうち調査区南端の東西溝（SD110）は、金剛心院の北限溝と考えられる。溝幅は1.4m以上、深さ0.5mを測る。また調査区東端で検出したSD75は、幅3.5m前後、深さ1.5mと規模が大きい。この溝は、第97次調査で検出した金剛心院の東限溝を延長した所に位置し、北限の溝を越え北方に延びる。室町時代の遺構は、小規模な溝を多数検出した。

**遺物** 出土遺物は整理箱に74箱で、弥生時代中期後半から室町時代までのものが含まれる。量的には弥生時代中期後半から後期にかけてのものが多く、次いで古墳時代後期のものである。前者は溝出土のものが注目され、調査区南側第102次調査検出遺構と関連し、完形が多く、一括と考えられる。また後者は、周溝より出土したものが注目される。この内埴輪では普通円筒、朝顔形円筒の他、形象の家形や器材（楯形・衣笠）・動物・人物（巫女）などがあり、その他須恵器杯蓋・甕なども出土した。埴輪の内では形態が判明したものが数点あり、それを概略すると巫女は胴部から上半しか残っていないが、両手を前方に突き出し、何かを持つようなポーズをとっている。頭髮は島田髷で、胴部にはタスキがかけられている。胴部は斜めハケ後にナデ、頭部はナデ、腕はハケ、内面はナデ、腕は中空造りで、臍の部分を肩部に差し込む。円筒埴輪（2～4）は、すべて土師質でタガ径は16cm前後のものが主流を占める。タガは3段と考えられ、すべて台形ではあるが、突出度は低く、その中央が窪むものが多い。外面調整は、第1次調整タテハケのみのものと、タテハケのち第2次調整B種ヨコハケが認められるものがある。内面調整は、ナデを施すものが大部分であるが、最上段内側だけを斜めのハケを施すものもある。透かし孔はすべて円を呈する。朝顔及び衣笠の成形・調整は円筒埴輪に類似するが、（5）が口縁内面斜めハケに対し、（6）はナデを施す。埴輪は、川西宏幸編年でのV期の初めに相当し、共伴の須恵器（1）から、ほぼ5世紀末～6世紀初頭と考えられる。

**小結** 成果として第一に金剛心院の北限より北側でそれに関連した雑舎などの遺構の存在が明らかになった。また埴輪を伴う古墳の発見で、周辺一帯が木棺墓・土器棺墓・方形周溝墓など多種類の墳墓で構成されていたことが判明した。（堀内 明博・吉崎 伸）

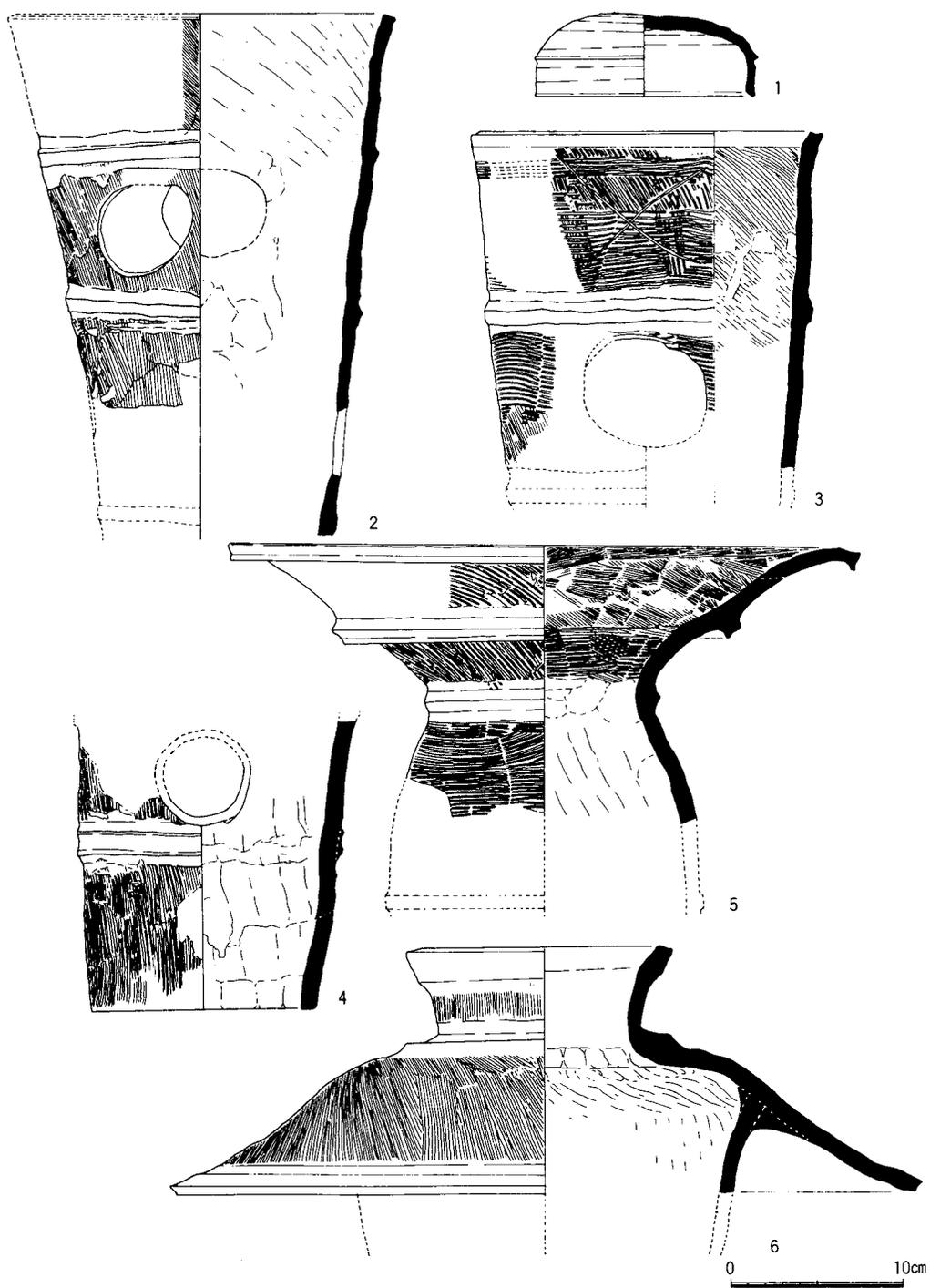


图3 古墳周溝内出土土器・埴輪実測図(1:4)

## 24 烏羽離宮跡第 107 次調査（第 1 章 - 26 図 4）

**経過** 調査地は、金剛心院跡の南側に位置し、釈迦堂跡の南正面約 80m 南方にある水田である。周辺部で実施した発掘調査では、釈迦堂・釣殿廊・小御堂などの建物や複雑に入り組む池などを発見している。このため、遺構の有無をまず確かめるために試掘調査を実施した。その結果、第 97 次調査で検出した池と同一のものと考えられる池の痕跡が認められたため、発掘調査へと移行した。

**遺構・遺物** 検出した池の汀は北東から南西方向に向かって認められ、南東方向に向かって池は徐々に深くなる。水際の傾斜面は 10 度前後と大変緩やかである。池の汀には、顕著な洲浜の痕跡や庭石を据え付けたような跡はなかった。性格は不明であるが、岸から池底に向かって丸瓦・平瓦が直線的に並べられたものを検出した。同様なものは、第 99・100 次調査でも発見している。池の推定水位は 12.4 ～ 12.6 m と考えられる。

出土遺物の大半は瓦で、土器は極めて少なくいずれも小片である。これらは、池内堆積土最下層のオリーブ黒色腐植土層から出土した。

**小結** 今回調査を実施した池は、位置や汀の方向、水位などから第 79・97・102 次調査などで発見した苑池の一部であると考えられる。この苑池は、金剛心院釈迦堂の東面及び南側に造営されたものである。汀には、洲浜や景石などは認められず先の調査で検出した池の景観とは若干異なったものである。このような現象は主要建物から離れたためか、あるいは景観を人為的に変化させたためと思われる。また昭和 59 年度実施した第 109 次調査でも九体阿弥陀堂の東面に別の南北に伸びる苑池を検出している。今回の調査地は、これらの苑池が複雑に入り組んだ地点に位置しており、金剛心院南半における調査の進展が望まれる。

（鈴木 久男）



調査区全景（東から）

『烏羽離宮跡発掘調査概報』昭和 60 年度 1986 年報告

## 25 烏羽離宮跡第 108 次調査

**経過** 調査地は、秋ノ山北方の水田地帯の一角、北殿推定地の一部である。これまで付近では、庭園遺構を検出している。第 81 次調査では、北から南へ傾斜する池の汀と景石を、また第 95 次調査では、池に北から張り出す陸部の一部を検出した。汀には景石を点々と据え付けていた。更に、本調査地の南方で行った第 115 次調査では、池に細長く伸びる東西方向の陸部を一部検出している。これらの陸部は人工的に土盛りしたものである。

**遺構・遺物** 調査の結果、対象地全体が池内であることが判明した。このため、遺物も極めて少なく、土器片や瓦片がわずかに出土したにとどまった。

**小結** 第 81 次調査以降、各地点で庭園遺構が検出されている。これらを合わせると北殿に造営された庭園遺構は、東殿や田中殿に匹敵する規模を有する。(鈴木 久男)

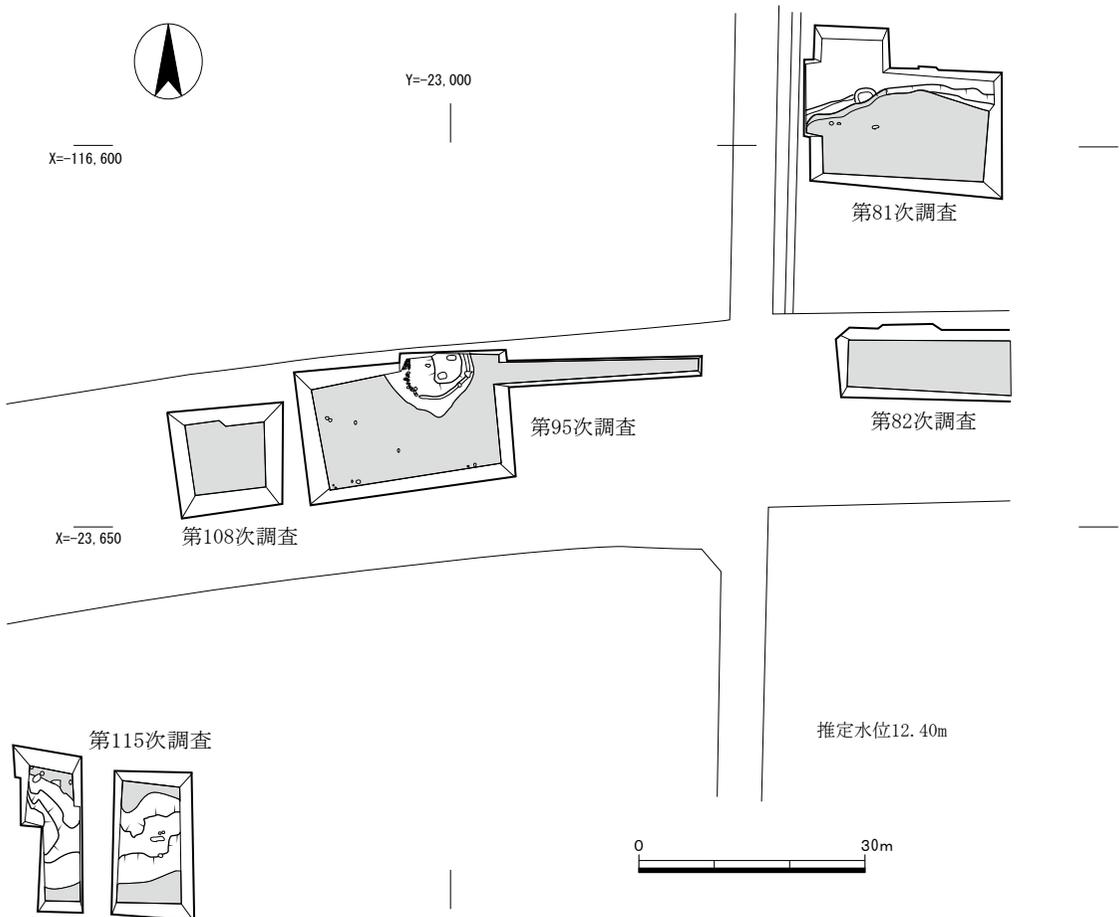


図 1 庭園遺構配置図(1:1000)

## 26 烏羽離宮跡第109次調査（図版41～45，第1章-26 図4）

**経過** 金剛心院跡の発掘調査は，昭和57年度以来数次にわたって実施している。その結果，釈迦堂跡，寢殿跡，築地，小御堂跡や苑池などを検出している。今回の調査地は金剛心院跡のほぼ中央部に位置し，釈迦堂と考えられる建物の南西方向にあたる。

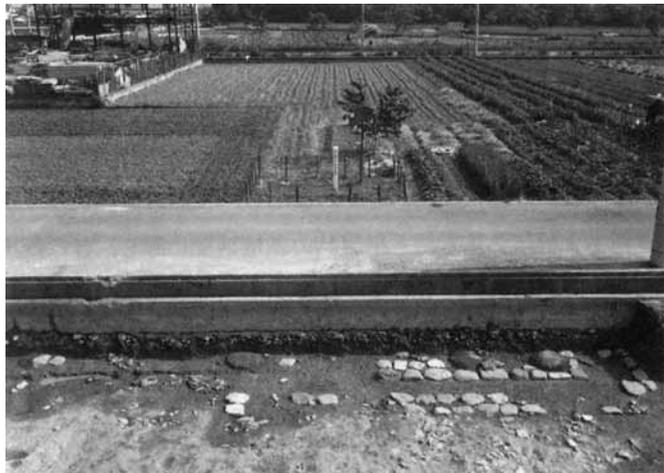
調査は，調査区の南側から開始し，後に北半部も実施した。調査地点の北半では水田であったが，南半は資材置場として利用するための盛土がなされていたため重機を導入して除去した。

**遺構** 今回の調査で検出した主な遺構は，建物，苑池，橋脚，井戸などである。SB1 東西方向の礎石建物で，釈迦堂跡と考えられる。基壇は掘込地業によって構築している。過去4次にわたる調査によって，桁行3間・梁行2間の身舎に四面庇が取り付け，更に縁の廻る建物であることが判明している。今回検出したのは，建物の南西隅である。

SB2 SB1同様の掘込地業によって構築された，亀腹状の基壇を持つ南北方向の建物である。建物の東面で南北方向に並ぶ礎石及び据付け穴を14箇所検出した。礎石はいずれも花崗岩で円形の柱座を造り出したものである。基壇の上面では，身舎・庇などの礎石据付け穴を検出した。

この建物の北辺部は，第75次調査の時に発見している。調査成果を総合すると，この建物は，身舎の桁行9間，梁行2間で四面に庇と縁が取り付け，北側は更に孫庇が付くものである。

SB17 SB1とSB2をつなぐ礎石建物である。北辺部は第75次調査で検出している。その主体は道路敷内にあたるため詳細は不明である。



第75次調査 SB2（北から）

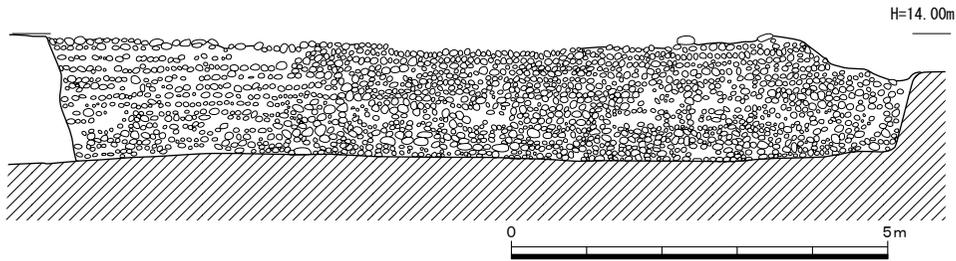


図4 SB2地業北壁断面図(1:100)

SX18 SG10に架かる東西方向の橋で、梁行1間、桁行2間以上である。橋脚は丸いものと面取りしたものがある。橋の南北中心線は、SB2の建物中軸線と同一線上にある。

SG10 SB2の前面に広がる細長い池である。池の汀や陸部に景石を点々と据え付けている。池の肩口から汀にかけて玉石を敷き詰め洲浜を造り出している。水位は12.60m前後を測る。

この他、池の洲浜上に掘られた木組みの井戸も発見している。

**遺物** 出土した遺物は整理箱にして200箱を数えるが、その大半は瓦である。軒瓦には、播磨産や讃岐産のものが見受けられる。注目される遺物として、池の堆積土から出土した木製品や金属製品がある。木製品には、仏像の一部や複弁8葉の蓮華文を彫った円光背・蓮弁・宝相華文を透かし彫りにした板材などがある。これらはいずれも黒漆の上に金箔を押し込んだものである。また瓔珞や飾金具・ガラス玉なども出土している。この他、SB2の基壇からは、須弥段の框を飾ったと考えられる装飾金具を発見している。この金具は鍍金が施され、文様は、魚子地に羽を大きく広げて向かい合う2羽の「鴛鴦」が表現されている。

**小結** 今回検出したSB2は、規模、方向、間取りなどから九躰阿弥陀堂跡と考えられる。この建物の検出によって、金剛心院の建物がほぼ明確となった。また、釈迦堂跡も九躰阿弥陀堂跡も亀腹状の基壇構築に際し、ほぼ同様の仕事をしたものであることが明らかになった。九躰阿弥陀堂前面の苑池は、小規模ながら丁寧に造営されている。そして、阿弥陀堂の東正面の苑池は、浄土式庭園の色彩が濃くあらわれた庭園遺構である。金剛心院内の苑池は細長い流路上の形態をしており、東殿のものとはかなり景観が異なっている。

九躰阿弥陀堂の建物中軸線を東へ延長すると、先述したように苑池にかけられた橋の中心を通る。更にこれを延長すると、瀧から流れる遺水の注ぎ口にあたる。このような関係は、建物と庭園の設計が計画的になされたことを物語っている。

(鈴木 久男・前田 義明)



図2 遺構実測図(1:400)

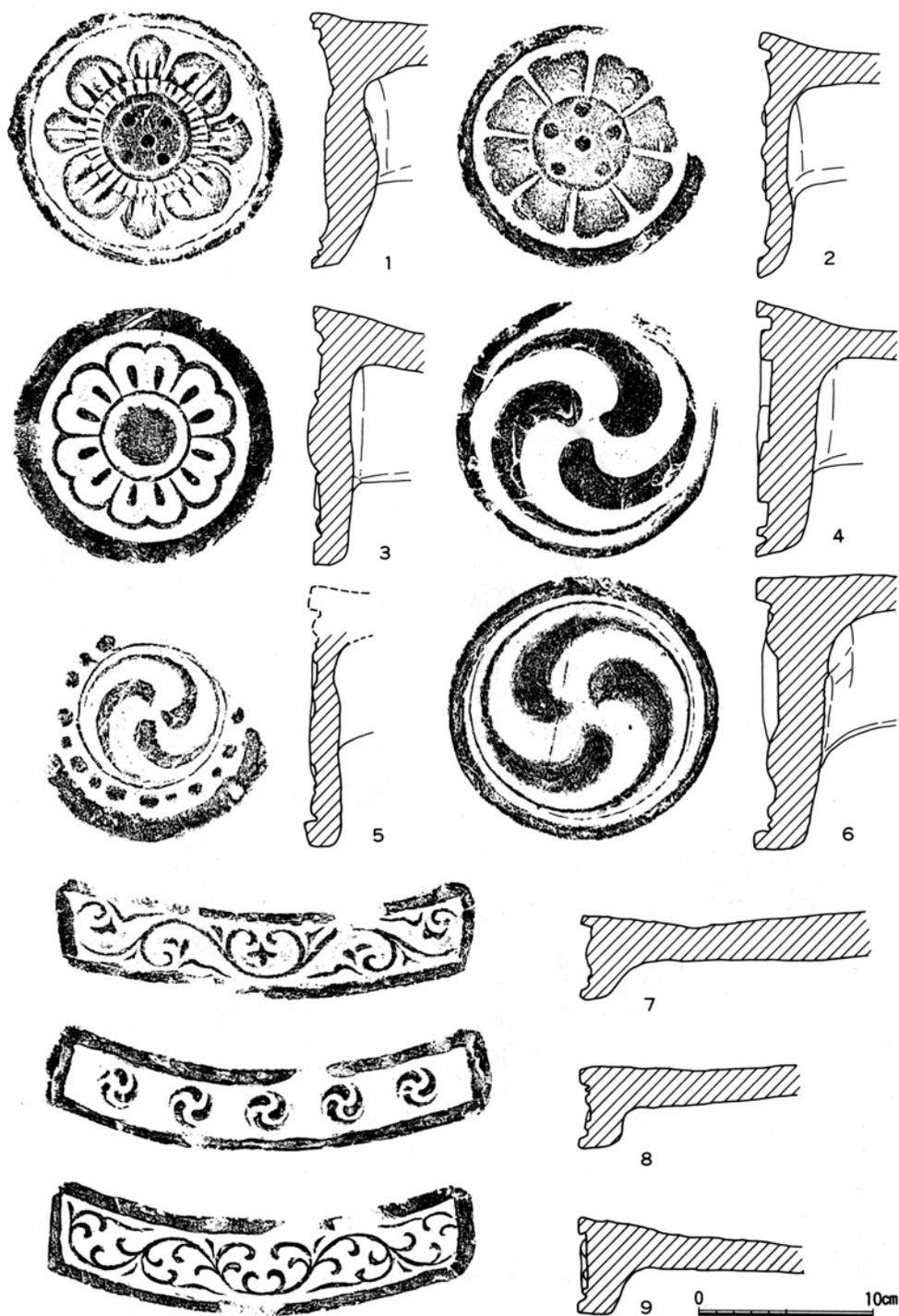


图3 軒丸瓦・軒平瓦拓影实测图 (1:4)

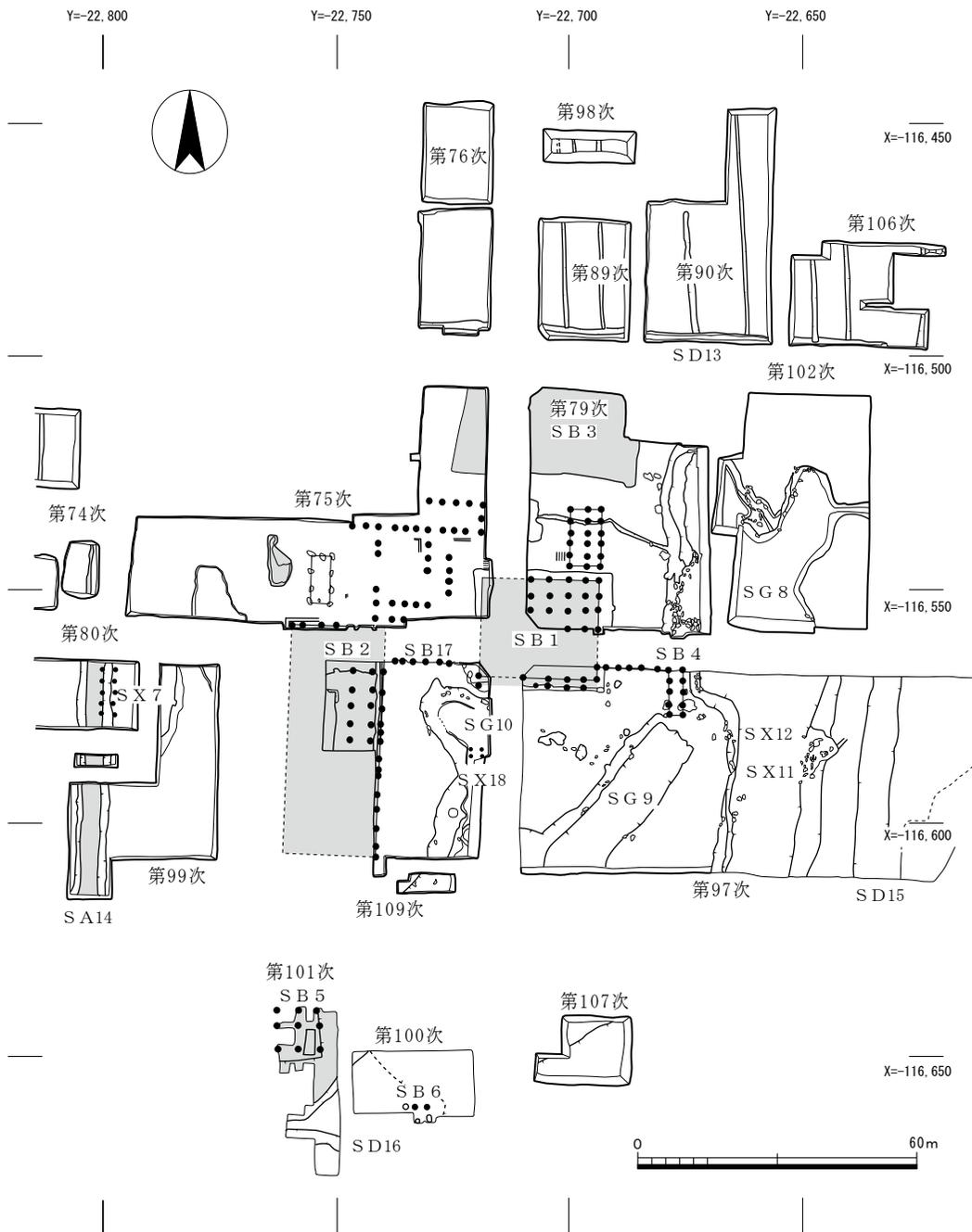


图4 金剛心院跡主要遺構配置図(1:1500)

## V 中臣遺跡

### 27 中臣遺跡第 59 次調査

**経過** 調査地は栗栖野集落の立地する低位段丘上部に位置し、南側の水田面と現地表面で約 1 m の比高差がある。

既往の調査成果から今次調査区でも竪穴住居、平安時代の建物などの検出が予想された。調査面積は 682m<sup>2</sup>である。

**遺構・遺物** 層序は単純で調査区の北側 3 分の 1 では約 30cm の耕作土下で無遺物の黄褐色泥土層または砂礫層となり、遺構を検出できる。南側では黒褐色砂泥層が南に向かってしだいに厚く堆積し、この層の下が褐灰色泥土層、黄褐色泥土層となる。黒褐色砂泥層からは弥生時代から平安時代の遺物が出土している。

検出した主な遺構は 6 世紀末の古墳 1 基、平安時代前期の竪穴住居状の土壇 2 基・掘立柱建物 4 棟などである。

古墳は周溝と石室基底部の痕跡を確認した。第 5 次調査の成果と合わせて復元径 13 ～ 14 m の円墳である。封土は後世の削平のため存在せず、主体部の石材も抜き取られており、基底部の掘形のみ検出した。主体部は玄室の幅 1.4 m、長さ 2.7 m、羨道の幅 0.9 m、長さ 2.4 m の規模を持つ横穴式石室と推定できる。周溝は全周せず南東部が陸橋状に途切れる。

土壇は四隅に柱穴状のピットを有するもので 2 基を検出している。平面方形を呈し、1.9 m × 2.2 m、1.7 m × 1.6 m のものである。両土壇とも床面直上に炭・焼土層が薄く堆積している。埋土より平安時代前期の遺物が出土している。

出土遺物は各遺構及び黒褐色砂泥層から弥生土器、土師器、須恵器が出土しており、弥生時代後期から古墳時代初頭、古墳時代後期、平安時代前期に分けられる。

**小結** 中臣遺跡群の中で、これまで漠然と考えられていた中臣十三塚（古墳群）は、1 次調査における古墳以外未検出で、今次調査で円墳が発見されたことは貴重な成果といえる。

（菅田 薫・辻 純一）

『中臣遺跡発掘調査概報』昭和 59 年度 1985 年報告

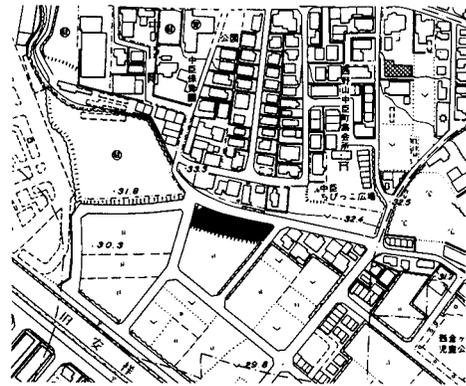


図 1 調査位置図 (1:5000)

## 28 中臣遺跡第60次調査

**経過** 調査地は中臣遺跡の南西端に位置し、旧安祥寺川に接する水田である。面積は2050㎡あり、ほぼ全域にわたって調査を実施した。

**遺構・遺物** 基本層序は耕作土・盛土が調査区北東部で30cm、南西部で70cmあり、調査区北西部では耕作土直下が遺構面となる

無遺物層の黄褐色泥砂層である。東南部では耕作土下に褐灰色砂泥層が堆積し南に向かって次第に厚く堆積する。褐灰色砂泥層下に遺構面となる黄褐色泥土層がある。褐灰色砂泥層は弥生時代後期から古墳時代前期の遺物を包含している。

検出した遺構には、弥生時代後期の土壇、古墳時代後期の竪穴住居・土壇・溝、時期不明の掘立柱建物などがあり、その他にピット多数を検出している。また、調査区西側約5分の1は旧安祥寺川河道（江戸時代？）で、他の遺構は削平される。

竪穴住居は2・3次調査時に一部を確認している。1号住居は平面方形を呈し、長軸5.7m、短軸5m、床面までの深さ約0.1mあり、壁溝は北コーナー部を除き全周する。竈は北西壁中央部にあり、須恵器高杯を倒立させて支脚としている。2号住居は平面方形を呈し、長軸6m、短軸5.5m、床面までの深さ0.15mある。壁溝は部分的に検出している。竈は北西壁中央に付設されている。

3号住居は一辺6.8mの正方形を呈する。床面までの深さは0.16～0.2m、壁溝は竈北側を除き全周する。柱穴は4本で竈は西側中央に付設。東壁中央部に貯蔵穴と思われる土壇がある。

**小結** 検出した3棟の古墳時代後期の竪穴住居は同時期の竪穴住居の中でも最も西南に位置する。中臣遺跡の当該集落西南の範囲を確定する作業の上で重要な成果を得ることができた。

（菅田 薫・辻 純一）

『中臣遺跡発掘調査概報』昭和59年度 1985年報告

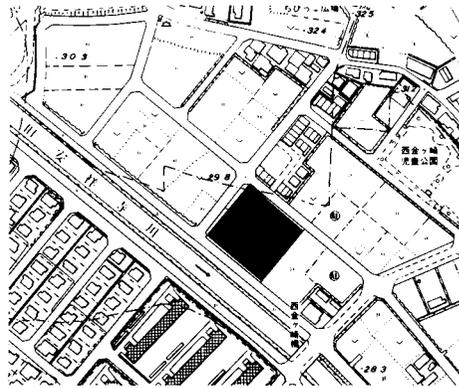


図1 調査位置図（1:5000）

## VI 長岡京跡

### 29 長岡京左京四條三坊 (図版 46)

**経過** 調査は外環状線建設計画に伴う発掘で昭和 55 年度より始まり、今年度は Q-4 区を実施した。昭和 57 年度に実施した Q-2 区<sup>注1</sup>の北半分に位置する。Q-2 区では推定東三坊第一小路の路面・両側溝など長岡京期の遺構、上層で平安時代の柱穴、下層で古墳時代と思われる水田遺構などを検出している。今回の調査でも上述した遺構の続きと、新たに長岡京期に相当する根石多数を持つ礎石据付穴 2 基などを検出する成果を得た。なお当調査は長岡京跡左京第 122 次調査にあたる。

**遺構・遺物** 長岡京期の遺構は、東三坊第一小路々面 (SF 1)・同東側溝 (SD32)・同西側溝 (SD40) の条坊制遺構と、小路西側で礎石据付穴 (SK27・28)、柱穴、土壙、小礫を敷き詰めた部分、焼灰層の散布などを検出した。路面は北半に小礫や土器片を敷き詰めた箇所がみられ、これらを除去すると土壙 (SK48) を検出した。この路面上に平安時代の建物を検出し、Q-2 区から続く南北 3 間・東西 2 間の規模を持つことが判った。下層の古墳時代の水田遺構は部分的に確認するに止まったが、Q-2・R・S 区と同方向の畦畔を検出することができた。以下長岡京期の遺構について述べる。

小路東側溝<sup>注2</sup>の幅は 1.1 m、深さ 0.4 m を測る。西側溝<sup>注3</sup>は東側溝に比べ不明瞭で検出しにくい状態で浅く、幅 1 m、深さ 0.15 m を測る。溝心々間は 9.6 m を測る。礎石据付穴は SK27 が径 0.8 m の土壙の中に大小の礫が投棄されたような状態で検出され、上部礫を除去すると 4 個の大礫が残り礎石据付穴と判った。一方 SK28 は検出し掘り下げた時点で 5 個の大礫が据えられていた。土壙では SK 33・48 から土器類がまとまって出土している。小礫敷の箇所は、調査区北西隅と SK33 の南側で検出した。

遺物は整理箱 11 箱分を出土した。器種は土師器・須恵器が中心で、ごく少量の黒色土器、瓦と一片の緑釉陶器がみられる。時代的には SD 9 上層で 10 世紀代の土器を若干認めた他は、長岡京期から平安前期に収まる。ここでは土師器が須恵器より多く、土師器は食器類が圧倒的優勢を占め、須恵器は食器類が貯蔵・調理器類よりやや多い程度という傾向が

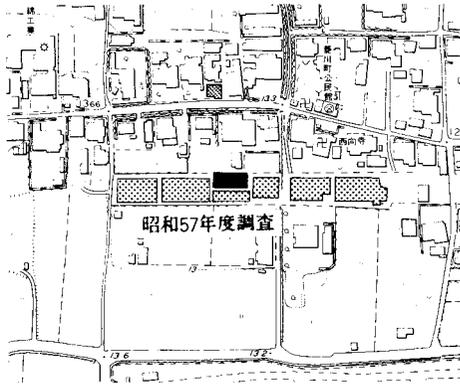


図 1 調査位置図 (1:5000)

みられた。また、土馬・竈・土錘・製塩土器も出土している。これ以外には、遺構面上層の包含層から中世の土師器・瓦器・陶器，下層からごく少量の古墳時代の遺物，一片の弥生土器が出土している。

**小結** 当調査で検出した礎石据付穴は，既往の調査で初めてのものであり，調査区内ではこれに続くものはなく，Q-2区及び西側のR区の調査でも検出されず問題を残した。当地の小字名が「西川原寺」であることから，川原寺に関係する遺構と考えるのが妥当と思われるが，来年度以降の調査を待って判断したい。

(鈴木 廣司・長宗 繁一)

注1 『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和57年度 1984年

注2 SD32の中心座標 X = -118,902 Y = -25,637.5

注3 SD40の中心座標 X = -118,902 Y = -25,647.1

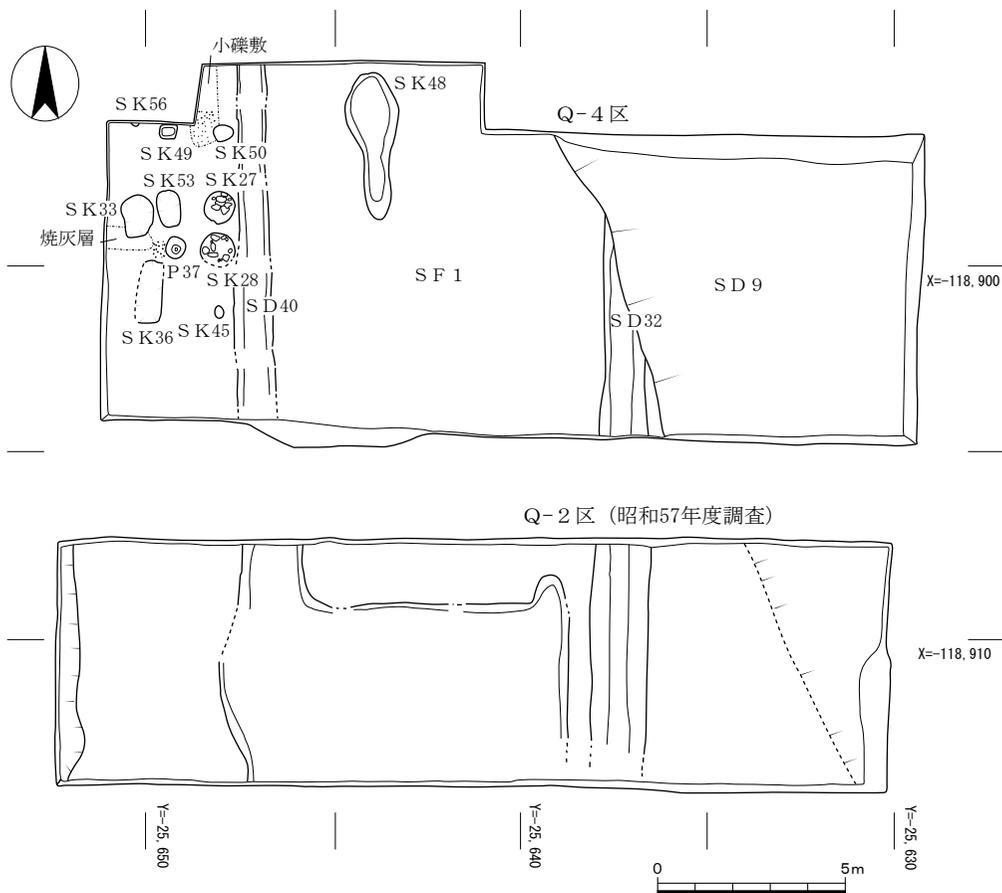


図2 長岡京期遺構配置図(1:200)

30 長岡京左京二・三条三・四坊（図版47）

**経過** 昭和55年度より継続している西羽東師川河川改修工事に伴う発掘調査である。本年度は昨年度調査<sup>注</sup>の対岸（左岸）、及び二条大路推定地から名神高速道路と交わる地点までの両岸を対象とした。

今回の調査では、条坊関係遺構の東西路の二条第二小路・二条大路・三条第一小路、南北路の東三坊大路・東三坊第二小路・東三坊坊間小路が推定される広範囲を対象とした。調査区の設定にあたっては、昨年度と同様に各路の推定地及び町割りの中間に調査区を設けることを基本方針として、調査の進展に伴い増補した地点を含め11箇所の調査区を設定した。調査区の幅は4～6mで、長さは4～32mと必要に応じ定めている。最

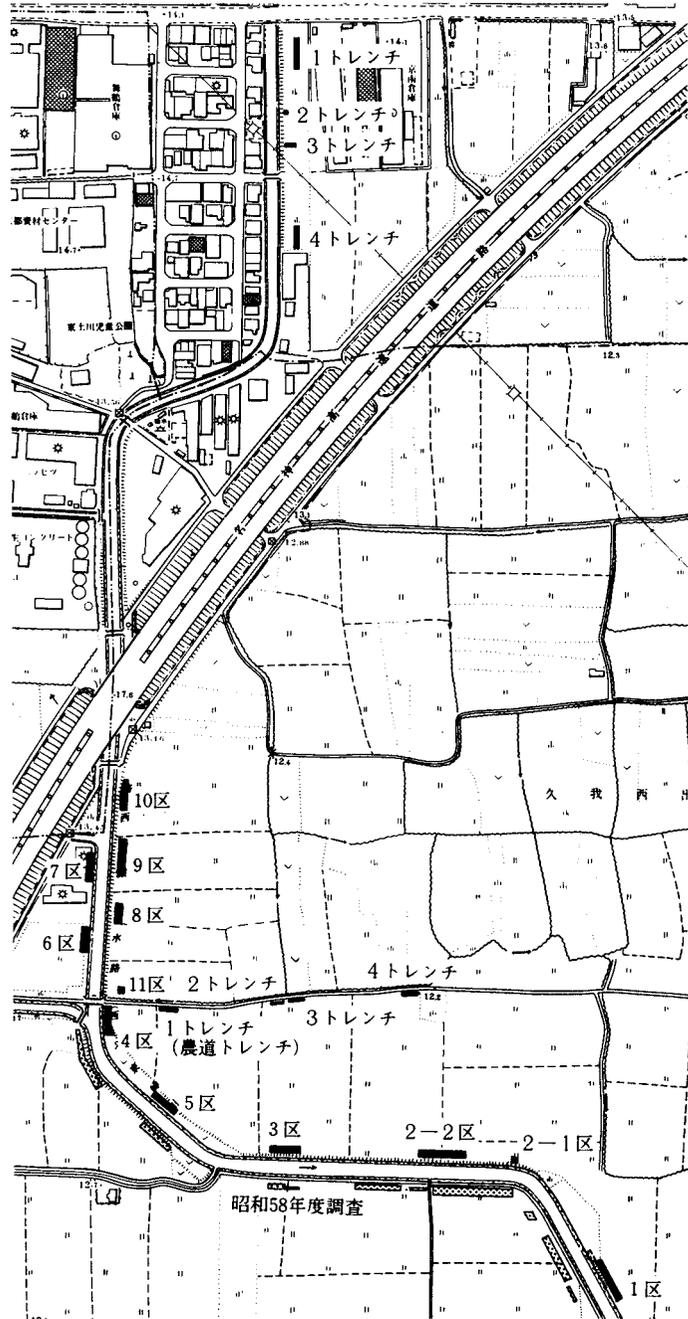


図1 調査位置図 (1:5000)

最終的に延べ調査面積は1200㎡となった。調査は左京第123次調査にあたる。

なお、河川の調査に関連して南区東土川町南浦橋南東部での試掘調査、及び今回の4・11区の間から久我町内へ東西に通じる農道の改修に伴う試掘調査もあわせて報告する。

**遺構・遺物** 堤防の盛土(4・5区)、工場の造成地(7区)を除き、他は水田となっている。堆積状況は、長岡京期の遺構面まで深さ0.5～0.8mで、この間、遺構面直上に中世の遺物包含層が所々で見られる以外はすべて新・旧耕作土の堆積と考えられる。遺構面は北に向かい徐々に高くなっており、標高は南の1区で約11.1m、北の10区で約12.1mと1mの比高差がある。本年度は、昨年度同様に長岡京期の遺構とその同一遺構面、及び直上層からみられる多数の中世の溝・落込など、更に縄文時代、弥生時代の遺構を検出している。以下、各区の概略を述べる。

1区 三条第一小路両側溝の検出を目的として設定した。1区南半部では、同小路の南側溝及び長岡京期の建物の柱穴3基(一辺0.5～0.6mで方形の掘形)を検出した。しかし北半部は河川の旧流路にあたり、深く攪乱されていた。

2区 東三坊大路両側溝の検出を目的とした。西側溝は検出できたが、東側溝は中世の湿地状堆積の拡がりにより認められなかった。また弥生時代の溝を検出している。

3区 東三坊第二小路両側溝の検出を目的とした。ここでは中世の溝・落込がみられたのみで、長岡京期の遺構を認めることはできなかった。

4区 二条大路の北側溝を求めたが、ここでも河川旧流路・中世の溝はみられたものの北側溝の検出は果たすことができなかった。

5区 3区と4区の間の一町内に設けた。長岡京期の遺構は検出できなかったが、弥生時代と思われる腐植土を含む長円形の土壌状の遺構を2基認めている。

6区 東西の農道を越えた北側の河川右岸の、町割りの中間と推定される地点に設置した。長岡京期の遺構は検出できなかったが、古墳時代ないし弥生時代とみられる東西の流路を認めた。しかし、遺物がごく少量で細片のため時代を確定することはできない。

7区 同じく右岸で、二条第二小路の推定地に予定した。しかし推定地には西羽束師川に合流する用水路がかかり調査区の設定ができないため、南に調査区をずらした。ここでは長岡京期の東西の溝1条と、その下層において縄文時代晩期の滋賀里第Ⅲ式と思われる土器を含む土壌状の遺構2基を検出した。

8区 河川左岸において、右岸の6～7区のように位置するように設定した。ここでは中世の溝を数条検出したのみである。

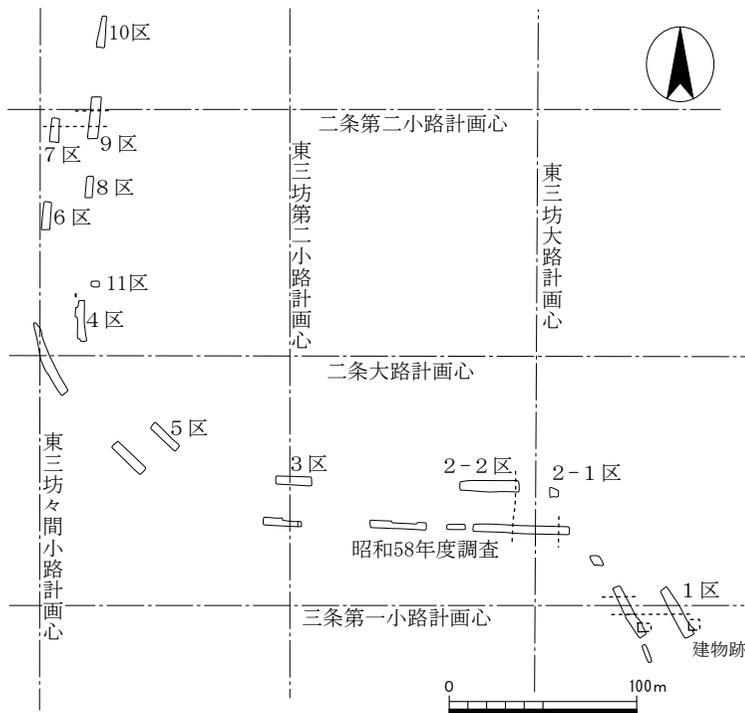


図2 調査区配置図(1:4000)

9区 二条第二小路推定地の河川左岸に設定した。ここでは右岸の7区で検出した長岡京期の溝が、同小路の側溝である可能性を考え予定より南へ調査区を延ばした。その結果7区で検出した東西溝延長上に溝を認め、更に北へ8.8mの地点でやはり

東西の長岡京期の溝を検出した。推定される二条第二小路より南にずれるが、二条第二小路の南北両側溝を検出した可能性が高い。また、弥生時代の溝1条を検出した。

10区 今回の調査対象地最北部に設定した。明確な長岡京期の遺構は認めることはできなかったが、それ以前の時代不明の落込を検出した。また、ここでは中世の溝がこれまでの東西方向に反し南北方向に造られ、条里坪境で溝の方向が変わることが判った。

11区 河川改修予定地に隣接しポンプ場が併設されるため調査を行った。ここでは中世の東西溝を数条検出したのみである。

この他、前記の東土川町南浦橋南東部河川敷の試掘では長岡京期の柱穴・古墳時代の溝を認めた。河川課を交えた協議の結果、次年度に発掘調査を実施する運びとなった。

東西の農道の拡幅に伴う試掘調査では、東三坊第二小路推定地を中心に農道南縁に沿って4箇所の特レンチを設定した。しかし、ここでも中世の東西溝は検出したものの、長岡京期や、それ以前の遺構は認めることができなかった。

出土した遺物は、整理箱にして10箱と少量で、かつ大部分が小片である。しかし、時代的には縄文時代晩期から室町時代と長期間にわたり、器種、器形とも多種・多様な土器・

陶器類が出土しており、当地付近が間断なく土地利用されていたことが考えられる。

**小結** 今回の調査で条坊に関する地点に設置した調査区のうち、二条第二小路推定地に設けた7・9区は新たなものであるが、1～4区は昨年度調査の成果の確認・補遺をなすものとして設定した。結果として1・2区では側溝を確認したが、3・4区ではそれを認めることができなかった。7・9区では東西溝2条を検出した。二条第二小路推定計画心から南に外れており、その存否は今後の調査に期待せねばならないが、ともあれこの2条の長岡京期溝の座標をあげておく。両溝心々間の中心座標は $X = -117,938.9$   $Y = -25,480$  を測る。

なお、1区では三条第一小路南側溝以南に南北2.4 m、東西1.8 mの柱間を測る建物の南西端を検出している。この建物の傾きは、昨年度の1区で検出した南北棟の建物と近似しており、同一の計画下に建てられたものと考えられる。

また7区で出土した縄文土器や2～5・8～10区で出土した弥生土器及び2区の弥生時代の石器・石器未製品により周辺における縄文時代、弥生時代の遺構が濃く残存する可能性が考えられる。

(鈴木 廣司・長宗 繁一)

注 「長岡京跡左京三条三・四坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和58年度 1985年



9区弥生時代溝



7区縄文時代土壺

### 31 久我東町遺跡 (図版 48～51)

**経過** この遺跡は昭和57年度の『京都市埋蔵文化財調査概要』で長岡京跡左京四条四坊として報告し、その中の中世集落跡を「久我東町遺跡」と名付けた。今回の調査地は上述した遺構を中心に設定した。試掘調査の段階では12～13世紀の遺構群を確認していたが、遺跡全体は南方の地域にも展開していることが予想された。

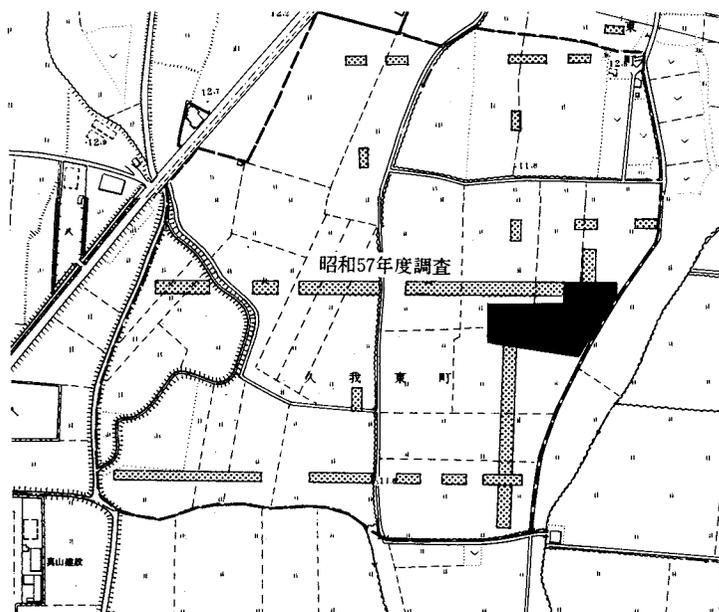


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構** 調査の結果、調査区北東部に先の試掘トレンチで検出した12～13世紀の建物を中心とした遺構群、南東部に試掘調査では確認できなかった14世紀前半の建物及びこれに伴う遺構群、更にこの上面に14世紀中期の墓域とこれに伴う遺構群をそれぞれ検出した。これら3つの遺構群の他に、14世紀の遺構群の北側を東西方向に走る12～14世紀の間に数回にわたり造り替えが認められる大小の遺構群と、調査区全域に散在する16世紀の火葬墓3基を検出した。火葬墓のうち南西隅で検出したSK19は保存状態がよく、これを遺構毎取上げ保存処理した。

12世紀の遺構群は、数回の建て替えが認められる建物を中心に、井戸 (SE143)、土壙 (SK159)、建物の東側で南北方向に検出した石敷溝 (SD102)、木棺墓 (SK98) などを検出した。建物の重複関係は複雑で素掘りの柱穴、掘形底部に石を据えたものなどが混用され明確な建物復元までは至っていないが、おおよそ南北2間×東西4間ないし5間の建物が造り替えられたものと考えられている。井戸、石敷溝は2時期の造り替えがあり、遺構群全体が2時期以上の変遷をしていることと一致している。

14世紀の遺構群は、数回の建て替えか改築がみられる建物を中心に、井戸（SE97・265）・溝・土壇などがある。この建物の柱穴群も複雑で明確な復元までには至っていないが、南北4間ないし5間、東西7間ないし8間の建物に付属屋が付くものと考えられる。この建物が廃絶した直後に跡地が墓域となる。建物に伴う土壇などとの区別が困難であるが、火葬墓（SK22）、木棺墓（SK98・303）、集石墓（SK43・46・74・79）、蔵骨器を持つ土壇（SK65・242）など墓本体と思われる遺構がある。このうち木棺墓（SK303）は、上層の段階で直角に折れ曲がるコーナーを持つ石列を検出しており、下層の木棺と合わせて墓域を形成していたと考えられる。また他の墓とは異なり建物の北東部の方向に離れた位置で検出したことなど考え合わせると、建物に伴う家墓と推定される。

その他、焼土、焼灰の堆積する土壇（SK39・41・54・59・62・63・75・85）、土器を多量に含む土壇（SK37・49・50・61・64・71）などの遺構を検出した。

上述した遺構は、重複や整地などが繰り返されたようで、検出が非常に困難な状況であったが、時期的には14世紀中葉頃の短期間のものであることが判る。東西に走る溝群は大きく分けて3時期あり、位置を少し違えているものの全体的には同一方向である。

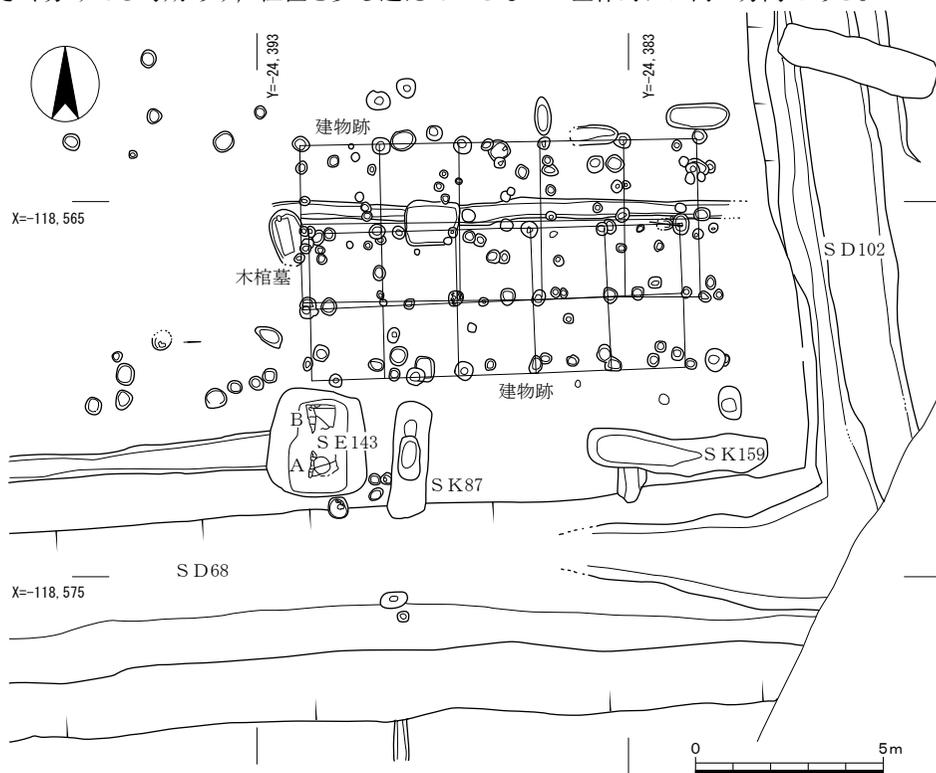


図2 平安時代後期遺構実測図(1:200)



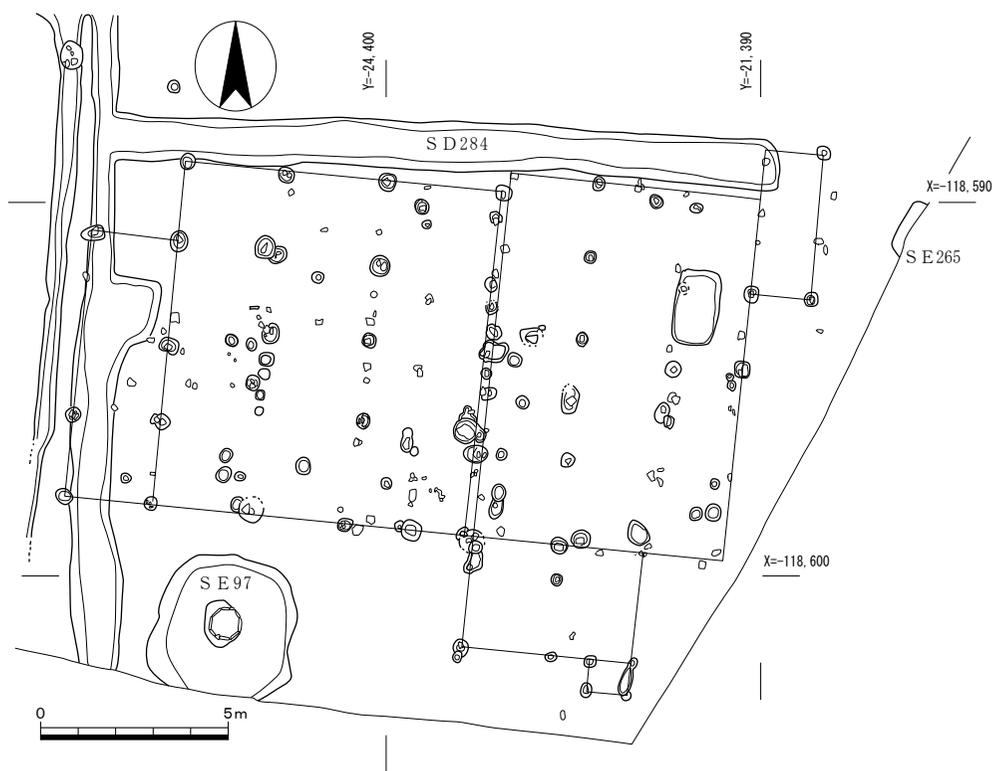


図4 室町時代建物実測図(1:200)

**遺物** 出土した遺物は、整理箱にして122箱である。内容は多量の土師器・瓦器と国産陶器類、輸入陶磁器及び若干量の瓦、木製品、金属製品、銭貨、石製品がある。

平安時代後期の遺物が出土する遺構は、SE143、S D 68・102、S K 87・159などがある。これらの内、SK159出土の一例(1～5)を図に示した。土師器皿(1・2)はやや深めの杯とも言えるもので、器壁が厚く良く焼き締まっている。瓦器皿(3)は、口縁部内外面にヘラミガキを施す。瓦器椀<sup>註</sup>(4)は、内面を密にヘラミガキ、外面は口縁部をナデ、以下底部にかけて丁寧なオサエで調整する。底部内面には、断面三角形の高台を貼り付ける。土師器羽釜(5)は口縁部が強く内側に傾く。口縁部内外面、齔部をナデ、体部をオサエで調整する。

室町時代の遺物は調査地のほぼ全域にわたり、また東南部の建物から墓にかけての遺構群より多量の土器が出土した。代表される遺構には、SE97、SD66、S K 37・46・49・50・61・62・64・71・231・284などがある。ここではSK71(6～13・22)、SK37(14

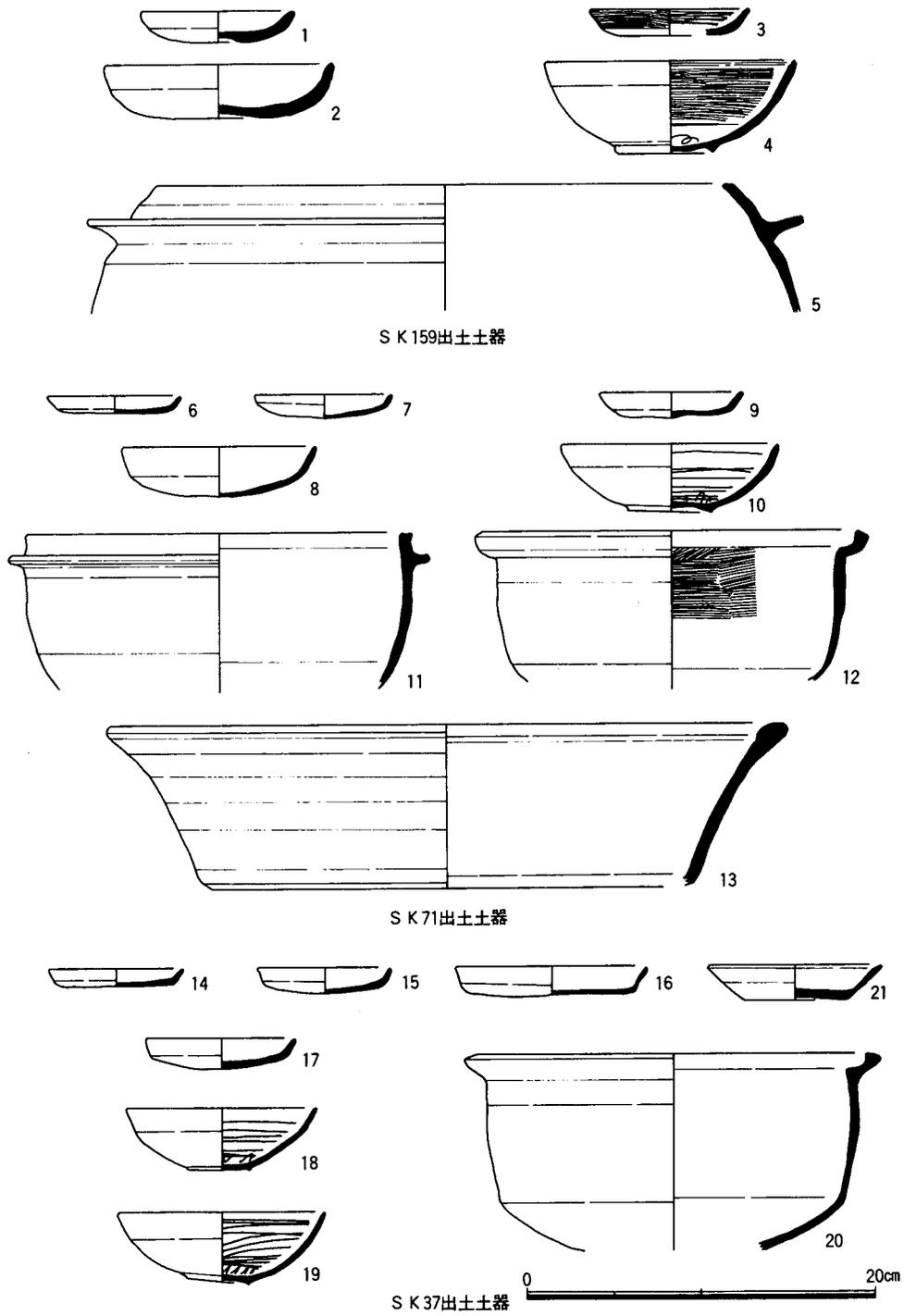


图4 出土遺物実測図 (1:4)

～21)の出土例を図5・図版51に示す。SK71出土の土師器皿(6～8)は、口径・器高ともに矮小化が認められ、調整も粗雑化がみられる。(8)は深めの皿である。他に浅いものも出土している。土師器皿は総体に器壁が薄くなっている。瓦器皿(9)は、土師器皿よりわずかに口径が大きい。また器表の黒色味は失われるものが多い。瓦器椀(10)にも口径・器高の矮小化、調整の粗雑化がみられる。内面のヘラミガキは太く、間隔も広い。瓦器の羽釜(11)・鍋(12)は口縁部内外面をナデ、外面は体部から底部をオサエで調整する。(12)は内面の上半にハケを施す。土師質盤(13)は、内面・口縁部をナデ、体部はオサエと粗いナデで調整する。底部外面にモミガラ痕が残る。(22)は須恵器の甕で、口縁部内外面をナデ、体部外面に平行叩きを施し、体部内面は当具による青海波文と粗いヘラケズリがみられる。

SK37出土の土師器皿(14～16)、瓦器皿(17)瓦器椀(18・19)は、SK71出土のものとは大差はない。ただし、SK37は(8)のタイプの土師器皿がみられなくなり、すべて図5の(16)となる。瓦器椀は、高台が(10)の断面三角状の低いものが減少し、一部が途切れた馬蹄形の粘土を付けて粗くナデる、簡略化されたものが多数を占めるようになっている。(18)はやや小型である。瓦器鍋(20)は口縁部が撥形に肥厚する。調整法は(12)と大差ないが、内面はナデのみである。白磁皿(21)は、口縁端部の釉が欠き取られているいわゆる口禿のタイプである。輸入陶磁器は、平安時代後期、室町時代ともに出土しているが少量である。

この遺跡では、土師器皿、瓦器椀からなる食器類が多数を占める。鍋・釜・鉢からなる調理器類がそれに次ぎ、壺・甕などの貯蔵器類は更に少ない。

**小結** 今回の発掘調査で検出した遺構は、中世集落跡の一端を知る上で貴重な成果と言えよう。当集落跡は、12世紀から14世紀にかけて存続し、14世紀中頃に廃絶してしまうことが判ってきた。文献資料で久我荘は12世紀頃から成立し以後存続してきたが、この遺跡が当荘園を構成する集落であることが明確になってきた。試掘調査で検出した南東部の遺構群も考え合わせ、今回の調査区南方部全域の調査が重要な対象地となってきた。また墓域と、墓域から独立して営まれる火葬墓や木棺墓の発見は、墓制の資料としての成果はもとより、家と墓、村と墓域の関係からも検討して行く必要がある。

(鈴木 廣司・長宗 繁一)

注 瓦器椀は、この他に口縁部外面に退化したヘラミガキを残すもの、口縁部内面上端に沈線を持たないものがある。底部内面の暗文は、ラセン文・鋸歯文などがある。

## VII その他の遺跡

### 32 上久世遺跡 (図版 52)

**経過** 調査は道路建設に伴うもので、幅 11 m、南北 360 m の範囲を対象として実施した。まず南側 220 m は 8 区に分けて全面調査を行った (I 期)。北側は対象とする遺跡の範囲からややずれているため、あらかじめ 9 箇所グリッド (3 × 3 m) を設定して試掘調査を行い、その結果を元に 2 箇所を発掘調査することにした (II 期)。

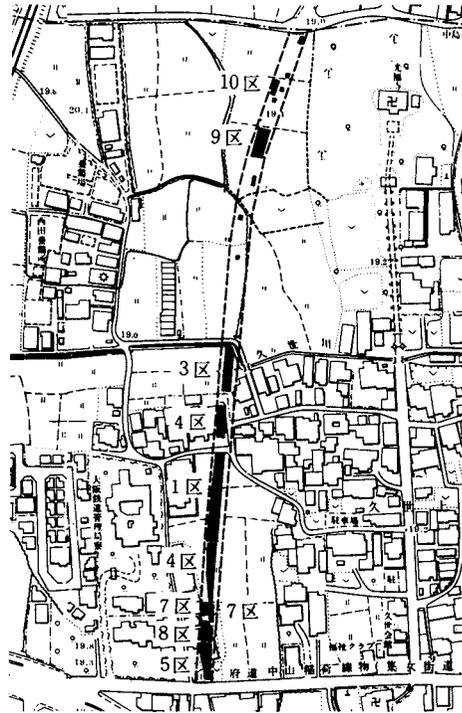
調査で上久世遺跡及び山城国乙訓郡の条里構造が明らかになるものと期待された。

**遺構・遺物** I 期調査区は大半が河川による攪乱を受けており、1・2・3・4・6・7 区では遺構は全く残存しておらず、5・8 区のみ遺構を検出した。

5・8 区の遺構面は上記した他の調査区より約 0.5 m 高く、南接する昭和 57 年度調査地での遺構面とほぼ同一である。ここの土層は盛土・旧耕作土の下層が茶褐色礫層 (無遺物層) であり、その面で柱穴・土壇・溝などを多数検出した。遺構は一部中世～近世のものがあるが、多くは弥生～古墳時代のものである。

II 期調査では 9・10 区の 2 箇所を発掘調査区とした。10 区は黄褐色砂礫層がベースで、灰色褐色砂泥層を埋土とする落込を検出したのみで、明確な遺構・遺物は検出していない。9 区では 8 × 19 m の調査区を設定した。層序は耕作土直下が茶褐色砂泥層で遺構面となる。検出した遺構は溝・土壇・井戸状遺構で、それらは北半部に集中している。南半部では礫層が耕作土直下で出ている部分もある。北西から南東にかけて検出した小溝はいずれも近世以降のものである。以下、主な遺構について報告する。

土壇 (SK21) 3.8 × 5.5 m の規模を持つ長方形の土壇である。土壇の埋土を除去した段階で土壇・井戸状遺構を検出した。この土壇は溝状遺構 (SD22) を切っている。



井戸状遺構（SK23）素掘りの長円形の掘形を持ち、長径は1.9 mである。埋土は上層から茶褐色泥砂層・暗灰色泥土層・黒灰色泥土層で、暗灰色泥土層から遺物の出土が多い。

溝状遺構（SD22）北東から南西にかけての溝で、その規模は幅3 m、深さ0.5 mである。埋土は4層に分層することができ、そのうち第2層から多くの遺物が出土した。

出土遺物は整理箱で26箱である。5・8区の弥生土器は小片で器形は不明である。古墳時代の土器は10区の溝状遺構・井戸状遺構で一括して多量に出土している。時期は庄内から布留式期に相当するもので、器形は甕・壺・高杯・器台などがある。河川からは須恵器・土師器が出土しているが小片が多い。須恵器には甕・甕・杯・壺などの器形がある。中世の土器には各種のものがあるが、河川から出土しているものが多く、大半が小片で磨滅している。

**小結** 今回の調査では調査地の北端部と南端部で遺構を検出したのみで、他ではいずれも河川による攪乱を受けていた。これは当調査と相前後して実施された公共下水道工事に伴う立会調査結果ともほぼ一致する。（第2章－15）

また遺構の存在する地点は若干高くなっており、本来の遺跡範囲はもっと広いと考えられるが、中世の河川によって失われたものであろう。5・8区で検出した弥生時代から古墳時代の遺構は、過去の調査で検出した弥生時代後期の住居などと関連するものと考えられ、「上久世遺跡」の一端をおさえることができたといえよう。調査地の西側に更に遺跡が広がっていることが推定される。9区で検出した古墳時代初頭の遺構は上久世遺跡が更に北へ広がるのか、あるいは別の遺跡として捉えることができるか問題となる。

なお、当調査で検出を目指した遺構のうち、条里制に関連する坪境溝などの検出を試みたが、先述の理由により全く確認できなかった。（久世 康博・上村 和直）

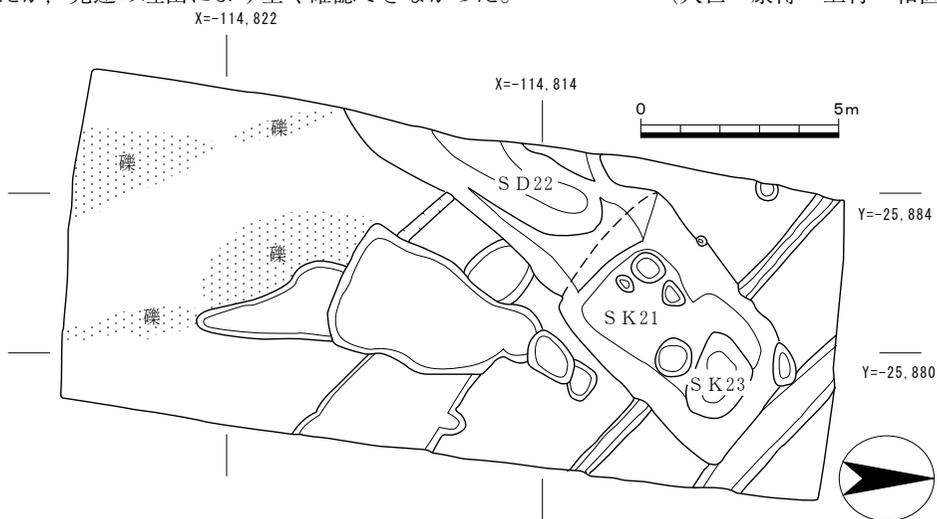
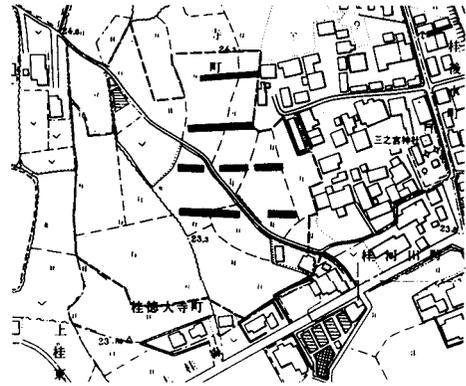


図2 10区遺構実測図(1:200)

### 33 桂徳大寺町遺跡（図版 53）

**経過** 調査は昭和 59 年 5 月 14 日～30 日まで分布調査を行い、その後 6 月 4 日～23 日まで試掘調査を行った。その結果 6 箇所南北方向の石積遺構を検出し、発掘調査に切り替えた。調査は 7 月 16 日～9 月 26 日まで実施した。



**遺構** 石積遺構 1～4 を検出した。石積遺構 1 は 4 筋の内、西端部にあたり、北東から南西方向に延びる。規模は 1 トレンチで東西幅約 4.2 m、高さ約 0.7 m、4-1 トレンチでは幅約 2 m、高さ 1 m である。石積遺構 2 は 1 と 3 に挟まれ、方向は 1 と同一である。規模は約 2.8 m、高さ 0.5 m である。石積遺構 1 と 2 の間隔は、ほぼ 18 m である。石積遺構 3 と 4 は 4-3 トレンチでしか検出できなかった。石積遺構 3 の規模は東西幅約 2 m、高さ 0.5 m である。2 との間隔は約 22 m である。石積遺構 4 の規模は東西幅約 1.2 m、高さ 0.4 m である。3 との間隔は、ほぼ 18 m である。石積遺構 1～4 は径 0.25～0.3 m の河原石が地山である粘土層、あるいは泥砂層上に積まれていたが、4-2 トレンチ及び試掘トレンチで検出した石積遺構 2 を除く石積みは、ほとんどが落石状態であった。

**遺物** 出土遺物は分布、試掘、発掘調査を合わせると、整理箱 11 箱であった。その内容について表に示した。全調査を通じて、出土遺物の傾向は調査方法が異なるにせよ、器種の細部に至るまで類似点がみられる。時代についても、室町時代後半のものが大半で、他に平安時代、鎌倉時代、江戸時代と続いており、同一の成果を得た。

**小結** 室町時代後期の石積遺構を 4 筋検出した。調査区西隣接地を旧流路が北西から南東に流れ、氾濫の影響を直接受けていたと推定され、正長二年（1429）八月の大洪水では上桂一帯の田、畑が完全に荒廃し、以後 12 年間も年貢米が徴収できなかったという記録が「東寺百合文書<sup>註</sup>」に残っている。また、同文書には調査地が中世において、徳大寺郷で妙法院領であると記されている。近世は京極家の領地として徳大寺村が形成された。

調査及び文献から石積遺構は、農業用水を桂川から引く機能と、氾濫から田畑を保護するために築造された堤防の機能を合わせ持っていたのであろう。 (加納 敬二)

注 「東寺百合文書」や函七六号

分 布 調 査	器種	土師器	須恵器	緑釉陶器	瓦器	青磁	白磁	陶器	磁器	瓦	不明	総数
	破片数	395	25	1	2	2	1	170	54	1	15	666
	比率	59%	4%	0.1%	0.3%	0.3%	0.1%	26%	8%	0.1%	2.1%	100%
試 掘 調 査	器種	土師器	須恵器	緑釉陶器	瓦器	青磁	白磁	陶器	磁器	瓦	不明	総数
	破片数	1546	70	2	32	9	2	36	3	14	0	1714
	比率	90%	4%	0.1%	2%	0.5%	0.1%	2.1%	0.2%	1%	0	100%
発 掘 調 査	器種	土師器	須恵器	黒色土器	緑釉陶器	灰釉陶器	瓦器	青磁	白磁	陶器	磁器	総数
	破片数	1905	100	1	7	1	35	28	13	19	2	2111
	比率	90%	5%	0.05%	0.3%	0.05%	1.6%	1.3%	0.61%	1%	0.09%	100%

表1 出土遺物破片数



4-1・2 トレンチ石積遺構1 立ち割り断面（南東から）

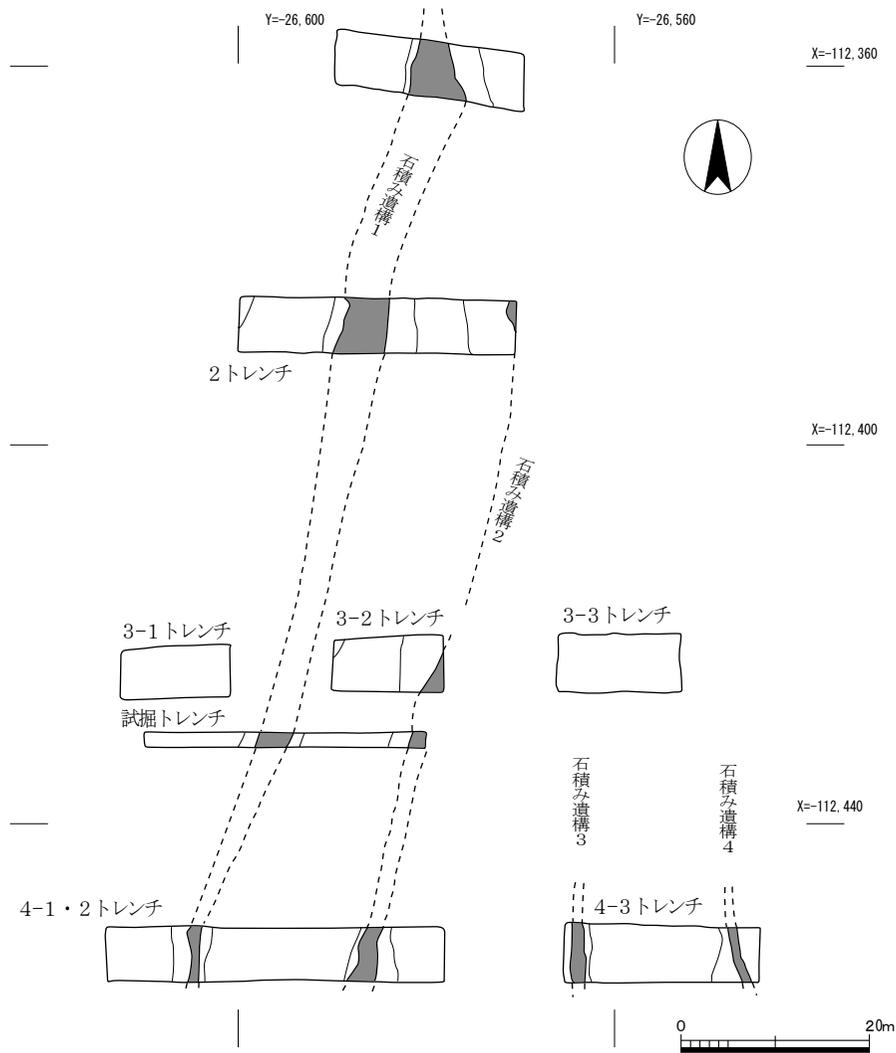


図2 遺構配置図(1:800)

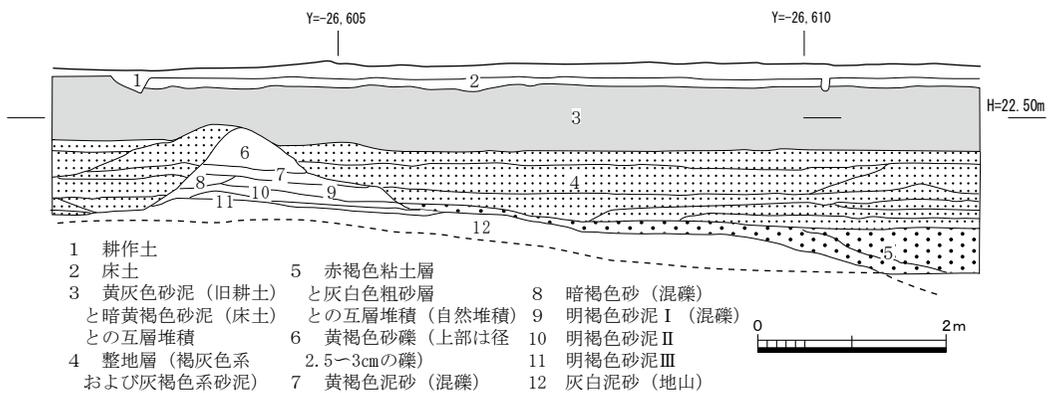


図3 4-1・2トレンチ南壁断面図(1:80)

### 34 松室遺跡 (図版 54 ~ 59)

**経過** 松室遺跡の発掘調査はⅠ期調査を、昭和58年11月16日から実施し、昭和59年3月31日を持って完了している。

Ⅰ期調査における成果を踏まえて昭和59年4月からⅡ期調査を開始し

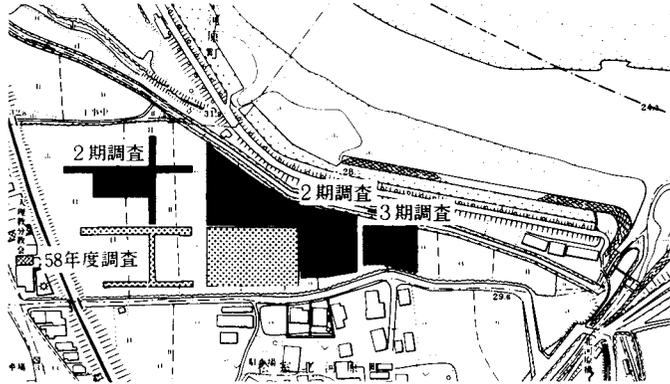


図1 調査位置図 (1:5000)

た。Ⅱ期調査はⅠ期調査段階で発生した周辺事情により、対象地東端部をⅢ期調査として実施するよう計画を若干修正した。また、遺跡の拡がりを確認するために幅4mのトレンチ調査を予定していた西部ブロック北部(中学校グラウンド予定地内)において、大溝(SD9)を追跡調査するため4トレンチの中央部を2トレンチ沿いに南に拡張し、新たにグリッド調査区を設定することとした。

Ⅱ期調査は、昭和59年8月20日を持って完了した。Ⅲ期調査は昭和59年8月6日のⅡ期調査終了前に調査を開始し、同年9月30日を持って完了した。Ⅲ期調査の完了を持って、桂中学校北分校建設予定地内における発掘調査はすべて終了した。

**遺構** Ⅱ・Ⅲ期の調査では、弥生時代中期、古墳時代前期～後期、古墳時代後期以降から中世の各時期の遺構を多数検出した。

弥生時代中期の遺構は、竪穴住居4棟(8～11号住所)、他に小建物の可能性がある方形の掘込(SX5)、溝(SD12)、土壙(SK13・14など)、ピット多数を検出している。これらの遺構からは畿内第Ⅳ様式を主とする弥生土器が出土している。その他にも弥生土器小片や、石鏃が出土する遺構も一定数検出しているが、これらも同時期の遺構とみられる。

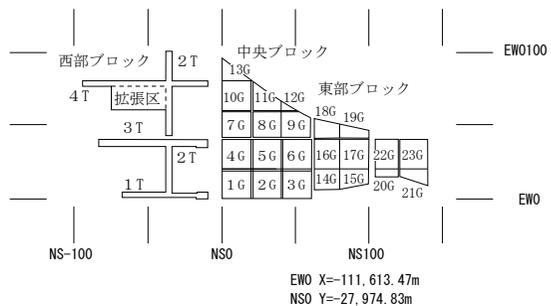


図2 トレンチ・グリッド配置図(1:5000)

弥生時代中期の遺構群は、中央ブロック西半部の川側微高地上で、微高地西肩沿いに展開している。Ⅰ期調査区でその一部を確認していた溝(SD12)はⅡ期調査区の中央ブロック北部でもその延長部を検出している。このSD12は、これら弥生時代の集落跡を構成する遺構群の東辺沿いに設置された溝とみられる。Ⅰ期調査で確認した溝(SD10)も、この集落に関連し、川側微高地西肩沿いに設置された溝であろう。

古墳時代の遺構は、布留式土器が出土する古墳時期前期のものと、須恵器が共伴する古墳時代後期の遺構群に大別できる。

古墳時代前期の遺構は、堅穴住居4棟(4～7号住居)、小数のピットなどを検出している。Ⅱ期調査区で検出した古墳時代前期の堅穴住居は、Ⅰ期調査区で検出した2号住居とは内部施設の様相が異なっているが、現時点では並存し、またほぼ同時に廃絶された堅穴住居群とみている。これら古墳時代の堅穴住居群を主とする集落跡は、前述の弥生時代の集落跡と重なるようにほぼ同地域に展開している。

古墳時代後期の遺構は、東部ブロック南西部で検出した4棟の掘立柱建物(SB 1～4)を始め、溝群(SD 2・3・5・13・20・27～30など)、ピット群(東部ブロック南半西部を中心とする)、土壙(SK16・17など)、不定形の掘込(SX 6など)など各種のものを多数検出している。これらの遺構以外にも、出土遺物が少なく確定はできないが配置や堆積土の類似性など別の要素からほぼ同時に機能しており、また、埋没したとみられる溝、ピットなども多数検出している。ピットには個別的には柱あたりの残るものもあり、柵列状に一定間隔で並ぶものも数条確認している。小建物や、前述の建物群に関連する柵列とみられる。掘立柱建物を含み周辺に密集するピット群や土壙などによって構成された古墳時代後期の集落跡は、その検出状況からみて、前述した弥生時代中期、古墳時代前期の集落跡とは大きく異なり、中心部は東部ブロックのやや南にあるとみられる。

古墳時代後期以降から中世の各時期の遺構は、拡張区を設けて追跡調査を実施したSD 9を始めそれに並走する溝(SD14)、川側微高地の西肩沿いを走る溝(SD 1・7)、Ⅲ期調査区で検出した溝(SD33・34)、掘立柱建物(SB 5・6)や、小溝群などの各種の遺構を数多く検出している。

SD 9は、今回検出した部分では幅約6.7 m、深さは最深部で山側の肩部から1.6 mを測る。断面形状は底部にやや丸みを持った逆台形状を呈している。堆積土は暗青灰色～暗茶灰色のシルト層が主であるが、部分的には砂礫層は砂層が互層堆積している。2・3トレンチ交差部で確認した部分に比べてやや規模が大きいが構造は共通しており、堆積土は

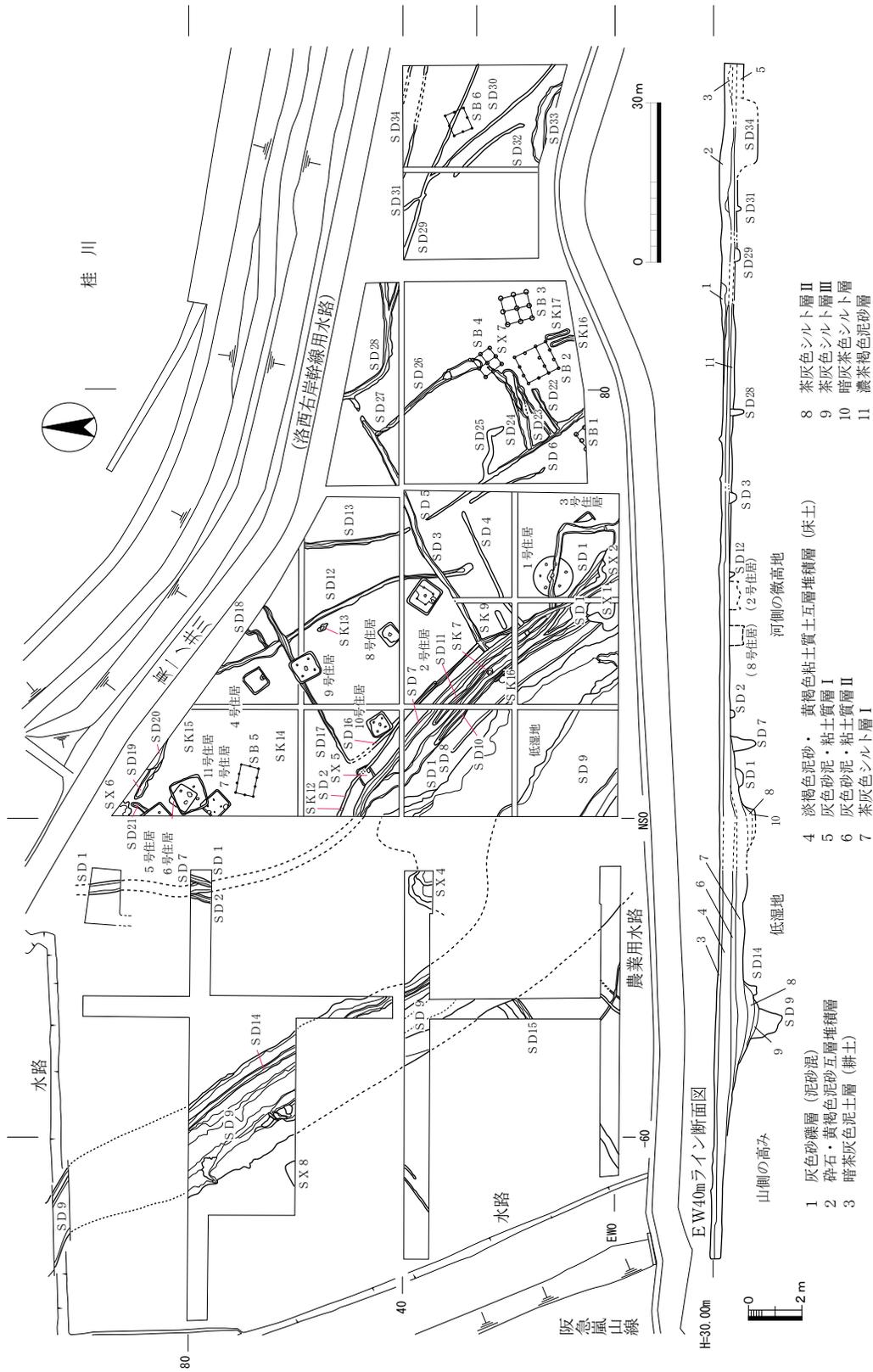


図3 遺構配置図(1:1200, 1:240)

連続したものである。

今回の拡張区北北西約 25 m の地点では先に実施した立会調査でこの S D 9 が、やや北西へ曲がるコーナー部を確認している。この部分では、幅約 6 m、深さ約 1 m を測る。断面形状、堆積状況は今回の検出部分とほぼ同様である。

この S D 9 の成立時期、機能、埋没過程、廃絶期などの問題については、I 期の概要報告<sup>注</sup>で示した理解を変えるような新たな事実は検出していない。本調査地点で検出した部分についても同様の理解をしている。S D 9 は調査範囲内では低湿地の山側高み沿いに立地し、その高みの傾斜面を切って造られたものである。古墳時代後期には溝として機能しており、その後、徐々にシルト層や砂・砂礫層で埋没し、その機能が失われて行ったものと考えられる。廃絶期は、低湿地上層に灰色砂泥粘質土層が全面に堆積した時期（中世）まで下る可能性が大きい。

S D 1・7 は川側微高地西肩沿いを走る溝である。S D 7 は、断面形状が底部の丸い逆台状を呈し、深さは 70cm 以上を測る。下層からは古墳時代後期、上層からは飛鳥時代の遺物が出土している。S D 1 は断面形状が浅い皿状を呈する。堆積土は、灰白色の砂質土層である。出土遺物は平安時代前期の土器類が主である。両溝とも集落もしくは、耕地に関連するものと考えられるが、今の所調査区内では対応するものを確認していない。

S D 33・34 は東部ブロックで検出している。SD34 は、出土遺物が少なく時期推定は難しいが、成立面や床土が混じる遺構堆積土層からみて近世以降に埋没した比較的新しい時期の溝である。SD34 は、規模・位置などから現在そのすぐ北側を東流する一ノ井東用水路の旧流路の可能性がある。SD33 の出土遺物は、中世の土器類を含む。性格については推測が困難であるが、調査地南辺を走る現在の村道の湾曲部に沿うように曲流している点を指摘しておく。

小溝群は、II・III 期の調査でも並行もしくは格子状を呈する様相で多数検出している。各ブロックで検出したものを合わせて東西溝 82 条、南北溝 129 条の計 211 条を検出している。検出範囲は、I 期調査同様に川側微高地と山側の高み上に限られており、低湿地と重なる地区では 1 条も検出していない。出土遺物は、今回検出した分については平安時代後期～鎌倉時代の土器が少量出土するものが多い。また調査後の整理作業によって、東西・南北のものがそれぞれ数条の単位となって、群単位で微高地状に展開していることが明かとなった。

なお II・III 期調査で確認した基本層位は、I 期調査で確認した堆積状況と大きく変わる

ものではなく、今回はその詳細を省いた。

**遺物** 弥生時代の土器・石器、古墳時代～飛鳥時代の土師器・須恵器と少数の土製品、鉄製品、石製品及び奈良時代以後の土師器・黒色土器・須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器などの遺物が出土している。

遺物出土量は各種類のものともに、I期調査同様に多くはない。個別に特記するようなものほとんど出土していないが、西部ブロック拡張区で検出した、SD9下層の暗茶色シルト層から出土した鉄製のU字形鋤先は注目すべきものの一つである。同層及び同じく下層に位置する他の堆積土層からは、少量ではあるが古墳時代後期の須恵器杯身、土師器甕片などが出土している。このU字形の鋤先も古墳時代後期の遺物といえるだろう。U字形鋤先は古墳時代に入って普及し、同時代における大規模土木工事を可能にした有力な道具の一つとみられているものである。SD9から出土したことは、象徴的意味を持つといえる。また京都盆地内でのU字形鋤先の出土例は極めて少なく、京都市埋蔵文化財研究所が検出した資料では最も古い時期に位置する。その意味でも貴重な資料である。

弥生時代の土器類は、8～11号住居、SK13・14などから一定量まとまって出土している。これらの土器類は、第IV様式に属するものが中心となっている。

古墳時代前期の土師器は4～7号住居などから一定量まとまって出土している。これらの土師器は、いわゆる「布留式」土器である。今回の調査で出土したものにも須恵器の共伴例はない。

I期分の概要報告<sup>註</sup>でも記したが両期の一括出土資料の例は、京都盆地内では極めて少ないといえる。全体に出土量は多くないが、本遺跡における一連の調査において明確な遺構から出土した一括資料の価値は極めて高い。

**小結** 今後の整理、研究課題になると考えている点を2・3記してまとめにかえる。

本遺跡で検出した各時期の集落跡を理解して行く上では、集落の基盤となっている川側微高地と桂川の河道との関連が問題となるだろう。現状をみれば、この微高地は、桂川の攻撃面側に位置しており、北側は常に桂川に削り取られる状況といえる。桂川の旧河道復元などの作業を通し、微高地の原形を復元する必要があるだろう。

弥生時代中期の集落跡は、桂川西岸に展開している弥生時代の遺構群との関連を明らかにする必要がある。本遺跡は今まで確認されている桂川西岸の遺跡群の中で、最北端に位置する下津林遺跡（京都市西京区）の更に北方約3kmに位置する。下津林遺跡は弥生時代後期～古墳時代初頭の遺跡でその南方に位置する上久世遺跡、中久世遺跡などとグルー

ピングされる。この遺跡群は中久世遺跡を中核（母村）とし、旧羽束師川流域を生活基盤とするグループとみられている。本遺跡の集落は、このグループとのダイレクトな関連も想定できるが短絡的な理解と結論は危険である。出土遺物を含む詳細な比較検証作業が要求される。

古墳時代の集落跡は、前述の弥生時代中期の集落跡とは断絶しており、古墳時代前期に入って新たにこの地に形成された集落と言える。古墳時代の集落跡は堅穴住居で構成された前期の集落跡と、中心地域が東南方向へ移動している掘立柱建物群によって形成されている後期の集落跡を確認している。この古墳時代の集落跡については、変遷をどのように理解するかが重要な問題である。また、その時代と葛野という地域性からみて、秦氏との関連を位置付ける作業が要求されるだろう。この点は後述する灌漑用水路とみている大溝に対する理解と位置付けとも関係しており、極めて重要な課題と言える。葛野への秦氏の入植時期は、文献資料やこの地域の首長墳墓の成立及びその展開についての研究などから5世紀後半代とするみ方が有力である。

SD9は、秦氏が古墳時代に現桂川の渡月橋付近に構築したとされる「葛野大堰」から分流された灌漑用水路の1本にあたりと考えている溝である。4箇所調査地点において確認している。先にも記しているが、古墳時代後期には機能しており、完全な埋没は鎌倉時代まで下る可能性が大きい。このSD9については、基本的な問題である人造の構築物とする点について、更に他の角度から検証を加えるべきであると考えている。その上で灌漑用水路としての能力的側面を明らかにし、灌漑流域面積などについて考えて行く必要があるだろう。

現在、桂川西岸北半部一帯の耕作地は、洛西幹線用水路網によって灌漑されている。この用水路の主水源は、嵐山の渡月橋のすぐ南に位置する取水口から取り入れられる桂川の流水である。用水路の本線は、嵐山の取水口を起点とし、嵐山、松尾を通り、松室で本調査地の北辺を流れ、その南の西芳寺川河道下を暗渠の立体交差で抜けた後、山田、桂以南の地域へ向う。この洛西幹線用水路の歴史は、中世まで遡るがそれ以前については明らかではない。この用水路網の古代以前の歴史が、SD9を手懸かりにして明らかになれば、秦氏による葛野開発の実像の一端が鮮明に把握し得るであろう。

（小森 俊寛・原山 充志 平安京調査会）

注 「松室遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和58年 1985年

## 35 音戸山古墳群

**経過** 昭和58年度に実施した発掘調査は、音戸山3～5号墳を対象としたが、同時に行った周辺の地形測量でその西側丘陵斜面で新たに3基の古墳を発見し、これを7・8号墳と名付けた。この両墳が造成小路によって破壊されることになり、事前の発掘調査を実施した。調査は昭和59年10月中旬より開始し、翌年1月に終了した。

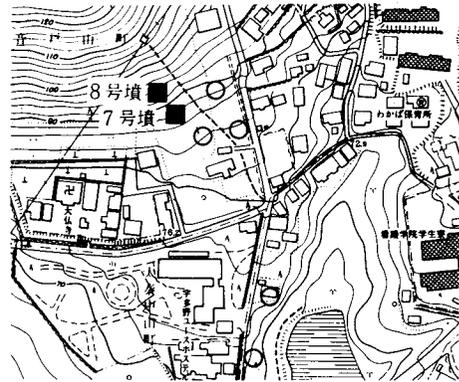


図1 調査位置図(1:5000)

**遺構・遺物** 2基の古墳とも墳丘は既に削平されて顕著な高みを持たないが、前方を除く3方に周溝が廻る方形を呈している。墳丘基底面に比して幅の広い周溝を持ち、西側の周溝が若干外側にひらいている。7号墳の内部主体は完全に破壊されており、石材の抜き取り穴も検出できず石室の形態・規模は不明である。ただ、開口部の西側に外区列石と思われる石を2個検出した。8号分の内部主体は、現存した基底石及び抜き取り穴から全長4.8m、幅1.2mの小型無軸の横穴式石室と復元することができた。開口部の西側で6個、東側で4個の外区列石を検出した。その他、7号分の開口部の東南隅で平安時代の土壌を検出した。直径1.2m、深さ0.45mを測り、埋土中から42枚の承和昌宝が出土した。

出土した遺物は、石室がほぼ完全に破壊されていたため、元位置をとどめるものはない。須恵器の杯・蓋・壺・高杯、土師器甕などがあり、7世紀の第一四半期から第二四半期の所産だと思われる。また、8号墳からは7世紀の後半以降に再利用された時に埋められた須恵器の台付き長頸壺が出土している。

**小結** 音戸山古墳群は、無軸の横穴式石室を主体とした古墳群で、築造年代は7世紀の第一四半期～第二四半期にかけての時期である。このような7世紀に築造された古墳群は、京都市内では山科区の旭山古墳群と伏見区の醍醐古墳群が知られるに過ぎなかったが、古墳群が最も密集する嵯峨野地域でも終末期に属する古墳群の存在を明らかにしたことは、山城地方における古墳時代の終末の様相を理解する上で重要である。

(木下 保明・丸川 義広)

『御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概報』昭和59年度 1985年報告

## 36 音戸山古墳群西支群

**経過** 支群は8基の円墳からなる古墳群である。昭和59年に1号墳が樹木の移転に伴う重機掘削を受け、石材が散乱するという事態になった。このため土地所有者と協議を行い、急遽発掘調査を実施した。また2号墳は墳丘頂上付近に天井石が露出し、一部空洞部も確認されたため、遺跡の保存を前提とした調査を実施した。期間は昭和59年11月と60年3月の約1月間である。

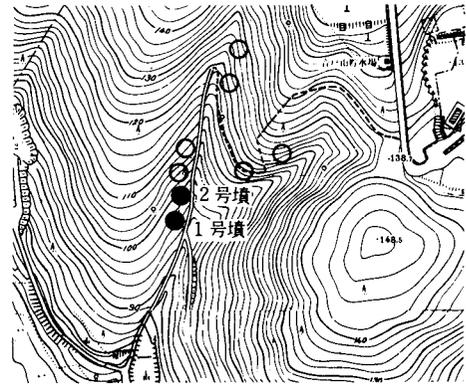


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構・遺物** 1号墳は支群中最南端に位置する。墳丘北側の2号墳と接する周溝を検出したのみで、正確な寸法は不明であるが、過去の踏査記録や地形から判断すると直径7mほどの円墳と考えられる。内部構造は横穴式石室で東に開口している。石室の大半が削られており全容は不明であるが、残存する石室の全長は約1mで、幅は奥壁付近で0.8mを測る。

石室高は奥壁の4段積みが現状では最も高く、床面から0.55mを測る。

出土した遺物はすべて石室内のものである。そのうち、古墳時代のものは須恵器6点(杯2・蓋2・壺2)と紡錘車1点であり、他に古墳時代以前の石鏃が1点出土している。

2号墳の現状での墳丘規模は直径8.5m、墳丘高2.5mを測る。同じ並びにある4基の古墳の中では最も良好に墳丘形態をとどめている。内部構造は無軸の横穴式石室で東南東方向に開口している。保存を前提とした調査のため床面の確認は横断主軸に沿う幅10cmのトレンチにとどめた。石室規模は全長5.5m、幅は奥壁で1.3m、開口部付近で0.7mを測る。横断面で確認した床面から測ると天井石までの高さは約1.8mを測る。出土遺物は床面の検出を一部にとどめたため、須恵器2点(杯1・蓋1)に止まった。

**小結** 音戸山西支群は御堂ヶ池古墳群と音戸山古墳群のほぼ中間にみられる狭溢な谷間に立地する。現在まで8基の円墳を確認しているが、その分布については今後精査を要する地区である。出土した須恵器からみると、1号墳は6世紀後半頃に位置付けられ、2号墳は7世紀前葉と考えられるが、石室を未完掘のため、時期の異なる遺物が出土する可能性もある。

(北田 栄造 京都市埋蔵文化財調査センター)

『御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概要』昭和60年度 1986年報告

### 37 御堂ヶ池古墳群

**経過** 古墳群は26基の円墳から成っており、昭和48年3月にゴルフ練習場造成工事に先立ち、20号墳の発掘調査を実施した。

その後工事は中断され20号墳は地下に埋没状態で保存されていた。近年造成工事が再開され、同じ敷地内にある21・26号墳の発掘調査を実施することになった。期間は昭和59年11月～60年1月までの約3月間であった。

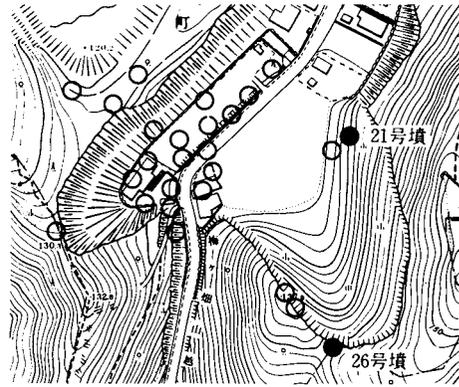


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構・遺物** 21号墳は20号墳の後方斜面に立地し、直径約16mの円墳である。内部主体は両軸の横穴式石室で、西北西の方向に開口している。石室規模は全長8.3m、玄室長3.5m、幅2.1mを測る。羨道部の幅は開口部寄りで0.9m、最大幅は玄室寄りにあり1.25mを測る。平面規模は、本古墳群内での既調査の石室と比較した場合、最大規模を持つ1号墳に次ぐ。ただし、石室の遺存状態は悪く、最下段ないし2段目の石材までが残る。

出土遺物は石室内から古墳時代の須恵器5点(杯2点・蓋3点)、鉄鎌3本、耳環1個があり、それ以外に墳丘斜面から平安時代の土師器皿2点が出土している。

26号墳は直径約11mの円墳である。20・21号墳の南側の南北に長い尾根と、そこから延びる東西の短い尾根のくびれ部に位置している。墳丘の北半分は調査前に削り取られ、全容を明らかにできなかった。内部主体は、無軸の横穴式石室でほぼ東に開口している。規模は残存長3.5m、幅約1mである。床面の敷石はほぼ全面にみられるが、密度は疎い。遺物はなかったが、調査前の造成工事で出土したと思われる須恵器蓋1点を石室前面で採集した。

**小結** 今回調査を行った21・26号墳は、出土遺物でみるかぎりでは7世紀前葉に位置付けられるが、横穴式石室の形態としては最も退化したものとみられる無軸の石室が多くなるこの時期に、21号墳のような比較的整った両軸の石室を内部主体とする古墳が築造されるという現象は興味深いことである。

(北田 栄造 京都市埋蔵文化財調査センター)

『御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概報』昭和60年度 1986年報告

## 38 醍醐古墳群

**経過** 醍醐耳塚古墳（1号古墳）を中心とする醍醐古墳群が、周辺の開発に伴い未調査のまま破壊される危険があり、国庫補助事業として発掘調査を実施した。

調査の対象となった古墳は、西端の13・20号墳、中央部南東斜面に立地する3・4・8～12・15～19号墳の計14基である。

**遺構・遺物** 墳丘が確認できたものは方形を呈している。斜面の築造のため、後方に溝を設けその両端にほぼ直角に溝を取り付けることで方形の区画を得る。また、比較的急斜面に築造されているため平面形は両側が長い長方形を呈し、あまり盛土がなくても斜面下より墳丘を望むと高く感じられる。

内部主体には、両袖の横穴式石室・片袖の横穴式石室・無袖の横穴式石室・小石室があるが、小石室を除けばいずれも玄室部の長さに大きな相違はない。また、棺台として使用された石の配置、遺物の出土状況から2体が石室主軸方向に合葬されたと思われる11号墳を除いた古墳は単葬墓と考えられる。

次に、墳丘の傾きと石室主軸方向にずれを生じる古墳が多く、著しいものは墳丘の対角線上に石室が納まるものがある。これは、比較的急斜面の限られた区画内に石室を納めなければならないからで、斜面の緩やかな地点に造られている13・20号墳は墳丘の傾きと石室主軸方向はほぼ平行である。

石室の副葬品は須恵器が中心で他に土師器、鏃・鉞・刀子などの鉄製品、金・銀環などがある。須恵器の器形は豊富で蓋杯・高杯・平瓶・甗・器台・無頸壺・短頸壺・台付き長頸壺、甕がある。土器には時期差が認められず、7世紀の第一四半期の時期が与えられる。

**小結** 醍醐古墳群は方墳を主体とした古墳群で、内部主体は横穴式石室のすべての形態がある。被葬者は基本的には一人で、築造年代は7世紀の第一四半期で各古墳間の時期差はほとんどない。本古墳群とよく似た構造を持つものと同じ山科区の旭山古墳群が知られているが、本古墳群の方が内部主体は大型で種類も豊富で、石室内に副葬される品物の量・種類も多い。

（木下 保明・丸川 義広）

『醍醐古墳群発掘調査概報』昭和60年度 1985年報告

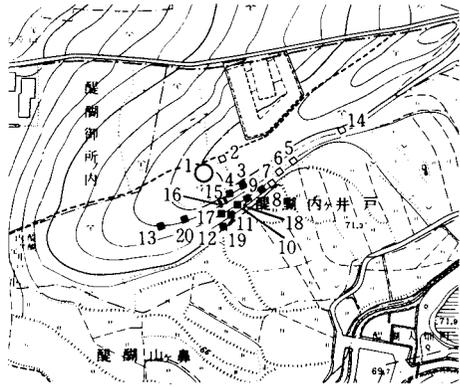


図1 調査位置図 (1:5000)

### 39 日野谷寺町遺跡 (図版 60～63)

**経過** 京都府伏見区日野谷寺町に所在する新発見の遺跡である。当地の南 500 m に日野法界寺境内遺跡 (平安～室町時代)、北西約 300 m に栢ノ森遺跡 (平安～鎌倉時代) が知られているだけで、遺跡の空白地であった。当地は音羽山から醍醐山を経て天下峰へ至る山科盆地東側の山系から西に延びる丘陵の末端扇状地に立地する。この地に市立醍醐中学南分校が新設されることとなり、周知の遺跡外ではあったが、遺跡の有無を確認するため昭和 59 年 7 月 6 日～30 日まで、試掘調査を実施した。

中学校建設予定地は約 16000㎡ある。現況は、敷地の南側中央部から北西に向けて用水路が流れ、その東及び北側の一部が茶畠、北辺が竹藪、用水路の南西側が水田として利用されていた。茶畠は南東から北西に向けて比高差約 5 m の急斜面を呈しており、水田は東側と西側で比高差約 4 m の 5 枚からなる段々畠である。

試掘調査は対象地のうち水田地区 8 箇所、茶畠地区 14 箇所のテストピット約 580㎡を実施した。その結果、水田地区のテストピットすべてから、溝・土壇・柱穴・集石など 60 以上の遺構と、縄文土器・奈良～室町時代までの土師器・須恵器などの遺物を確認、茶畠地区においても飛鳥～室町時代の遺物を発見し、遺構の存在が推定された。この試掘調査の結果、縄文～室町時代に至る複合遺跡であることが明らかとなり、当該地が「日野谷寺町遺跡」として認知された。



図 1 調査地位置図 (1:5000)

発掘調査は昭和59年9月3日～翌年の3月12日まで実施、総調査面積は約6000㎡である。調査は茶臼地区をA区、水田地区をB区とし、A区はトレンチにより遺構の分布範囲の確認を初期に実施、遺構・遺物の確認されなかった北側地区を排土置場として、新たに調査区(2130㎡)を設定した。またB区はほぼ全面(3410㎡)の調査を実施した。

**遺構・遺物** A・B区ではまったく異なった層序をしている。A区の基本層序は、約0.2mの表土層下に調査区西端で0.6m、東側で2.5mの層厚で淡黄灰色層が堆積し、以下淡茶灰色泥土層(0.1m)、赤褐色砂礫層の順に堆積する。淡茶灰色泥土層は室町時代の遺物包含層であり、赤褐色砂礫層は無遺物層で遺構のベースとなる層である。また調査区北東側では部分的に飛鳥時代の遺物を包含する黄灰色泥土層が赤褐色砂礫層の上位に堆積する。

B区の基本層序は耕作土・床土(約0.2m)の下に暗灰褐色泥土層が東側で薄く、西側で厚く堆積し、以下暗黄褐色砂質泥土層・暗赤褐色泥土層となる。暗灰褐色泥土層は縄文時代の遺物包含層で、暗黄褐色砂質泥土層・暗赤褐色泥土層は無遺物層である。また調査区西側には部分的に奈良時代・平安時代の遺物を包含する暗褐色泥土層が堆積している。奈良時代以降の遺構は暗灰褐色泥土層を切り込み、また縄文時代の遺構は暗黄褐色砂質泥土層・暗赤褐色泥土層を切り込んでいる。

検出された主な遺構には、縄文時代の石囲炉・焼土壇・土壇、飛鳥～奈良時代の土壇・掘立柱建物、平安時代の集石・土壇、平安時代後期～鎌倉時代にかけての建物・石組井戸・柵列・集石墓、室町時代の流路などがある。遺物は各遺構・包含層から縄文土器・石器、飛鳥時代以降の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・輸入陶磁器・瓦などで、整理箱に82箱出土している。また、縄文時代の遺構と遺物は、A区では検出されず、B区のみで発見している。

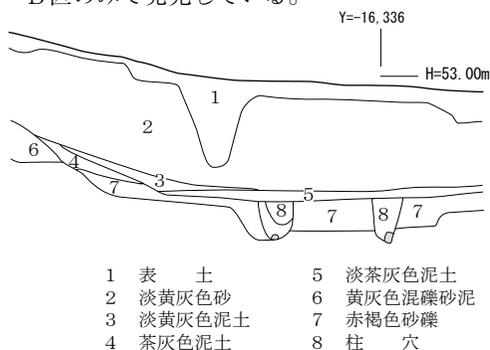


図2 A区断面模式図(1:100)

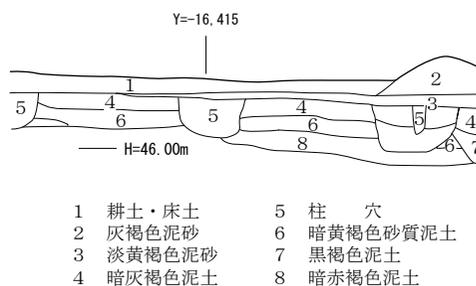


図3 B区断面模式図(1:100)

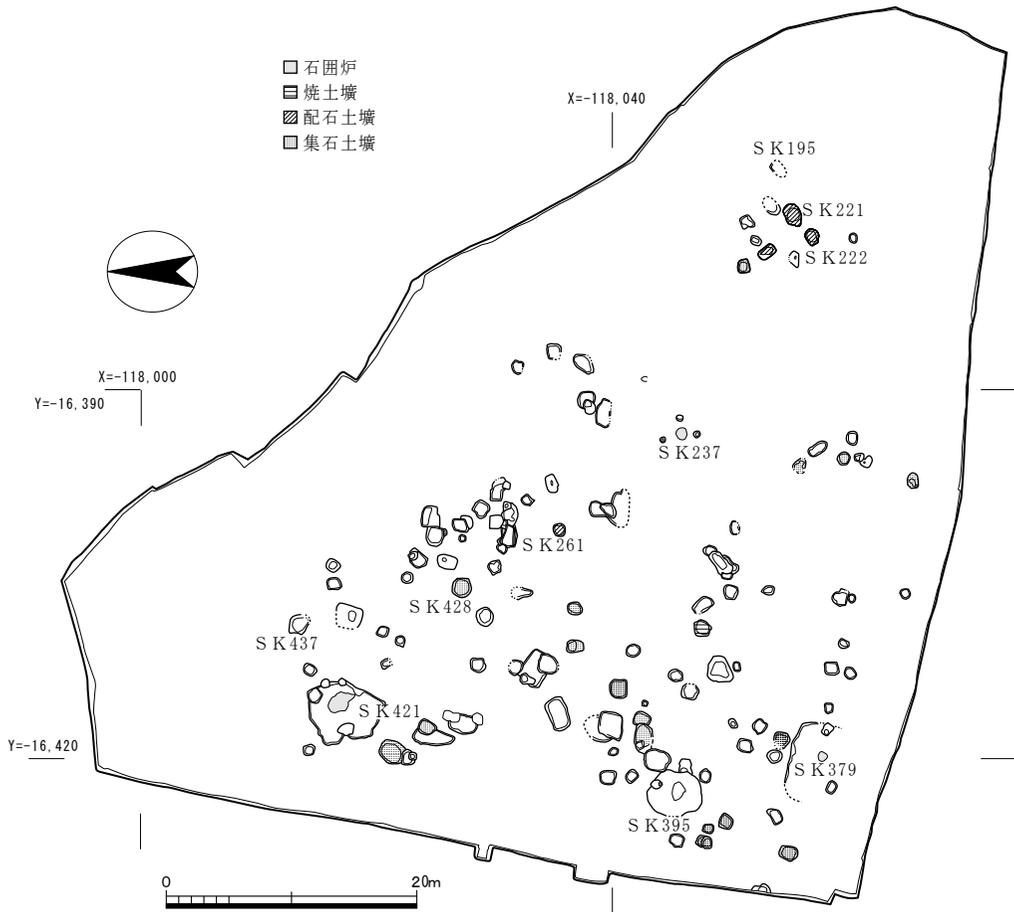


図4 B区縄文遺構配置図

縄文時代の遺構と遺物 発見された縄文時代の遺構は石囲炉・焼土壙・土壙である。

石囲炉は3基検出した。竪穴住居に伴う炉と思われるが、3基ともに床面・壁・壁溝などの竪穴住居としての施設は確認できなかった。

SK237は短径0.2m、長径0.3m前後の不定形な河原石を、一辺0.3～0.4mの方形に石組みしている。掘形は径約0.8mで石囲炉の深さ約0.2mであり、底部に薄い焼土層が堆積している。この石囲炉から半径1.4mの地点より柱穴と考えられるピット3箇所を検出したが、炉との関係は明らかではない。この他、SK379・SK421の2基の石囲炉がある。共に径約4mの不定形な平面形を呈する落込の中心近くで検出した。柱穴・壁溝などは確認できず、落込の埋土中には拳大から人頭大の河原石が多量に混入していた。

SK237は後期初頭、SK379、SK421は共に中期末に位置付けられる。

焼土壙SK04は径約1.4mの円形を呈し、深さ約0.3mある。埋土中に多量の炭・焼土が混入し、壁面は強く焼け締まっている。中期末から後期初頭である。

土壙は116基検出した。このうち素掘りの土壙が大半を占めるが、人頭大またはそれ以上の大きさの河原石を配した土壙、拳大の小礫を多量に混入する土壙もある。

SK222は長軸1.37m、短軸1.08m、深さ0.3mの円形を呈する掘形で、土壙上部に長径0.6m、短径0.3m、厚さ0.1～0.2mの扁平な河原石を配置している。土壙底部からは深鉢1個体が出土しており、土壙墓と思われる。

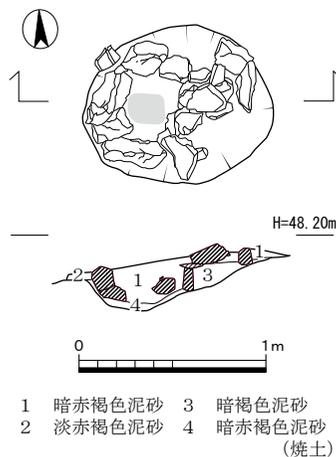


図5 SK237遺構実測図(1:40)

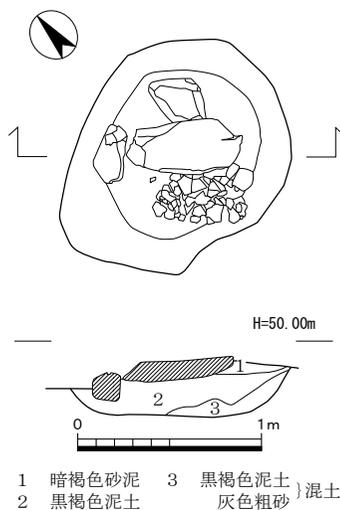


図6 SK222遺構実測図(1:40)

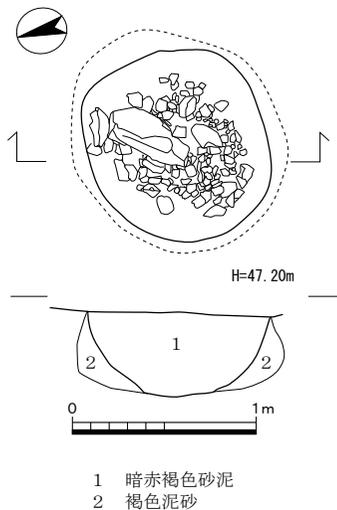


図7 SK261遺構実測図(1:40)

SK261は径約1m、深さ約0.5mの掘形を持つ円形の土壙で、土壙断面は袋状を呈している。土壙中位に長軸0.6m、短軸0.25m、厚さ0.2mの河原石があり、その下層には多量の小礫と土器片が混入していた。

出土遺物は各遺構及び暗灰褐色泥土層から多量に出土している。深鉢・浅鉢・注口土器などの土器類と、石鏃・石槍・凹石・磨石・石皿などの石器類である。石器類は土器に比べて極端に少ない。土壙出土の土器は、中期終末の北白川C式～後期初頭の中津式併行の時期に限定される。この他の時期では、SK221より1点であるが、中期初頭の船元I式が出土しており、また包含層である暗灰褐色泥砂層より、注口土器など北白川上層式が、調査区南に堆積する茶褐色混礫泥土層から晩期志賀里IV・V式の土器が少量出土している。

SK395より分胴型を呈する土偶が1点出土した。最大長7.8cm、厚さ2.3cmで乳房部は剥離している。頭部側面には1条の浅く細い溝が縦にある。裏面中央には

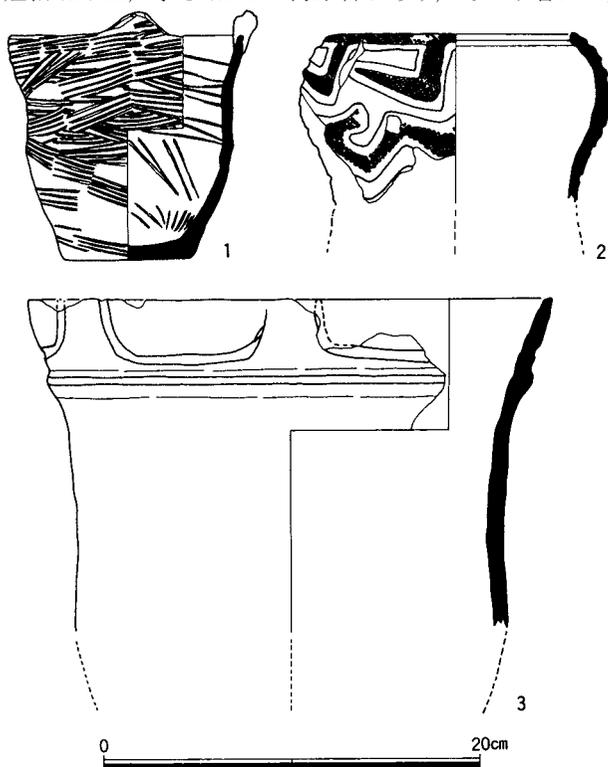


図8 遺物実測図 (1 SK437, 2・3 SK428)

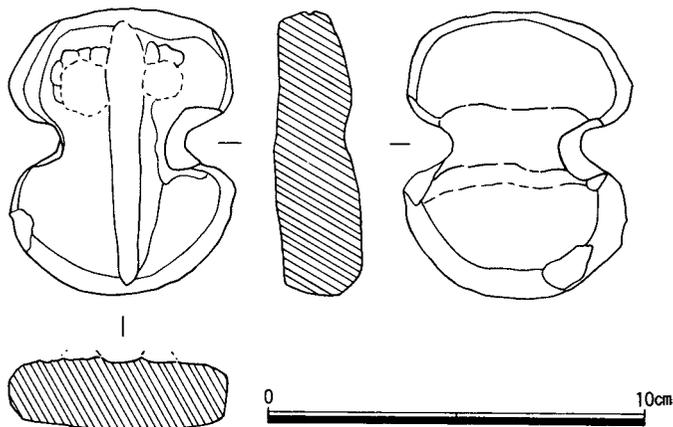


図9 土偶実測図 (1:2)



图 10 SK 428 出土遺物拓影・実測図 (1:3)

横方向に指オサエにより凹みが施される。愛知県八王子貝塚出土例などと同形式のものであるが、伴出遺物は中期末から後期初頭の中津式までであり、時期の比定は詳細な土器の検討を要す。

出土遺物は未整理のため本報告ではSK428出土の有紋土器とSK437出土の完形条痕文鉢型土器を図示した。

飛鳥～奈良時代の遺構と遺物 A区で飛鳥時代の土壙と遺物包含層を検出した。土壙は長軸0.74m、短軸0.53mの掘形で、土師器壺に須恵器杯身を蓋とした蔵骨器が埋納されていた。土師器壺からは多量の骨片を検出した。

B区では掘立柱建物・溝・土壙などを発見した。掘立柱建物は11棟検出し、SB145・SB466が2間×2間で、他の9棟は2間×3間の規模を持ち、東西建物4棟、南北建物5棟である。これらの建物の時期は、出土遺物の検討を加えていないため確定できないが、柱穴掘

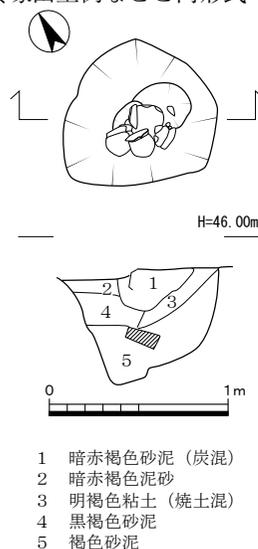


図11 SK236遺構実測図(1:40)

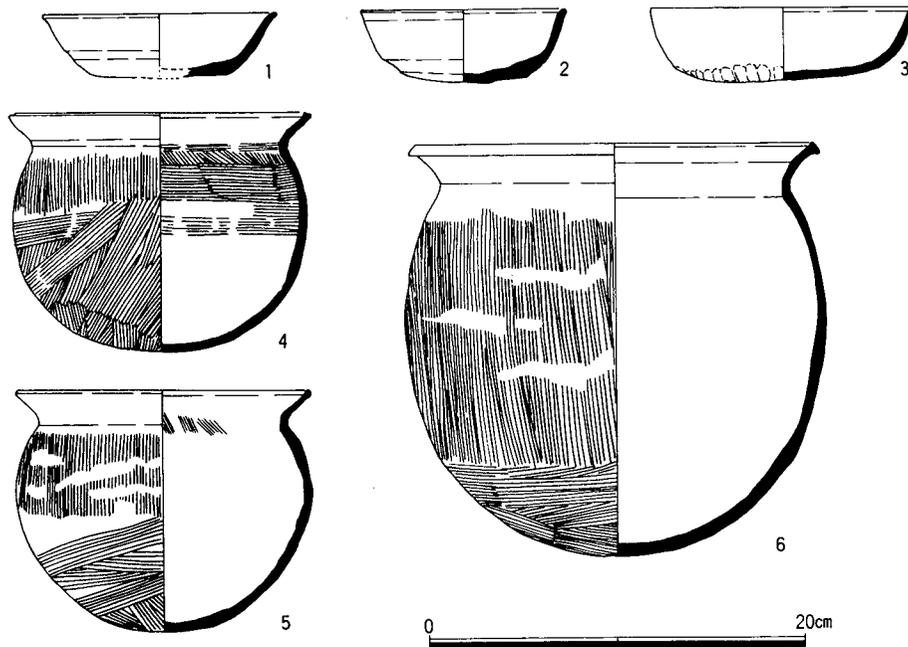


図12 SK236出土遺物実測図(1・2須恵器 3～6土師器)(1:4)

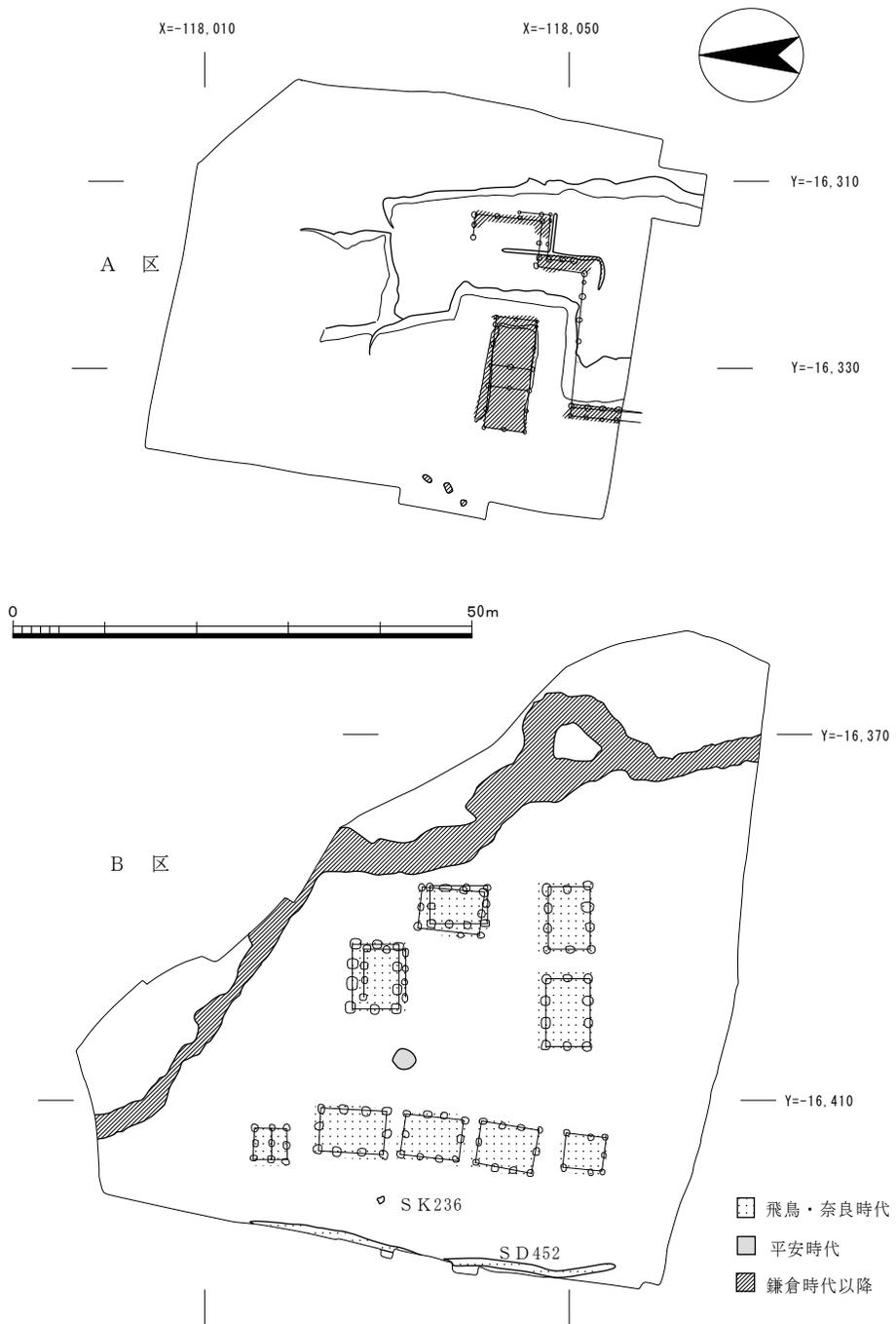


図13 飛鳥～鎌倉時代主要遺構配置図(1:800)

形出土の墨書土器などから奈良時代と考えている。

SK236 は径約 0.8 m、深さ約 0.6 m のピット状の土壙で埋土上面に土師器皿 1 個体、底部には土師器甕 3 個体がいずれも完形で埋設されていた。他に溝・柱穴などがある。

出土遺物は各遺構から出土しているが少ない。土師器・須恵器などこの時代特有な器種・器系のものである。また、柱穴掘形, SD452 からは未判読であるが墨書土器も出土している。SK236, SK452 の遺物を図示した。

平安時代以降の遺構と遺物 平安～鎌倉時代にかけての石組井戸・石組遺構・集石墓・建物・柵列・土壙などを検出している。遺物は各遺構・包含層から、平安時代前期～室町時代にわたって出土しており、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・黒色土器・輸入陶磁器・軒瓦などがある。

小結 発掘調査で明らかとなった縄文時代の遺構は土壙を中心とするものであり、集落の全容を明らかにすることはできなかった。調査地周辺の地理的条件をみると、南側丘陵斜面に縄文時代の集落が想定できる。  
(菅田 薫・辻 純一・平方 幸雄)

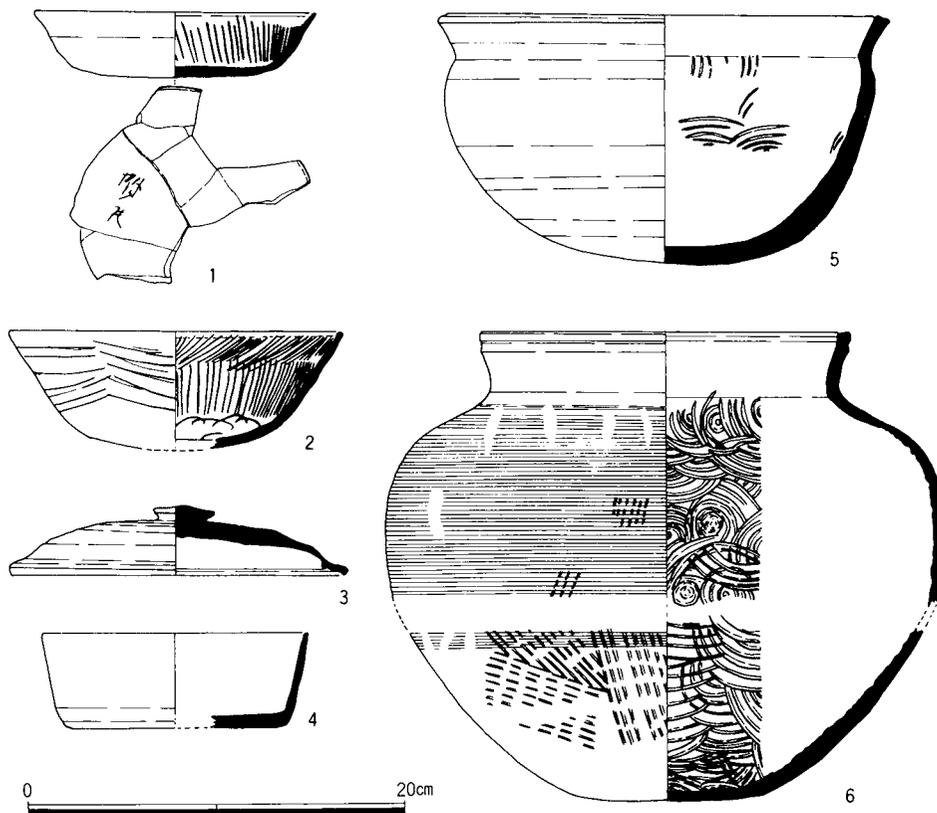


図 14 SD 452 出土遺物実測図 (1・2 土師器, 3～6 須恵器) (1:4)

#### 40 小倉町別当町遺跡

**経過** 調査地は京都市左京区北白川上別当町で、北白川小学校内にあたる。同小学校の校舎改築工事に先立ち試掘調査を実施した所、対象地の南半分で遺構を確認した。

同小は既に昭和56年度の調査<sup>注</sup>で飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物などを確認している。したがって当地にも遺構が広がっているかを確認するために発掘調査を実施した。

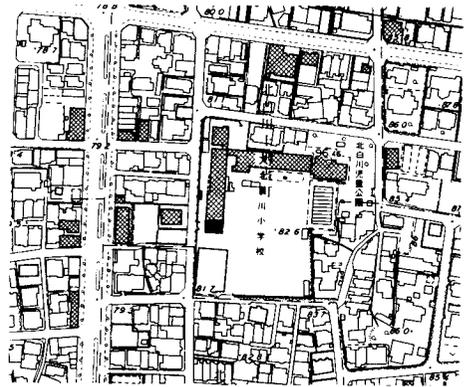


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構・遺物** 竪穴住居は4.3m四方と3.8m四方の2棟がある。竪穴掘り込みは前者が0.5m、校舎が0.25mと比較的良好で、竪穴内の竈は、粘土混じりの砂質土で構築されていて、一辺の隅寄りにあるものと、隅にあるものがある。屋根支持の柱は棟下の2本で受けると思われるが、1棟では確認できなかった。この他、柱穴を25基検出し、3列の柱列を識別し得たが、対になる柱列を明確とし得なかった。柱列はいずれも北で西偏している。竪穴住居6と重複する柱列は平安時代初期に振る可能性がある。他の柱列は竪穴住居よりも古いと考えられる。

遺物の多くは竪穴住居の覆土から出土したが、微細片のみで図示・復元し得るものはない。他に北白川廃寺所用の軒丸瓦が出土している。

**小結** 調査地点でも竪穴住居・掘立柱建物を発見したことから、北白川小学校付近全域に飛鳥時代～奈良時代にかけての集落が存在していたとみて、ほぼ間違いはない。ただし、昭和56年度調査の竪穴住居と今回調査の住居では若干時期差が認められ、その集落範囲内全域に同時に多数存在したのではないようである。

(梅川 光隆・磯部 勝)

注「小倉町別当町遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査偏)』昭和56年度  
1983年

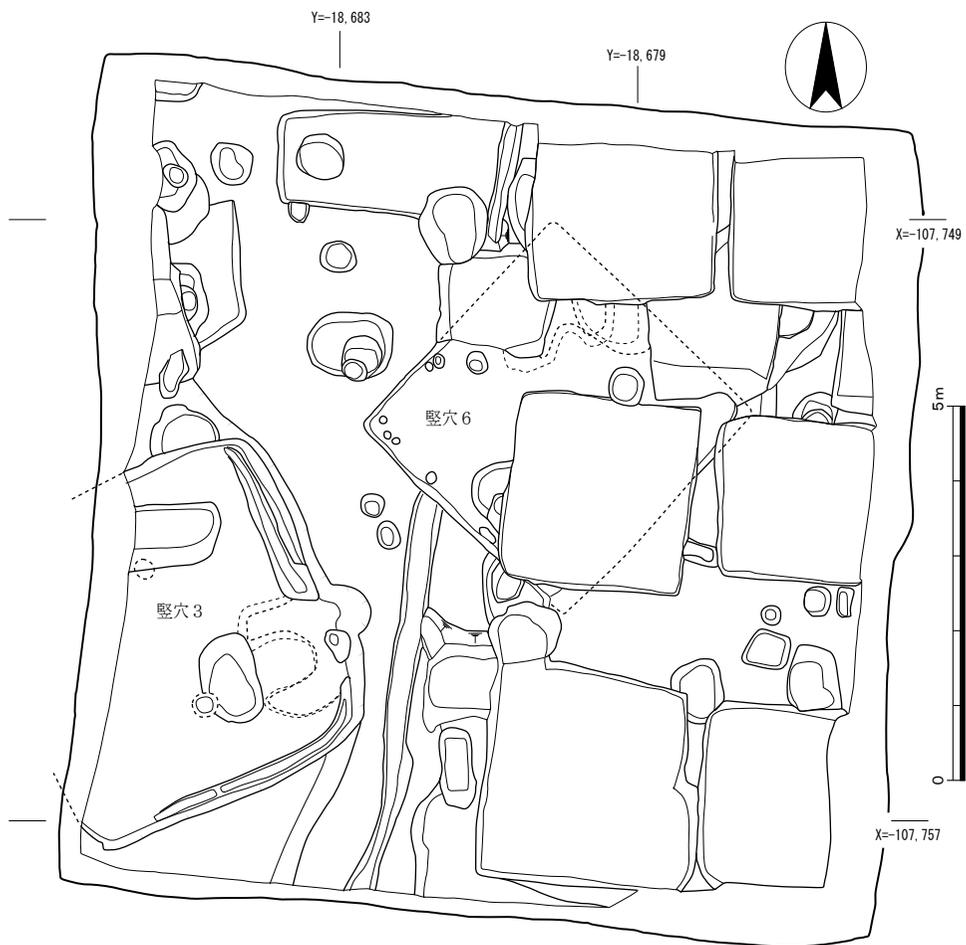
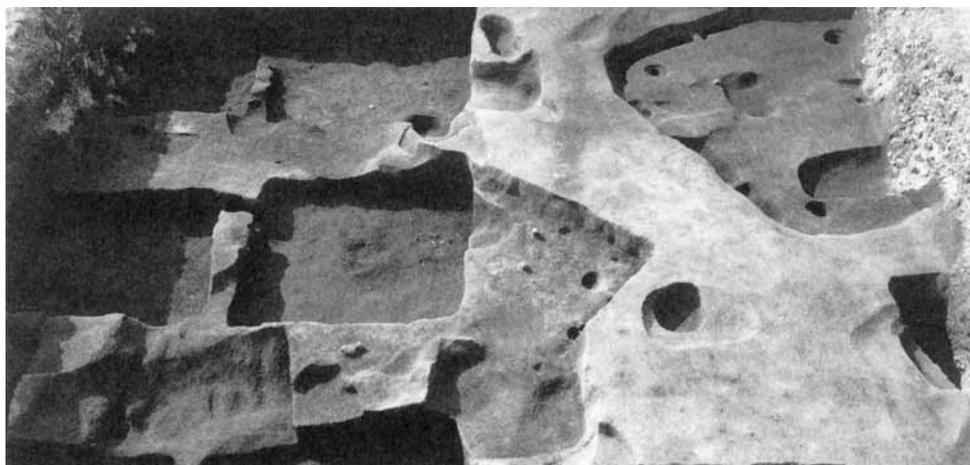


図2 遺構実測図(1:100)



竪穴住居3・6（北から）

## 41 植物園北遺跡

**経過** 当該地にマンションが新築されることに伴い試掘調査を実施した。各種遺構・遺物包含層が検出でき、遺跡の遺存状態が良好であることの確認を受け発掘調査を実施する運びとなった。

植物園北遺跡は、京都府立植物園とその北方一帯の鴨川扇状地上に立地する弥生時代後期から古墳時代にかけて展開した一大集落跡である。遺跡は公共下水道管敷設工事に伴う立会調査で確認されたもので、これまで2度の発掘調査を実施したが当該期の遺構を検出するには至らず、当遺跡における竪穴住居などの構造及び構成などの具体的な様相を把握する上でも遺構の検出が期待されていた。



図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構・遺物** 調査区の基本層序は、耕作土・床土が15～24cmあり、床土下には明褐色泥砂層が厚さ4～10cmある。その下は明褐色泥砂層で厚さ2～6cmある。床土下の2層からは縄文晩期から鎌倉時代までの遺物が出土した。明褐色砂泥層の下は無遺物層の褐色砂泥層が堆積し、各遺構は褐色砂泥層上面で検出した。検出した遺構には、竪穴住居4棟、溝及び流路6条、土壇1基などがある。竪穴住居は北に対しほぼ45度傾く。1～3号住居は一辺5.2～5.3mの方形を呈し、主柱穴は4箇所ある。壁溝はほぼ全周する。床面のほぼ中央にピットがあり、地床炉として利用されるものもある。壁溝に接して貯蔵穴がある。4号住居はいびつな長方形を呈し、一辺3.9～4.2mある。主柱穴は2箇所ある。貯蔵穴は壁溝に接して2箇所ある。

遺物は、各遺構及び第1・2層から遺物整理箱で20箱出土した。内容は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、手捏ね土器、陶器、瓦器、輸入陶磁器、鉄製品などがある。

**小結** 竪穴住居は、その構造や出土遺物から、1・2号住居が弥生時代後期、3・4号住居が古墳時代前期、また流路から溝は古墳時代後期に属すると考えられる。

(辻 裕司)

『植物園北遺跡発掘調査概報』昭和59年度 1985年報告

## 第2章 試掘・立会調査

### I 昭和59年度の試掘・立会調査概要

昭和59年度の試掘・立会調査は956件で、遺跡別に分けると平安宮91件、左京332件、右京205件、烏羽離宮跡58件、長岡京跡25件、中臣遺跡81件、その他164件であった。事業別によると国庫補助901件、原因者負担55件である。以下文化庁国庫補助事業として行っている試掘・立会調査と原因者負担事業で行っている試掘・立会調査に分けて報告する。

#### 1 文化庁国庫補助事業による試掘・立会調査の概要

本年度実施した調査件数は、試掘調査が134件、立会調査が766件の計901件である。その内、特に遺跡の残存状態が良好な13件は発掘調査に切り替えた。以下、調査で知り得た成果について、平安宮、京域、京域外に分けて概略を述べる。

平安宮 宮内においては、内裏承明門付近での試掘調査において石組遺構を検出し、発掘調査の結果、承明門の雨落溝と地鎮遺構を4基検出した。その他、平安宮の西限隍を検出し、同一位置で数回の作り変えが判明した。

平安京 京域で検出した条坊遺構は、右京北辺二坊で土御門大路北側溝、右京三条二坊で姉小路南側溝及び路面、右京八条二坊では、平安時代前期の建物、野寺小路西側溝を確認した。その他、右京五条四坊において古墳時代前期から平安時代にわたる複合遺跡を検出した。

京域外 尊勝寺跡では塔の推定地で版築層を試掘調査で確認し、引き続き発掘調査で大規模な版築層と古墳時代の古い流路を検出した。(第1章-14)。烏羽離宮跡では、3箇所を試掘調査において建物基壇を検出し、それぞれ発掘調査に切り換え、礎石建物・基壇掘込地業などが明らかになった。(第1章-18～20)。

長岡京跡の試掘では、平安時代の水田遺構と足跡及び長岡京以前の水田遺構を検出し、発掘調査に切り換えた。中久世遺跡では、弥生時代中期からの後期の溝を検出し、多量の土器・石器類が出土した。大原野地区における試掘調査では、全域で平安時代から室町時代の遺構を多数検出し、中世遺構の分布をほぼ確定した。また、新たに奈良時代の竪穴住居を検出し、多数の須恵器が出土した。須恵器には溶着したものが多く、付近の南春日町窯との関係が推定される(第2章-16)。

植物園北遺跡における試掘調査では弥生時代から古墳時代前期の竪穴住居を検出し、当該遺跡における初めての本格的な発掘調査となった。ケシ山古墳群隣接地では、造成工事中の崖法面に瓦窯2基を発見<sup>注2</sup>し、発掘調査の結果、北白川廃寺へ供給した瓦窯であることが判明した。天塚古墳・清水山古墳の周辺における公共下水道の立会調査では、両古墳の周溝の一部を検出し円筒埴輪片が数点出土した。鳥辺野では道路拡幅工事中の崖法面に古墳3基を発見し、その内2基について発掘調査を行った（第2章-20）。以上が本年度における試掘・立会調査の主要な成果である。（家崎 孝治）

## 2 原因者負担による試掘・立会調査の概要

昭和59年度の原因者負担による試掘・立会調査は計55件で、遺跡別に分けると平安宮・京2件、左京13件、右京13件、烏羽離宮跡・周辺遺跡6件、長岡京跡・周辺遺跡6件、中臣遺跡・周辺遺跡3件、その他12件であった。以下、その主要なものについて述べる。

平安宮・京 平安宮域の調査は少なく中心は左京・右京で、しかも左京の調査事例の多くは五条以南である。左京九条四坊の調査（3）<sup>注3</sup>では東京極大路の隣接地から始良Tn火山灰を検出し、また弥生時代から室町時代に至る各時期の遺構・遺物を検出し、安定した微高地が島状に残っていることが判明した。

右京では一条四坊とその周辺地区での下水道管埋設に伴う立会調査（4）では、一条四坊十一町で平安時代、室町時代～江戸時代に至る多数の遺構を検出した。また、法金剛院とその西側や北側でも多数の遺構・遺物を検出し遺跡の拡がりを確認できた。更に当地で文献にある「双ノ池」と推定できる湿地帯・池を検出した。四円寺跡の下水道関係の調査（4）では、円教寺の比定地で11世紀から12世紀後半の遺構群を検出し、中でも東西溝と南北溝は、寺の東と南を限る遺構と推定された。円乗寺推定地では旧地形が谷筋にあたる<sup>注4</sup>ことが判明し、河川・湿地帯の土層を検出した。寺院跡を示す遺構・遺物は検出できず、遺跡の推定に疑問を残した。

烏羽離宮跡では田中殿の金剛心院関係の礎石・築地・阿弥陀堂（SB1）の礎石などを検出した（9・10）。また、南殿推定地の調査（7）では庭園の庭石を検出した。中臣遺跡（11）では発掘調査例の少ない北部の下水道関連の調査で弥生時代中期の溝、古墳時代後期の横穴式石室などや、平安～鎌倉時代の遺構・遺物が出土し、丘陵頂部にも各時期の遺構が存在することが判った。

山科本願寺跡の調査（12）では山科川の自然堤防上から古墳時代前期の竪穴住居・土壙・自然流路、山科本願寺関連の幅3.2mの外濠、土壙・溝などを多数検出した。山科本願寺

関連の資料はいずれも埋土に焼土・炭などを含み、天文元年（1532）の天文法華の乱に伴うものと推定された。

長岡京左京九条四坊跡と淀城跡の下水道関連の調査（13）では旧宇治川の南岸の堤防や淀城の堀を検出し、嘉永5年（1852）の「淀城絵図」の資料的価値が確認された。上久世遺跡では広範囲の下水道関係立会調査（15）で、弥生時代中期～近世の流路を数条検出し、旧流路と微高地の関係が明確になった。弥生時代～中期の遺構は微高地上に立地し、中世集落跡は斎王堂周辺の小範囲の微高地に限定されることが判明した。

嵯峨院・大覚寺御所跡の推定地の調査（18）では、大覚寺北側の東西道で平安時代前期の土壌・落込を検出し、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土した。遺物の年代から嵯峨院などに関連するものと推定できる。出雲寺跡・相国寺境内の調査（21）では、上御霊神社南門前の道路上で中世の池状の遺構を検出した。しかし、寺関係の遺構・遺物はとぼしく寺域範囲は明確にならなかった。その他、貞観寺跡の試掘調査（19）では中世の柱穴、平安時代と推定される井戸状遺構などの遺構を検出し、発掘調査の方向で協議した。

### 3 試掘・立会調査情報の有効な活用について

平安京を中心とする京都市域の遺跡調査では、立会・試掘・発掘調査の3つの方法で遺跡調査を行っている。これらの調査が有機的に結合し、成果をあげる必要がある。試掘調査は発掘が必要か否かのデータを事前を得るために行われているが、立会調査は国庫補助事業として行われている都市の再開発に関わる家1軒ないし数軒の敷地の調査や、小規模な道路掘削に伴うものと、主として原因者負担で行っている、公共下水道工事・ガス管理設・上水道工事になどに伴う調査があり、これらは主に道路の掘削に伴う調査である。各々の調査地点・成果の記録は、2500分の1の都市計画図をベースに、工事原因者提供の500分の1の地図を使用する上水道やガス工事の立会調査など様々である。これらの地図は調査成果を今後に残すという点では問題点を持っている。2500分の1の地図では大略の調査位置の記録しかできないし、500分の1にしても国土座標がなく図面は工事範囲に限られ、遺跡の範囲を確認し、マクロ的に遺跡内容を知る方法としては有効であるが、詳細に遺跡内容を記録できない限界があり、また、精度のある記録を将来に残す点で問題がある。昭和50年に国立京都博物館によって1：1000の地図が平安宮部分に製作され、検出遺構を地図上に載せることができるようになった。更に立会調査のレベル測量を多大の時間をかけて行っていたが、地図のある部分ではこの作業が省けるようになり、多くの成果があった。

したがって、今後は大縮尺の地図の製作とその活用が必要になり、その上で国土座標を媒介に様々な調査成果を统一的に管理し残す必要がある。また、年間1000件近い立会調査の成果は一現場単位ではそれほど意義をもちえないし、広域立会調査における数千から万単位の土層断面図も同様である。この成果は、過去の平安京や京都市内遺跡で行った6000件に上る調査データと総合的に評価した場合に初めて重要になり、遺跡の密度や各時代の層の重なり具合、地下遺構の破壊状況などが明らかとなる。膨大な考古学情報を整理し、活用するためには情報機器の活用が不可欠であり、その利用方法が課題となっている。 (百瀬 正恒)

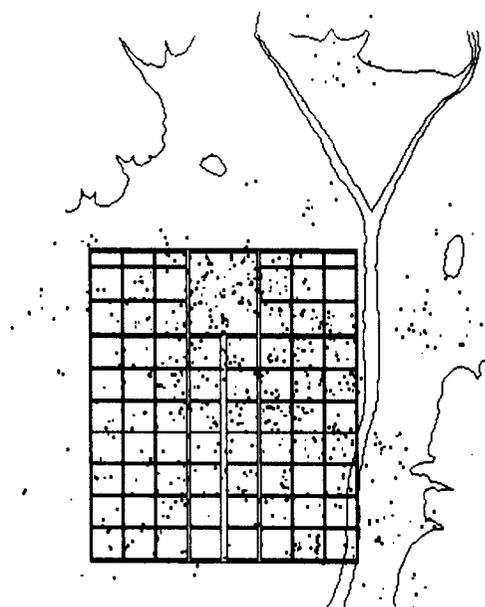


図1 昭和59年度の調査地点のドット

注1 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度 1984年 報告

『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 1985年 一部報告

注2 発掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターによって行われた。

注3 第2章-3, 以下同じ

## II 平安京跡

### 1 平安京左京六条四坊

**経過** 調査地は平安京左京六条四坊七・八・九・十町にあたり、六条坊門小路、樋口小路、五条大路、万里小路などの条坊遺構検出が期待された。行政区画では京都市下京区松原中之町、本上神明町、本神明町、塩竈町、柏屋町、豎田町、忠庵町、杉屋町などを調査した。全体が流路ないし湿地状を呈し、遺構の検出はできなかった。

**遺構・遺物** A区南半は焼土を含む暗茶灰色泥砂層が地表下1m前後まで続き、この下層は灰褐色泥砂層となり低湿地状の土層堆積である。

B区全体は地表下0.4m前後に近世の焼土層があり、この下層は、暗灰色や灰色の砂泥層、泥土層、砂礫層などでありいずれも流路埋土である。流路埋土からは出土遺物がなく年代は不明。

**小結** A区北半部は不明であるが、A区南半、B区ともに低湿地、流路埋土の土層を検出した。A、B区共に焼土層を検出できるが、この下層では貝や漆喰の入った土壌があり、焼土が近世のものであることを確認できた。B区の流路埋土は焼土層との関係から近世以前であるが年代を特定できない。

(百瀬 正恒)

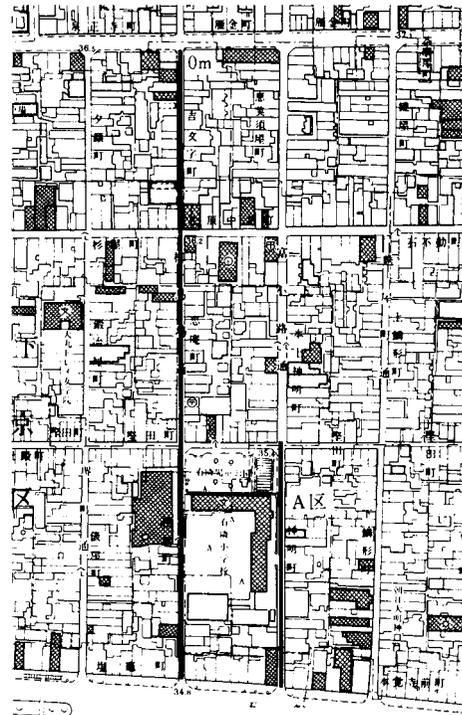


図1 調査位置図 (1:5000)

## 2 平安京左京九条三坊

**経過** 調査地は京都市南区の東寺道と八条間、烏丸通と室町通間で、東九条室町、東九条殿田町を中心とする地域である。

平安京条坊の左京九条三坊七・八・九・十町にあたる。調査は道路毎にA～J区までの10区に分け実施した。

**遺構・遺物** 対象地全域の土層は路面直下から砂・砂礫・砂泥などが卓越し、流路堆積によって形成された層である。以下調査区毎に主要な成果を述べる。

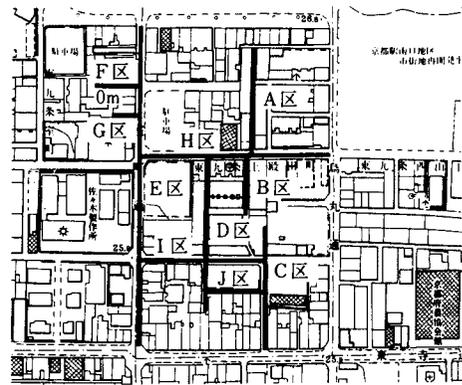


図1 調査位置図 (1:5000)

E区では南北方向の流路を検出した。50 m地点では上層から路面、灰色砂泥層、暗灰色泥砂層、淡灰色泥土層、灰褐色砂礫と泥土の互層が認められた。Ⅱ・Ⅲ層は堆積状態から流路堆積物であるが、出土遺物が少なく年代を決めることができない。規模は掘削溝と平行したため不明であるが、室町通と平行することから道路側溝と推定され、平安京内の排水溝の機能を持っていたと推定される。

F区では10 m地点を中心に遺物包含層を検出した。土層は暗灰色砂泥層、淡茶灰色泥砂層、灰青色泥土混じり砂礫層、暗灰色砂泥層の4層で、遺物は第3層から出土した。細片化した土師器が中心で、中に青白磁が1点ある。鎌倉時代中期のものである。

B・C・D・H・I区などでは路面直下で砂礫、泥砂などの流路堆積土層を検出した。I区では第2層の茶灰色泥砂層から細片の土師器が出土した。H区では地表下0.5 m前後まで攪乱層であったが、この下は灰色泥土層、灰色砂礫層となり、砂層・砂礫層が卓越する。これに対し、C・I・D区などでは地表下1 m前後までは砂泥層が主体でこの下に砂層の堆積がみられる。堆積土からは出土遺物がなく年代は不明である。

**小結** 検出したのは流路や鎌倉時代の遺物包含層であった。周辺地域は砂泥や砂礫層が卓越する地域であるが、部分的に安定した土層分布が認められる。

(百瀬 正恒)

### 3 平安京左京九条四坊

**経過** 調査地は京都市南区の九条河原町の一帯で、東九条河原町、東九条宇賀辺町である。平安京条坊の左京九条四坊十二・十三町にあたり、九条大路と東京極大路の交差点とその南側である。

調査区を道路によってA～G区までの7区に分けて実施した。A～D区は高瀬川の兩岸の調査区などで攪乱層を確認し、遺構・遺物は出土しなかった。



図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構・遺物** 遺構を検出したのはG区・F区などで、以下主要なものを報告する。

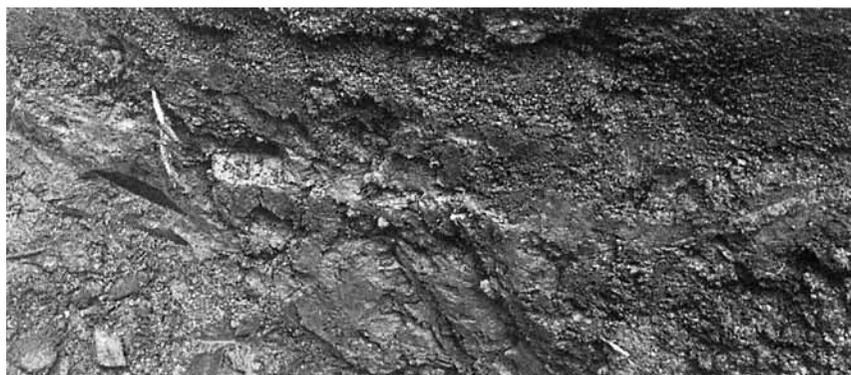
G区で土壌、遺物包含層を検出した。土壌は35.8m地点に東肩があり5m程確認した。土層は路面、灰茶色砂泥層、黄灰色泥砂層と続き、土壌はⅢ層上面で成立している。埋土は灰茶色礫混じり砂泥層、灰茶色砂泥層で、各層から小片の土師器・瓦などが出土し、室町時代のものである。土壌西部には遺物包含層が広がっている。地表下40～50cmに上面がある淡灰褐色泥砂層で厚さは50cm前後ある。瓦・土師器・青白磁・焼土などが出土した。

F区では土壌、遺物包含層など多数の遺構を検出した。8m地点の土層は上から路面、茶灰色粘土層、灰茶色粗砂層、茶灰色粘土層、黄色泥砂層、茶灰色粘土層、灰色泥土層、砂礫層へと続く。第V層の黄色泥砂層は地表下1.5mに上面があり、厚さ0.1mある。これは始良Tn火山灰層と推定される。8.6～9.4m地点にかけて灰茶色砂泥が埋土になる土壌を検出した。瓦器・土師器など鎌倉時代の遺物が出土した。12m地点では地表下1mに灰茶色泥砂層があり、弥生時代の遺物が少量出土した。30.5～32.2m地点で大規模な土壌ないし溝状遺構を検出した。成立面は地表下0.5mで、埋土は3層あり上層から暗灰色泥砂、茶灰色砂泥、暗灰色砂泥層となる。各層から室町時代後期の遺構が少量出土した。33.5～38mにかけて茶灰色泥砂層、茶灰色礫混じり泥砂層を埋土とする大規模な土壌を検出した。出土遺物は小片の土師器である。

**小結** 対象地での遺構・遺物の検出状況は地区によって偏りがある。ほぼE区から東部は砂礫層が主体で攪乱層も多いのに対し、西部には遺構・遺物包含層が残存している。F

区での始良T n火山灰の検出はこの地域が洪積世から安定した微高地であり，弥生時代から室町時代，現代に至るまで一貫した土地利用がなされていることから証明できる。G区での鎌倉時代から室町時代の土壌・遺物包含層は当地が平安時代後期に皇嘉門院邸が設定されたことによると考えられる。

(百瀬 正恒)



火山灰出土状態（西から）

4 平安京右京北辺四坊・一条四坊，法金剛院境内，四円寺跡（図版 64・65）

**経過** 調査地は京都市右京区谷口梅津間町，谷口園町，花園天授ヶ岡町，花園寺ノ前町，その他である。平安京の条坊や遺跡では右京北辺四坊・一条四坊，法金剛院旧境内，円乗寺跡，円教寺跡に比定されている。調査期間は昭和 59 年 5 月 8 日～昭和 60 年 6 月 27 日までであった。

調査の結果，平安時代中期～後期，室町時代，江戸時代の溝・土壌・井戸・柱穴・池・河川・落込・遺物包含層など多数の遺構・遺物を検出した。

特に円教寺の推定地区では平安時代中期～後期に属する溝・井戸・土壌・柱穴・遺物包含層などを数多く検出した。また検出した溝の 2 条は円教寺西辺・南辺を画した溝の可能性が高い。円乗寺跡の比定地では，湿地状堆積・河川・池と，これらの周辺で少量ながら平



図 1 右京北辺四坊・一条四坊・法金剛院調査位置図 (1:5000)

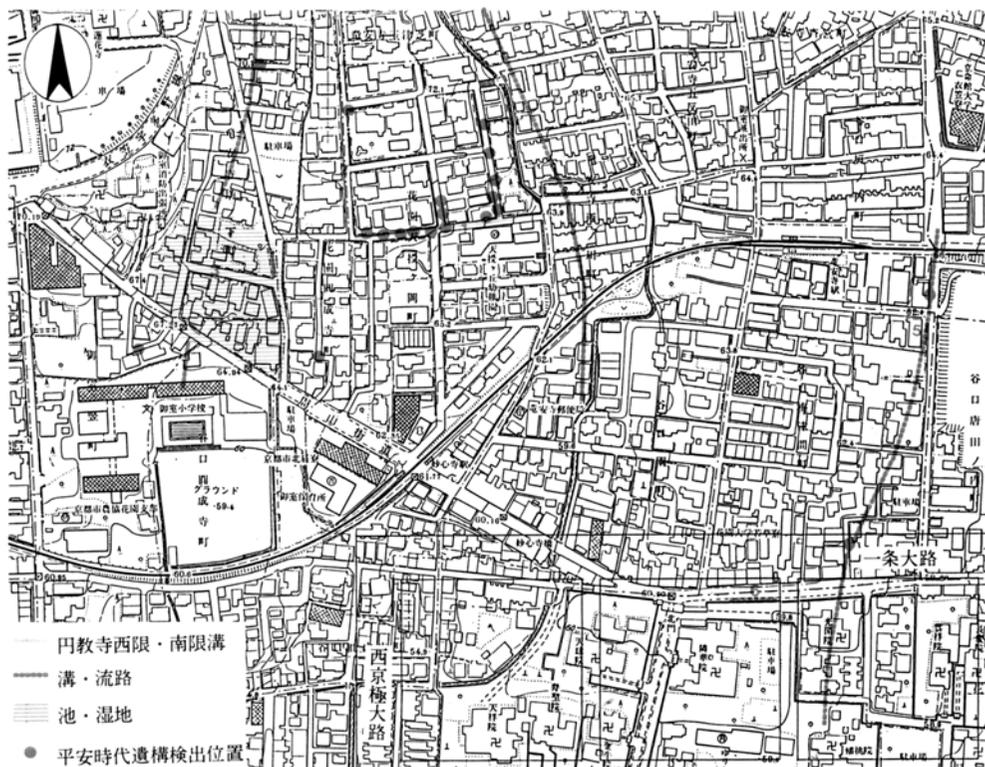


図2 四円寺跡調査位置図 (1:5000)

安時代の遺構・遺物が検出された。法金剛院境内の西側及び北側一帯では文献にある「双ノ池」<sup>注1</sup>と考えられる湿地状堆積層を確認した。また北側の池の周辺から、平安時代後期の井戸・土壌などを検出した。右京一条四坊十一町地内では、平安時代中期～後期、室町時代、江戸時代の井戸・土壌・柱穴・溝・遺物包含層などを多数検出した。

**遺構** 遺構は右京北辺四坊・一条四坊、法金剛院境内で99基、四円寺跡で98基、合わせて197基を検出した。遺構の内訳は土壌(61)、溝(63)、柱穴(11)、井戸(17)、堀(1)、落込(19)、河川(11)、池(5)、遺物包含層(4)、その他(1)となっている。

花園寺ノ前町(一条四坊十一町地内)では、11世紀後半～12世紀後半にかけての井戸・土壌・落込など6基を検出した。他に室町時代後期の土壌・溝など4基、江戸時代の溝・土壌など3基も検出した。花園寺ノ内町・花園内畑町・花園宮ノ上町・花園段ノ岡町(北辺四坊・法金剛院境内)では、井戸・土壌・柱穴・池・溝・遺物包含層などを検出している。このうち寺ノ内町は法金剛院の旧境内であるが、内畑町は境内地に接した西側、宮ノ

上町、段ノ岡町は北側にあたり、いずれも遺跡推定地区外である。寺ノ内町では12世紀後半の井戸・土壙・溝など4基を検出した。他に江戸時代の遺構8基、室町時代の遺構1基を検出している。内畑町では10世紀～12世紀後半にかけての土壙・河川・溝・柱穴・池・包含層など8基、江戸時代の遺構4基を検出した。宮ノ上町・段ノ岡町では12世紀後半の井戸・遺物包含層を検出した。他に室町時代の溝1条と江戸時代の落込・土壙・溝など3基も検出した。

円教寺跡に比定される花園天授ヶ岡町北部地区一町内で11世紀前半～12世紀後半に属する土壙・溝・井戸・柱穴・遺物包含層など20基を集中して検出した。このうち東西溝(1)と南北溝(2)をそれぞれ東西100m、南北100mにわたって確認している。円教寺域の西辺、南辺を画す溝の可能性が高い。竜安寺塔ノ下町(推定円乗寺跡)では池・低湿地状堆積層(3)、河川流路(4)などを検出した。このうち河川流路で12世紀前半の遺物が出土した以外はすべて江戸時代以降の遺構である。谷口梅津間町では10世紀～12世紀の溝(5)を検出し、これが南北200mにわたって連続することを確認した。

その他、妙心寺北門に接する一条通南側で、深さ3m、幅3m以上の溝(6)を検出した。江戸時代の遺物を含んでおり、妙心寺北域を画す濠と考えられる。

**遺物** 出土の遺物には土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦器・輸入陶磁器・須恵質陶器・陶器・施釉陶器・国産磁器・瓦・木製品・土製品・金属製品・その他がある。遺物の時期は平安時代中期～後期、室町時代、江戸時代に分けられる。このうち平安時代中期～後期の遺物は主として円教寺跡、法金剛院旧境内周辺、右京一条四坊十一町などから出土した。

円教寺跡から出土した土器・瓦類は11世紀前半～12世紀後半にかけてのものが多数であるが(図3 1～5・17～19)、一部少量ながら10世紀の遺物も出土している。南辺を画すとみられる溝からは、凝灰岩片を多数検出しており注目される。法金剛院境内東辺では、井戸と考えられる遺構から12世紀後半の完形土師器皿が数点出土した。同じく検出した井戸からは軒瓦を含む多数の瓦類(図3 6～10)を、境内西辺一帯の湿地状堆積層中から12世紀後半の遺物を検出している。

一条四坊十一町では、土壙・溝・井戸などから11世紀～12世紀後半の遺物を検出した。花園段ノ岡町、宮ノ上町からも12世紀後半の遺物が井戸から出土している(図3 11～16)。

室町時代に属する遺物は、花園寺ノ前町(一条四坊十一町)、花園宮ノ上町を中心に出土したが量的には少ない。

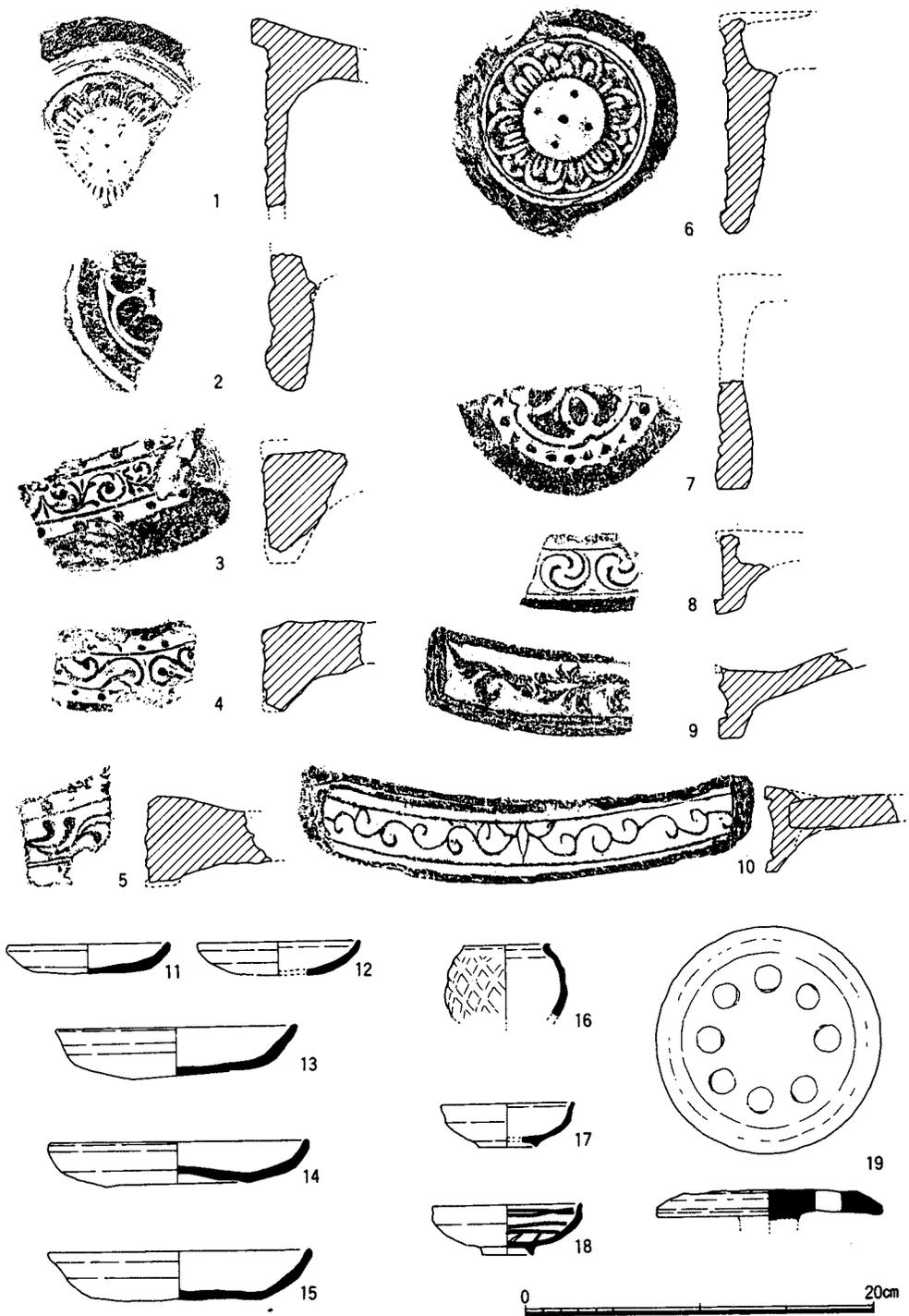


图3 出土遺物実測・拓影図（軒瓦 1～10，土師器 11～15，白磁 16，瓦器 17・18，土製品 19）（1:4）

江戸時代の遺物は主として谷口梅津間町、法金剛院旧境内周辺で検出した。谷口梅津間町の遺物は一条北側に展開されていたとされる妙心寺塔頭跡に伴うものと考えられよう。

**小結** 右京北辺四坊・一条四坊・西京極大路・法金剛院境内などの遺跡が推定されている地区では、特に右京一条四坊十一町地内に11世紀後半から12世紀後半にかけての遺構群を検出している。昨年度、妙心寺境内の調査で検出した同時期の遺構群<sup>注2</sup>との関係が注目される。西京極大路に関連する路面、溝などは検出していない。これは妙心寺域西辺の谷筋が更に南へ広がり、国鉄花園駅周辺から西南地域で池ないしは湿地帯を形成していたことによる。明治20年代に至ってもなお、付近一帯が沼地であったとの証言もある。法金剛院旧境内地の調査では旧境内の西側及び北側で10世紀から12世紀後半の遺構・遺物を検出した。北側の遺構に関しては10世紀中葉に仁和寺の寛忠僧都がこの付近に「池上寺」を建立したとの記録<sup>注3</sup>があり、これに関係するものと考えられる。法金剛院の前身である清原夏野山荘に直接関係する遺構は今回の調査では検出できなかった。

四円寺跡では、円教寺域の推定地である天授ヶ岡町北半を中心とした一町地内で、11世紀前半から12世紀後半の遺構群と西辺及び南辺に関係する溝を検出した。天授ヶ岡町南半地区は丘の裾部にあたり、南下がりの緩傾斜を呈しているが、寺院跡に結び付く遺構・遺物の検出はなかった。寺域の中心地区は丘頂上付近の一町四方に収まることが、遺構の分布から推定される。円乗寺跡と推定される地区は、仁和寺の台地と円教寺跡の天授ヶ丘に挟まれた谷筋にあたり、河川、池、及び湿地状の堆積土層を確認した。ただ少量であるが、池の北側と東側で平安時代の遺構・遺物が検出されており、円乗寺跡と結び付く可能性はある。

この他に、昨年度の妙心寺境内下水道敷設に伴う立会調査で発見した溝の延長を2箇所検出し、北に200m以上延びていることを確認した。これは「源有仁の池館」に通ずる溝と考えられる。

今回の調査の重要な成果に、法金剛院境内北方に展開する新たな遺跡の発見や、円教寺域の確定があげられる。しかし円乗寺跡比定地内で流路や池以外の遺構が少ない点は、寺院跡に比定する積極的な資料を欠いている。このことは円乗寺域推定の再検討が必要であるばかりでなく、仁和寺とその子院跡の寺域展開もからめた、周辺一帯の平安時代に属する遺構群の再点検と再整理が今後の課題として迫られたものと言えよう。（平田 泰）

注1 『続日本後記』承和十二年（845）十月壬子条

注2 「平安京右京北辺四坊・一条四坊・妙心寺境内」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和58年度 1985年

注3 『仁和寺諸院家記』

## 5 平安京右京三条一坊

**経過** 調査地は、平安宮南限の外郭及び朱雀門の一角、右京三条一坊一町北東角、朱雀大路にあたることから、会館建設に伴って試掘調査を実施することになった。敷地の縁辺に沿って4本と中央に1本のトレンチを設定し、地山直上まで機械掘削を行った。ほとんど地山直上まで盛土で、旧耕作土は敷地南東で確認したに止まることから、近代以降に、かなりの攪乱を受けているのが判る。当初

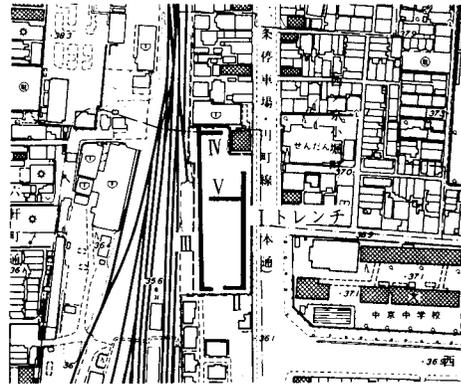


図1 調査位置図 (1:5000)

予想されていた平安時代の遺構も後世の攪乱により検出することはできなかった。

**遺構・遺物** 調査地北半部では近世の土壌及び土取り穴を検出した。比較的攪乱の少ない調査地南東端では、流路とその上に平安時代の瓦を多量に含む土層を確認したが、その性格については整地層が流れ堆積なのかは不明である。南西端では、朱雀大路西側溝推定地で中世の南北溝を検出した。また、調査地北西部と南西部で火山灰層を地表下2～2.5mで確認した。

遺物の大半は江戸時代後半の土壌から出土した陶磁器と平安時代の包含層から出土した瓦である。その他の遺物としては、流路の砂礫層から出土した縄文土器（晚期）、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、包含層などから出土した平安時代以降の土師器、須恵器、白磁などがあげられる。

**小結** 今回の試掘調査によって、調査地南端で遺構が比較的良好に残存していることを確認した。しかし、平安時代の遺構については後世にかなり削平を受けており、残存状況は良いとは言えない。なお、当調査地から市内で検出例の少ない火山灰層を確認できたことは注目されよう。



I トレンチ全景 (北から)

(中村 敦)

## 6 平安京右京三条三坊

**経過** この調査は(株)島津製作所工場建設に伴うものである。右京三条三坊ではこれまで3度発掘調査が行われている。いずれの調査でも平安時代前半の遺構が良好な状態で検出されているが、これらの調査や周辺の立会調査結果から当地付近は低湿地状の旧地形が予想された。そこで遺構の有無を確認するため試掘調査を行った。調査対称地に8箇所の試掘トレンチを設けたが、全域で沼地状の堆積が認められたため、全面を発掘調査するには至らなかった。

**遺構・遺物** 1区から8区まですべて旧耕作土層下に低湿地状の堆積を確認した。1区の西端部に茶褐色砂礫層がみられたため、一部拡張し、調査を行ったが、この土層も低湿地の上部に堆積したものと判明した。

遺物は1区から古墳時代の須恵器辺が数点出土しただけで、他はすべて旧耕作土層からのものである。

**小結** 当初予想されたように右京三条三坊十二町の南西部には低湿地状の地形であることが判明した。出土遺物が少ないためこの低湿地の時期は決定し難いが、この付近には平安時代の遺構が存在する可能性は少ないものと思われる。

(平尾 政幸)



1区西半部全景（南から）

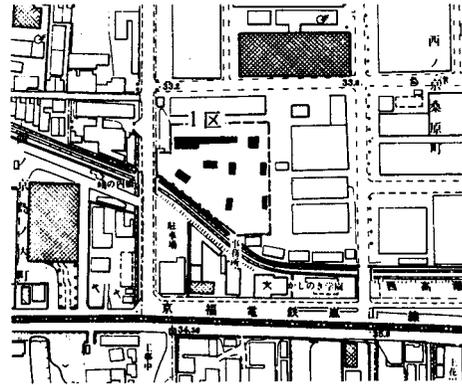


図1 調査位置図 (1:5000)

### Ⅲ 烏羽離宮跡

#### 7 烏羽離宮跡（1）

**経過** 調査地は京都伏見区中島秋山町・中島御所ノ内町・中島前山町で烏羽離宮跡南殿に推定されている。発掘調査は日本電信電話公社の整備工事に伴い実施したものである。地点は城南宮道と旧千本通の交差点より東へ約 130 m（A区）とそれより南へ約 360 m（B区）の合計 490 mの工事区で実施した。

**遺構・遺物** 検出した主な遺構は南殿関係の苑池とそれに伴う庭石である。庭石を検出したのはB区で公園南東入口門柱から北へ約 2.5 mの地表下 1.3 mの地点である。

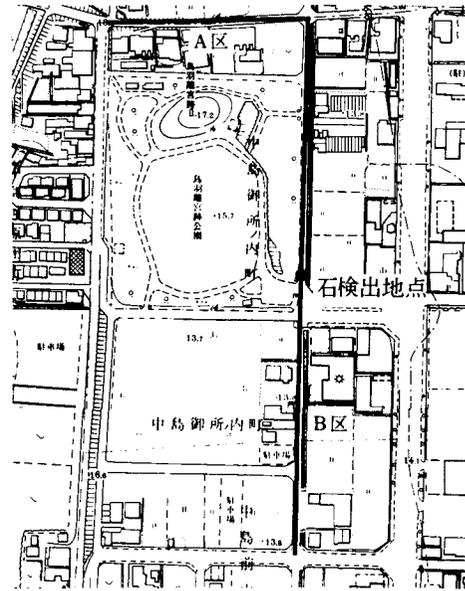


図1 調査位置図 (1:5000)

庭石は南北方向に並列した状況で暗灰色泥土層から検出した。検出地点の土層は上から現代盛土層 (0.7 m), 黄褐色砂土層 (0.3 m), 暗灰色泥土層 (0.3 m), 黒灰色泥土層 (0.2 m) である。石の大きさ長辺 1 m, 短辺 0.6 mで材質は砂岩で, もう 1 個は工事で抜き取られ規模は不明である。A区では工事掘削の深さまで盛土層で遺構・遺物を検出できなかった。

遺物は土師器皿, 平瓦があるが量は少なく整理箱 1 箱である。これらは苑池埋土の暗灰色泥土層と黒灰色泥土層から出土した。

**小結** 烏羽離宮南殿の発掘調査の第 3・4～6 次調査で検出されている遺構から, 今回検出した庭石・池は南殿関係の庭園遺構の一部と考えられる。 (磯部 勝)



庭石出土状態（西から）

## 8 烏羽離宮跡（2）

**経過** 調査地は京都市伏見区竹田浄菩提院町、小屋ノ内町で、烏羽離宮跡田中殿の金剛心院推定地にあたる。調査は公共下水道工事に伴い立会調査を実施した。

新油小路通りと新城南宮道の交差点より西へ約160m（A区）、それより北へ約170m（B区）の合計330mの工事区で実施した。なお、B区の深さ2mまでの土層で古墳時代の遺物包含層を検出したため、関係者と協議し12mの長さにわたって発掘調査を行った。

**遺構・遺物** 検出した主な遺構には溝・流路、柱穴などがある。これらはB区中間点付近で検出したもので、A区では道路建設時に削平を受けたと考えられ、地表下2mまで現代の盛土層で遺構・遺物は検出していない。

B区で検出した溝は幅約0.9m、深さ0.3mの東西溝、埋土は黒褐色砂泥層である。柱穴はいずれも径0.2～0.25mの円形で、深さは0.1～0.2mである。

古墳時代の遺物は暗茶褐色砂泥層から出土した。

遺物は整理箱で3箱出土した。烏羽離宮期から古墳時代のもので、瓦、土師器、須恵器などがあるが、細片のため細かな観察はできない。

**小結** 調査では対象地の大半が区画整理に伴う道路建設で削平を受け、一部平安時代の遺物包含層を検出したにとどまり、烏羽離宮期の遺構を検出できなかった。しかし、B区（工事区8～9）で古墳時代の溝・柱穴などを検出し、平安時代以前の遺構を確認したことは重要である。

（磯辺 勝）



図1 調査位置図（1:5000）



B区発掘調査地全景（北から）

## 9 烏羽離宮跡（3）（図版 66）

**経過** 調査地は京都市伏見区竹田小屋ノ内町・竹田田中殿町で烏羽離宮跡の田中殿に推定されている。調査の結果、A、C区では遺構の検出はなかったが、B区の17m～23m地点にかけて土壇1基と径0.5mの礎石2個を検出した。礎石2個は水道埋設管の下に現状保存されている。

**遺構・遺物** 遺構はB区で検出した。B区12m地点の土層は上から攪乱（1層）、淡灰褐色泥砂層（2層）、淡褐灰色泥砂層（3層）と続く。B区17～18、92m地点では2・3層を掘り込んだ深さ0.55mの土壇1を検出した。埋土の茶灰色泥砂層からは多量の瓦が出土した。この下面に接して径0.5mの礎石を西寄りで見出した。礎石の掘形は不明瞭であるが径2m程で淡褐灰色泥砂が埋土で小片の土師器や炭などを含む。西の礎石は礎石心で4.75m離れた所にあり、規模は径0.4mで淡褐灰色砂泥層の上面に位置している。共に地表から1.4m前後に埋まっていた。

出土遺物はB区の土壇出土遺物が中心である。土壇1からは瓦が整理箱3箱出土した。この土壇成立面は礎石検出面より2層上面で、遺構成立に時期差がある。出土瓦は軒丸瓦3点、軒平瓦3点が含まれ、共に瓦当文様は一種である。軒丸瓦は複弁六葉蓮華文で、兵庫県神出古窯跡群の宮ノ裏支群や釜ノ口支群更に高砂市魚橋瓦窯で同文のものが出土している。したがってこれらの生産窯から持ち込まれたものと推定できる。軒平瓦は前記の瓦窯からは同文のものは出土していないが胎土に同一のものがある。しかしより硬質で、灰白色の胎土、自然釉の掛かっているものもあり、生産窯を特定できない。東礎石の掘形から出土した土師器は小片であるが、平安時代後期のものである。

**小結** 礎石2個が現位置のまま出土し成果があった。付近の調査では烏羽離宮跡第75・76・79・89・90次調査などがある。第75・79次ではSB3とした建物が検出されており、今回検出の礎石もこの建物のものである。

（百瀬 正恒）



図1 調査位置図（1:5000）

## 10 烏羽離宮跡（4）

**経過** 調査地は京都伏見区竹田小屋ノ内町・竹田浄菩提院町で、平安時代後期から鎌倉時代まで存続した田中殿の金剛心院跡に推定される。付近では大規模な建物や苑池が発見されている。

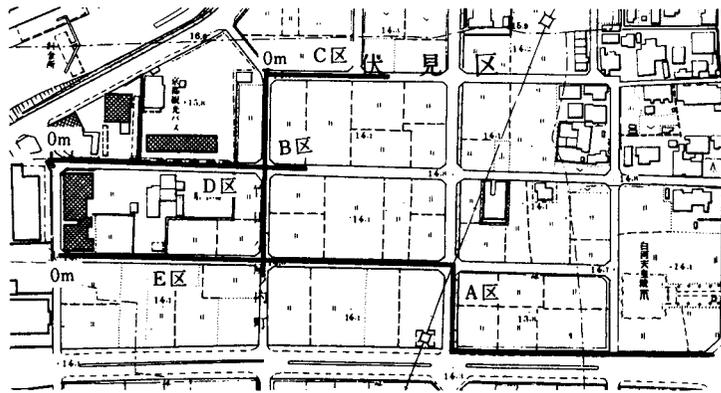


図1 調査位置図（1:5000）

道路によって調査区をA～Fの6区に分け調査した。A・C・F区では良好な土層断面を確認できず、遺構・遺物の出土はなかった。他の地区では当該期の遺構・遺物が検出された。

**遺構・遺物** B区では建物の基壇を検出した。10 m地点の土層は上から盛土層、旧耕作土層、灰色砂層、灰茶色泥砂層、灰黄色泥砂層、灰茶色泥砂層と続き、第V層以下は堅く安定している。90 m地点の土層は盛土層、旧耕作土層、灰色砂泥層、灰茶色砂泥層となり、10 m地点と大きな違いはない。128.3 m前後から南の144 m地点にかけて地表下1.5 mの灰茶色泥砂層の下から礫が多量に出土し、建物の基壇跡と推定された。D区20 m地点の土層は地表下0.9 mまで盛土層で、以下旧耕作土層、灰色砂層、灰茶色砂礫層と続く。56.3～58.3 mの幅2 mはボーリング棒で工事掘削深の以下を突いた所、径5～10 cmの礫を確認できた。この礫は位置関係から既検出の南北方向の築地に関連したものと推定できる。この東部の土層は100 m地点を例にとれば、地表下0.7 mまで盛土層、以下旧耕作土層、灰青色砂層、灰色泥砂層、灰茶色泥砂層と続き、西部に比べ、灰茶色泥砂層があり、安定している。

E区では建物基壇、礎石などを検出した。127.1～156.6 mにかけてB区で検出したものと同様な礫を多量に含む基壇建物を検出した。礫は径10 cm前後で、中には50 cm × 30 cmの大きなものも含まれる。地表下1.2～1.5 mに礫の上面がある。162 m地点では花崗岩の礎石を検出した。長径35 cm、短径18 cm以上のもので、地表下1.55 mで検出した。礎石

上面には瓦が数点のっていた。

**小結** 調査地点周辺は金剛心院に推定され、過去多数の調査がなされており、その成果と今回を重ね合わせることができる。D区検出の築地に関連すると推定される礫は第80次調査検出のものと位置が合い、同一のものとできる。B・E区検出の建物基壇は金剛心院の釈迦堂跡と推定されるものの一部である。同じくE区検出の礎石は釈迦堂に取り付く回廊と推定される。

(百瀬 正恒)



E区 117m 地点



E区 88m 地点

## IV 京域外の遺跡

### 11 中臣遺跡，中臣十三塚，宮道古墳

**経過** 調査地は京都市山科区栗栖野打越町から西野山中臣町にかけての地域である。山科排水区安祥寺系統西野山(その4)公共下水道工事を対象とした立会調査を実施した。当該地域は、中臣遺跡，中臣十三塚，宮道古墳などを包蔵する。調査は、掘削工事の行われる道路毎に、南から1～28までの番号を振り、それを調査地区として実施した。

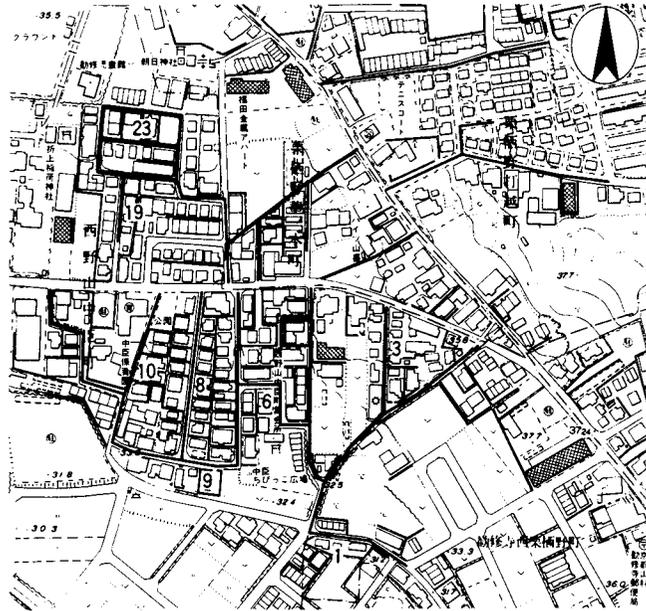


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構・遺物** 検出した遺構は溝・土壙・柱穴などであるが、以下時代毎に列記する。

1. 弥生時代 6区で中期前半の溝を検出した。幅0.8 m、深さ0.52 m。
2. 古墳時代 1・3・8・10区で後期の溝・土壙を検出した。8区で検出の土壙からは、須恵器壺・甕・高杯・杯，土師器甕，鉄器片と共に0.4 m大の自然石，握拳大の角礫などもかなり多量に出土した。横穴式石室を破壊した後の処理穴とも考えられる土壙である。
3. 平安時代～鎌倉時代 この時期の遺構には溝・土壙・柱穴などがあるが、出土した遺物から平安時代中期と平安時代後期～鎌倉時代の2時期に分かれる。平安時代中期の遺構は9・19・23区で、平安時代後期～鎌倉時代の遺構は19・23区で検出した。

出土遺物には弥生時代中期前半の壺，古墳時代後期及び平安時代～鎌倉時代の土師器，須恵器などがある。弥生時代中期の土器は，壺の体部小片で櫛描直線文が施されている。

**小結** 6区周辺では，既往の調査で弥生時代中期の遺構を検出しており，周辺一帯に当該期の遺構が分布することを確認した。19・23区周辺には，平安時代～鎌倉時代の遺構，遺物包含層が分布し，遺構が比較的良好に遺存していると考えられる。(平方 幸雄)

## 12 山科本願寺跡

**経過** 調査地は京都市山科区西野離宮町から東野八代町にかけての地域である。山科排水区安祥寺系統（その1・その2・その4）公共下水道工事を対象とした立会調査を実施した。対象地には、文明9年（1477年）から天文元年（1532年）にかけて存続した山科本願寺（寺内町）跡がある。また、山科川が形成した自然堤防状を呈する地形的な高まりがあり、古代の集落等が存在していることも充分想定できる景観を呈している。

調査は、工事が3工区に分かれているため、その1をⅠ区、その2をⅡ区、その4をⅣ区とし、掘削工事の行われる道路毎に番号を振り、それを調査区として実施した。調査の

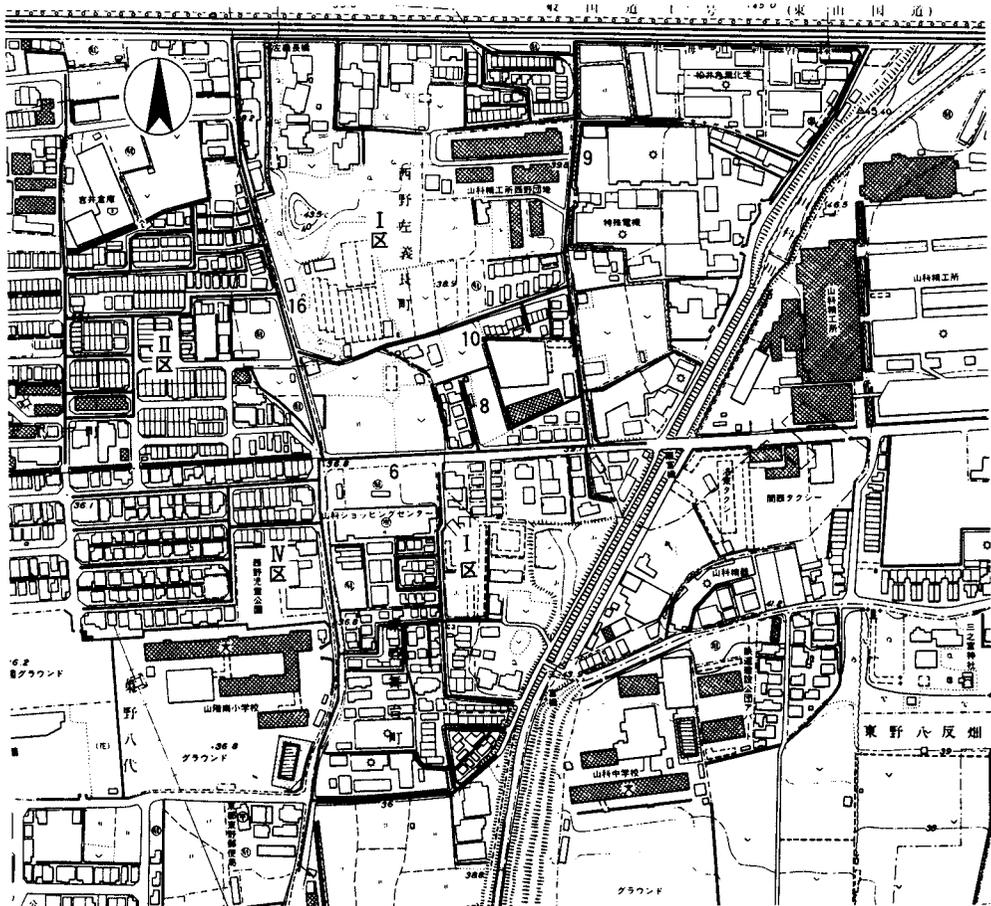


図1 調査位置図 (1:5000)

進行に伴い、Ⅱ区及びⅣ区は全面が最近の整地で埋め立てられた池ないし沼であり、遺構・遺物もまったく検出できず、遺跡の範囲外であることが判明した。このため、調査は途中からⅠ区を専らその対象として実施した。

**遺構・遺物** 検出した遺構は、出土遺物から古墳時代前期と室町時代後半の2時期があり、以下その概略を列記する。

1. 古墳時代前期 Ⅰ-10区で竪穴住居・土壙、Ⅰ-6区で自然流路を検出した。また、Ⅰ-8区では遺物包含層も検出した。竪穴住居は深さ0.2m～0.4m残存し、確認できた長さは5.5mある。

2. 室町時代 土壙とセットになる外濠をⅠ-10区・Ⅰ-6区で検出した。Ⅰ-6区で検出した濠は、南北方向に延長するものと、西北から東南方向に延長するものである。中ほどで検出した濠は、深さ0.97～1.24m、上幅3.2mある。Ⅰ-9区で石組み井戸を検出した。掘形は円形で2.5mあり、井戸の内法は約1mある。石組みは幅0.2～0.3m、厚さ0.1～0.2mの自然石を小口積みにし、9段まで確認した。なお、掘削面が井戸底まで到達せず、井戸底までの深さは不明である。その他にⅠ-6区から北側、Ⅰ-16区から東側で土壙・溝などを多数検出した。土壙・溝の埋土には、ほぼ例外なく焼土・炭を多量に含むことが認められた。

遺物は畿内第Ⅴ様式～庄内式併行期の壺・甕・鉢など、15世紀後半～16世紀前半の土師器皿、陶器甕・播鉢、磁器碗、瓦などが出土した。

**小結** 古墳時代前期の竪穴住居・土壙を検出した地点は、地形的には山科川の自然堤防上に位置

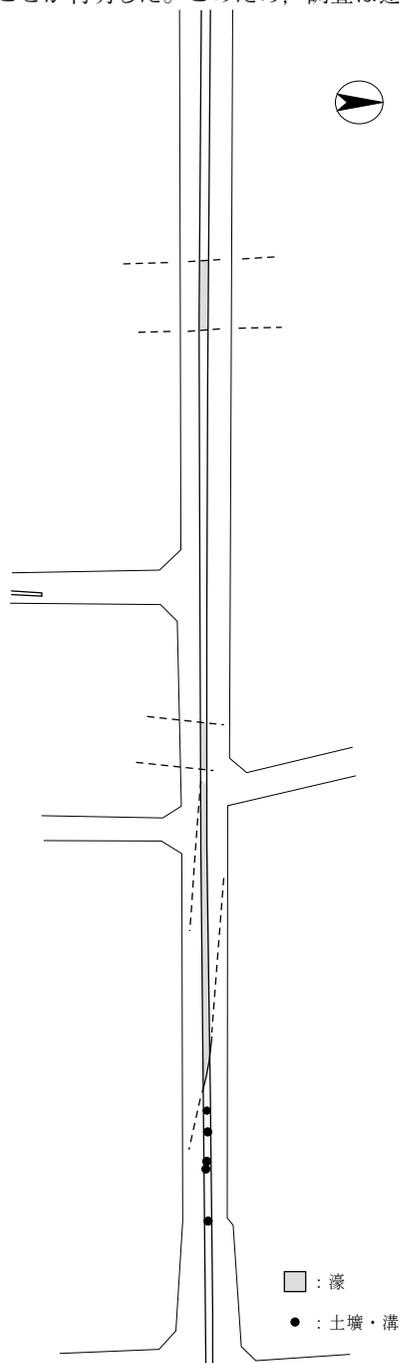


図2 Ⅰ-6区山科本願寺関連遺構(1:1000)

している。この自然堤防から後背湿地に移行すると考えられる地点で、古墳時代前期の遺物を包含する自然流路（南北方向に延長）を検出した。また、自然堤防の末端部付近と考えられる地点では、当該期の遺物包含層も分布しており、この自然堤防上には出土した遺物などからみて弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡が存在していると考えられる。なお、この自然堤防は当該対象地域から更に北側へ伸張しており、集落も同様に北側へ広がって展開していると考えられる。

山科本願寺に関連する遺構は、I-6区（現離宮道）から北側、I-16区（現西野道）から東側の範囲内で検出し、この範囲より西・南側ではまったく検出していない。また、遺物包含層の分布範囲も同様な状態を示すことを確認した。このことから当初、寺域（寺内町）外まで及ぶ広がりを考えていた遺跡範囲は、寺内町域に限定できるものと考えられる。

（平方 幸雄）

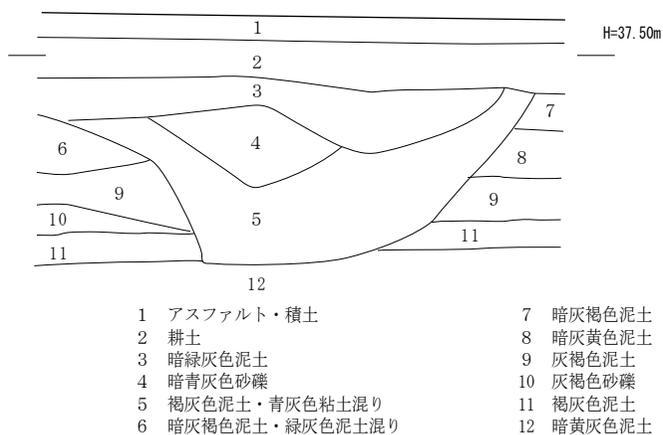


図3 I-6区 濠断面図(1:50)

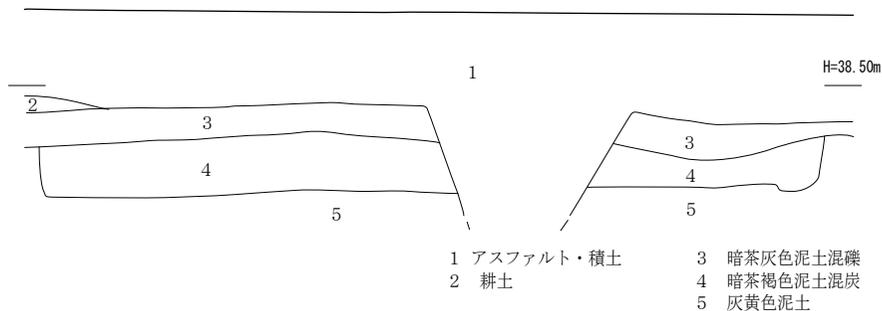


図4 I-10区竪穴住居断面図(1:50)

### 13 長岡京左京九条四坊，淀城跡

**経過** 調査は、現在淀城跡として城郭の一部が残存している地点を中心として実施した公共下水道工事に伴う立会調査である。調査期間は昭和59年8月～60年1月である。

調査では淀城の堀割検出を主眼とした。長岡京跡については過去の調査結果によって遺構検出が望めないことが明らかになっている。

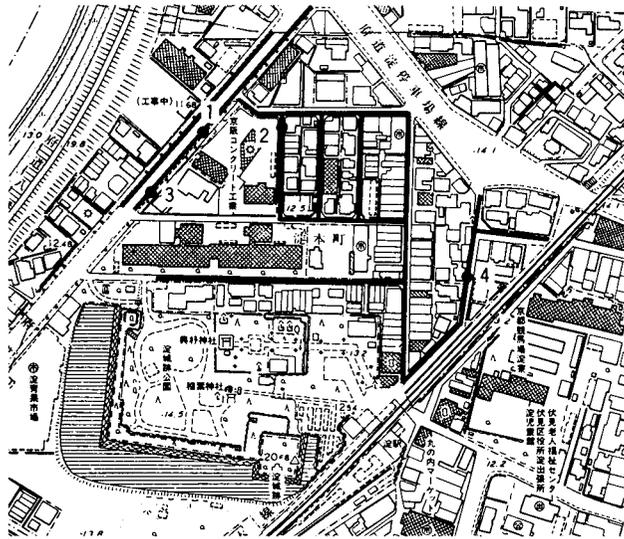


図1 調査位置図 (1:5000)

そこで、あらかじめ淀城に関連する史料・古絵図を収集し、現存する町割と重ね合わせて、淀城の構造を推定し、それに基づいて工事に立ち会うことにした。

**遺構・遺物** 調査の結果、検出した遺構は、旧宇治川南岸・淀城北端部・堀である。以下それぞれについて報告する。

**旧宇治川南岸** 現地地表下1.5mで茶褐色泥土層となり、中に人頭大の石が2.8mにわたって認められた。これは仮製地形図(明治20年作成)による宇治川南岸とほぼ一致しており、護岸用の石ではないかと推定した(地点1・2)。この北では暗褐色砂層・黄褐色砂層・青灰色砂層が認められ、河川の堆積と考えられる。

**淀城北端部** 石垣は既に抜き取られていたためか検出できなかったが、地点3付近で整地を施したらしい土層が認められた。

**堀** 現地地表下1.6mで石垣を検出した。確認幅3.8m北側の石垣は2段分(1段分の石の厚さは0.8m)、南側の石垣は1段分を確認したが、更に下段にも存在する。埋土は暗灰色泥土で、水分を多量に含む。古絵図(嘉永5年作成 稲葉家所蔵)によれば検出地点は他の地点と異なって狭く描かれており、橋脚が架けられていた様子がうかがえる(地点4)。

**小結** 今回の調査結果は、調査自体に多くの障害があったにも関わらず、何箇所かの石垣及びその痕跡を検出したことである。その結果、あらかじめ史料収集を行い、推定して

いた堀の位置と検出結果がほぼ一致していることが判った。

またこれらの成果や明治・大正年間に作成された地形図と現在の地割との比較検討によっても、嘉永5年（1852）に作成された地図はその精度が極めて高いものであるという評価が与えられる。なお、資料収集には京都市歴史資料館の協力を得た。（久世 博康）

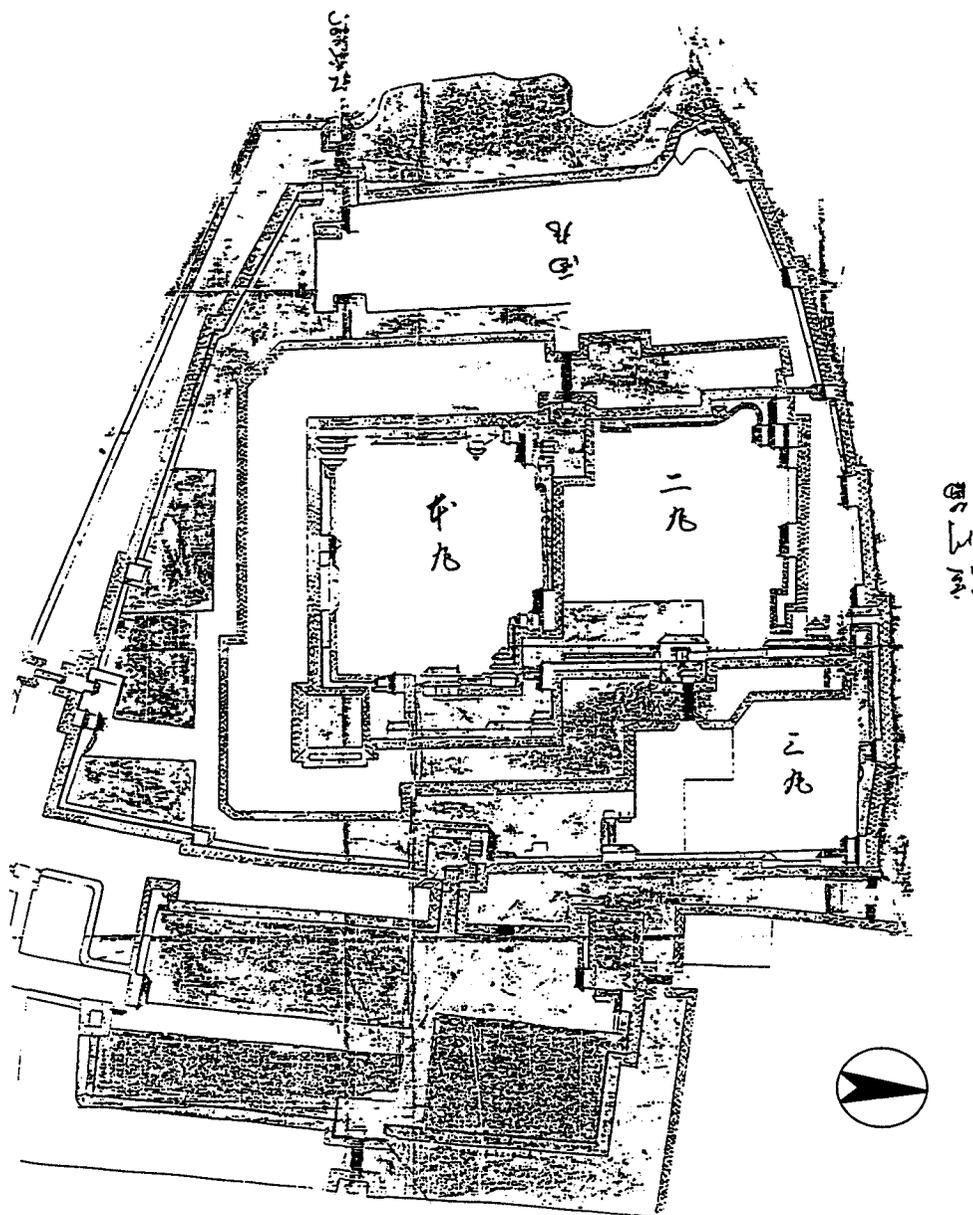
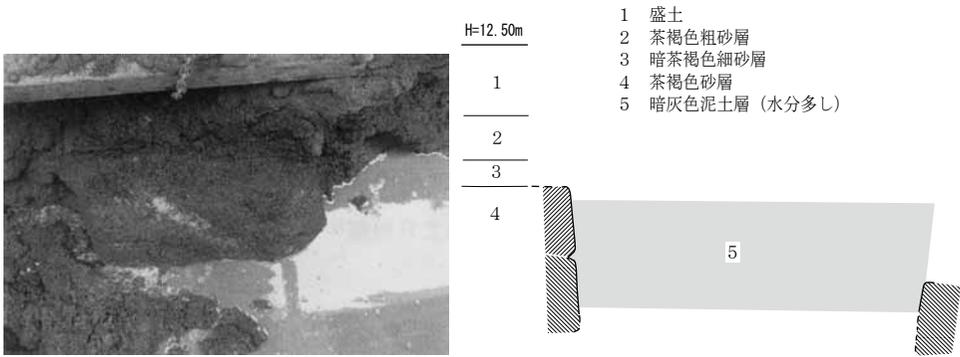


図2 淀城絵図（嘉永5年）



石垣出土状態

図3 石垣検出地点断面模式図(1:100)

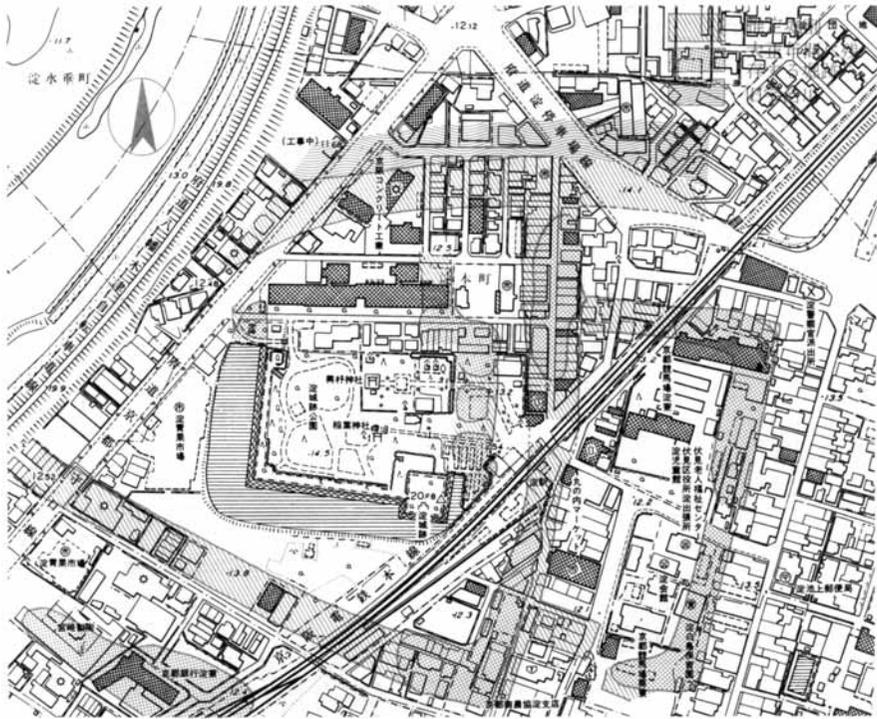


図4 淀城堀配置復元図(1:5000)

## 14 中久世遺跡

**経過** 京都市南区久世中久世3丁目で倉庫拡張工事に伴って試掘調査を実施し、遺構が検出されたため発掘調査に切り換えた。南北6m、東西23.5mのトレンチを設定した。

**遺構** 検出した遺構は、3条の流路と2基の土塋がある。流路の2条は浅いもので、弥生土器から鎌倉時代の遺物と植物遺体が出土した。

東端で検出した流路(SD3)は2層に分かれ、上層には畿内第V様式の手焙り形土器が、下層には第II様式から第IV様式までの土器と石器が多量に含まれていた。

**遺物** SD3から出土した主な遺物を紹介する。手焙り形土器はほぼ完形で、S字状に立ち上がる口縁の下半にやや太くて乱雑な波状文が施される。滋賀県湖西地方に類例が認められるものである。他に長頸壺が出土した。下層の堆積土の中には、縄文晩期の貼付け突帯文の土器が1点混入していた。他は第II様式の甕が最も多く出土し、底部に木葉文が残り、底上りのものと、平底の2種がみられた。第III様式の土器は、いずれも第III様式末葉のものが多く、波状文を口縁外面に施すもの、口縁内面に貝殻状文・列点文を施すもの、乳の付くものなども出土した。他に鉢形・器台・高杯・水差しなどがみられた。石製品は石剣・うす刃型石斧・石庖丁を転用した石ノミ・硬質砂岩質の太型蛤刃石斧の破片もある。またやや緑色を呈する硬質砂岩の砥石も出土した。

**小結** SD1・SD2は中世以降存在しており、条里制溝とは無関係とみられる。SD3は上層から中世の遺物が出土し、中層では第V様式から庄内式の土器が出土、下層からは第II様式～第IV様式の土器、砥石、未完成の粘板岩製品も出土している。このことから集落内で石器類の加工・研磨が行われていたものとみられる。

(吉村 正親)

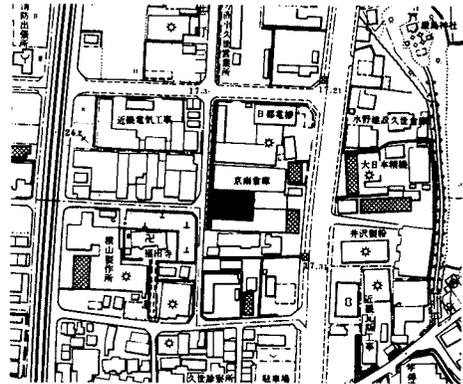


図1 調査位置図 (1:5000)

## 15 上久世遺跡

**経過** 調査地は京都市南区上久世町に所在する。昭和51年(1976)に六勝寺研究会によって調査がなされ、弥生時代から古墳時代前期の遺構が検出されている<sup>注1</sup>が、遺跡の北半部

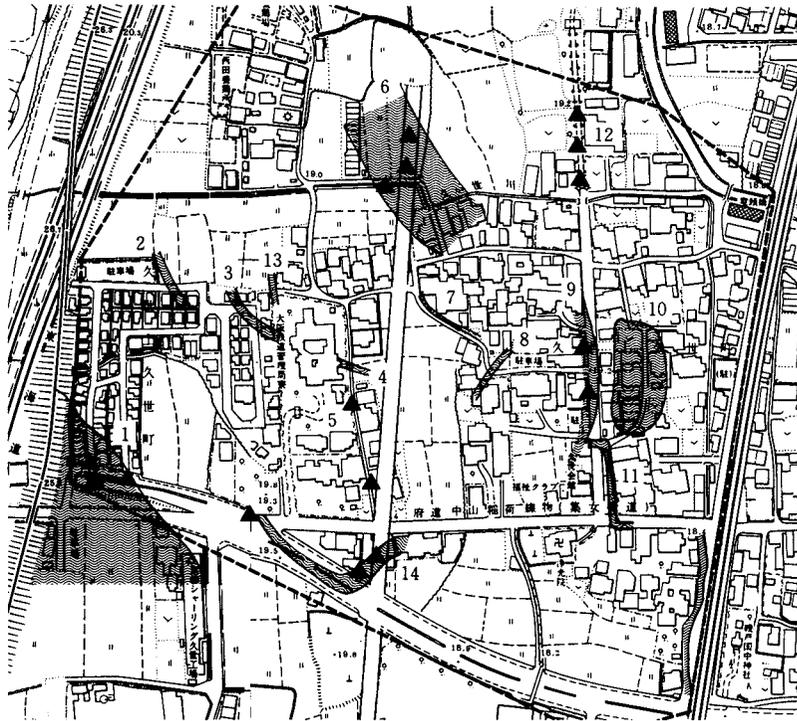


図1 調査位置図・検出遺構配置図(1:5000)

への拡がりは不明であった。昭和58年～59年に公共下水道管理設工事が実施され、遺跡範囲を確定するために立会調査を実施した。また、調査中に対象地域の中央部水田を当研究所が発掘調査を実施し、遺構の存在も明らかになった<sup>注2</sup>。

**遺構・遺物** 主要な遺構は図1に示した。以下各遺構の概略を述べる。

1 この部分の基本土層は、水田耕作土の下層に安定した褐色泥砂層があり、昭和51年の調査で竪穴住居が検出された地点で、今回は少量の弥生土器を包含する土層が分布していた。

2 灰青色砂層を埋土とする溝が10m前後にわたって検出され、9世紀代の灰釉陶器碗・緑釉陶器碗・須恵器が出土した。南北方向に流れて、4の溝まで続くとみられる。

3 褐色砂礫層を切り込んだ幅2.5～3mの溝で、南東方向に流れ、畿内第V様式の土器と庄内式の土器を包含する。埋土は褐灰色泥砂層である。

4 褐色泥土層を切って灰紫色の泥土層が堆積し、第IV様式の土器が出土する溝である。

5 幅 1.5 m の工事掘削面と西側断面に確認した。炭混じりの暗褐色泥砂層が厚さ 0.15 m で堆積し、少量の土器が出土した。やや微高地上にあり、竪穴住居とみられる。時期は庄内式期である。

6 幅 20 m 以上の自然流路で、堆積する褐色砂礫層中に 6 世紀後半代の須恵器・土師器が含まれる。

7 現在の湾曲した里道の北側に沿って流れていた近代の水路で、暗灰色泥土層と腐植土層を埋土に持つ。染付椀などが出土した。

8 褐色砂礫層の基本ベースを切り込んだ南西方向の浅い溝で、幅は 1.9 m ある。埋土は暗褐色砂礫層で庄内期の土器が出土した。

9 褐色砂礫層ないし黄色泥土層のベース上に、流路とみられる暗褐色砂礫層が 1 m の深さで堆積していた。庄内式期から布留式期の完形壺が出土したが、流下方向が工事掘削の進行方向と同一であったため、その幅を明らかにすることはできなかった。

10 柱穴を 3 基発見し、瓦器が出土した。中世に属したものとみられる。

11 中山稲荷線を横断して延びる流路で、幅 5 m を測る。近世の漆器が出土した。

12 斎王堂（光福寺）に通ずる参道で土壌を 3 基検出した。14 世紀の瓦器椀と土師器が出土し、斎王堂関係の遺構ではないかと考えられる。

13 盛土下 0.8 m から検出した南北方向溝で幅 2.8 m を測る。中層の暗灰色泥土層から多量の第 V 様式の土器が出土した。

14 昭和 51 年の発掘調査において検出されていたもので、延長部分での再確認であり、庄内式期の土器が出土した。

**小結** 弥生時代から布留式期にかけての遺構は 1・3・4・5・8・9・13・14 であり、自然流路は 2・6 とみられる。竪穴住居は弥生時代中期に属した 1 で、溝や流路より古いものである。中世に関連する遺構は、10・12 検出の柱穴と土壌で、中世の上久世庄に関係したものと捉えている。

以上を総括すると弥生時代～布留式期の遺構は 3 地区に分布しており、この間には自然流路が存在し、いずれの流路も桂川の流下方向に沿っている。また中世の上久世庄は、おおむね斎王堂地区と現集落の中心部に限定でき、弥生時代の遺構とも一部で重複している。

図 2 の上久世遺跡の土層分布図では、大きく 3 分類した。褐色泥土層は、現集落と重複し、かつ微高地であり、多くの遺構・遺物を発見した地区に分布する。褐色砂礫層は、褐色泥土層の周辺に分布し、人工水路などが掘り込まれている。網掛けしていない部分はお

おむね旧流路で、古墳時代から中世までの土器片が出土する。

(吉村 正親)

注1 『上久世遺跡発掘調査報告』1976年

注2 第1章—32「上久世遺跡」

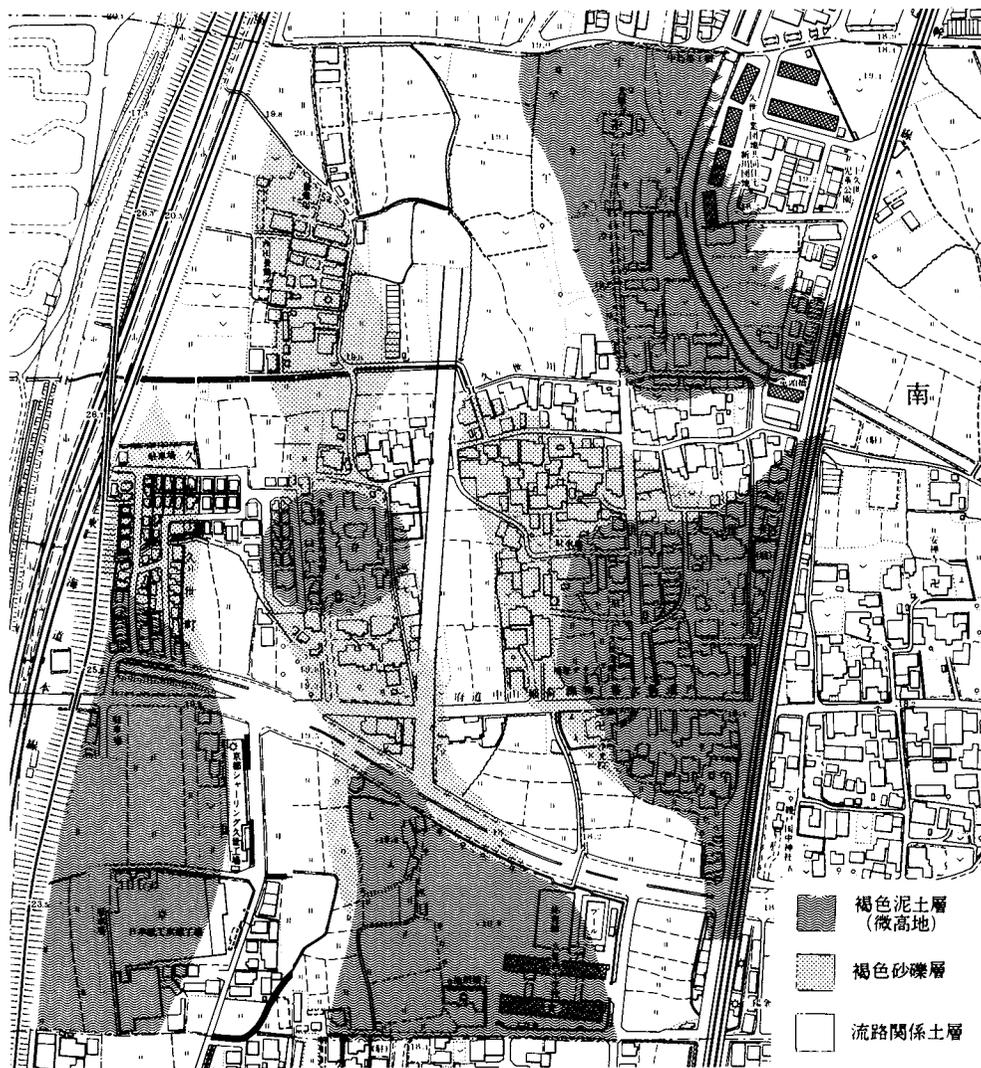


図2 上久世遺跡基本土層分布図 (1:5000)

## 16 大原野南春日町遺跡

**経過** 調査地域は西山から南東にかけて延びる段丘にあたり、北は府道灰方中山線、南が善峰寺川に挟まれた範囲である。調査地東北部は南春日町遺跡にあたり、西北部は南春日町窯跡にあたる。また、周辺の丘陵上には八幡宮古墳・丸山古墳群などが立地し、東北部には平安時代に創建された大原野神社がある。

調査地域の周辺では昭和57年～59年にかけて当研究所が遺跡分布調査・試掘調査を行い新たな遺物散布地や遺構を確認している。試掘調査は前年度同様、分布調査の成果に基づいて行い、地区設定・地点表示及びトレンチの設定・規模などについても前年度調査に準拠した。なお、今回の調査地域は北からD・E・F地区の3地区に分け調査を実施した。

**遺構** 調査地域北西部に該当するD地区では7地点で遺構を確認した。検出した遺構はピット・土壇・焼土壇などである。D地区東北部の3地点では室町時代後期のピット・土壇を検出した。また南部では平安時代の焼土壇を検出し、近接地点で奈良時代の須恵器が

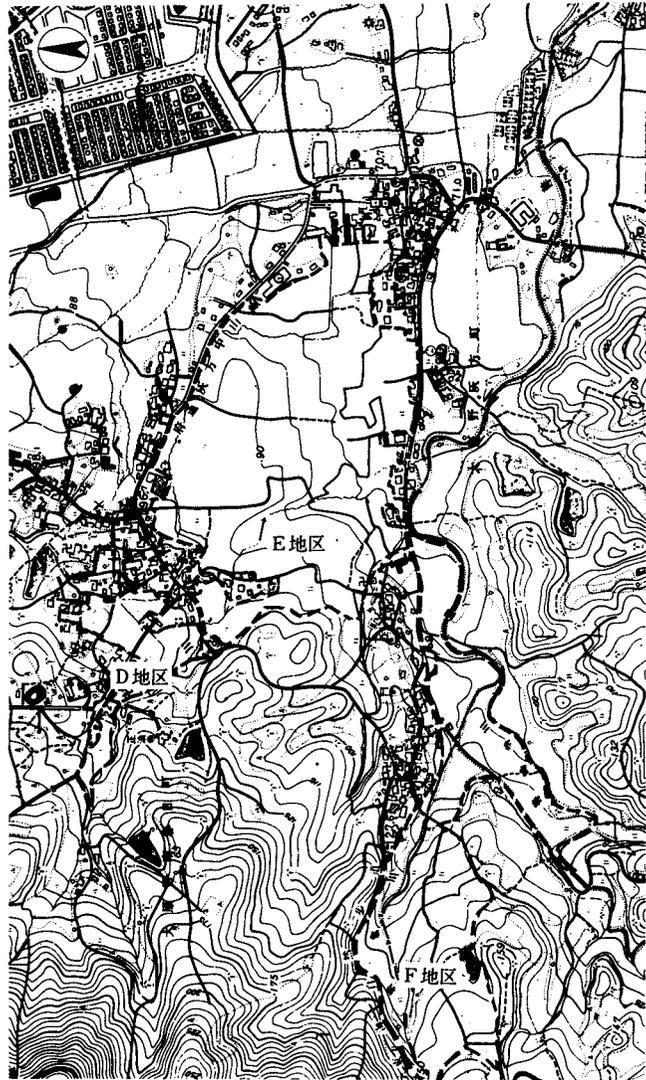


図1 調査位置図 (1:5000)

多量に出土した。東北部の10地点では旧耕作土を含む中世の遺物包含層を検出した。

調査地域中央から東部を占めるE地区では15地点で遺構を検出した。ピット・土壙・井戸・竪穴住居・溝などである。E地区のほぼ中央の4地点では鎌倉時代のピット・土壙・井戸・溝を検出した。中央部東にあたる地点では炭を多量に含む平安時代のピットを検出した。東部北の地点では中世のピット・土壙を重複した状態で検出した。西部では奈良時代の竪穴住居を検出した。住居の形状はやや東西に長い歪む長方形で、長軸約6.1 m、短軸約5.1 mある。支柱穴は4箇所あり、北壁中央に竈がある。住居検出地の南接地点では鎌倉時代の溝を、中央部南の地点では平安時代の柱穴・土壙を検出した。更に南東部の2地点でも平安時代の柱穴・土壙・溝を残存良好な状態で検出した。またE地区全体で旧耕作土を含む中世の遺物包含層を54地点で、平安時代の包含層を4地点で検出した。調査地域西南部に該当するF地区では4地点で遺構を検出した。東部では中世の柱穴を、西部では柱穴・土壙・溝を検出した。旧耕作土を含む中世の遺物包含層は27地点で検出した。

**遺物** 各調査地点から整理箱約22箱の遺物が出土した。土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・陶磁器・銭貨・金属製品・サヌカイト片などがある。竪穴住居からは土師器・須恵器・鉄製品などが6箱出土した。他の遺構・包含層から出土した遺物は細片である。

**小結** 調査地区全域で奈良時代から中世に至る遺構及び遺物包含層（旧耕作土を含む）を検出した。遺構の分布を概観すると、中世遺構の分布が多く、また遺物包含層（ほとんどが旧耕作土）の分布も、ほぼ調査地全域に認められる。中世遺構の分布傾向は現集落の近縁部に分布する遺構と離れた地点に分布する遺構がみられる。

平安時代の遺構及び遺物包含層の分布はE地区東半部北西から南東を結ぶ一帯にみられる。遺構の密度については、何れの地点も柱穴・土壙・溝を重複した状態で検出しており、濃密である。今回の調査で検出した平安時代の遺構及び遺物包含層は調査地北に東接する南春日町遺跡との関連で把握する必要がある。奈良時代の竪穴住居は南春日町窯跡から南東方向に約250 mの地点にある。住居から多量の飛鳥～奈良時代前期の生焼け・溶着・歪変した状態の須恵器が出土した。当該期の須恵器は窯跡周辺から住居西方までの丘陵沿いの耕作地に広範に多数分布していることから窯・住居・窯付属施設などの存在する可能性があり、西山裾野一帯に展開する各期の窯跡の変遷・立地を考える上で重要な地域といえる。

(加納 敬二・辻 裕司)

『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 1986年報告

## 17 榎原遺跡隣接地

**経過** 調査地は京都市西京区榎原蛸田町で、榎原小学校給食室建設予定地に東西約4m、南北約3mのトレンチを設け、灰色砂泥層上面から調査を始めた。灰色砂泥層（厚さ0.2m）から弥生時代～平安時代の遺物が出土したが遺構は認められなかった。下層のオリーブ砂泥層からは遺構・遺物が検出されず、調査を終了した。

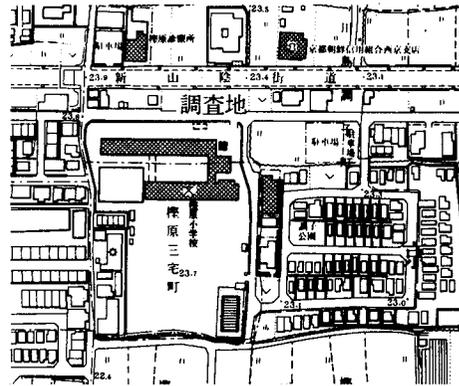


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構・遺物** 検出遺構は皆無であった。遺物は弥生時代から平安時代の土器が灰色砂泥層から出土したが、いずれも摩滅した細片で、詳細な観察は不可能である。

**小結** 調査面積が約12㎡と狭く、明確な遺構を検出することはできなかった。しかし、弥生時代から平安時代の遺物が出土し、調査地周辺が当該期の遺構・遺物が数多く発見されている地域であり、今後の調査に期待したい。

(磯部 勝)



調査区全景 (東から)

## 18 嵯峨院・大覚寺御所跡（図版 67）

**経過** 調査地は、現在の大覚寺の北側と西側を走る府道大覚寺平岡線、及び北嵯峨北ノ段町の東側の南北道である。当地は、嵯峨天皇の離宮・嵯峨院並びに大覚寺御所跡に推定されている所である。



図1 調査位置図（1:5000）

調査にあたっては大覚寺北側の東西道をⅠ区、南北道をⅡ区、大覚寺西側の南北道をⅢ区として地区設定した。

**遺構** Ⅰ区全域において平安時代の遺物包含層・土壌を検出した。Ⅱ区では遺構・遺物とも検出できず、Ⅲ区では室町時代の遺物包含層を一部確認した。

Ⅰ区 0～135 m付近まで側溝などにより攪乱が著しく、整序の土層が確認できなかった。135～287 mにかけて遺物包含層を検出した。厚さ0.2～0.3 mで暗赤褐色ないしにぶい黄褐色砂泥層である。平安時代前期の遺物を含む。A地点（135 m）において土壇2基（SK 1・SK 2）を検出した。それぞれの断面形状は、幅0.65 m、深さ0.54 mと幅1～1.6 m、深さ0.27 mの規模を持つ。埋土は黒褐色砂泥層、暗褐色砂泥層である。SK 2より平安時代前期の土器が出土。B地点（228～238 m）において、落込（SX 3）を検出した。幅10 m以上、深さ0.5 mで東へ緩やかに下がる断面形状を呈する。埋土はにぶい赤褐色泥砂

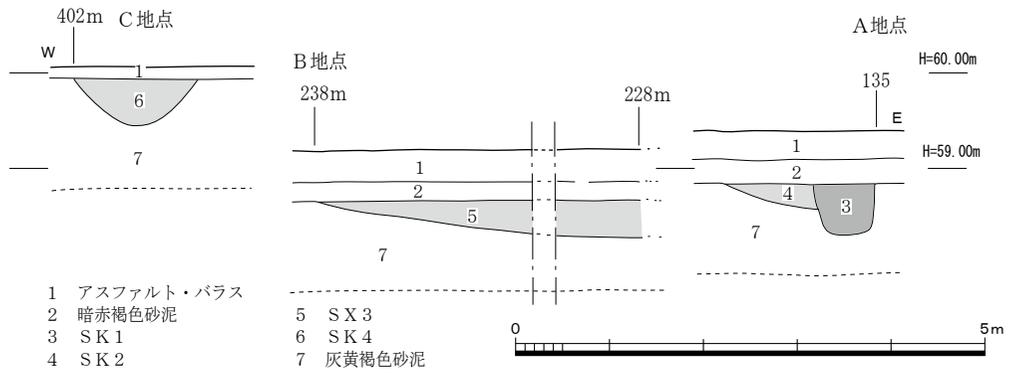


図2 遺構断面図(1:80)

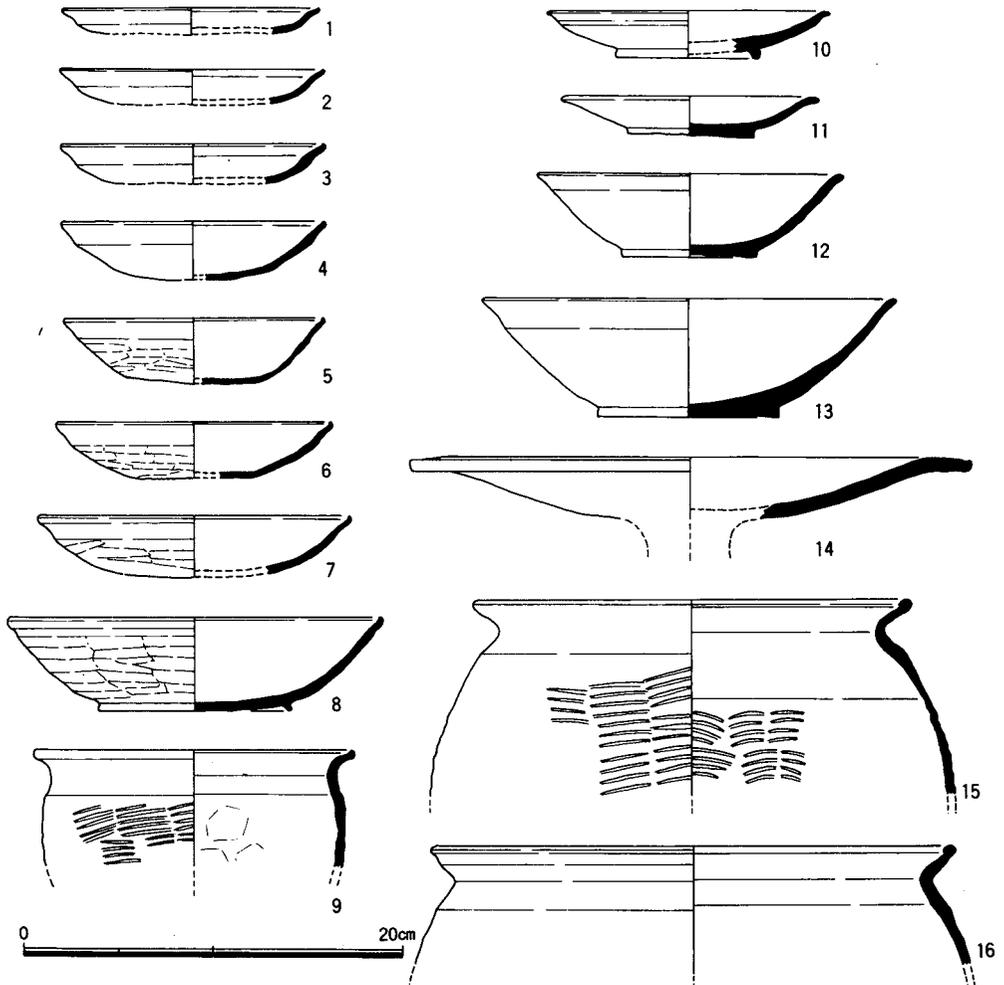


図3 SX3出土遺物実測図(土師器1~9・14~16, 灰釉陶器10, 緑釉陶器10~13)(1:4)

層で平安時代前期の遺物が出土した。C地点（402 m）では幅 1.3 m、深さ 0.47 mの土層を検出した。埋土は褐色砂泥層で平安時代の平・丸瓦が出土。I区とⅢ区が接する道が折れ曲がる付近は流路堆積を呈する。堆積土は旧耕作土、灰オリーブ砂泥層、黒褐色腐植土層、褐色砂礫層で、最下層により須恵器甕が出土した。

Ⅱ区 全体にわたり現道路直下が山土となり、遺構・遺物は検出できず。

Ⅲ区 169～202 mにかけて厚さ 0.2～0.4 mの遺物包含層を検出した。土層は褐色泥砂層で室町時代の土師器皿が出土した。ベースはにぶい黄色砂泥層である。

**遺物** 出土遺物には平安時代の土器類、瓦類、室町時代の土器類がある。ここではB地点の落込（SX 3）より出土した土器について述べる。土器類には土師器皿・椀・杯・高杯・蓋・甕、須恵器壺・甕・蓋、灰釉陶器皿、緑釉陶器皿・椀がある。

土師器 皿A（1～3）口径 13.5～13.8cm、復元器高 1.5～2.1cmで、口縁部をヨコナデし、体部及び底部外面をヘラ削りするもの（2・3）と指圧痕が残るもの（1）がある。

杯A（4～7）口径 14cm 前後のもの、16cm 前後のものがある。口縁部をヨコナデし、口縁端部を内側に肥厚させる。外面全体をヘラ削りするもの（5～7）と指圧痕が残り未調整のもの（4）がある。（4）の口縁部内面には煤が付着する。杯B（8）口径 19.6cm 器高 5cm。丸みをおびた底部と斜め上方にひらく体部を持ち、口縁端部は内側に肥厚する。底部に高台が付く。体部外面はヘラ削りする。甕（9・15・16）いずれも破片で全形を知りうるものはない。外反した口縁を持ち、端部が内側に肥厚する。体部外面上半に叩き目が残るもの（9・15）とナデ調整のもの（16）がある。（15）の体部内面には当て板の痕跡がある。高杯（4）口径 29.5cm で杯部以外を欠く。内面を平滑に仕上げる。粘土紐のつなぎ痕が一部残る。幅は 1.5cm 程である。

灰釉陶器 皿（10）は口径 15cm、器高 2.6cm。体部外面全体をロクロヘラ削りする。内面全体に施釉し、トチン痕が残る。胎土は灰白色、釉調はオリーブ灰色を呈する。

緑釉陶器 皿（11）・椀（12・13）、皿（11）は口径 13.7cm、器高 2.1cm。椀（12）は口径 16.2cm、器高 4.4cm。椀（13）は口径 21.9cm、器高 6.3cm で大型品である。何れも内外面全体にヘラ磨きを施し、全面に施釉する。胎土は軟質で、釉調はうぐいす色を呈する。高台は円盤高台である。

**小結** I区全体に平安時代の遺物包含層が認められ、遺構の密度も高く遺跡の保存状態が良好なことが判明した。SX 3より出土した遺物は、嵯峨院に関連する遺物としては初出のもので、9世紀前半に比定できる。（家崎 孝治）

## 19 貞観寺跡

**経過** 調査地は京都市伏見区深草瓦町で、貞観寺跡推定地の南縁に位置している。周辺では以前より遺物の散布が認められており、遺物の有無を確認するため試掘調査を実施した。

その結果、敷地北辺の3トレンチで柱穴を10箇所発見し、敷地西辺の2トレンチ北端では平安時代の井戸と推定される遺構を発見した。この他、2トレンチ及び敷地東辺の1トレンチでは、時代が明らかでないが、中世までの遺物を含む整地層を認めた。

**遺構・遺物** 中世の柱穴は、掘形径0.2m前後の比較的小さなものが多く、中世後期のものと思われる。ただ、3トレンチ東北隅で検出した柱穴は大きく、平安時代に遡る可能性がある。柱穴は3トレンチ西半では耕作土直下で検出したが、東半では耕作土下に地山の黄色砂に近い砂層があり、その下で検出した。井戸は末掘で規模は不明。

整地層は2トレンチ南半、1トレンチのほぼ全面で認められ、南から北西に向かって深く、しかも厚くなる。

遺物は奈良時代から中世の土師器、瓦が出土したが、遺構をほとんど掘っていないので量は少ない。

**小結** 敷地北半で多くの遺構を検出したが、南半でも整地層下層で検出される可能性があり、発掘調査が必要と判断する。 (磯部 勝)

なお、発掘調査は昭和60年度事業として行われた。



図1 調査位置図 (1:5000)



3トレンチ全景 (東から)



1トレンチ全景 (南から)

## 20 本多山古墳群泉山支群

**経過** 鳥辺野遺跡内において、市道今熊野36号線の拡幅工事が実施されることになったため、昭和59年1月9日から立会調査を行った所、道路北側に面した宮内庁の敷地から古墳が3基（1～3号墳）発見された。この内1号墳は安全対策を考慮して立会の後すぐ擁壁の取付けを行い、2・3号墳に関しては工事を一時中断して発掘調査を実施した。調査地は京都市東山区今熊野泉山町の飛

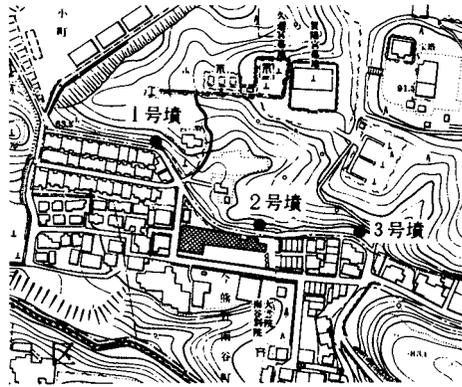


図1 調査位置図（1:5000）

び地であり、期間は4月17日～25日までの8日間である。

**遺構・遺物** 2号墳は直径約9mの円墳であり、内部主体は横穴式石室である。道路により墳丘の南半分が破壊されており、全容を明らかにすることはできなかった。石室の奥壁と側壁が残存しており、規模は残存長約1m、幅1～1.1mを測り、最大高は1mである。床面に施された敷石はかなり疎らであるが、石室内の埋土は軟質土であり、床面との区別は明確であった。

出土遺物は石室内から須恵器11点（杯4・蓋3・高杯2・壺2）と鉄釘5本・金環2個が出土している。これらの遺物はすべて床面直上から出土したものであり、出土状態からみて、埋葬時の現状を維持しているものと考えられる。

3号墳は過去の開発によって大半が削り取られているため、墳丘規模、形態、内部主体など不明な点が多く、周溝の一部を検出したのみである。この周溝は幅2m、深さ1mほどで、円形に廻らされていたものと考えられる。なおこの周溝からは壺2点が出土している。

**小結** 調査を行った2基のうち3号墳は周溝の一部を検出しただけであるが、2号墳に関しては、成果を得ることができた。

2号墳の横穴式石室は幅が1m前後であることからみて無袖である可能性が強く、石室内に使用された棺は鉄釘の出土により、木棺が考えられる。出土した須恵器からみて6世紀末葉～7世紀初頭と考えられる。

（北田 栄造 京都市埋蔵文化財調査センター）

『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度 1985年報告

## 21 出雲寺跡・相国寺境内（図版 68）

**経過** 調査地は京都市上京区上御霊町、上御霊前町、上御霊馬場町、相国寺門前町などで、対象地内の遺跡としては出雲寺、相国寺などがあげられる。面積は広大であったが検出遺構は少なく近世流路、中世の池状遺構・土壇・包含層などをあげうる。池状遺構は上御霊神社南の東西道路（B区）で検出した。



図1 調査位置図（1:5000）

**遺構・遺物** B区全域で下水道管埋設に伴って廃止されたと推定できる溝（小河川）を検出した。花崗岩で護岸され、上御霊神社西門地点では橋の蓋石も検出した。埋土は灰褐色砂礫で、埋土中には陶製ガイシ、ガラス瓶などを含んでいる。流路は上御霊神社の周囲に添って流れ寺町通まで確認できる。

石組みを持つ池状遺構はB区250m地点の上御霊神社南門付近で検出した。この地点の埋土は、アスファルト路面、暗灰色砂礫層（路面）、暗灰色砂泥層（溝埋土）、灰褐色砂礫層（溝埋土）、灰色砂泥層と続く。池状石組みは近世溝下層にあり、東西規模は5m程である。西部は径20cm程の石を段積みし、中央部は密に径30～40cmの石を敷き、間に平たい石を立てる。東部は幅0.5mの大きな石を立てその東には1m近い石を横たえる。石と石の間には杭を打ち、また径10cm程のグリ石を積めた所もある。幅0.4m程の工事掘削溝での、観察なので平面的形状が明確でないが、立てた石があること、径1m近い石を横たえていること、また灰色泥砂が石を埋めていることなどから上御霊神社に伴う池状遺構の一部と推定しておきたい。

D区では焼土層と路面、土壇などを検出した。路面は現代路面を含め3層あり第2層と3層の間に焼土層を認める。土壇は最下層路面の下層から成立していて幅1.8m、深さ0.3

m, 室町時代の土師器を出土した。

出土遺物は少なく, 池状遺構から出土した遺物も小片の土師器で大まかに室町時代頃と推定できる。

**小結** 出雲寺関係の遺構の検出はなかった。遺物としてはB区北端で布目瓦1点を表採している。

上御霊神社関係では寺を取り巻く道の側溝(小河川)を検出した。また南門付近では5m規模の池状遺構に伴う石組み遺構を検出した。D区では西門に取り付く道路の路面敷きを3層確認した。第2, 第3層の間の焼土層は下層土壌の出土遺物から応仁の乱前後のものと推定できる。

相国寺関係については明確な遺構を確認できない。南部に行く程, 包含層が厚くなるようであり工事掘削深の1.4m前後では遺構にあたっていないとも考えられる。

(百瀬 正恒)

### 第3章 資料整理

発掘，試掘，立会調査など現場作業に伴って多くの資料が生まれる。これらの資料を記録，管理，運用，報告して行くことは非常に重要なことである。ここではこれらの活動の主なものを「資料整理」と位置づけ報告する。

#### 1 遺物復元

昭和58年度『京都市埋蔵文化財調査概要』，昭和59年度『文化庁国庫補助に伴う概要報告書』の作成のために遺物復元を実施した。また，元離宮二条城々内無料休憩所内に，城内の発掘調査で出土した遺物の展示コーナーが設けられ遺物復元を行った。縄文時代晩期の土器，土師器，須恵器，備前焼，宋銭，瓦などが展示されている。他に京都市考古資料館の新発見コーナーの展示替えにあたり烏羽離宮跡出土の土器類の復元も行った。

(永田 信一)

#### 2 遺跡測量

本年度に行った測量作業は，計46件になる。その内訳は平安京域12件，烏羽地区11件，南・桂地区5件，長岡地区4件，北白川地区3件，洛北地区2件，洛東地区2件，伏見・醍醐地区2件，太秦地区1件，立会・試掘2件，その他2件である。

これら測量作業以外に昨年度に導入したパソコンを利用して測量関係の調査補助用資料を作成した。主なものは2つあり，1つは平安京の条坊位置を戸主単位で数値化したもの（条坊カード）と，調査測量原点のカード（測量カード）である。条坊カードの方は，あらかじめ調査で確認された条坊遺構の位置関係を延喜式による平安京の条坊にあてはめて，それを最小二乗法で平均計算し造営尺及び座標方位に対する平安京の傾きを導きだし，それを1

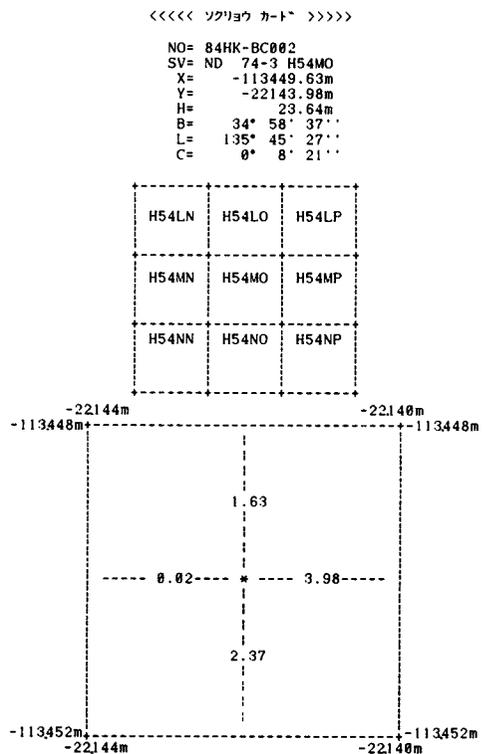


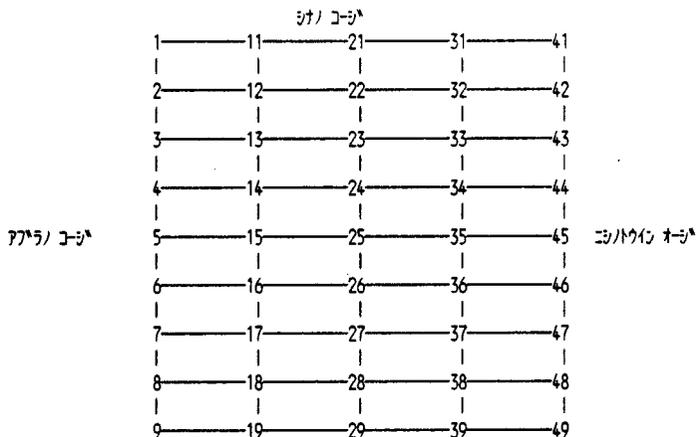
図1 京都市埋蔵文化財研究所測量カード

<<< サキョウ 9 ショウ 2 ホウ 13 チョウ >>>

MODEL 32

シノコ-ジ  
 シノコ-ジ = 29.8316cm  
 シノコ-ジ / フシ = -0-14-32  
 X = -109788.85m  
 Y = -23237.57m

X,Y リスタウ / チョウシ and シノコ-ジ ミナシ / ツイサ / チョウシ



		フシ					
		11	21	31	41		
1	X=-113400.12 Y= -22208.02	11 x=-113399.99 Y= -22178.19	21 x=-113399.87 Y= -22148.36	31 x=-113399.74 y= -22118.53	41 x=-113399.62 y= -22088.69		
2	X=-113415.04 Y= -22207.96	12 x=-113414.91 Y= -22178.13	22 x=-113414.78 Y= -22148.29	32 x=-113414.66 y= -22118.46	42 x=-113414.53 y= -22088.63		

平安京条坊カード

町の戸主（平安京の条坊計算は、京が延喜式の京程どおりに、また同一の物差し・同一の方位で造営されたと仮定して計算されている。計算は32箇所の条坊遺構に関する座標成果に基づいている。その計算は各々の遺構がモデルと最も誤差が少ない値になるようにするためのもので、平均計算を20回ほど繰り返している。カードに記載されている項目は、調査原点の位置が平安京のどの条坊位置であるかから始まり、計算に使った遺構数、計算結果の造営尺、第6平面座標系に対する振れ、仮原点の位置とその場所名、一町の最小区画である戸主割りと町の周辺道路名、戸主毎の座標値である。平安京の調査では、あらかじめ測量を行うことによって、調査地がどの場所にあたるのかを数値で知ることができ、調査計画の手助けとなっている。なお、カードの各数値は、条坊遺構数が増加する毎に計算結果が変動するため、多少は変化する。）

単位で数値を提供するカードである。測量カードは、調査測量原点の座標値・標高及び京都市域を4×4mのメッシュ網で覆うように作成したものに、調査測量原点がどれだけ動けばそのラインにのるかを記入したものである。

この他通常使用の機材を利用した写真測量を実験的に行った。従来は、調査の平面図を写真測量する場合ヘリコプターなどを使用して空中から垂直写真を撮影して、図化していたが、この方法では機材のチャーターの関係上、あらかじめ撮影日を決めなければならないことや、低空で撮影することにより生ずる騒音などへの住民対策、その他様々な規制のある市街地での調査には不向きであった。

当研究所には調査地の全景撮影用にバルーンを利用した空中撮影装置があり、この装置を利用して撮影を行い、平面図を作成することが可能かを試みた。図化は測量会社に依頼<sup>注</sup>することにし、烏羽離宮跡第97次調査地で実施した。作図面積は6000㎡で、図化縮尺を1/100と設定して計画した。まず、標定点(8×8mメッシュの交点)の測量をあらかじめしておく。撮影に使用したカメラはハッセルブラッド500ELMでレンズはすこしでも撮影範囲を広くするためディスタゴン50mmとした。高度は50mとし、これを測るために距離を測定した水糸にブラリを付けカメラの下に取り付けた。撮影基線は東西に2本を設定し、そこに水糸を張り目標とした。撮影はモニターをみながらできるので決められた間隔でシャッターを切ることが可能である。この方法で撮影したフィルムにより図化することができた。以上が今回の写真測量の概略である。この方法の特徴は、遺跡の全景撮影と同時に比較的簡単で安価にできるが、反面、強風の日や広範囲の調査には不向きである。また、カメラの向きが一定しないというデメリットもある。しかしながら、このような撮影方法でも図化できることが判り、調査の諸条件により平面図の作成方法を考えることができるようになり成果であった。また、図面の精度であるが一般カメラではフィルム面の平面維持装置がなく、補正できない誤差も生じる。今後この問題を是正する余地があると共に、考古学の図面精度に対する議論をも進める必要がある。

### 3 コンピュータ

昨年に引き続き遺跡調査カードの入力を行った。入力カードは明治36年からのもので約5000件にのぼる。その他、立会・試掘の資料に関しての調査データを日々作成し入力している。パソコンは主に測量の作業用に使用している。

(辻 純一)

注 図化にあたっては(株)関西航側、(株)パスコの協力を得た。

#### 4 写真撮影

遺跡撮影で特筆すべき事項としては昭和56年から開発を始めたバルーンによる空中撮影装置を59年1月に導入し、その試験使用を3月までに終え、4月から本格的に使用を始めたことである。これは遺跡の写真記録におけるヘリコプター、やぐら、クレーン車といった撮影高度の間を埋めるものである。撮影高度の確保の必要性、撮影経費の削減、より多くの航空写真記録が必要などの要望を満たすため、利用法などの面も含めて(株)稲富興産と共同開発し、導入したものである。59年度には30余件の撮影を行い、装置の利点、欠点を把握することができた。利点としては撮影経費の面や使用の簡便さの他に、調査面積、撮影対象面積に応じて30m～100mといった撮影目的、調査面積に対して適度な高度が簡単に得られる。場合によっては光線の具合に応じ長時間の撮影も可能であること、ヘリコプターなどのように運航申請などといった事務手続が不必要なために急な撮影要望に応じられ、騒音もないことなどがある。逆に撮影時の天候、特に風の強弱に対してその使用が左右されることや、調査地周辺の電線、樹木の状況によってはバルーンの移動ができにくいといった点がある。このために平安京外の周辺地域の発掘調査地では利用の範囲は広いが、平安京内のようにビルが乱立し、電線が縦横に張られ、家屋が密集した状況によっては危険なために利用に少なからず制約がある。しかしこれらの点も現在使用している丸型のバルーンの他に強風時に限って飛行船型のバルーンを使用するといった工夫で多少の改良の余地は残されている。

遺物撮影では(株)京都写真卸センター、(株)酒井特殊カメラ製作所の協力を得て無影撮影台を製作した。これまで俯瞰撮影台は木材で製作し使用していたが、他の撮影地への移動の際に解体、組立てが難しいことや撮影能率の向上、カラー撮影での発色の安定、背景紙の交換を簡単にしかも迅速に、また無影状況を簡単に得ることなどの点も考慮し改良したものである。

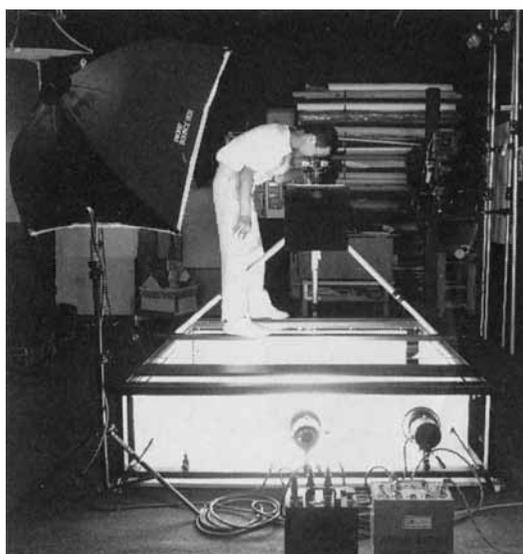
照明器具ではカラー撮影での発色の安定化、大光量の必要性のためにストロボの光量を今までのサンスター2400SEX 2台、カコ1500PRO 1台の計3台、6300W / SにサンスターVX2400、VE5000を加えて合計5台、12700W / Sに増量した。これによって反射の少ない木製品や超接写の撮影時においても余裕のある、よりバラエティーな照明が可能になり、低感度のフィルムの使用に対しても撮影意図に応じて絞り値も種々選択できるようになった。

撮影器具ではバルーン撮影装置の導入と同時にその撮影、4×5in判の補助カメラとし

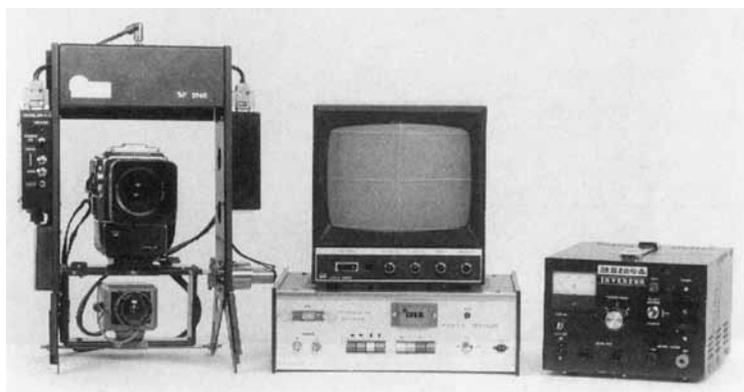
て使用する目的でボディをハッセルブラッド 500ELM, レンズはディスタゴン 40mm f 4, 50mm f 4, プラナー 80mm f 2.8, マクロプラナー 120mm f 4 を新たに購入した。また, 外部団体からの委託で以下の写真撮影を行った。

遺跡名	場所	依頼者
1 勝竜寺城跡	長岡京市東神足2丁目	長岡京市埋蔵文化財センター
2 物集女車塚古墳	向日市物集女町南条	向日市教育委員会
3 長岡京左京二条堀川跡	向日市上植野町地田	向日市教育委員会
4 長岡京跡	向日市上植野町地田	向日市教育委員会

(牛嶋 茂)



無影撮影台



バルーン空中撮影装置

## 5 遺物管理

研究所創立以来、出土遺物が増加し、従来の保管施設では収容できなくなってきた。更に、当研究所の母体となっている創立以前の各調査組織分を含めて、出土遺物が市内各地に分散して保管されていたために遺物管理が容易ではなかった。そこで、新たな保管施設が望まれ、昭和 58 年度に京都市左京区大原百井町に総合的・計画的な遺物保管場所を確保するに至った。



図1 百井収蔵庫位置図 (1:100,000)

58 年度に 3 棟、今年度分 4 棟の現在 7 棟の遺物保管建物がある。建物は、4 間×10 間の鉄骨プレハブ造亜鉛鋼板葺平屋建てで、床面積 132.32㎡のものを基本とした（1 棟のみ床面積 211.57㎡）。管理方法は、建物にはそれぞれ棟番号を付け調査年度単位に順次保管している。1 棟あたりの遺物収蔵箱数は約 4300 箱（箱は長さ 60cm、幅 40cm、深さ 15cm）である。

今年度までに収蔵した遺物は、合計 26,700 箱を数え、その内訳は当研究所の昭和 55 年度までの遺物と 56 年度の一部、研究所創立以前の各調査組織の遺物、烏丸線関係の遺物である。

年度	発掘	試掘	広域立会	試掘・立会	計
51	2,460		25		2,485
52	2,907	10	89		3,006
53	4,535	6	96		4,637
54	5,110	14	358		5,482
55	3,118	5	157	250	3,600
56	6,510	18	369	250	7,147
57	4,656	8	99	250	5,013
58	4,025	34	105	150	4,314
59	4,530	49	50	160	4,789
計	37,921	144	1,348	1,060	40,473

表1 年度別出土遺物箱数

注 広域立会は原因者負担事業、試掘・立会は文化庁国庫補助事業

## 6 保存科学

京都市左京区岡崎の武道センター建設に伴う発掘調査で出土した石組み井戸を武道センターの一角に復元することになり、昭和60年1月から3月に復元作業を行ったのでそれについて報告する。これは昭和57年度の調査概要に報告した井戸の石組み取上げの続報である。

今回は取上げの経過について報告したので、今回は取上げから約2年後に行った井戸の復元作業について報告する。

### 1 井戸の規模

前回の報告では、復元した井戸の規模について具体的にふれていなかったもので、ここで改めて発掘調査時の井戸の形態と規模について述べておく。

取上げた井戸は発掘調査時にSE15と記録されたもので、木枠と石組みを組み合わせた構造で、下部は長さ70cm、幅が15cm位の縦板を4枚から5枚用いて一辺の長さを57cmにした方形の縦板組で、上部は木枠と接する部分で直径90cm、最上端で160cmとやや播鉢形に広がる石組みになっており、底に直径38cm、深さ18cmの曲物を据えている。木枠、曲物は腐朽が激しく、取り上げることができない状態であった。石組みの石は、砂岩、チャートを主体とし、腐食してボロボロになった花崗岩が3個使われている。石の大きさ、形が不揃いであるばかりでなく、積み方も雑で、平安時代後期の石組み井戸の特徴が出ているとの考古学的知見を得ている。掘形は、井戸が木枠と石組みの組み合わせからなる不安定な構造で、特に下部の負担が大きいため上部の石をしっかりと保持するために土を充分叩き締めてあり、版築上に縞模様になっていて大変硬い。井戸の掘形断面が黒土を用いて黒いのに対し、地山は花崗岩起源の白川砂で白く、しかも水平に近い堆積をしているので、井戸の製作過程を知る上で重要な掘形の観察が極めて容易である。



SE 15 井戸断ち割り状況

## 2 井戸の復元の考え方

井戸は本来水を得る目的で地面から地下に掘られたものであり、それを忠実に復元するならば断ち割った井戸であっても地下に復元すべきものであろうが、既存の建物との関係や、井戸の構造をわかりやすく展示する目的から、武道センターの門をくぐると左手にすぐに見える場所に、本来の井戸の底がほぼ現在の地面に相当する形で、従って石組みの上端が地面から約 230cm の高さになるように復元することになった。復元は、上部の石組みについては一旦解体すると再現するのが困難である積み方なので石組みを解体せず、合成樹脂で取上げ、形態を保持したまま用い、井戸下部の木枠のほとんど残っていない部分についてはヒノキの新材で補うことにした。最下部の曲物は復元しなかった。また、井戸の製作過程を理解する上で重要な井戸の掘形断面も、近年開発された合成樹脂による土層断面の剥ぎとり転写法を応用することで実際の掘形断面を貼ることにした。

## 3 作業工程

井戸上部の石組みの取上げは既に述べてあるので省略する。今回行った内容は3点で、(1)既に取上げてある井戸の上部にあたる石組みの据付けを基礎、擁壁など周囲を全てコンクリート打ちした上で、コンクリートで固定する。(2)井戸の下部の木枠は厚さ3cm、幅20cmのヒノキ材で復元し、素木のまま据える、(3)掘形断面の再転写をトマック NR-51 を用いて行い、裏面を FRP で充分補強した上で補修、整形の後既に取り付けた井戸の本体の両側にエポキシ樹脂で貼り付ける作業からなる。



井戸復元後

(岡田 文男)

注 井戸復元場所の基本設計は吉村設計事務所の、井戸設置の施行はミラノ工務店の全面的な協力を得て行うことができた。

## 7 報告書の刊行, 遺物の貸出し

昭和 59 年度は以下の報告書を刊行した。

- |                             |            |
|-----------------------------|------------|
| 1 『平安京跡発掘調査概報』 昭和 59 年度     | 1985 年 3 月 |
| 2 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和 59 年度 | 1985 年 3 月 |
| 3 『烏羽離宮跡発掘調査概報』 昭和 59 年度    | 1985 年 3 月 |
| 4 『中臣遺跡発掘調査概報』 昭和 59 年度     | 1985 年 3 月 |
| 5 『植物園北遺跡発掘調査概報』 昭和 59 年度   | 1985 年 3 月 |
| 6 『京都市埋蔵文化財調査概報』 昭和 57 年度   | 1985 年 3 月 |

本年度は以下の機関に発掘調査で出土した遺物を貸し出した。

番号	貸し出し機関名	遺跡・貸し出し遺物	目的	期間
1	富永製作所	右京二条二坊 工場建設地出土遺物	平安～鎌倉時代の土師器・瓦 13 点	社内展示 59.04.01 ～60.03.31
2	元離宮二条城事務所	左京二条二坊 収蔵庫建設地出土遺物	縄文～桃山時代の土器・陶磁器・瓦・銭貨 50 点	無料休憩所展示 59.03.20 ～60.03.31
3	奈良県立橿原考古学研究所	京都市内遺跡	平安時代の輸入陶磁器 13 点	「奈良・平安の 中国陶磁器店」 展示 59.04.17 ～05.31
4	愛知県三好町教育委員会	平安京・仁和寺	白磁椀・灰釉陶器 5 点	「八和田山古窯 展」 59.04.18 ～07.20
5	神奈川県立博物館	平安京・仁和寺	緑釉瓦 2 点	「神奈川の古瓦 展」展示 59.10.06 ～11.03
6	伊丹市立博物館	北野廃寺・北白河廃寺 他	瓦・須恵器・土師器・瓦窯模 型 20 点	「伊丹廃寺展」 展示 59.07.23 ～09.07
7	京都府立嵯峨高校	御堂ヶ池古墳	須恵器・土師器 10 点	「郷土資料展」 展示 59.09.17 ～09.24
8	愛知県陶磁資料館	二帖半敷町遺跡・伏見 城他	室町～近世初期の陶磁器 127 点	「近世城館跡出 土の陶磁展」 59.08.30 ～12.05
9	長岡京市教育委員会	長岡京左京四条四坊	石帯写真	パンフレット掲 載 59.09.11
10	向日市文化資料館	長岡京左京四条四坊	漆紙文書 1 点	向日市文化資料 館展示 59.11.01 ～11.19
11	学校法人平安学園	烏羽離宮跡関係他	瓦・輸入陶磁器・瓦器・土師 器 20 点	「烏羽離宮跡を さぐる展」展示 59.10.04 ～10.09
12	木簡学会	左京九条二坊十三町	木簡	第 6 回木簡学会 59.12.01 ～12.02
13	大阪市立博物館	弁天島経塚	須恵器甕・鏡・青白磁合子他 6 点	「日本の古鏡展」 展示 60.03.05 ～04.17
14	日本興業銀行	左京四条三坊 支店建設地出土遺物	室町～近世陶磁器 15 点	店内展示 60.03.09

## 8 御堂ヶ池1号墳の移築復元

**経過** 御堂ヶ池1号墳は京都市右京区梅ヶ畑向ノ地町にあった古墳で、総数26基からなる御堂ヶ池古墳群の中でも特に際立った規模を有するものである。昭和58年2月に開発行為に伴い緊急発掘調査を実施し<sup>注1</sup>たが、現地の保存が困難であることから、移築保存を行うことになった。<sup>注2</sup>移築場所は元の場所に近い右京区鳴滝音戸山町の通称さざれ石山と呼ばれる丘陵の尾根筋で、現在その一帯は歴史的風土特別保存地区に指定され、市所有地となっている。作業期間は昭和59年4月～7月までの約3箇月間である。



図1 移築位置図(1:25000)

**移築作業** 移築作業は、まず墳丘と石室の設置範囲を設定した後、石室を構築するための掘形の掘削を行い、その底盤に発掘調査の際作成した10分の1の石室床面プラン図を基に、実寸大のラインを描き込んだ。石材の設置にあたっては、調査時の実測図、記録写真及び石材に描き込んだ1m毎の割り付けラインを基に実施した。最初の最下段石材の設置は天井石を含む全ての上部石材の設置位置を左右することになるため特に慎重に行う必要があった。その平面位置はベースにラインを描き込んでいるため比較的容易に決定できるが、石材の高さ位置、傾きなどは何度も微調整を繰り返しながら決定した。石材の重量は奥壁最下段の15.5トンが最大で、次に3枚の天井石が、奥から順に7・9・11トンを測定している。墳丘を構築するための盛土作業は、石灰を混合した正土を使用し、石室の構築に伴い盛り上げて行った。なお、復元作業が終了した後、墳丘上には全面芝貼りを行い、廻りには安全柵を廻らし、説明板を設置して全ての作業を終了した。

**小結** 移築場所が元の場所に近く、その地盤がさざれ石山の名称どおり岩盤であったため、鉄筋やモルタルなどを使用することなく復元することができた。しかし、本来埋蔵文化財は過去の人々の生活が土地に刻まれたものであり、その土地や環境とは切り離すことのできない一体となったものである。そういう意味で今回の移築復元は、あくまでも次善の策といえよう。

(北田 栄造 京都市埋蔵文化財調査センター)

注1 『御堂ヶ池1号墳発掘調査概報』昭和57年 1983年

注2 北田栄造「御堂ヶ池1号墳の移築保存」『研修』第63号 京都市職員研修所 1984年



図2 御堂ヶ池1号墳石室実測図(1:125)

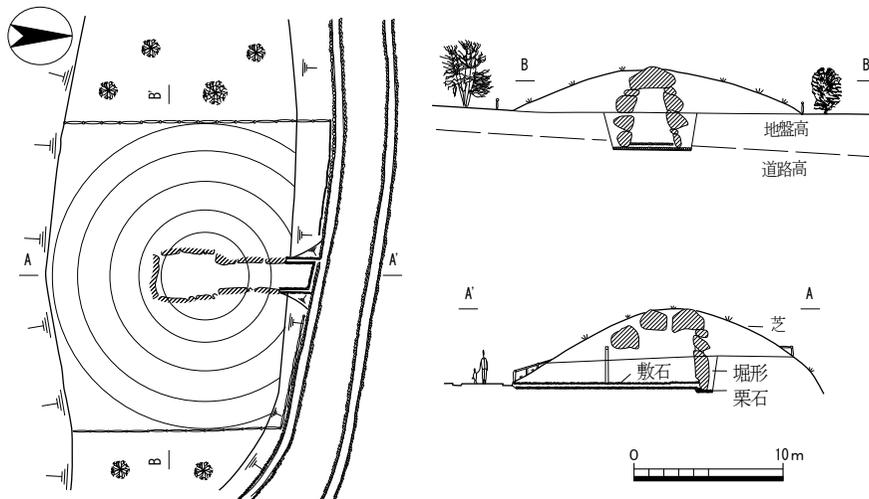


図3 御堂ヶ池1号墳移築復元図(1:500)

## 第4章 事務報告

### 1. 人事異動

(1) (理事の変更(昭和60年3月29日の理事会))

就任 増田 駿 小島泰男 阪本雅人

辞任 仲田 直 伊藤寛一 榎本 治

(2) (役員の変更(昭和60年3月29日の理事会))

就任 副理事長 増田 駿 専務理事 阪本雅人

辞任 副理事長 仲田 直 専務理事 榎本 治

(3) (監事の変更(昭和60年3月29日の理事会))

就任 松山充允 辞任 藤林金三郎

(4) 事務局職員の異動

採用 総務部 主事 片山 巖 (昭和59年4月9日付)

退職 調査部 主任 吉川義彦 (昭和59年7月28日付)

総務部 河本 昭 (昭和60年3月31日付)

### 2. 普及啓発及び技術者養成事業

(1) 埋蔵文化財講演会並びに写真展の開催

ア埋蔵文化財講演会

日時 昭和59年11月25日 場所 京都公会館会議場

「平安京の南郊鳥羽とその離宮」 研究所長 杉山信三

「院政期の京都」 京都産業大学 教授 井上満朗

(出席者約300名)

イ写真展「'84発掘調査成果集」

期間 昭和59年11月20日～12月2日(12日間) 場所 京都市考古資料館3階

(入場者901名)

埋蔵文化財講演会は「平安京の南郊鳥羽とその離宮」と題し杉山研究所長が、昭和35年から発掘調査を開始し、今年度第100次調査を迎えた鳥羽離宮跡の調査成果について、スライドを交えて講演を行い、次いで井上京都産業大学教授から、平安時代後期に展開された院政について、鳥羽離宮跡、白河院を中心に文献資料を用い、現在の京都との結び付きを論じた講演があった。

写真展「84 発掘調査成果集」は、今年度発掘調査を行った遺跡のうち、平安宮・京跡、烏羽離宮跡、蟹ヶ坂瓦窯跡、中臣遺跡などを中心に写真パネル 34 枚で紹介し、期間中約 900 名の入場者があった。



埋蔵文化財講演会

(2) 現地説明会の開催

ア「蟹ヶ坂瓦窯跡」

日時 昭和 59 年 4 月 22 日 場所 市立加茂川中学校分校予定地

イ「烏羽離宮跡第 97 次調査」

日時 昭和 59 年 7 月 1 日 場所 伏見区竹田小屋ノ内町

(3) 埋蔵文化財発掘技術者専門研修への派遣

於 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

ア「縄紋施紋法調査課程」

期間 昭和 60 年 2 月 14 日～同月 16 日（3 日間）

調査部 研究職員 菅田 薫

イ「埋蔵文化財情報課程」

期間 昭和 60 年 3 月 5 日～同月 14 日（9 日間）

調査部 研究職員 吉崎 伸

(4) 研究会などへの派遣

ア「長岡京連絡協議会」

日時 昭和 59 年 4 月～昭和 60 年 3 月（毎月開催）

場所 京都府埋蔵文化財調査研究センター・同長岡京整理事務所

調査部 研究職員 長宗 繁一

イ「瀬戸市史編纂委員会研究会」

- 日時 昭和 59 年 4 月 13 日・14 日 場所 瀬戸市歴史民俗資料館  
調査部 研究職員 堀内明博・百瀬正恒
- ウ「第 4 回中世遺跡研究集会」
- 日時 昭和 59 年 6 月 2 日・3 日 場所 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所  
調査部 研究員 加納敬二・上村和直
- エ「第 6 回近畿地方出土木器の集成研究会」
- 日時 昭和 59 年 7 月 20 日 場所 奈良国立文化財研究所  
調査部 研究職員 百瀬正恒
- オ「第 5 回日本貿易陶磁研究集会」
- 日時 昭和 59 年 9 月 14 日・15 日 場所 青山学院大学  
調査部 研究職員 吉村正親・堀内明博  
百瀬正恒
- カ「第 2 回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会」
- 日時 昭和 59 年 9 月 29 日 場所 大阪市中央公会堂  
調査部 研究職員 鈴木久男
- キ「日本考古学協会昭和 59 年度大会」
- 日時 昭和 59 年 11 月 10 日・11 日 場所 山梨学院大学  
調査部 研究職員 家崎孝治
- ク「近世城館跡出土の陶磁座談会」
- 日時 昭和 59 年 11 月 18 日 場所 愛知県陶磁資料館  
調査部 研究職員 堀内明博・梅川光隆
- ケ「国内出土の肥前陶磁」
- 日時 昭和 59 年 11 月 21 日・22 日 場所 九州陶磁文化館  
調査部 研究職員 平尾政幸
- コ「京都府埋蔵文化財調査研究センター第 26 回研修会」
- 日時 昭和 59 年 12 月 2 日 場所 京都社会福祉会館  
調査部 研究職員 平方幸雄
- サ「条里制研究会第 1 回研究集会」
- 日時 昭和 60 年 1 月 29 日・30 日 場所 奈良国立文化財研究所  
調査部 研究職員 吉村正親・堀内明博

久世博康

シ「昭和 59 年度スライドでみる乙訓の発掘」

日時 昭和 60 年 3 月 16 日

場所 向日市文化資料館

調査部 研究職員 長宗繁一

ス「日本文化財学会第 2 回大会」

日時 昭和 60 年 3 月 21 日・22 日

場所 奈良大学

調査部 研究職員 岡田文男

### 3. 文化庁「低湿地遺跡調査研究会」への派遣

日時 昭和 59 年 11 月 7 日～9 日

場所 福井県小浜市

調査部長 田辺昭三

### 4. 京都市考古資料館の状況

#### (1) 展示替の実施

「烏羽離宮跡コーナー」の新設, 「姉妹都市コーナー」, その他コーナーの一部展示替え

#### (2) 「第 5 回京都市考古資料館小・中学生夏期教室」の開催

期間 昭和 59 年 8 月 22 日～24 日 (小・中学生とも各 2 日間)



中学生サマースクール

#### ア「小学生親子教室」

第 1 日目 京都市社会教育総合センター  
で学習及び土器づくり

第 2 日目 資料館見学, 感想文

参加者 小学生親子 46 組 (定員 50 組)

#### イ「中学生サマースクール」

第 1 日目 資料館見学, 学習と映画  
「大枝山古墳群」鑑賞

第 2 日目 松室遺跡で発掘調査及び  
遺物水洗の実習

参加者 中学生 49 名 (定員 50 名)

「京都市考古資料館小・中学生夏期教室」

も今年で5回目を迎えた。特に、今回は「中学校サマースクール」において発掘調査の実習だけでなく、調査の方法、整理の仕方、用具の種類・扱い方をも含めた総合的な体験学習を行った。

(3) 京都市考古資料館土器づくり作品展の開催

期間 昭和59年9月1日～同月9日 場所 京都考古資料館

(小学生親子教室で造った土器を展示)

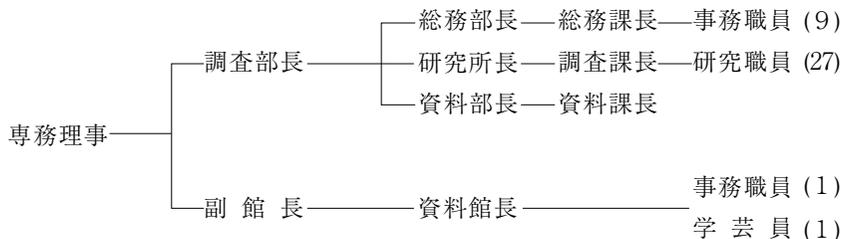
(4) 昭和59年度月別観覧者一覧表

月	開館日数	一般		団体		合計	一日平均
		12歳以上	12歳未満	12歳以上	12歳未満		
4	26	1,327 <sup>人</sup>	408 <sup>人</sup>	77 <sup>人</sup>	60 <sup>人</sup>	1,872 <sup>人</sup>	72.0 <sup>人</sup>
5	26	1,286	312	225	1,048	2,871	110.4
6	26	1,279	230	287	0	1,796	69.1
7	26	1,213	277	110	154	1,754	67.5
8	27	1,437	537	199	131	2,304	85.3
9	26	1,359	378	25	2	1,764	67.8
10	26	1,331	306	130	17	1,784	68.6
11	26	1,391	238	206	21	1,856	71.4
12	23	1,207	169	75	0	1,451	63.1
<sup>60</sup> 1	24	1,175	236	120	0	1,531	63.8
2	24	1,370	266	62	72	1,770	73.8
3	27	1,788	343	36	270	2,437	90.3
合計	307	16,163	3,700	1,552	1,775	23,190	75.3

(村木 節也)

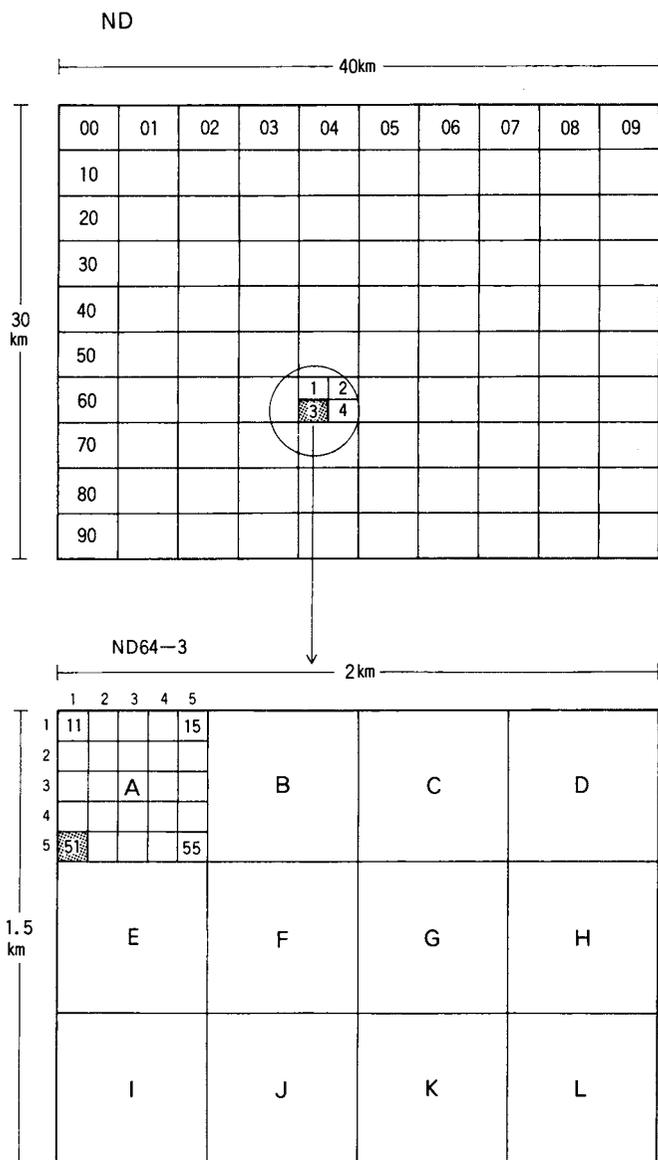
5. 組織及び役職員 (昭和60年3月31日現在)

(1) 事務局組織





付図1 調査地点の表示方法



1 図は、京都市都市計画局発行の1:2,500都市計画基本図(国土基本図)を使用した。

2 都市計画基本図の図幅は東西2km, 南北1.5kmで, これを各500m四方のブロックに分割し, 更に各々100m四方に細分した。

3 調査地点は, 都市計画図の図葉番号(ND64-3)とアルファベット(A~L), 番号(11~55)で示している。

4 ND00北西コーナーの座標は第VI系の $X = -90.000\text{km}$   $Y = -40.000\text{km}$ である。

付表1 昭和59年度発掘調査一覧表 (関連する試掘調査は表中に含めてある)

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積 (㎡)	調査地点表示	調査原因者	担当者	分類
平安宮	1	59-001-01-03 内裏跡 (84HK-LL)	上京区下立売通千本東入ル 田中町 468	84.12.14 ～ '85.01.21	140	ND64-1 I 15KM	平安武久 建物建設	梅川 中村	国庫 補助
	2	59-001-01-02 中和院跡 (84HK-LK)	上京区千本通下立売下ル小 山町 890	84.10.01 ～ 10.16	45	ND64-1, I 23BU	中田和宏 マンション建 設	家崎	国庫 補助
	3	59-001-01-04 西限跡 (84HK-LM)	上京区御前通下立売上ル三 丁目西上之町 253-1.2	85.03.18 ～ '85.03.30	65	ND64-1E22XU	中野梁工(株) 工場改築	梅川 家崎	国庫 補助
平安京	4	59-049 左京北辺三坊 四町 (84HK-YH II)	上京区一条通室町西入ル東 日野殿町	84.10.13 ～ 10.16	30	ND64-2A51KP	京都市 上京中学校内 防火水槽建設	磯部 中村	
	5	59-034 左京一条二坊十五 町 (84HK-ML)	上京区西洞院通下長者町下 ル 102	84.10.24 ～ '85.02.16	670	ND64-1H54AQ	農水産省 庁舎建設	平尾 本	
	6	59-026 左京四条二坊十 一町 (84HK-FF)	中京区東堀川通錦小路上ル 四坊堀川町 622-2	84.06.11 ～ 07.12	180	ND64-3L22VN	京都市 堀川高校校舎 改築	上村 久世	
	7	59-042 左京六条二坊九 町 (84HK-PF)	下京区醒ヶ井通松原下ル篠 屋町 59	84.09.20 ～ 11.02	150	ND74-1D53XT	京都市 醒泉小学校校 舎改築	上村 久世	
	8	59-027 左京六条三坊六 ・十一町 (84HK-GK 6)	下京区東鋤屋町～醍醐町	84.07.12 ～ 09.27	462	ND74-2E22RF	京都国道工事 事務所 道路拡幅	上村 久世	
	9	59-021 左京九条二坊十 三町 (84HK-BC II)	南区西九条春日町 19	84.05.21 ～ 10.01	3940	ND74-3H54MO	松下電子工業 株式会社 工場建設	木下 注裕 丸川	
	10	59-014 左京九条三坊十 三～十五町 (84HK-KA 6)	南区東九条烏丸町 32-1	84.08.27 ～ '85.04.06	888 発 340 立	ND74-4E34UJ ND74-4E24MG	京都市 地下鉄建設	平安京 調査会	
	11	59-033 右京七条一坊二 ・三町 (84HK-SM 5)	下京区朱雀分木町・堂ノ口 町	84.07.12 ～ 10.20	3000	ND74-1J22FU	京都市 市場改築	平尾	
	12	59-001-01-01 右京八条二坊十 六町 (84HK-YD)	下京区西七条南衣田町 21	84.08.01 ～ 08.31	140	ND73-4D13RH	上杉常雄 マンション建設	北田	国庫 補助
	13	59-015 平安京隣接地 (84HK-WC)	下京区河原町通松原上ル二 丁目富永町 344	84.05.14 ～ 07.21	250	ND74-2C12CA	京都市 松永小学校跡 地	平尾 吉川	
白河	14	59-037 尊勝寺跡 (84KS-SR)	左京区岡崎最勝寺町 2-12	84.09.03 ～ 10.06	120	ND65-3A22WD	京都市 建物建設	梶川	

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積 (㎡)	調査地点表示	調査原因者	担当者	分類
鳥羽 離宮跡	15	59-003 第 97 次調査 (84TB-TB97A)	伏見区竹田小屋ノ内町 45A. 46.47.48. 竹田浄菩提院町 42-1	84.04.09 ～ 09.05	4860 (3ヶ)	ND84-3K24FT	(株) ニュウ 第一観光 ホテル建設	鈴木久 吉崎	
		59-004 第 97 次調査 (84TB-TB97B)	伏見区竹田小屋ノ内町 6.34	84.04.09 ～ 09.05	〃	ND84-3K24FT	(株) 大昭 ホテル建設	鈴木久 吉崎	
		59-005 第 97 次調査 (84TB-TB97C)	伏見区竹田小屋ノ内町 26.3 3	84.04.09 ～ 09.05	〃	ND84-3K24FT	(株) プレジャ ー ホテル建設	鈴木久 吉崎	
	16	59-019 第 98 次調査 (84TB-TB98)	伏見区竹田田中殿町 29	84.05.16 ～ 05.28	140	ND84-3G54KA	南都住建設株式 会社 ホテル建設	上村	
	17	59-018 第 99 次調査 (84TB-TB99A)	伏見区竹田小屋ノ内町 54-1	84.06.15 ～ 09.22	940 (2ヶ)	ND84-3K13WC	大徳興業株式 会社 ホテル建設	堀内 前田	
		59-025 第 99 次調査 (84TB-TB99B)	伏見区竹田小屋ノ内町 53-1	84.06.15 ～ 09.22	〃	〃	玉山鐘午 ホテル建設	堀内 前田	
	18	59-001-03-01 第 100 次調査 (84TB-TB100)	伏見区竹田小屋ノ内町	84.08.16 ～ 08.31	348	ND84-3K23LP	大谷忠雄	辻純	国庫 補助
		59-001-03-02 第 101 次調査 (84TB-TB101)	伏見区竹田小屋ノ内町 44	84.09.17 ～ 10.03	267	ND84-3K23PK	山内芳夫	中村	国庫 補助
	19	59-040 第 102 次調査 (84TB-TB102)	伏見区竹田小屋ノ内町 68-1 ・ 2 ・ 3	84.10.01 ～ '85.02.12	1480	ND84-3K140N	アンダーウッ ト興産 (株) ホテル建設	鈴木久 吉崎	
	20	59-051 第 103 次調査 (84TB-TB103)	伏見区竹田小屋ノ内町 61-2	84.10.23 ～ '85.01.21	398	ND84-3K12HW	(株) ミコマ産 業 ホテル建設	堀内 前田	
	21	59-001-03-03 第 104 次調査 (84TB-TB104)	伏見区竹田田中殿町 56	84.11.12 ～ 11.30	310	ND84-3G35WE	吉村房枝	中村 吉崎	国庫 補助
	22	59-017 第 105 次調査 (84TB-TB105)	伏見区竹田内畑町・浄菩提 院町	85.01.10 ～ 01.14	5	ND84-3H42FK	京都市 土地区画整理 事業	鈴木久 前田	
	23	59-054 第 106 次調査 (84TB-TB106)	伏見区竹田小屋ノ内町 77	85.02.12 ～ 04.20	582	ND84-3G54UP	ダイテツ建設 株式会社 ホテル建設	堀内 吉崎	
	24	59-001-03-04 第 107 次調査 (84TB-TB107)	伏見区竹田小屋ノ内町 43-1 ・ 2	85.02.19 ～ 03.02	270	ND84-3K24KC	山内邦芳 帝新商事 倉庫建設	鈴木久 前田	国庫 補助
	25	59-017 第 108 次調査 (84TB-TB108)	伏見区中島外山町	85.05.04 ～ 03.16	210	ND84-3I24IU	京都市 土地区画整理 事業	鈴木久 前田	
26	59-059 第 109 次調査 (84TB-TB109)	伏見区竹田浄菩提院町 79	85.03.28 ～ 09.07	1246	ND84-3K23CT	(株) ミコマ産 業 ホテル建設	鈴木久 前田		
中臣 遺跡	27	59-001-02-01 第 59 次調査 (84RT-NK59)	山科区西野山中臣町 58A.59 70A	84.04.16 ～ 06.02	682	ND85-2E14YR	奥村正次	菅田 辻純	国庫 補助
	28	59-001-02-02 第 60 次調査 (84RT-NK60)	山科区勤修寺西金ヶ崎 96.9 7. 西野山中臣町 68	84.06.04 ～ 08.11	2055	ND85-2E35HF	森田清造	菅田 辻純	国庫 補助

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積 (㎡)	調査地点表示	調査原因者	担当者	分類
長岡京跡	29	59-053 左京四条三坊 (84NG-PV4)	伏見区羽東師菱川町	84.12.10 ～ 12.28	176	ND93-4A44YO	京都市 道路建設	長宗 鈴木広	
	30	59-031 左京二・三条三 ・四坊 (84NG-SD5)	伏見区久我西出町	84.01.17 ～ 04.02	1200	ND93-2F51AD	京都市 西羽東師川河 川改修	長宗 鈴木広	
	31	59-6 左京五条三坊 (84NG-DS2)	伏見区羽東師古川町 322 他	84.04.16 ～ 07.14	1080	ND93-4E45UK	大日本スクリ ーン 工場建設	長宗 鈴木広	58 年度 報告
	32	59-030 久我東町遺跡・ 左京三条四坊隣 接地 (84NG-KI2)	伏見区久我東町	84.07.19 ～ 10.03	2960	ND93-4D12LA	京都市住宅供 給公社	長宗 鈴木広	
その他の遺跡	33	59-044 上久世遺跡 (84MK-KK2)	南区久世上久世町 196 ～ 167	84.11.05 ～ '85.05.09	1409	ND83-2E42HF	京都市 道路建設	上村 久世	
	34	59-016 遺物散布地 (84MK-KC)	西京区桂徳大寺町	84.05.21 ～ 06.27	231	ND73-1K55FA	京都市 桂小学校北分 校建設	加納	
		59-038 桂徳大寺町遺跡 (84MK-KC)	西京区桂徳大寺町	84.07.16 ～ 09.26	940	ND73-1K45RF	京都市 桂小学校北分 校建設	加納	
	35	59-011 松室遺跡 (MK-KB II・III)	西京区松室中溝町 15 他	84.04.01 ～ 09.30	5821	ND73-1E11KM	京都市 桂中学校北分 校建設	平安京 調査会	
	36	59-52 59-001-04-02 音戸山古墳群 (84UZ-QD III)	右京区鳴滝音戸山町 11-3	84.10.27 ～ '85.01.16	676	ND53-3I22CAN	野々口昭三	丸川 木下	国庫 補助
	37	59-001-04-03 音戸山古墳群西 支群 (84UZ-OD II)	右京区梅ヶ畑向ノ地町 27-1	84.11.27 ～ '85.03.16	935 (2ヶ)	ND53-3I22CA	権寧杰	北田	国庫 補助
	38	59-001-04-03 御堂ヶ池古墳群 (84UZ-OD II)	右京区梅ヶ畑向ノ地町 27-4	84.10.22 ～ '85.01.31	〃	〃	権寧杰	北田	
	39	59-001-04-04 醍醐古墳群 (84FD-DM III)	伏見区醍醐内ヶ井戸町 16-2 他	85.01.17 ～ 03.30	432	ND53-3J22CA	石高悟	丸川 木下	国庫 補助
	40	59-032 遺物散布地 (84FD-DC)	伏見区日野谷寺町	84.07.06 ～ 07.30	580	ND95-2L12FH	京都市 醍醐中学校南 分校建設	磯部	
		59-039 日野谷寺町遺跡 (84DF-DC)	伏見区日野谷寺町	84.09.03 ～ '85.03.12	5540	ND95-2L12FH	京都市 醍醐中学校南 分校建設	菅田 辻純	
41	59-046 小倉町別当町遺跡 (84KS-KB II)	左京区北白川上別当町 70	84.10.08 ～ 10.20	100	ND55-3K34LB	京都市 北白川小学校 校舎建築	梅川 磯辺		
42	59-001-04-01 植物園北遺跡 (84RH-TM)	北区上賀茂榊ヶ垣内町 47	84.04.09 ～ 05.22	389	ND54-2A14QL	溝川新吉朗 マンション建 設	辻裕 木下	国庫 補助	

付表2 昭和59年度試掘・立会調査一覧表

番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積 (㎡)	種類	調査契機	概要	担当	本文	
平安宮・左京	1	59-043-04 宮左近衛府跡 (84HK-W-4)	上京区下長者町通～下立売通、 智慧光院通～堀川通	84.10.27 ～ 12.13	1913 ㎡	立会	京都市水道局 配水管布設替	左近衛府付 近で平安時 代の整地層	家崎	
	2	59-010-01 宮大炊寮・左京 二条二坊二町 (84HK-G-9206)	上京区南伊勢屋町	85.01.25 ～ 03.23	290	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	大宮大路路 面、平安時 代の遺物包 含層検出	百瀬	
	3	59-002-02 左京二条四坊十 一町 (84HK-W-2)	中京区御幸町丸太町通～二 条通他	84.05.07 ～ 06.12	625	立会	京都市水道局 配水管布設替	近世の路面 検出	百瀬	
	4	59-010-10 左京三条一坊五 ・六町 (84HK-G-9211)	西ノ京池ノ内町	85.01.28 ～ 02.29	557	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	遺構未検出	百瀬	
	5	59-043-05 左京三条二坊十 一・十二町 (84HK-W-5)	中京区油小路通、御池通～ 三条他	84.12.10 ～ 12.25	255	立会	京都市水道局 配水管布設替	近世の油小 路路面検出	百瀬	
	6	59-010-11 左京五条二坊五 ～八町他 (84HK-G-9128)	中京区高辻堀川町・吉野町 他	84.06.04 ～ 07.14	1927	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	遺構未検出	百瀬	
	7	59-002-03 左京六条二坊十 一～十三町 (84HK-W-3)	下京区堀川五条～花屋町 他	84.05.31 ～ 07.20	398	立会	京都市水道局 配水管布設替	遺構未検出	家崎	
	8	59-010-12 左京六条四坊十 四・十五町 (84HK-G-9133)	下京区御影堂前町	84.07.30 ～ 09.08	501	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	近世の土壌 検出	百瀬	
	9	59-043-08 左京七条一坊九 ～十三・十六町 (84HK-W-8)	下京区壬生川通、花屋町通 ～七条通他	84.10.18 ～ 11.24	905	立会	京都市水道局 配水管布設替	平安時代包 含層検出	家崎	
	10	59-010-13 左京九条二坊七 ・八町 (84HK-G-9125)	南区西九条藤ノ木町	84.06.06 ～ 06.29	212	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	遺構未検出	百瀬	
	11	59-010-14 左京九条三坊三 ・四町 (84HK-G-9155)	南区東九条中殿田町	84.09.13 ～ 11.10	455	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	遺構未検出	磯部	
	12	59-010-15 左京九条三坊六 ・十一町 (84HK-G-9269)	南区東九条北烏丸町	85.01.08 ～ 03.31	408	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	中世の遺物 包含層検出	百瀬	
	13	59-010-16 左京九条三坊七 ・八町 (84HK-G-9278)	南区東九条上殿田町	85.03.18 ～ 03.31	632	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	中世の遺物 包含層検出	百瀬	有

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積 (㎡)	種類	調査契機	概要	担当	本文
平安 京 左 京 ・ 右 京	14	59-010-18 左京九条四坊十一・十四町 (84HK-G-9121)	南区東九条東岩本町	84.07.02 ～ 07.19	355	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	遺構未検出	百瀬	
	15	59-010-17 左京九条四坊十二・十三町 (84HK-G-9283)	南区東九条河西町	85.01.08 ～ 03.31	279	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	南北方向の 流路、中世 遺物包含層 検出	百瀬	有
	16	59-020 四円寺・法金剛 院境内。右京北 辺四坊・一条四 坊十三町他 (84UZ-SW-20)	右京区谷口梅津間町・園町 ・花園天授岡町・寺ノ前町 他	84.05.08 ～ 85.06.27	6462	立会	京都市下水道局 下水道管敷設	平安時代～ 近世の遺構 ・遺物多数 検出	平田	有
	17	59-007 右京三条一坊 一坊一町・朱雀 大路 (84HK-UB II)	中京区西ノ京梅尾町	84.03.26 ～ 04.07	630	試掘	日本国有鉄道大 阪鉄道管理局	縄文晩期～ 中世の流路 火山灰層検 出	中村	有
	18	59-036 右京三条一坊 十一・十五・二坊 二・七・十町 (84HK-W-36)	中京区西ノ京東中合町～西 ノ京東月光町	84.07.02 ～ 11.29	830	立会	京都市水道局 配水管布設替	西堀川小路 西側溝・西 堀川検出	家崎	
	19	59-022 右京三条三坊十 二町 (84HK-CF4)	中京区西ノ京桑原町 1	84.06.25 ～ 07.06	378	試掘	(株)鳥津製作 所 工場建設	低湿地帯 古墳時代の 流路検出	平尾	有
	20	59-010-02 右京四条二坊二 ・三町 (84HK-G-9146)	中京区壬生西大竹町	84.08.04 ～ 09.17	1644	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	流路、平安 時代の遺物 包含層検出	百瀬	
	21	59-041 右京五条二坊一 町 (84AH-10)	中京区壬生東土居ノ内町 20	84.09.06	40	試掘	京都市 朱雀第七小学校 屋内体育館改築	遺構未検出	磯部	
	22	59-010-03 右京六条二坊六 ・七町 (84HK-G-9177)	下京区西七条東御前田町	84.12.08 ～ 12.25	319	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	遺構未検出	百瀬	
	23	59-010-04 右京七条二坊二 ・七町 (84HK-G-9115)	下京区西七条石西ヶ坪町	84.07.01 ～ 08.04	321	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	平安時代の 遺物包含層 検出	百瀬	
	24	59-010-05 右京七条二坊十 ・十五町 (84HK-G-9126)	下京区西七条八幡町	84.06.29 ～ 07.30	353	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	遺構未検出	百瀬	
	25	59-010-07 右京八条二坊十 三・十四町 (84HK-G-9119)	下京区七条御所ノ内北町	84.06.07 ～ 08.10	449	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	遺構未検出	百瀬	
	26	59-010-06 右京八条三坊十 五町・四坊二町 (84HK-G-9264)	右京区西京極南方町	84.11.19 ～ 85.01.24	559	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	遺構未検出	百瀬	
27	59-010-08 西寺・右京九条 一坊十二町 (84HK-G-9148)	南区唐橋西寺町	84.08.18 ～ 85.02.03	266	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	西寺関係の 礎石、古墳 時代の遺物 包含層検出	百瀬		

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積 (㎡)	種類	調査契機	概要	担当	本文
右京	28	59-010-09 右京九条二坊十五町・三坊一町 (84HK-G-9183)	南区吉祥院西ノ庄東屋敷町	84.09.10 ～ 10.15	211	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	遺構未検出	百瀬	
	29	59-029 烏羽離宮跡 (84TB-D-29)	伏見区中島秋ノ山町他	85.01.16 ～ 02.08	493	立会	日本電信電話 公社 電話線敷設	庭石検出	磯部	有
烏羽離宮跡	30	59-057 烏羽離宮跡 (84TB-SW-57)	伏見区竹田浄菩提院町・内 畑町・露川町・田中宮町	85.03.04 ～ 08.24		立会	京都市下水道局 下水道管敷設	60年度 継続	磯部 鈴木 堀内	
	31	59-035 烏羽離宮跡 (84TB-W-35)	伏見区竹田浄菩提院町・小 屋ノ内町	84.11.24 ～ '85.03.09	320	立会	京都市下水道局 下水道管敷設	古墳時代～ 烏羽離宮期 の遺構検出	磯部	有
	32	59-043-10 烏羽離宮跡 (84TB-W-10)	伏見区竹田小屋ノ内町・田 中殿町	85.01.28 ～ 02.05	155	立会	京都市水道局 配水管布設替	金剛心院関 係の礎石検 出	百瀬	有
	33	59-010-22 烏羽離宮跡 (84TB-G-9307)	伏見区竹田小屋ノ内町	85.01.14 ～ 03.01	692	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	金剛心院関 係の礎石検 出	百瀬	有
	34	59-050 下烏羽遺跡 (84TB-YH II)	伏見区下烏羽芹川町	84.11.12 ～ 11.16	56	試掘	京都市 下烏羽公園内防 火水槽建設	遺構未検出	磯部	
	35	58-064・59-013 中臣遺跡群。中 臣十三塚。宮道 古墳 (83RT-SW-64 I) (83RT-SW-64 II)	山科区栗栖野打越町 8-46・ 山科区西野山中臣町 69-18	84.02.07 ～ 09.01	1300	立会	京都市下水道局 下水道管敷設	弥生～古墳 時代の遺構 検出	平方	有
中臣・ 周辺 遺跡	36	58-61・59-012 山科本願寺跡 (83RT-SW-61 I) (83RT-SW-61 II)	山科区西野離宮町・山階町・ 左義長町・広見町・大鳥井 町・東野舞台町・八代町	84.03.06 ～ 11.17	1400	立会	京都市水道局 配水管布設替	古墳～室町 時代後期の 遺構検出	平方	有
	37	59-058 大宅廃寺跡 (84RT-OT)	山科区大宅山田・鳥井脇町 ・奥山田	85.03.15 ～ 03.29	550	試掘	京都市 勤修中学校分校 予定地	60年度発 掘調査	平方	
	38	59-023 長岡京跡。淀城 跡 (84NG-SW-23)	伏見区淀本町他	84.06.06 ～ 85.01.16	1626	立会	京都市下水道局 下水道管敷設	堀跡・旧流 路岸検出	久世	有
長岡京・ 周辺 遺跡	39	59-002-01 長岡京跡 (84NG-W-1)	伏見区久我西出町ほか	84.05.09 ～ 06.20	240	立会	京都市水道局 配水管布設替	遺構未検出	百瀬	
	40	中久世遺跡 (84BB-MK6)	南区久世中久世 3	84.11.04 11.14 ～ 12.05	140	試掘 発掘	倉庫建設	弥生時代の 溝検出	吉村	国庫 補助 有
	41	59-009 上久世遺跡 (83MK-SW-58 II)	南区久世上久世町	84.02.09 ～ '85.01.07	2044	立会	京都市下水道局 下水道管敷設	弥生時代～ 近世の遺 構・遺物検 出	吉村	有
	42	59-008 榎原遺跡隣接地 (84AH-1)	西京区榎原三宅町 24	84.03.27	12	試掘	京都市 榎原小学校給食 室増改築	遺構未検出	磯部	有
	43	59-045 南春日町遺跡 (84MK-H04～6)	西京区大原野南春日町他	84.11.01 ～ 85.06.06	2253	試掘	京都市 圃場整備事業	奈良～平安 時代の遺構 ・遺物検出	加納 辻裕	国庫 補助 有

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積 (㎡)	種類	調査契機	概要	担当	本文
その 他 の 遺 跡	44	59-010-23 円教寺跡 (84UZ-G-9182)	右京区花園天授ヶ岡町	85.02.25 ～ 03.07	472	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	近世溝検出	百瀬	
	45	59-043-06 嵯峨院跡・大覚 寺御所跡 (84HK-W-6)	右京区北嵯峨名古曾町他	84.11.20 ～ 12.20	1127	立会	京都市水道局 配水管布設替	平安時代前 期の土壌検 出	家崎	有
	46	59-060 極楽寺跡 (84FD-SW-60)	伏見区深草藪之内・大門町 他	85.03.15 ～シ'ブチェウ		立会	京都市下水道局 下水道管敷設	60年度継 続	吉村	
	47	59-047 貞観寺跡 (84FD-UA)	伏見区深草瓦町 61	84.11.01 ～ 11.07	75	試掘	京都市 農業指導所建設	ピット・土 壌検出 60年度発掘	磯部 梅川	有
	48	59-010-24 伏見城跡 (84FD-G-8625)	伏見区周防町	84.05.14 ～ 05.29	286	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	近世の土壌 検出	百瀬	
	49	59-010-21 鳥辺野跡 (84RT-G-9210)	東山区今熊野南日吉町	84.12.15 ～ '85.01.22	429	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	遺構未検出	百瀬	
	50	本多山古墳群泉 山支群 (84BB-RT50)	東山区今熊野泉町	84.01.09 ～ 04.15 84.04.17 ～ 04.25	60	立会 試掘	京都市 道路拡幅	古墳3基発 見	北田	国庫 補助 有
	51	59-010-20 法性寺跡 (84RT-G-9000)	東山区今熊野南谷町	84.06.04 ～ 07.10	214	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	中世の遺物 包含層検出	百瀬	
	52	59-043-07 出雲寺跡・相国 寺境内 (84HK-W-7)	上京区上御霊堅町・前町・ 馬場町・相国寺門前町	84.10.15 ～ 12.08	1734	立会	京都市水道局 配水管布設替	中世の庭園 状遺構・室 町時代の遺 物包含層	百瀬	有
	53	59-010-19 北白川廃寺・上 終町遺跡 (84KS-G-9132)	左京区北白川伊織町	84.08.05 ～ 09.14	268	立会	大阪ガス(株) ガス管入れ替	奈良時代の 瓦出土	磯部	
	54	59-016 遺物散布地 (84MK-KC)	西京区桂徳大寺町	84.05.21 ～ 06.27	231	試掘	京都市 桂小学校北分校 予定地	発掘調査に 切り替え 59年度発掘	加納	有 第1 章
55	59-032 遺物散布地 (84FD-DC)	伏見区日野谷寺町	84.07.06 ～ 07.30	580	試掘	京都市 醍醐中学校南分 校予定地	発掘調査に 切り替え 59年度発掘	磯部	有 第1 章	

付表3 外部からの委託事業その他一覧表

番号	遺跡跡名	所在地	期間	委託団体
1	59-024 御堂ヶ池古墳	右京区鳴滝音戸山町 12-1	84.05.01 ～ 07.31	実施団体 京都市埋蔵文化財調査 センター
2	59-28 勝竜寺城跡	長岡京市東神足2丁目1番 地	84.05.28 ～ 05.29	財団法人長岡京市 埋蔵文化財センタ ー
3	59-048 物集女車塚古墳	向日市物集女町南条1-1	84.10.03	向日市教育委員会
4	59-055 長岡京左京二条 堀川推定地	向日市上植野町地田内地	85.01.25 ～ 01.31	向日市教育委員会
5	59-056 長岡京左京二条 堀川推定地	向日市上植野町地田4-1	85.02.26 ～ 03.05	向日市教育委員会